平成 25 年度

エコツーリズム推進アドバイザー派遣事業
事例集

平成 26 年 3 月

環境省
Ministry of the Environment

平成 25 年度
エコツーリズム推進アドバイザー派遣事業 事例集

＜目次＞

1. 本事例集について 1

2. エコツーリズム推進アドバイザー派遣事業について 3

2-1. 目的 3

2-2. 実施方法 3

2-3. 派遣地域とアドバイザーのマッチング 6

3. アドバイザー派遣事業　平成 25 年度取組事例 7

3-0. 取組事例インデックス 9

3-1. 八戸市（青森県八戸市） 11

3-2. NPO 法人しずくいし・いきいき暮らしネットワーク（岩手県岩手郡雫石町を中心とする岩手山周辺地域） 16

3-3. 市貝町（栃木県芳賀郡市貝町） 29

3-4. 南房総市（千葉県南房総市） 36

3-5. NPO 法人フジの森（東京都西多摩郡檜原村） 44

3-6. 妙高市（新潟県妙高市） 53

3-7. 大野市（福井県大野市） 63

3-8. 小浜市（福井県小浜市） 75

3-9. 東伊豆 ECO ツーリズム協議会（静岡県賀茂郡東伊豆町） 80

3-10. 大井川流域振興連絡会（静岡県大井川流域） 97

3-11. 東海自転車旅エコツーリズム協議会（愛知県名古屋市） 104

3-12. NPO 法人大杉谷自然学校（三重県多気郡大台町） 110

3-13. 周南市（山口県周南市） 116

3-14. 那賀町（徳島県那賀郡那賀町） 123

3-15. 南大隅町ツーリズム推進協議会（鹿児島県南大隅町） 134

3-16. 奄美群島広域事務組合（鹿児島県徳之島） 143

3-17. NPO 法人西表島エコツーリズム協会 （沖縄県八重山郡竹富町） 155

3-18. 南大東村（沖縄県南大東村） 162

4. アドバイザー派遣報告会 169

4-1. 開催概要 170

4-2. 議事概要 171

参考　エコツーリズムについて 187

（1）エコツーリズムの基本知識 188

（2）エコツーリズムに取り組む地域への支援 196

（3）エコツーリズム推進法について 197

1．本事例集について

地域の自然環境や歴史文化を対象として、その魅力を解説し、地域の観光に活かしながら、地域振興につなげていくエコツーリズムの推進に向けた取組が各地域で行われています。

平成 20 年 4 月にエコツーリズム推進法が施行され、環境省では本法に基づくエコツーリズム推進に向けた事業の一環として、「エコツーリズム推進アドバイザー派遣事業」を実施してきました。

本事業は、エコツーリズム取組地域の中で、外部アドバイザーの助言・指導によってより良い取組の方向性を探ろうと希望する地域を対象として、専門知識を有するアドバイザーを派遣し、各々の地域の個別の状況・課題に対して、個別に助言・指導を行うものであり、平成 25 年度は計 18 団体への派遣を行いました。

本事例集は、派遣地域とアドバイザーから提出いただいた報告レポートと、報告会の議事録を取りまとめたものです。また、巻末には、新たにエコツーリズムに取り組む地域に参考としていただくためにエコツーリズムと環境省の関連施策の概要を付記しました。

これからエコツーリズムに取り組もうと考えている地域や、取り組み始めて間もない地域、既に取組を実践しており改善を目指す地域等のみなさまに、取組を進める上での参考資料としてご活用いただければ幸いです。

平成 26 年 3 月
環境省自然環境局総務課
自然ふれあい推進室

2. エコツーリズム推進アドバイザー派遣事業について

2-1. 目的

エコツーリズムに取り組む地域を対象に、各々の地域の個別の状況・課題に対し個別に助言・指導を行うことで、エコツーリズムのより一層の推進を図ることを目的とし、取組経験や専門知識を有するアドバイザーの派遣を行った。

【過去のアドバイザー派遣団体数】

	17 年度	18 年度	20 年度	21 年度	22 年度	23 年度	24 年度	25 年度（本年度）	総計
派遣団体数	5 団体	6 団体	10 団体	10 団体	16 団体	12 団体	20 団体	18 団体	97 団体

2-2. 実施方法

地域からの派遣申請を受け、予め就任を依頼しているアドバイザーの専門性等を勘案して派遣アドバイザーの選定（マッチング）を行った後、アドバイザーと地域が直接調整を行い、アドバイザーが現地に直接訪問して個別の指導・助言を行う形式とした。

（1）派遣対象

エコツーリズム推進に取り組む地域のうち、下記のような団体を対象とした。

・エコツーリズムや、地域の観光振興を図る目的で組織された協議会
・地域の観光協会、観光連盟、商工会議所、市町村の担当課など
・広域圏で形成された①、②の団体

なお、個別の団体・企業による職員向けの研修・勉強会を目的とする場合は対象外とした他、申請主体又は関係団体として市町村の行政機関が参画していることを必須要件とした。また、「復興エコツーリズム推進モデル事業」および「生物多様性保全推進交付金（エコツーリズム地域活性化支援事業）」にすでに採択されている場合の応募は不可とした。

（2）アドバイザー

申請地域の抱える地域課題の内容や取組の熟度に応じた助言・指導ができるように、予め幅広い分野のアドバイザーに就任を依頼した。

また、環境省が就任を依頼しているアドバイザー以外であっても、申請地域で派遣を希望する有識者を、一定基準下で派遣できることとした。

【平成 25 年度　エコツーリズム推進アドバイザー（28 名）】

所属・所属	氏名（五十音順・敬称略）
北海道大学大学院　農学研究院　准教授	愛甲　哲也
NPO 法人片品・山と森の学校　理事／チーフインタープリター	安類　智仁
有限会社オズ　代表取締役、旅館　海月　女将	江崎　貴久
鹿児島大学　名誉教授、桜島ジオパーク研究会　座長	大木　公彦
株式会社生態計画研究所　早川事業所／ 南アルプス生態邑　所長・主任研究員	大西　信正
コンサルタント	緒川　弘孝
みなかみ町観光課観光振興グループ　主査	小野　宏和
文教大学　国際学部国際観光学科　教授	海津　ゆりえ
株式会社ジェイティービー　旅行事業本部　観光戦略部長、 株式会社 JTB 総合研究所　客員研究員	加藤　誠
公益財団法人キープ協会　環境教育事業部　シニアアドバイザー	川嶋　直
NPO 法人黒潮実感センター　センター長／理事	神田　優
公益財団法人日本生態系協会　地域計画室長	城戸　基秀
NPO 法人信越トレイルクラブ　事務局長、 一般社団法人信州いいやま観光局　事務局次長	木村　宏
国際教養大学　国際連携部長／地域環境研究センター長　教授	熊谷　嘉隆
東京情報大学　環境情報学科　教授	ケビン　ショート
東京大学大学院　農学生命科学研究科　教授	下村　彰男
環境カウンセラー（広報戦略）、環境映像ディレクター・プロデューサー	鈴木　順一朗
株式会社ツーリズムワールド　代表取締役	高梨　洋一郎
一般社団法人信州いいやま観光局、なべくら高原・森の家　支配人	高野　賢一
株式会社南信州観光公社　代表取締役社長	高橋　充
公益財団法人日本交通公社　観光文化研究部長／理事	寺崎　竜雄
株式会社風の旅行社　代表取締役	原　優二
NPO 法人霧多布湿原ナショナルトラスト	阪野　真人
一般社団法人田辺市熊野ツーリズムビューロー プロモーション事業部長／国際観光推進員	ブラッド　トウル
京都嵯峨芸術大学　芸術学部　観光デザイン学科　教授	真板　昭夫
株式会社知床ネイチャーオフィス　代表取締役	松田　光輝
有限会社屋久島野外活動総合センター　代表取締役	松本　毅
アイ・エス・ケー合同会社　代表	渡邊　法子

（3）募集・派遣スケジュール

平成 25 年 9 月下旬から 3 週間の応募期間を取って一次募集を行い（ホームページ、環境省関連団体のメールマガジン他を活用）、10 月中旬に派遣実施地域を確定し、10 月下旬に地域とアドバイザーとのマッチングを行い、11 月～平成 26 年 3 月にかけてアドバイザーの現地派遣を実施した。二次募集については以下の表参照。

表　派遣実施スケジュール（一次募集）

9 月 26 日～10 月 16 日	派遣地域の募集
10 月中旬～	派遣地域の決定
	派遣地域とアドバイザーのマッチング
11 月～3 月	アドバイザー派遣の実施

表　派遣実施スケジュール（二次募集）

10 月 31 日～11 月 27 日	派遣地域の募集
受付次第順次	派遣地域の決定
	派遣地域とアドバイザーのマッチング
11 月～3 月	アドバイザー派遣の実施

（4）派遣の条件等

派遣にあたっては、事業内で 40 地域・回（※1 回当たり 17 時間稼働を目安）を上限とし、アドバイザーの旅費（※現地までの交通費、現地での宿泊費※前後泊含む）及び謝金を事務局負担とした（※現地での移動費用、施設利用料、入場料、その他アドバイスの実施にあたって現地で発生した費用等は申請地域が負担）。

（5）審査・選定

上記への公募に対して、下記の審査基準で書類審査を行い、総合的視野（地域間のバランスや、資源性のバランス、その他環境省関連事業の実績等）も考慮した上で選定を行った。

【審査基準】

- 応募資格を満たしていること。
- エコツーリズムに取り組む目的が明確であること。
- 多様な主体が連携しながらエコツーリズムに持続的に取り組む体制がとれること。
- 地域の現状や課題に対し、アドバイスを希望する内容が明確であること。
- アドバイザーの助言や指導を取組に反映させる仕組みがあること。

2-3. 派遣地域とアドバイザーのマッチング

派遣要請があった地域からの要望や地域の実情等を勘案し、アドバイザーの専門分野とのマッチングを行った。結果、派遣地域として 18 地域、アドバイザー14 名（内 7 名は複数地域に派遣）を決定した。

【派遣地域とアドバイザーのマッチング結果】

都道府県	市町村・地域	申請団体	派遣アドバイザー	派遣日
青森県	八戸市	八戸市	安類　智仁氏	2/7-8
岩手県	岩手郡雫石町を中心とする岩手山周辺地域	NPO法人しずくいし・いきいき暮らしネットワーク	北川　健司氏*	2/11-13
			橋詰　元良氏*	
			三木　廣氏*	
栃木県	芳賀郡市貝町	市貝町	渡邊　法子氏	1/8-10
千葉県	南房総市	南房総市	木村　宏氏	2/2-3
				2/15-16
東京都	西多摩郡檜原村	NPO法人フジの森	真板　昭夫氏	1/18-20
新潟県	妙高市	妙高市	鈴木　順一朗氏	2/24-26
福井県	大野市	大野市	鈴木　順一朗氏	12/18-20
福井県	小浜市	小浜市	城戸　基秀氏	2/5-7
静岡県	賀茂郡東伊豆町	東伊豆ECOツーリズム協議会	渡邊　法子氏	11/20-22
				2/5-7
静岡県	大井川流域	大井川流域振興連絡会	木村　宏氏	1/18-19
愛知県	名古屋市	東海自転車旅エコツーリズム協議会	高橋　充氏	2/2-4
三重県	多気郡大台町	NPO法人大杉谷自然学校	川嶋　直氏	2/25-27
山口県	周南市	周南市	川嶋　直氏	2/3-4
徳島県	那賀郡那賀町	那賀町	高橋　充氏	1/27-29
			加藤　誠氏	3/18-19
鹿児島県	南大隅町	南大隅町ツーリズム推進協議会	加藤　誠氏	3/3-4
鹿児島県	徳之島	奄美群島広域事務組合	海津　ゆりえ氏	2/22-25
沖縄県	八重山郡竹富町	NPO法人西表島エコツーリズム協会	松本　毅氏	11/16-17
沖縄県	南大東村	南大東村	真板　昭夫氏	2/28-3/2

* 環境省が予め就任を依頼したアドバイザー以外で、地域から推薦があった有識者。

3. アドバイザー派遣事業　平成 25 年度取組事例

3-0. 取組事例インデックス

（1）アドバイス分野別

	エコツーリズムに関する意識啓発、資源の発掘	ガイド人材の育成、ガイド制度づくり	利用と保全の仕組みづくり	環境教育の実施	地域が協働する推進体制づくり	エコツアーの商品化と事業化	フィールド環境の整備・計画	環境省施策・事業の活用	頁
八戸市 （青森県八戸市）	●	●							11 頁
NPO 法人しずくいし・いきいき暮らしネットワーク （岩手県岩手郡雫石町を中心とする岩手山周辺）	●	●	●	●	●	●			16 頁
市貝町 （栃木県芳賀郡市貝町）	●				●	●			29 頁
南房総市 （千葉県南房総市）					●	●			36 頁
NPO 法人フジの森 （東京都西多摩郡檜原村）	●					●			44 頁
妙高市 （新潟県妙高市）	●		●		●	●			53 頁
大野市 （福井県大野市）	●	●	●		●	●			63 頁
小浜市 （福井県小浜市）	●		●		●	●	●		75 頁
東伊豆 ECO ツーリズム協議会 （静岡県賀茂郡東伊豆町）	●	●		●	●	●			80 頁
大井川流域振興連絡会 （静岡県大井川流域）	●	●	●		●	●			97 頁
東海自転車旅エコツーリズム協議会 （愛知県名古屋市）	●			●	●	●	●	●	104 頁
NPO 法人大杉谷自然学校 （三重県多気郡大台町）						●			110 頁
周南市 （山口県周南市）	●			●	●	●			116 頁
那賀町 （徳島県那賀郡那賀町）	●				●				123 頁
南大隅町ツーリズム推進協議会 （鹿児島県南大隅町）	●	●	●		●	●	●		134 頁
奄美群島広域事務組合 （鹿児島県徳之島）	●		●						143 頁
NPO 法人西表島エコツーリズム協会 （沖縄県八重山郡竹富町）		●	●				●		155 頁
南大東村 （沖縄県南大東村）	●				●	●		●	162 頁

（2） 取組段階別

取組段階	申請団体	頁
胎動期	八戸市（青森県八戸市）	11 頁
	市貝町（栃木県芳賀郡市貝町）	29 頁
	小浜市（福井県小浜市）	75 頁
	東海自転車旅エコツーリズム協議会（愛知県名古屋市）	104 頁
	周南市（山口県周南市）	116 頁
	那賀町（徳島県那賀郡那賀町）	123 頁
	南大隅町ツーリズム推進協議会（鹿児島県南大隅町）	134 頁
始動期	NPO 法人しずくいし・いきいき暮らしネットワーク（岩手県岩手郡雫石町を中心とする岩手山周辺地域）	16 頁
	NPO 法人フジの森（東京都西多摩郡檜原村）	44 頁
	大野市（福井県大野市）	63 頁
	東伊豆 ECO ツーリズム協議会（静岡県賀茂郡東伊豆町）	80 頁
	奄美群島広域事務組合（鹿児島県徳之島）	143 頁
	南大東村（沖縄県南大東村）	162 頁
改善期	南房総市（千葉県南房総市）	36 頁
	妙高市（新潟県妙高市）	53 頁
	大井川流域振興連絡会（静岡県大井川流域）	97 頁
	NPO 法人大杉谷自然学校（三重県多気郡大台町）	110 頁
	NPO 法人西表島エコツーリズム協会（沖縄県八重山郡竹富町）	155 頁

（3） 地域別

地域	申請団体	頁
東北地方	八戸市（青森県八戸市）	11 頁
	NPO 法人しずくいし・いきいき暮らしネットワーク（岩手県岩手郡雫石町を中心とする岩手山周辺地域）	16 頁
関東地方	市貝町（栃木県芳賀郡市貝町）	29 頁
	南房総市（千葉県南房総市）	36 頁
	NPO 法人フジの森（東京都西多摩郡檜原村）	44 頁
北陸地方	妙高市（新潟県妙高市）	53 頁
	大野市（福井県大野市）	63 頁
	小浜市（福井県小浜市）	75 頁
中部地方	東伊豆 ECO ツーリズム協議会（静岡県賀茂郡東伊豆町）	80 頁
	大井川流域振興連絡会（静岡県大井川流域）	97 頁
	東海自転車旅エコツーリズム協議会（愛知県名古屋市）	104 頁
近畿地方	NPO 法人大杉谷自然学校（三重県多気郡大台町）	110 頁
中国地方	周南市（山口県周南市）	116 頁
四国地方	那賀町（徳島県那賀郡那賀町）	123 頁
九州地方	南大隅町ツーリズム推進協議会（鹿児島県南大隅町）	134 頁
	奄美群島広域事務組合（鹿児島県徳之島）	143 頁
	NPO 法人西表島エコツーリズム協会（沖縄県八重山郡竹富町）	155 頁
	南大東村（沖縄県南大東村）	162 頁

3-1. 八戸市（青森県八戸市）

(1) アドバイザー派遣申請の背景

●地域の概要

人口　238,835 人（平成 26 年 1 月末現在）
面積　305.40km²
種差海岸概要
うみねこの繁殖地である蕪島を起点として南東に伸びる海岸線。白砂青松、大小の岩礁、小島が交互に続き、高山植物及び海浜植物の宝庫でもある。平成 25 年 5 月に三陸復興国立公園に指定。

●アドバイザー派遣申請の背景・これまでの取り組み

〇派遣申請の背景

種差海岸は平成 25 年 5 月に国立公園に指定され、市内外から注目され始めた。それとともに、ガイドの要請が昨年度に比べ倍増し、全ての要請を受け入れられない状況であった。ガイドの絶対数が不足している状況であり、ガイドのスキルアップが課題である。

このことから、ガイドの仕事を多くの方に知っていただき、興味を持ってもらうこと。そして、来訪者に再訪していただけるよう、スキルアップを図っていくことを目的にアドバイザー派遣事業を行った。

〇これまでの取り組み

・ガイド同士の情報交換会実施。

(2) アドバイザー派遣の概要

日　　時	平成 26 年 2 月 7 日（金）～平成 26 年 2 月 8 日（土）
場　　所	三陸復興国立公園　種差海岸
ア ド バ イ ザ ー	NPO 法人片品・山と森の学校　理事／チーフインタープリター　安類　智仁　氏
参　加　者	第 1 部　87 名 第 2 部　35 名
スケジュール・方法	【1 日目】 ・現地視察及び、既存ガイドから聞き取り 【2 日目】 ・講習会第 1 部「尾瀬プロガイドが語る！～地域の宝をまもり・つたえる～」 ・講習会第 2 部「ガイドを観光資源にするには」

(3) アドバイスの内容

自然ガイドのあり方について

・ガイドの役割、求められるもの（知識＜安全性、時間管理）

・地域間の連携の必要性（ガイドは地域の人と引き合わせるという役割も持つ）

・ガイドの情報発信方法（AGT への情報発信、PR イベントへの参加）

(4) アドバイザー派遣の効果

●参加者や関係者に与えた効果

・自然ガイドへの興味が高まった。
・ガイドは地域の魅力を伝える一つの手段であることの認識
・地域間の連携が必要であることの認識
・種差海岸の魅力の再認識

●今後の期待される効果

・今回の講習会で自然ガイドへ興味を持った方々が、ガイドとして活動できるよう学ぶ場をつくる。

●今後の取り組み

・新規ガイドの育成及び既存ガイドのスキルアップを図るため、勉強会と先進地視察を実施。
・ガイド同士の情報交換会を実施

(5) アドバイザー派遣を実施して（地域からの声）

●参考となった事項

自然ガイドは、地域宣伝マンであること。
地域間で連携することの重要性。

●その他感想

・講習会を通し、たくさんの方に自然ガイドに興味をもっていただいた。結果、新規ガイドの発掘に繋がった。今後、ガイドとして活動できるよう、育成事業に繋げて参りたい。また、今後地域間の連携を強くし、地域魅力発信に努めて参りたい。

(6) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

NPO 法人片品・山と森の学校　理事／チーフインタープリター　安類　智仁　氏

●地域におけるエコツーリズム推進の取組の現状と課題

青森県八戸市の東部に位置する種差海岸は、平成 25 年 5 月に三陸復興国立公園の一部に指定され、本地域の東日本大震災からの復興に貢献する役割を担っている。また同年には「三陸ジオパーク」にも指定され、長距離自然歩道「みちのく潮風トレイル」の起点でもあることから、その知名度は急に知られることになった。一方で利用拠点の整備やツアーコースとプログラム開発、またガイド育成といった受入全般において体制づくりが遅れている。

●特に魅力を感じた地域の自然観光資源

種差海岸は三陸特有のリアス式海岸とは異なり、比較的緩やかな地形からなる海岸線だが、荒々しい風と波が叩きつける海岸だけでなく、目の細かな鳴き砂のある大須賀海岸、放牧によって維持されてきた芝生、風衝地特有の植物群落など、様々な要素の自然がコンパクトにまとまり変化に富んだ地域である。また海岸北部のウミネコ繁殖地としても有名な蕪島は国の天然記念物にも指定されており、周辺観光ルートの一つとして多くの人が現在も訪れている。このほか自然観光資源ではないものの、国の重要無形民俗文化財である伝統芸能「えんぶり」や市街地での「朝市」は遠方からの観光客にも好まれている。

●アドバイス（講義等）の概要

八戸市では受入体制づくりの一つとしてガイド育成に着手したばかりである。本地域では国立公園指定前から地元ボランティアによる自然解説や、個人ガイドによる活動が行われてきたが、今回のアドバイスを通じて従来のガイド団体のネットワーク構築・相互交流・スキルアップをはかるとともに、地元住民のガイド活動への参加を促している。

このため、アドバイスではガイド活動の楽しさを感じてもらい、エコツーリズムにおけるガイドの役割や地元への貢献内容などを尾瀬での事例を使いながら紹介を行った。

●全体構想への取組状況・意向について

本地域はエコツーリズム黎明期であり、同様な意見交換・検討を行う推進体制が存在しないため、少なくとも八戸市単独では全体構想への取組みは予定していない。しかし、長距離自然歩道を軸にした地域だけに、全体構想に伴うエコツアー送迎の規制緩和などは今後の検討課題としてあげられると思われる。

●地域に対する印象、今後地域に期待すること（メッセージ）

派遣 1 日目に訪れた蕪島と種差海岸は様々な自然の要素がコンパクトにまとまった地域であり、日本人が持っている原風景のイメージに近い姿を持っている。東北新幹線八戸駅から車で約 20 分という距離感にある。また自然度の高い海岸線からほんの 50m 内陸側では民家があり、人間活動が行われているが、こうした距離にあって種差海岸の自然度が高いまま残されている事に驚いた。海岸線には国立公園指定に伴う歩道が整備されたものの、余計な人工物は全くなく、現地の雰囲気を壊さないよう配慮されていた。

種差海岸では環境省や地元自治体の関わりだけでなく、地元ボランティアグループがいくつか存在し、芝生の維持管理（草刈り）、美化清掃やモニタリング調査が行われている。また、ガイド活動においてもこれらの団体だけでなく、数人の個人ガイドがアクティブに活動するなど、種差海岸と関係する様々な主体が見えやすく存在してい

る。

ガイド団体同士や個人ガイドとの間では、主義・主張の違いによる隔たりが感じられたが、その大半は交流不足・情報不足によるものと思われるため、八戸市がガイドの連絡会議を設置し月 1 回ペースで情報共有を図ろうとしている点は良いきっかけとなると思われる。こうした場でお互いの活動について認識を深め、種差海岸全体を良くするためのガイドルール（合意事項）づくりや、ガイドのスキルアップのための教本づくりなどが次のステップにつながると思われる。現時点ではこうした事務局運営はニュートラルな立場にある八戸市が最適と思われる。

一方、受入体制づくりにあたっては、より多くの主体が参画した場を設定する必要がある。ここでは種差海岸全体の利用計画を検討するだけでなく、種差海岸と関わる全ての主体について、この地域のエコツーリズム推進のための役割を明確にし、関わりの薄い地元住民に対してもこうした取組みがわかるよう配慮することで、地域全体での受入体制づくりができると思われる。

視察や意見交換会、また講習会後にも様々な方と話したが、自然だけでなく、文化的な奥深さや、人懐っこい人間性に触れることができた。エコツーリズム推進にとって最も大切な「人間の魅力」を最大限に活かしていただきたいと思う。

3-2. NPO 法人しずくいし・いきいき暮らしネットワーク（岩手県岩手郡雫石町を中心とする岩手山周辺地域）

（1）アドバイザー派遣申請の背景

●地域の概要

しずくいし・いきいき暮らしネットワークがエコツーリズム事業を推進している雫石町は、名峰岩手山の南麓に広がる面積 609.01 km²、人口 17,277 人の農村地域で、エコツーリズムの推進は、雫石町を中心に南八幡平エリアと呼ばれる山岳高原域とその周辺の農村域、牧野域をも対象地域に考えており、県境を越えた秋田県の田沢湖や乳頭温泉郷などとの連携を進めている。

南八幡平エリアは、広く十和田八幡平国立公園に含まれる森林地帯や湖沼、山岳、渓谷を含む大自然域である。

南八幡平エリアは、「深田久弥の日本百名山」に選ばれている岩手山、八幡平や「花の百名山」に撰ばれ秋田駒ヶ岳などの日本を代表する名峰が連なる山岳高原域で、高山植物の宝庫であり、深い渓谷や高層湿原、火口湖などの優れた自然がみられるほか、エリア内には乳頭温泉郷や松川温泉、網張温泉、玉川温泉、東八幡平温泉郷、後生掛温泉、藤七温泉などの名湯、秘湯が多く見られることから、多くの登山客やハイカーが訪れる人気の山岳エリアになっている。そして、南八幡平エリアの中央部には、白神山地ブナ林(世界自然遺産)にも匹敵する規模と自然度で、「葛根田ブナ原生林」と呼ばれる広大な森林渓谷域が広がっている。

この「葛根田ブナ原生林」は、北上川の支流葛根田川源流域に位置し、人里離れた深山にあって、森林の伐採はおろか、入山する人も稀であったことから、手つかずの原生自然が残されており、イヌワシやヤマネ、ニホンカモシカ、ツキノワグマなど多く野生生物が棲むほか、数多くの絶滅危惧種が生息する東北地方屈指の生態系ホットスポットである。

「葛根田ブナ原生林」のような生物多様性豊かな生態系ホットスポットは、同じく東北地方の白神山地ブナ林と並ぶ世界遺産級の自然の聖域として、固有の生態系や生物多様性を保全し、その資源価値を高めることで、エコツーリズムなどでの活用が可能であることから、大震災の影響もあり、経済面での復興が求められる東北地方(岩手県)にあって、自然遺産としてのワイズユース(資源性を保全・高めながらの活用)が望まれている。東北地方の秘境とされ、外来者の侵入を拒んできた「葛根田ブナ原生林」などの葛根田川源流域も、過疎高齢化が進み、地域住民が山に入る機会が少なくなる中、近年、大規模な林道建設などもあり、年を追うごとに登山や沢登りなどで県外からの入山者が増え、遭難事故の発生に加えて、車両の通行や入山者の高山植物の群落域や湿原域への立ち入りによる環境悪化が懸念されている。

●アドバイザー派遣申請の背景・これまでの取り組み

東北の名峰「岩手山」は、南部富士と呼ばれる秀麗な火山峰で、山麓の広がる牧場や水田農村地帯から大きく雄大に望むことができる岩手県のランドマークでもある。

また、激しい火山活動を繰り返しながら成長した巨大な成層火山であることから、変化に富んだ火山地形が見られる。

さらに、岩手山を源とする葛根田川(北上川の支流)の源流域から秋田駒ヶ岳、八幡平にかけての山地には、世界遺産「白神山地のブナ林」にも匹敵する広大な天然林域が広がっている。

岩手山は、日本を代表する美しい名峰であり、山岳としての雄大な眺望や大自然とあわせて、その山麓には緑豊かな農村地帯が広がっているにもかかわらず、観光といえば、冬のスキーや登山・ハイキング、山岳ドライブが主流で、観光客の減少傾向が続いている。

そのような状況の中、岩手山の南麓地域では、小岩井農場でのバスツアー(小岩井農場物語り)をはじめ、農業体験を取り入れた教育旅行などグリーンツーリズム、エコツーリズム、ニューツーリズムの動きが見られるようになり、NPO や地域住民、学識経験者が連携して、岩手山の美しい眺望や秋田駒ヶ岳、岩手山、八幡平と連なる火山性山岳とその山麓に広がる農村地帯の生物多様性豊かな自然環境を保全し、活用した環境保全型の観光により地域の活性化を進めたいという活動がはじまっている。

そのような状況のもと、しずくいし・いきいき暮らしネットワークでは、平成 24 年 4 月より、同じく富士山型名峰である大山や牧歌的農村景観が広がる蒜山地域で自然学校やエコツーリズム事業を展開しているグラウンドワーク大山蒜山との交流連携により、名峰の景観や地域の生物多様性を保全・活用したエコツーリズムの推進を進めており、昨年度は、内閣府の復興型地域社会雇用創造事業やエコツーリズム推進アドバイザー事業を活用し、伊藤延廣氏(裏磐梯エコーリズム協会会長)、三木廣氏(富士山エコネット理事長)、橋詰元良氏(浅間山麓国際自然学校理事長)、中越信和氏(広島大学大学院教授)、大木公彦氏(桜島ジオパーク研究会会長)、坂元英俊氏(前阿蘇地域振興デザインセンター事務局長)、渋谷晃太郎氏(岩手県立大学教授)などを講師に招き、エコツーリズムセミナーや勉強会・調査会、研修会、ガイド養成などを行ってきた。

岩手山を中心とした南八幡平エリアは、原生自然的な環境が残る森林域、渓谷域のほか、山麓に広がる牧野域や水田農村域など里地里山の農村エリアである。南八幡平エリアのみならず、これまでのエコツーリズムは、ガイド・インストラクターがインタプリターとして自然解説や環境案内、自然体験アクティビティーの指導を行う自然観察型、冒険(自然体験)型のものが主流で、国立公園内の湖沼群や湿原地帯、森林域、渓谷域などの原生自然的な環境や優れた景観が見られる大自然域・生態系域をフィールドとしたエコツアーであったことから、環境負荷を考慮して少人数でのツアーとならざるを得ず、また、その地に生育生息する野生生物への影響が懸念されている。

雫石町を中心とした南八幡平エリアにおいて進めている生物多様性を活かしたエコツーリズムは、地域住民や NPO が取組んでいる野生生物の調査や保全活動に参加する体験型ツアーであり、これまでツアーのフィールドとしてあまり利用されていなかった草原、牧場、里山雑木林、山里・人里、水田農村域、河川などでの生物多様性を保全する活動が体験プログラムとなることから、ツアーで利用できるフィールドが格段に広がるとともに、体験活動時間の長時間化による滞在時間の増加や訪問頻度増大などにより、宿泊客も増える。また、野生生物の調査保護や景観を保全する体験活動そのものによって、景観の保全や生息環境再生が進み、地域が魅力的になることから、来訪者の増大にもつながる。

火山国「日本」には、富士山、羊蹄山、大山、男体山、鳥海山、岩木山、木曽御岳、浅間山、・・・磐梯山、阿蘇山、桜島・・・など美しい火山性の名峰(ふるさとの富士)が多くみられ、これら名峰は、その地方のシンボル、ふるさとの山、お国のランドマークとして、古来より多くの人々に愛されてきた。

一方、雄大で秀麗とされる日本の火山峰(ふるさとの富士)であるが、登山やスキー以外にはあまり観光利用され

ることがなく、かつて美しく名峰を仰ぎ望むことができた山麓域は、少子(過疎)高齢化など人口減少も進み、昔懐かしい農村の風景の消失とともに、生物多様性の低下も危惧されている。

そのような中、世界中で地域の生物多様性を資源として活用しようという動きも見られるようになっており、美しい風景や自然と共生する暮らし、固有の食文化などを生み出す生物多様性は資源である。

温帯域にあって生物多様性が豊かとされる日本の農山村には、昔懐かしい山里の風景の中に、今では珍しいとされる生き物が多く棲んでいるが、農地や山林、草原が荒廃する中でこれら野生生物の中には絶滅が危ぶまれているものがいる。

本アドバイザー派遣申請は、豊かな生態系や美しい景観に恵まれた名峰地域において、これら絶滅の危機に瀕した野生生物やふるさとの風景を保護保全する活動に実践的に参加し、生物多様性の恵みとも言える地域の自然や景観、食を楽しもうという旅行スタイルの可能性などについて話し合い、名峰地域の山麓に広がる生物多様性豊かな農村域を、エコツーリズムのフィールドとして活用することを目的に行うことになった。

(2) アドバイザー派遣実施の概要

日　　時	平成 26 年 2 月 11 日（火）～平成 26 年 2 月 13 日（木）
場　　所	事前打合せ：鶯宿温泉(ホテル森の風) 情報交流・講演（セミナー）： 小岩井農場(倶楽部会議室) 戦略会議：道の駅あねっこ 視察場所：松川温泉、東八幡平温泉郷、渋民地区(石川啄木記念館周辺)、御所湖、鶯宿温泉周辺、小岩井農場、岩手山周辺(焼走溶岩流、岩山公園など)等
アドバイザー	株式会社 アウトドアサポートシステム　代表取締役　北川　健司　氏＊ NPO 法人浅間山麓国際自然学校　理事長　橋詰　元良＊ NPO 法人富士山エコネット　理事長　三木　廣　氏＊ ＊環境省が予め就任を依頼したアドバイザー以外で、地域から推薦があった有識者
参　加　者	＜事前打合せ・情報交流会参加者＞ しずくいし・いきいき暮らしネットワーク、岩手山自然ガイド協会設立準備会、岩手県登山ガイド協会、小岩井農場、安比高原自然学校、北海道や東北地方でエコツーリズムを進めている団体(NPO 法人岩木山自然学校、裏磐梯エコツーリズム協会、NPO 法人尻別川リバーネット、NPO 法人鳥海遊佐観光協会)の関係者の他に、地域住民、地元自治体(雫石町役場など)の職員、環岩手山ニューツーリズム研究会の会員(大学教授、NPO 関係者など)など　計 27 名 ＜講演（セミナー）＞ しずくいし・いきいき暮らしネットワーク、岩手山自然ガイド協会設立準備会、岩手県登山ガイド協会、小岩井農場、安比高原自然学校、北海道や東北地方でエコツーリズムを進めている団体(NPO 法人岩木山自然学校、裏磐梯エコツーリズム協会、NPO 法人尻別川リバーネット、NPO 法人鳥海遊佐観光協会)の関係者の他に、地域住民、地元の観光協会(雫石観光協会)、地元自治体(雫石町役場など)の職員、環岩手山ニューツーリズム研究会の会員(大学教授、NPO 関係者など)など　計 27 名 ＜戦略会議＞ しずくいし・いきいき暮らしネットワーク、岩手山自然ガイド協会設立準備会、岩手県登山ガイド協会、小岩井農場、安比高原自然学校、北海道や東北地方でエコツーリズムを進めている団体(NPO 法人岩木山自然学校、裏磐梯エコツーリズム協会、NPO 法人尻別川リバーネット、NPO 法人鳥海遊佐観光協会)の関係者など　計 14 名
スケジュール・方法	【1 日目 】 ・岩手山周辺の現地視察 松川温泉、東八幡平温泉郷、御所湖、鶯宿温泉などのツーリズム拠点を視察 ・事前打合せ

	【2 日目】 ・小岩井農場など雫石町内の視察 ・岩手山麓の生物多様性を活かしたツーリズムフォーラム(情報交流会) 　橋詰氏、北川氏、三木氏はツーリズムフォーラムで講演 ・名峰ツーリズム戦略会議 【3 日目】 ・岩手山麓の視察と現地指導 　焼走溶岩流、八幡平市、滝沢村、岩山公園など エコツーリズムを考える場合、屋久島や知床半島、白神山地など、人里離れた島嶼部や日常立ち入ることのすくない原生自然域でのガイド付きツアーをイメージすることが多いが、富士山麓や浅間山麓には教育旅行で年間多くの児童生徒が訪れており、教育旅行でのエコツアーが実施されている。また、木曽御岳や白山などでは渓谷や清流を活かしたアドベンチャー型のエコツアーを開催されている。岩手山は、富士山、浅間山、木曽御岳と同じく巨大な成層火山で溶岩流や火山麓扇状地、側火山などの共通した地形や環境もみられことから、岩手山麓でエコツーリズムを進めるにあたり、富士山や浅間山で展開されているエコツアーを取り入れた教育旅行、木曽御岳や白山周辺で行われている源流探検型のエコツアーについてアドバイザーからの助言指導を受けた。

(3) アドバイスの内容

三木廣氏(富士山エコネット理事長)、橋詰元良氏(浅間山麓国際自然学校理事長)、北川健司氏(アウトドアサポートシステム代表)とは、名峰山麓の景観や生物多様性を保全する活動に参加するプログラムを取り入れたエコツーリズムを「生物多様性ツーリズム」として進めるべく、講演を依頼し、情報交流と助言指導を求めた。

アドバイザーからのアドバイスは、事前打合せや現地視察、戦略会議で行われたが、基本的にはアドバイザーそれぞれがフィールドとしている富士山麓、浅間山麓、白山麓で取組んでいるエコツアーや教育旅行、自然学校事業を紹介する形で行われ、その内容は生物多様性ツーリズムフォーラム(情報交流会)での講演の中で凝縮されて紹介された。

以下、アドバイザーごとの講演内容でとくに重要で参考になった内容を記す。

●三木　廣さん（特定非営利活動法人 富士山エコネット 理事長）の講演

①特定非営利活動法人富士山エコネットの活動紹介
②富士山麓(青木ヶ原樹海など)における教育旅行エコツアーについて
③教育旅行エコツアーにおいて求められるプログラムづくりと事前学習
④必要とされるガイド(インストラクター)の数と質、その養成方法
⑤クリーン活動体験など環境保全活動について、エコツアー団体としての取組み

●橋詰元良さん（特定非営利活動法人 浅間山麓国際自然学校 代表理事）の講演

①特定非営利活動法人浅間山麓国際自然学校の活動紹介
②浅間山麓で実施されている教育旅行用ネイチャーガイドプログラムについて
③浅間一周ロングトレイルツアーなど、ロングトレイルツアーの具体的内容と運営方法
④レンゲツツジ群落保全など浅間山麓における生物多様性と景観保全の取組み
⑤自然保護・環境保全と観光事業の両立やカントリコードについて

●北川健司さん（株式会社 アウトドアサポートシステム　代表取締役）の講演

①アウトドアサポートシステムの事業と会社紹介
②白山の山麓で実施されている自然学校(自然体験型環境学習)プログラムについて
③シャワークライミングなど源流環境を活用した探検型エコツアーの内容と収益性
④RAC(特定非営利活動法人川に学ぶ体験活動協議会)とガイドインストラクター養成
⑤名峰の環境を活かしたロングトレイル事業と健康トレッキング・ツアーなど

生物多様性フォーラムの会場となった
小岩井農場クラブハウス

生物多様性フォーラムの会場となった
小岩井農場の重要文化財

生物多様性フォーラムで公演中の橋詰アドバイザー

生物多様性フォーラムで席に座っている
北川アドバイザー（前列左側）と
三木アドバイザー（二列目、左から 2 番目）

生物多様性フォーラムでの
三木アドバイザーと橋詰アドバイザー

現地視察中の三木アドバイザー

(4) アドバイザー派遣実施の効果

●参加者や関係者に与えた効果

岩手山・八幡平地域においては、これまでの研修会や講演会、シンポジウムなどで「エコツーリズム」という概念は、定着しつつあり、地域の活性化や資源の掘り起し、ふるさとの再発見につながるという期待感はあったが、これまで紹介されていた事例は、屋久島であったり、知床であったり、小笠原であったり、当地域のような街や農村域に近い環境をフィールドとしたものでなく、人里離れた自然域を訪ねるガイドツアーであったことから、あまり活動の参考になっていなかった。

また、ガイドツアーでは、少数のガイド団体だけに儲けが発生し、地域の活性化がはかれないことはもちろん、資源である自然が観光客によって踏みにじられるというマイナス部分も見えており、エコツーリズムは難しいという絶望感もでていた。

そういう中、今回、名峰(巨大火山)地域と共通の環境をフィールドで活動する実践家をアドバイザーとして派遣され、実践事例をもってエコツーリズム事業の説明や助言を受けたことによって、岩手山地域で展開すべきエコツーリズムのイメージが具体的に見えるようなり、今後いっそうエコツーリズムに取り組もうという意欲が高まった。

●今後の期待される効果

地域的な差異はあるものの、同じく名峰を背景およびランドマーク、地域のシンボルにもっていることから、情報交流などでノウハウを共有することが可能になった。

とくに、岩手山には葛根田川の源流域は秘境をなす峡谷域が広がり、白山や木曽御岳周辺で実施されているシャワークライミングなど源流探検型のエコツアーを参考に、ブナ林や渓谷の生物多様性を活かしたツーリズムや教育旅行に取組むことになった。

また、浅間山麓で展開しているロングトレイル事業については、岩手山地域で取り組んでいる山麓トレッキング事業にも大いに参考になり、今後、岩手山地域でも浅間山の取組みを参考に岩手山一周ロングトレイル事業に取り組む気運が高まった。

このロングトレイル事業は、全国の名峰地域とのネットワーク構築を進めるにあたり、有効な手段になるということで意見が一致したことから、浅間地域、大山地域、富士山地域など名峰地域を中心に日本の自然と風景を楽しむ「歩く観光」を取り入れた体験型エコツーリズム・プログラムを開発していこうという話しになった。

牧野地帯が広がる岩手山地域においては、雄大で牧歌的な山麓風景が広がっており、名峰を背景に牧場の環境をゆっくりと歩くロングトレイルは農村型エコツーリズムを進める上で大きな魅力になると期待される。

●今後の取り組み

「葛根田ブナ原生林」を含む南八幡平(岩手山地域)について、ワイズユースを考える検討会議を発足させるとともに、葛根田川源流域の自然環境調査とあわせて入山状況や環境悪化の状況について実態把握を進めるともに、都市住民と地域の子どもたちが参加する現地見学会をエコツアーとして開催し、意見交流の場をもうけることで、都市住民や地域の子どもたちに検討会議への参加・出席を求め、「葛根田ブナ原生林」についてのワイズユースを進めるための地域ルールづくりを進める。また、南八幡平(環岩手山)こどもエコクラブの結成や、南八幡平の保全と活用を考える環境・エコツーリズムフォーラムなどを開催し、自然遺産としての「葛根田ブナ原生林」の魅力と資源性の情報発信をはかりながら、自主ルールについて地域の合意形成をはかる。

(5) アドバイザー派遣を実施して（地域からの声）

●参考となった事項

エージェント(旅行業者)との関係、歩く観光に人気が高まっていること、ツアープログラムの開発、ガイドの管理、体験型観光の需要の高まりなどについて、先進的かつ実践的な活動を通じての話しには説得力があり、これから当地域において本格的にエコツーリズム事業を展開する上で大いに参考になった。

とりわけ、エコツーリズムを展開していく上では、優秀なガイドの存在が不可欠といわれていたが、特定非営利活動法人富士山エコネット代表の三木廣さんの話しからは、ガイドも大切であるが、ガイドの個人的技能や知識に頼るのでなく、しっかりとしたガイド・プログラムをつくって、ガイド組織全体でチームワークをもって事業に取り組むことが重要との話しは、たいへん参考になり、共感がもてた。

また、特定非営利活動法人浅間山麓国際自然学校は、上信越国立公園浅間山地区の公園管理団体となって、浅間山麓の生物多様性や景観の保全活動を進めており、橋詰元良さんの話しから、これら環境保全活動そのものが今後のエコツアーでの体験プログラムとなるという実感を得ることができた。

さらに、北川健司さんの事業紹介からは、冒険・探検的な要素を取り入れた源流エコツーリズムについての需要の高まりについて情報を得ることができ、それに伴うリスクマネージメントの重要性や、求められるガイド・インストラクターの質について勉強になり、今後の事業展開を考える上での参考になると同時に、北川さん、三木さん、橋詰さんらとの活動ネットワークを拡大させていきたいと考えている。

●その他感想

今回、講師に富士山や浅間山、木曽御岳、白山の山麓でエコツーリズムを実践的に展開する団体の代表を招いて現地指導や講演会をおこなったが、当初、これらの地域は富士五湖や軽井沢などの有名観光地を有し、首都圏にも近いことから、集客面において岩手山地域より有利な状況にあると考えていた。実際に助言を受け、話しを聞く中で、大都市に近い分、開発も進み、自然生態系はもちろん、昔懐かしい景観や歴史的資源も失われていることがわかり、岩手山地域は資源面において、富士山や浅間山の山麓よりのエコツーリズム事業を展開する上において有利ということもわかった。

後は、この残された自然や景観、文化資源を上手く活用したエコツーリズム・プログラムをどのように開発し、それを運営する人材育成や運営組織づくりをどう進めていくかであり、今後も富士山や浅間山、木曽御岳、白山などの名峰地域と情報交流を進めながらそれに取り組んでいこうと考えている。

(6) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

株式会社アウトドアサポートシステム　代表取締役　北川　健司　氏

●地域におけるエコツーリズム推進の取組の現状と課題

雫石町は、盛岡市に隣接し、交通網など恵まれ、参加者を集めやすい環境にある。
また、自然豊かな地域で四季を通じて活用できる資源が豊富だ。
エコツーリズム事業やガイドの参画者は、年齢的にも幅があり今後の取り組みにも期待が持てる状態だ。
現在取り組んでいる方々は積極的な取り組みで雰囲気もいいと感じた。
エコツーリズムを理解し、活動しようとしている団体や個人も多数あるが、ネットワークとしての活動も進みつつあるように感じた。
現状では、ガイドの数が少なく、地域や周辺からさらなる参画者を求める働きも必要だ。
地域の事をよく知る地元の人が中心であるが、ネットワークを作って地域の魅力を生かしたプログラムを開発し、ニーズに合わせた商品作りをしていく余地は多くあると感じた。
現状の参画者には自分たちの好きなスタイルは完成されているので、それを生かして対象者にあったプログラム作りを考える事ができれば、いいプログラム作りができるはずだ。

●特に魅力を感じた地域の自然観光資源

今回、冬のフィールドを見たが豊富な雪が魅力的だ。広大な農地や牧場も冬なら利用できる余地はあるだろう。
さらに魅力的な温泉地や宿泊施設が豊富にあり、それらとの連携により更に魅力つけをできる。広域ではあるがコンパクトにまとまっている。
歴史や文化も点在しており、大きな祭りが毎月のようにある、その時期に合わせて祭りの前後にプログラムを企画すると魅力を生かせると思う。例えば、馬の祭りの前後に乗馬体験をしたり、祭りの準備を見ることができれば、さらに多角的な体験ができるだろう。
地域の味や飲物、お菓子や名物料理もとても豊富にある。
食・宿・温泉・祭り・文化・山・川・森の全てが充実しているので、それらと連携したイメージのメニュー開発をすれば、全てのシーズンに魅力的な商品つくりが可能だ。
現状の課題は、地域をつなぐ人、魅力的なツアーの企画開発者、旅行社や情報伝達手段などの構築だろう。

●アドバイス（講義等）の概要

白山や乗鞍岳、長良川での私たちの取り組みや指導者育成、行政や他団体との協働イベントやネットワーク作りの仕掛けなど、実際の企画者の立場でお話をした。
特に地域での連携による催しや講習会、各種全国大会の誘致など注目されるエコツーリズムの実施地域となる手法などお伝えした。
白山周辺でのツアーやイベントの実際、乗鞍高原で取り組む子どもたちの団体誘致、御母衣湖の利用促進事業、地域社会や地域行政、地域の人、団体との連携から作る新しい催事などを具体的に紹介した。
また、長期にわたる人材育成事業から創出した地域での若者の起業など指導者育成から自立を促進するための視点などもお話した。

●全体構想への取組状況・意向について

いくつかの団体がそれぞれに取り組みをしているが、人材不足や日常業務の忙しさから、全体構想までの取り組み

や地域のつながりができるには時間がかかりそうでした。
地域をつなぐコーディネーターが望まれると感じました。
民間だけではなく地域行政など公的機関がネットワークの促進や企画作りのための援助をすれば、より構想が早期に進むと思う。

●地域に対する印象、今後地域に期待すること（メッセージ）

歴史のある地域なので人材は豊富にあると思えた。それぞれの活動の中から目指す将来像の共通認識を図っていけば、その先に協働して作っていける道もあると思います。
各団体の活動の活発化のために、新たな人材の育成や発掘、ニーズの掘り起こしとなる魅力的な商品作り、販売ルートの確立も必要です。
素材はそろっているが、顧客の嗜好するメニュー作りと料理人の発掘と養成、魅力のあるコース料理として仕上げられたエコツアー商品作りが必要だ。
販売体制や広報の整備から顧客につなげることが今後の課題だ。
東北に対する特別な支援のある期間に、東北の魅力を発見するエコツアーを多く完成させて震災で離れた旅行者や学校団体を取り戻してほしい。
素材は一流品なので自信を持ってプログラムや商品作りを進めてほしい。

NPO 法人 浅間山麓国際自然学校 理事長　橋詰　元良　氏

●地域におけるエコツーリズム推進の取組の現状と課題

今回派遣先の岩手県雫石町では小岩井農場を中心に散策のガイド団体が複数団体ありそれぞれの活動エリアでエコツーリズム等を推進しているようであるが、各団体のスキルが一定ではなく、ボランティア団体を含めてガイド内容やガイドのスキルにかなりの格差があるように見受けられた。エコツーリズムに関する取り組みについてはボランティアのガイド団体を含めてエコツーリズム推進への意欲は感じられるが、複数の団体がそれぞれに活動指針を持ちバラバラな活動をしているように見受けられ、岩手県雫石町のエコツーリズムとして窓口の一本化をすることによる、活動エリアの多様化、各団体の連携強化が課題であると感じた。

●特に魅力を感じた地域の自然観光資源

この地域は岩手山南麓に広がる小岩井農場約 3,000ha を中心に北側には岩手山の雄大な自然があり、南には田畑が広がり、自然環境観光資源としては大自然をそのまま残す十和田八幡平国立公園の中にある岩手山、その裾野に広がる広大な牧場、小岩井農場の里山的な自然環境及び景観、葛根田川流域に広がる田畑地帯、それらを一体的に見た時に自然と人の生活とが共存している素晴らしい自然観光資源であると感じた。

小岩井農場の草地や営農の風景と牧場内にある森林帯が里山的な自然景観として岩手山と葛根田川流域に広がる田畑を繋いでいる印象を受け、人が生活する中で残されてきた自然景観として、発展している里山としての価値は非常に高いものであると感じた。

また、小岩井農場の草地、森林帯における人や牛（家畜）を含めた生物多様性についても他では見られない自然観光資源であると感じた。

●アドバイス（講義等）の概要

私が活動している浅間山麓周辺地域の一つである長野県東御市湯の丸高原は、明治 37 年に牧場として開場し、当時は数百頭の牛が放牧されていたが畜産業の衰退や輸入飼料の増加などにより年々放牧数が減少し、現在では 10 数頭にまで落ち込んでしまっている。湯の丸高原は牧場が開場したことにより、牛馬の忌避植物であるレンゲツツジだけが食べられず残ったため当時約 90 万株のレンゲツツジの群落が誕生した経緯があるが、現在放牧数の減少とともにレンゲツツジの株数も約 40 万株に減少している状況である。

私たちの自然学校では、この減少傾向にあるレンゲツツジ群落の保全について、この地域で絶滅危惧種に指定されている高山蝶「ミヤマシロチョウ」の保全も含めて、レンゲツツジとミヤマシロチョウを象徴とした生物多様性の保全活動を行っている内容についてお話をさせていただき、併せて浅間山麓周辺の自然観光資源との連携やそれを取りまとめる窓口や委員会の設置等についてお話をさせていただいた。

湯の丸高原や小岩井農場のような人の手の入った自然（里山）においては人を含めた生物多様性を考える必要がある事、自然散策等のガイドについてはそのスキルの平準化と向上するための研修が不可欠である事、生物多様性を考える時に一部エリアではなく山から平地まで全体の多様性を考える事、全体を考えるに当たり各種ガイド団体の一本化が必要な事などを提案させていただいた。

また、点在する資源を繋ぐ方法の一つとして、今ブームとなっているロングトレイルの導入が有効な事も、私たちが実践している浅間ロングトレイルの事例を交えて提案させていただいた。

●全体構想への取組状況・意向について

小岩井農場を中心とした生物多様性の保全及び観光資源としての活用については非常に面白い取り組みである

と感じた。現に小岩井農場ではフットパス的な観光取組がされているということなので、出来れば農場のみならず岩手山を含むその周辺に対しても生物多様性の概念を取り入れた保全や活用を実施して行けば更に幅が広がり町ぐるみの展開へと発展していく可能性があると感じた。

各種自然観光地域及びガイド団体の一本化を図る必要があると感じ、まずは「しずくいし・いきいき暮らしネット」等が中心となり連絡協議会的な情報交換ができるような会議を設ける必要があると考える。そこがバラバラだとガイドのスキルの平準化も全体的な底上げも思うように行かず、観光客も回遊性がないため飽きが来てしまうような気がする。観光客目線からも問い合わせや申し込みは一か所で、そこから様々なメニューやニーズに合ったプログラムを提供できるシステムが必要であると感じている。

生物多様性の保全や活用については、それなりの調査等が必要と考える。

以上のような観点から、エコツーリズム推進法による全体構想の作成および認定については、エリア内の十分な調査を必要とすることとエコツーリズムに関するプログラムの開発やガイドの育成が不可欠であるので、現段階では次期尚早と言える。また、全体構想の作成には市町村が大きくかかわってくることもあり、当地では単に雫石町のみならず周辺市町村（八幡平市、滝沢市）及びそれらの地域の各種エコツーリズムに係る団体とも連携を取る必要があるので、まずは広域的な連絡協議会のような組織で検討を重ねていかなければならいと考える。しかしながら当地域で現在活動している団体はそこまで広範囲に手を広げられる状況にないと思われ、当面は雫石町の岩手山麓を中心に調査を実施しガイドの養成及びスキルアップ、各エコツーリズム団体のスキルの平準化を目指すべきであると考え、全体構想の作成および認定については次のステップであると思われる。

また、全体構想を考える時にはオーバーユースによる踏み荒らしや希少種、絶滅危惧種の保護の観点から特定自然観光資源の指定が重要であると思うので、今後のエコツーリズムに関する観光客の動向や周辺の植生等の調査が必須である。現状の雫石町のエコツーリズムとしては、将来的に全体構想の作成を目標として、まず雫石町での連携を強化して活動していくことが望ましいと考える。

●地域に対する印象、今後地域に期待すること（メッセージ）

雫石町は先述したように、岩手山南麓に広がる小岩井農場約 3,000ha を中心に北側には岩手山の雄大な自然があり、南には田畑が広がり自然環境観光資源としては大自然をそのまま残す十和田八幡平国立公園の中にある岩手山、その裾野に広がる広大な牧場、小岩井農場の里山的な自然環境及び景観、葛根田川流域に広がる田畑地帯、それらを一体的に見た時に自然と人の生活とが共存している素晴らしい自然観光資源であり、多くの人がその環境や景観を活用して地域振興や観光振興に活用したいという意欲も強く感じているので、早い段階で同じ目標を持つ各種団体の連携を強化していくことが、地域全体の生物多様性の保全や活用について、またエコツーリズムの推進について重要であると考える。

この地域のエコツーリズムについては現状実践者がおり成功している感があるので、それをさらに膨らませるためにも、生物多様性の概念の共有や各団体の連携強化を図ることにより、更に素晴らしい自然豊かな生物多様性エコツーリズムの町となると考える。

将来的に広大な里山としての自然景観について、人の生活を含めた生物多様性の概念がこの雫石町から全国に発信できることを大きく期待している。

NPO 法人富士山エコネット　理事長　三木　廣　氏

●地域におけるエコツーリズム推進の取組の現状と課題

岩手山の南麓雫石町でエコツーリズム事業を展開されている「NPO 法人しずくいし・いきいき暮らしネットワーク」（以下、「いきいき暮らしネットワーク」）のお招きで、今回その一部を視察させていただき、また同様の岩手のほかの団体とも意見交換をさせていただいた。その過程において当団体の成功事例を紹介することで、地域、環境は違えども当団体の実践の一部が雫石での活動の一助になれば幸いである。

話し合いの中で、個人的には、岩手県のほかの平泉、花巻、遠野などに比べ、雫石という地域の持つ特徴がまだまだ一般に知られていないのではないかと感じた。「小岩井農場」など全国的に有名な場所を「点」で知ってはいても、それが雫石全体のイメージにはなっていないと思う。今後「いきいき暮らしネットワーク」が中心となり地域の活性化により知名度もあげていくことが期待される。

●特に魅力を感じた地域の自然観光資源

「小岩井農場」ではすでに積極的にエコツーリズム推進に向けての活動を展開しており、多くの観光客が毎年訪れている。雄大で美しい自然に囲まれ、長年にわたる人々の開拓の歴史の中で育まれた 3,000ha におよぶ広大な牧場は、自然と見事に調和した景観、飼われている動物たちと自然界の生き物たちとの多様性に対する配慮も十分に感じられる。

岩手山から八幡平へと広がる葛根田渓谷は手付かずの自然が残されており、ブナ林を中心とした多くの広葉樹の森の散策は、自然との一体感を十分に満喫できる。また、周辺には秘湯と呼ぶにふさわしい鶯宿、つなぎ、網張などの豊富な温泉地が点在しており、長逗留にもふさわしい。名峰岩手山を象徴とした変化に富んだ自然や温泉をメインに歴史、文化、食などを取り入れることで、あらゆるニーズに対応しうる可能性を多分に秘めている。

●アドバイス（講義等）の概要

当団体（富士山エコネット）は教育旅行が中心であり、年間平均 140 団体 2 万 5000 人の方が参加されている。一般旅行と異なる点は、必ずしも好きで参加している方ばかりではない。その方たちにも満足感を与えるためには、案内する側がここぞという場所を自信を持って選定することだと思う。（当団体では青木が原樹海と富士山五合目お中道のエコツアー）その唯一の場所でしか体験できない自然の中をとにかく歩くことで体感させることが重要である。次に、ただ歩くよりは多少の知識があるほうがよりツアーが楽しくなるということをわかっていただくためにインストラクターの説明があるという位置づけである。頭からの知識の押し付けではなく、ともに考えるための入り口を提供することにより、少しでも自然や環境、生物の多様性に興味をもっていただけたらというコンセプトをガイドみんなが共有している。楽しくなければツアーは続かない。また独りよがりの解説では誰も聞かない。自然に対しては謙虚に接し、ともに考えるという姿勢を持ち続けることだと思う。当団体のリピーターが約 7 割を超えているのも、このコンセプトがお客様に多少ともご理解いただけている結果ではと自負している。とはいえ、富士山の知名度はあっても当団体の知名度はもとよりエコツアー自体も知名度があるとはいえない。雫石であれ富士山であれ自然の資源を活用し、お客様に来ていただくために、自分たちの地域の自然環境の素晴らしさをどのように発信させていくかも大切である。

●全体構想への取組状況・意向について

上記したように、まずは「雫石」の知名度をより上げるために、現状の活動を地域全体で見直し、おのおのの団体の成功例を持ち寄り、特化していくことが望まれる。そのための全体的な主導的役割を、地元に密着している「い

きいき暮らしネットワーク」が担っていただきたい。それぞれの団体の統一性がないと総花的になり、一般の人々にはなかなか全般的なよさが伝わりにくいと思う。メインとなる体験・ツアーを他団体の地元をよく知る皆さん方と話し合い確立し、それを中心にいかに全国的に売り込んでいくかの戦略も必要である。「小岩井農場」ではすでにエコツーリズムを実践し、多くのお客様が訪れている。お互い協力しあって雫石全体を発展させていくという構想を明確にし、その実践と結果により地域全体に貢献してほしい。雫石はそれに答えうる自然資源を十分に有している。

●地域に対する印象、今後地域に期待すること（メッセージ）

富士山は知名度があると同時に、現在 30 をも超えるツアー団体が活動している。当地域から見ると雫石はまだまだこれからの可能性を秘めている。手付かずの自然の豊かさという意味においては富士山の比ではない。貴重な生物の多様性を維持し、環境を保全しながら多くのお客様を呼び込み、地域の活性化につなげるという、まさにエコツーリズムのモデルにふさわしい状況だと思う。今後も一つ一つ実践されていく過程において、当団体とも交流を密にし情報交換しながら、お互いの目指すエコツーリズムの推進を進めてほしい。

3-3. 市貝町（栃木県芳賀郡市貝町）

(1) アドバイザー派遣申請の背景

●地域の概要

市貝町は、人口は 12,236 人、東西 9.9km、南北 15.6km の長方形をしており、総地面積 6,424ha で県都宇都宮から東へ約 24km に位置し、東は茂木町、西は芳賀町、南は真岡市、益子町、北は那須烏山市の 2 市 3 町に接している。基幹産業は農業。年間平均気温は 12.7℃だが、最低気温は-10.9℃、最高気温は 36.0℃という内陸型の気候である。年間降雨量は 1,282.0mm 台、年間を通じての降雨分散は不均一で、遅霜や雹害など農作物の被害が比較的多い地域である。市貝町およびその周辺は、環境省レッドリスト（絶滅危惧Ⅱ類）タカ科の「サシバ」の生息密度が高い地域である。

●アドバイザー派遣申請の背景・これまでの取り組み

里山の景観を残した自然豊な市貝町では、環境を利用した農業が現在も営まれている。関東平野と丘陵地の境に位置し、谷津田と呼ばれる従来からの水田が特徴的だが、大規模な機械化が難しく、生産性において厳しい状況となっている。また市貝町内の商業は、買物が周辺都市部の郊外型大型施設に流失し、中心市商店街の形成が困難となっている。

平成 23 年に起きた東日本大震災により、市貝町内にも大きな被害を受け町民の生活に打撃があり、25 年 9 月に中学校施設と 12 月に公共温泉施設の復旧ができた。平成 18 年から計画されていた道の駅事業も、震災の影響により大幅に遅れ、本年 4 月に道の駅「サシバの里いちかい」としてオープン予定としている。農産物の直売や加工品を主体とし、地域の里山景観を活かした自然観察や体験観光ができる道の駅として内容の充実を目指している。

市貝町の 25 年度事業として「サシバが舞う豊かな里地里山環境を基盤に、環境と経済が両立するまち」という基本構想を掲げ、市貝町を「サシバの里」として PR することで、農産物の 6 次産業化を推進したいと考えている。その一環として 26 年 4 月にオープンする道の駅には「まちおこしセンター」を置いて、観光交流の拠点にする予定としているが、町民からは市貝町に通年で観光客が来ることはなく、仮に観光客が来たとしても一般住民にとっての関わりは薄いものと考えている。

そこで、エコツーリズムのアドバイザーに来て頂き、同じように過疎化に悩む他の地域の事例を聞き、エコツーリズムの視点を取り入れたまちおこしが可能かどうかを地域住民と一緒に考えた。さらにアドバイザーには町を視察していただいた上で、地域資源探しと魅力ある商品化の手法を詳しく教えて頂きたいとした。

(2) アドバイザー派遣実施の概要

日　　時	平成 26 年 1 月 8 日（水）～平成 26 年 1 月 10 日（金）
場　　所	【1 日目】 講師打合せ：栃木県芳賀郡市貝町庁舎内 講演会場：市貝町庁舎多目的ホール 視察場所：道の駅「サシバの里いちかい」予定地（市貝町）、道の駅「はが」（芳賀町）、 道の駅「もてぎ」（茂木町） 【2 日目】 視察場所：市貝町内　市塙駅、山根城跡（記念樹の森）、村上城跡（観音山梅の里）、 永徳寺観音堂、横穴、芝ざくら公園、水晶湖、杉山地区いちご農家、武者絵の里、 前野内・諏訪塚古墳、多田羅沼、日枝・熊野神社、伊許山キャンプ場、大久保・弁天池、 妙哲庵桂蔵寺（六角堂）、入野家住宅 【3 日目】 町長対談：市貝町庁舎内副町長室 視察場所：藤平武家屋敷（心身統一合気道会本部施設）
アドバイザー	アイ・エス・ケー合同会社　代表　渡邊　法子　氏
参　加　者	＜講演会参加者＞ 市貝町町長、市貝町企画振興課、農林課、栃木県産業労働部観光部、観音山梅の里づくり協議会、 芳那の水晶湖ふれあいの郷協議会、JA はが野市貝町地区直売会、栃木県内の一般参加者 計 75 名
スケジュール・方法	【1 日目】 ・視察 道の駅「サシバの里いちかい」予定地、道の駅「はが」、道の駅「もてぎ」 ・打合せ（企画振興課長、農林課長） ・講演会「地域資源を活かした観光まちづくり」 エコツーリズムの基礎的な知識、他の地域の実例を紹介 【2 日目】 ・視察 市塙駅、山根城跡（記念樹の森）、村上城跡（観音山梅の里）、永徳寺観音堂、横穴、 芝ざくら公園、水晶湖、杉山地区いちご農家、武者絵の里、前野内・諏訪塚古墳、多田羅沼、 日枝・熊野神社、伊許山キャンプ場、大久保・弁天池、妙哲庵桂蔵寺（六角堂）、入野家住宅 【3 日目】 ・市貝町議会議員と対談 ・視察 市貝町続谷地区、藤平武家屋敷（心身統一合気道会本部施設） ・市貝町長対談

(3) アドバイスの内容

●講義の概略

観光が身近なものになり、従来型の観光ではあきたらない人たちのニーズがエコツーリズムにシフトしつつある。これは世界的な潮流だ。法律の改正や整備も行われて追風となり、新しい観光を商品化してまちおこしを成功させた市町村も増えている。「新しい観光」の目的は異文化交流。その地域の地形、歴史や伝統文化や風俗習慣を貴重な観光資源ととらえる。その資源を魅力ある商品にするために、住民が主体となってツアーを企画し、住民自らがツアーガイドをする。住民はガイド料を収入にできるためメリットを実感できる上、人と人の交流を通して郷土愛が育まれ、生きがいづくりにつながる。エコツーリズムには住民主体で取り組むことが望ましいが、その活動の「核」となるしくみが必要となる。市貝町の道の駅はその「核」の機能を担えるだろう。

●質疑応答の概略

Q1：市貝町の地域資源として有望なものは？市貝町の弱みは？弱みを強みに変えるにはどうしたらよいか？

A1：サシバの生息する豊かな自然は有望な資源となる。しかしエコツーリズムの視点で考えると、年間を通して売れる商品が必要なので自然のものだけでは不十分。地名、郷土史など歴史的な掘り起こし作業が必要になるだろう。市貝町の町民の意識がまだ十分ではなく、当面は人づくりが課題になるだろう。

Q2：リーダーシップをとるのは住民か町か？

A2：リーダーシップをとるのは企業でも、商工会でも、行政でも住民でも NPO でも良いだろう。その町の実情を反映させるべき。

Q3：鬼怒川では地域リーダーの育成事業を行っている。何から始めて良いからわからない時は、ガイド養成から始めるべきだと理解したが。

A3：その通りだと思う。ガイド養成は「自分の地域を語れる人、自分の地域に感動する人」を増やす活動なので、出来るだけ多くの住民を集めて研修会や交流会を開くことをすすめる。その研修会用のテキストづくりも初期の段階でとりくむべきだろう。

Q4：農業体験を商品化したいが、成功の秘訣を教えて欲しい。

A4：農業体験は、収穫体験に限定してしまうと受け入れる農家の負担が大きくなる。収穫時期は見学だけ、収穫以外の草むしりや肥料づくりなどの体験ツアーはやり方次第で商品化可能。

Q5：エコツーの担い手として NPO を作る事も考えられるが、市貝町は NPO が 1 つしかない。NPO の運営に関するアドバイスが欲しい。

A5：補助金だのみの NPO 運営は限界がある。活動の目的をはっきりさせて賛同者を集め、その賛同者から会費を集めることで自立した活動が可能となる。

Q6：これまでのアドバイザーとしての活動で一番大変だったことは？どうやって解決したのか？

A6：活動主体は地域の住民だということが理解してもらえないことが多々あった。既得権益、利害関係の調整など難しい案件には当事者だけでは解決が難しい。利害の無い住民、特に若者や女性を対話に巻き込み、肩書きや年齢をぬきにした対話を重ねることでよりよい解決に向かう。

記念樹の森

三叉路の地蔵尊

●市貝町内を視察後の町長との会談概略

市貝町はエコツーリズムの素材は十分あるが、すぐに商品となりうるものは武者絵資料館や民話の語り部などに限られる。住民が主体となる素材探し、素材磨きが必要となる。その際に「受け狙い」の素材だけを集めると、素材磨きに限界が来る。本当に輝く素材を探すためには、歴史を掘り下る必要がある。栃木県の文化財ボランティア協議会や元教員などを招いて、市貝町の歴史を掘り下げ、歴史に関するテキストを作り、ガイド養成講座をおこなうことを提言する。養成講座は「大人のふるさと学級」などというネーミングで平日の昼間に開催し、ガイド養成講座であることをあまり知らせずに受講生を広く募集すると、多くの住民を巻き込むことができる（土俵を広げる）だろう。

(4) アドバイザー派遣実施の効果

●参加者や関係者に与えた効果

これまでも町の関係者の間で「エコツーリズム」という文言は使われてきたが、その定義が統一されていないためか、エコツーリズムの有用性が理解できない人が多かったが、渡邊アドバイザーの解説で理解が深まり、推進活動がやりやすくなった。

更に、これまでのイベントを中心とした村おこし活動が、何故投資に見合うような効果をうまなかったのかわかった。参加者の多くは、エコツーリズムは敷居が低いと感じた様子で、エコツーリズムならまちづくり活動に加わりたいという感想がよせられた。

これまであまりみられなかった、女性のまちづくりへの参加を促そうという感想もよせられた。

●今後の期待される効果

・人材育成事業として町民の多くのかたへ地域の良さを知らせる
・来訪者へ町民自ら地域を案内することにより地域の良さを再認識する
・村おこし推進協議会の活動の面での拡大
・活動の後継者の育成と地域の文化を伝承する
・町民が地域の環境保全の主役である

●今後の取り組み

26 年度の市貝町企画振興課商工観光係で予算請求を計画し、エコツーリズムの「観光まちづくり事業」としての（1）人材づくり　（2）テキスト作成　（3）マップ作成の事業提案をおこなうことを予定。

（5）アドバイザー派遣を実施して（地域からの声）

●参考となった事項

住民参加のしくみづくり、その仕掛け方

●その他感想

渡邊アドバイザーが過去に活動された地域の商品がとても魅力的で、実際に行って体験したいと思った参加者も多かったようである。魅力的な地域は、市貝町同様の問題を抱えていたというお話は、市貝町でもエコツーリズムができるかもしれないという希望につながった。

先生のアドバイスはとてもわかりやすかったが、中にはどうしても従来型の観光のイメージから抜けられない参加者もいた。そういった参加者のために、渡邊アドバイザーが印象的な言葉を繰り返される姿を見て、住民の意識改革のテクニックを勉強させていただいた。渡邊アドバイザーからの提案を受けて、市貝町企画振興課商工観光係では早速、26 年度事業申請を行う予定である。

(6) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

アイ・エス・ケー合同会社　代表　渡邊　法子　氏

●地域におけるエコツーリズム推進の取組の現状と課題

26 年 4 月の「道の駅」オープンに合わせて、市貝町全体で地域交流・観光振興の仕組み作りをおこなうという方向性のもと、エコツーリズム推進の取組みがはじめられたところであり、胎動期といえると思います。

その一方で市貝町には絶滅危惧種のタカ、サシバが生息しており「サシバの里」としての環境保全をおこないつつ観光を含めた地域振興をおこなう方向性は見出され推進されている現状です。

課題としては以下の点があげられます。

１、道の駅の活用
２、里山保全と「サシバの里」をテーマに地域振興をおこなう推進方法
３、外部観光有識者等のアドバイスによる地域資源の発掘および活用方法
４、エコツーリズム（着地型）商品の企画、販売の仕組み作り
５、効果的な情報発信の仕組み作り
６、人材育成の仕組み作り
７、事業の継続化

●特に魅力を感じた地域の自然観光資源

市貝町は栃木県の南東部に位置し南西部は関東平野の北端であり東北部は八溝山系に属しており、小貝川が町の中央を南北に走り桜川が東武山間地を南流して小貝川に合流しています。丘陵が連なる里地里山の風景、自然環境には約 2 億年前の地層から現代までを見ることができ、海底で堆積した砂岩や粘板岩も見ることができるという地域です。

特に魅力を感じた自然観光資源は以下のとおりです。

１．古墳群・・・縄文時代から地域の環境を活かし人々が暮らしていたことの証し
２．山城跡・・・当地の地の利を活かし濠や土塁を巡らした城跡が点在する歴史資源
３．丘陵地・・・サシバの棲む谷津田が入り込む里山環境の四季、動植物
４．湿地帯・・・多田羅沼のコナラ林と睡蓮、周辺の古墳群
５．蛍・・・・・蛍の生息の研究地域としてこれまで蓄積された知見と観察会実施
６．古民家・・・旧芦野家陣屋跡（藤平家）；巨木、入野家住宅にみる郷土史

●アドバイス（講義等）の概要

１、人材育成事業について
２、地域の人によるエコツアーの実施環境づくり
　－1 地域で取り組む理解と協力
　　・地域全体で事業の継続化を
　　・担い手づくりと組織化
３、エコツーリズム商品を流通させるためのツアーデスクの設置
　　・事例紹介
　　・事業の継続化
４、エコツアーメニューの種類と特徴

５、メニュー別組織体制の強化
６、具体的な実施方法
７、実施する際の注意点　等

エコツーリズム胎動期の市貝町の現状と照らし合わせながら、まずは人材育成事業と市貝町におけるエコツーリズム実施環境づくりに重点を置きアドバイスをいたしました。

●全体構想への取組状況・意向について

すでに市貝町として「サシバの里」基本構想の原案を策定中であり、本事業における全体構想の取組に準じて進められているものと位置づけられます。

特にこれまで保護措置が講じられていなかった「サシバ」「多田羅沼湿原地域」など貴重な資源については、保全しながら活用できるよう、市貝町におけるエコツーリズム推進全体構想は策定がなされるべきものと考えます。

●地域に対する印象、今後地域に期待すること（メッセージ）

市貝町はサシバを代表とする動植物の生息地としての丘陵・谷津田等の里地里山の自然環境資源に非常に恵まれています。縄文時代から人々が地域環境資源を活かし暮らしてきたことが地質、古墳、山城跡などの歴史資源からよくうかがい知ることもできる素晴らしい地域です。

サシバや多田羅沼湿原は保護への配慮がまずは課題ですが、適切な利用の方法を模索し定めながら推進できますよう、まず市貝町地域の中に地域全体で取り組む理解と協力を得るために、地域内での理解を深め、次世代に郷土愛を育み、担い手を育成するためにも、人づくり事業から着手し、さらに地域の魅力を活かしたエコツーリズム商品化をめざし、今後持続して事業が継続できますよう組織化も視野に推進していただきたいと思います。

3-4. 南房総市（千葉県南房総市）

(1) アドバイザー派遣申請の背景

●地域の概要

南房総市は人口は約 4 万 2000 人、面積は 230.22km²、房総半島の南端に位置している。北側には県下最高峰の愛宕山（408m）をはじめ、富山（349m）等 300m 以上の山が連なり、西側には東京湾、東側及び南側には太平洋と三方を海に囲まれ、その海岸線は、南房総国定公園に指定されている。平成 18 年 3 月、富浦町、富山町、三芳村、白浜町、千倉町、丸山町及び和田町の 7 町村が合併し、新しく「南房総市」となった。平成 9 年に開通した東京湾アクアライン、平成 16 年に開通した一般国道 127 号富津館山道路に続き、東関東自動車道館山線が平成 19 年 7 月に全線開通となり、東京からのアクセスが約 90 分と東京圏から南房総がより身近になった。

気候は、沖合を流れる暖流の影響により冬は暖かく夏は涼しい海洋性の温暖な気候で、一部無霜地域を有し、特に 1～3 月に咲く色とりどりの露地のお花畑は人気のある早春の観光資源となっている。四季折々に咲き乱れる花々などの豊かな自然資源と、古代から近代に至る遺跡や社寺などの歴史的資源を有する地域である。

●アドバイザー派遣申請の背景・これまでの取り組み

千葉県南房総市は、交流人口の増加に力をいれているが、高速道路の開通による日帰り客の割合の増加や震災の影響もあり、宿泊事業を中心に低迷している。観光の新たな展開として、自然環境資源を活用したエコツーリズムに取り組みたいと考えている。

市内には、エコツアー・ガイド等を行なっている活動団体が複数あるものの、ガイドやプログラムの質のばらつき、不十分な受け入れ態勢、連携不足や PR 不足等の課題があり、エコツーリズムが地域としての一貫した取り組みになっていない。またエコツアーの商品は、学習旅行等の体験学習の一環として団体向けに提供されるものが主で、一般の個人のお客様への対応が不十分である。

一方で、南房総市は平成 26 年 3 月、千葉県初の森林セラピー基地と認定される予定となっており、これを機に、エコツーリズムに特に力をいれて取り組んでいきたいと考えている。今後新たな観光商品としてのエコツアーを持続可能な形で実施していくために、さらにエコツーリズム推進の核となる組織（「南房総体験観光プラットフォーム（仮）」）の立上げのため、運営組織・人材の育成、関係する主体間の役割分担と連携、エコツアーを業として成り立たせるための仕組みの構築等、実際の経験を基にアドバイスを頂きたいと考え、今回の申請に至った。

(2) アドバイザー派遣実施の概要

日　　時	平成 26 年 2 月 2 日（日）～平成 26 年 2 月 3 日（月） 平成 26 年 2 月 15 日（土）～平成 26 年 2 月 16 日（日）
場　　所	■1 回目 視察：大房岬自然公園、富山水仙遊歩道、平群の古民家“ろくすけ” セミナー会場：とみうら元気倶楽部　交流室 打合せ：道の駅とみうら枇杷倶楽部 ■2 回目 シンポジウム会場：南房総市役所　大会議室 視察：（千葉県南房総市、館山市）崖の観音、フラワーライン、根本海岸、白浜野島埼灯台周辺
ア ド バ イ ザ ー	NPO 法人信越トレイルクラブ　事務局長、一般社団法人信州いいやま観光局　事務局次長 木村　宏　氏
参　　加　　者	■1 回目 南房総市観光協会、南房総市内道の駅、南房総市エコツーリズム推進協議会、 NPO 法人千葉自然学校　大房岬少年自然の家、南房総市商工観光部観光プロモーション課など 約 30 名 ■2 回目 南房総市エコツーリズム推進協議会、南房総市地域づくり協議会、観光協会加盟宿泊施設、 道の駅関係者、近隣市町村職員（館山市、鋸南町）、 その他エコツーリズムに興味のある一般の市民、南房総市（副市長、観光プロモーション課） 約 50 名
スケジュール・方法	■1 回目 【1 日目】 ・視察 　大房岬自然公園、富山など、森林セラピーロード候補地 【2 日目】 ・セミナー及び意見交換会 「エコツアー運営するための組織と人材育成について～信州いいやまの事例から～」 ・次回の打合せ ■2 回目 【1 日目】 ・打合せ ・シンポジウム 【2 日目】 ・視察 　南房総ロングトレイル等 ・意見交換 　ロングトレイル事業運営について

(3) アドバイスの内容

●第一回目のアドバイスの内容

・　主なアドバイスは、セミナーを通じて行なわれた。発表のなかで、初日の視察、及び以前南房総に視察にいらした際の当地域への感想を随時織り込んで理解しやすく発表頂いた。「エコツアー運営するための組織と人材育成について～信州いいやまの事例から～」をテーマにたくさんのスライドを用いてご講演頂いた。内

容は、飯山の概要について、森林セラピーの取組みについて、信越トレイルについて、（社）信州いいやま観光局という組織の仕組みについて、着型旅行商品の作り方についてなど盛りだくさんであった。

- 長野県飯山市と当千葉県南房総市は、南房総がかつて海水浴で栄え数多くの民宿があった歴史と、飯山がスキーでかつて栄えたという点で共通性があるのでは、と触れられた。飯山では、かつては 5 箇所あったスキー場が 3 箇所になるほどのお客様の減少をうけて、スキー一色の観光地からの脱却に向けて始まった取り組みが紹介された。飯山では、昭和 50 年ごろからグリーンツーリズムの取り組みが始まり、最初は学習旅行等の団体を対象に行なわれてきたが、一般の人達も楽しめるよう、氏が所長を勤めていた「なべくら高原の家」において様々な地域資源を観光商品化、メニュー化を行い、人材育成も行なってきたと紹介された。
- 飯山では、ブナの森を守ったり、農地を再生したり、といった活動にボランティアでやってくるお客さんがかなりおり、これもエコツーリズムで、こういう観光のあり方もあるとの紹介があった。前日に視察した南房総の水仙遊歩道では、白い花が一面に群生する水仙の小道はとても素敵だったが、周りの林が荒れていたり、ゴミが落ちていたり、という事が気になったとのこと。こういった問題の解決にボランティア・エコツーリズムの力を借りる事ができるのではないか、という提案を頂いた。
- 飯山の景観作りの取組みは非常に興味深かった。山並みをそぐわないように、"日本のふるさと”のキャッチコピーにそぐわないように、というコンセプトで景観づくりを行ってきたとのこと。国に電線の地中化をお願いしたり、施設に商業看板の撤去や低位置化をお願いしたり、また自主的に協力してもらえるような環境作りを 10 年以上かけて、また市長が強い意志をもって行なってきた。南房総のフラワーラインでは、特に商業看板は気になったとのこと。市の中心を走る国道 117 号線脇の花壇の植栽にも、市民が係ることで、その後の様子を見に来たり、ゴミがないようにしたり、といったように道をきれいに保つことができるという。飯山ではこういった取り組みの結果得られた景観が、大きな評価を得て、非常に大きな財産となっているとのことであった。
- 森林セラピーの取り組みについては、飯山では最初は市が先導して行い、今は着型旅行商品のひとつとして展開している。病院との提携例や、寝たきりの人を森に連れて行く取組の実験結果について紹介いただいた（お年寄りたちの表情の変化はとても興味深いものであった）。森林セラピー事業には、様々に異なるお客さまの状況に合わせることができるスキルの高いガイドをどうやって育成するか、どのようにお客さまを呼び込むかといった課題があり、事業の位置付けを明確にしないと、実のある取組にならない恐れがあるとアドバイス頂いた。
- 長野と新潟の県境 16 の地域を通るトレッキングルート、信越トレイルの取組みについては、連携の調査事業を発端に、日本のロングトレイルの第一人者の加藤則芳氏との出会いがあり、始まった取り組みであったこと、参考にしたアメリカのアパラチアントレイルの例や、迷った時に戻るための“憲章“には生物多様性の保全を基調にしたこと、毎年自然環境のモニタリング調査を行っていることをご紹介頂いた。計画から完成まで、8 年間かかり、のべ 2000 人の力を借りて作られたこと、ここでも、多くの地域の人が関わり、環境省のエコツーリズム大賞受賞の際にも評価されたとのことであった。現在は年間 3 万 6 千人のお客さんを受け入れており、40 人のガイドの登録になっているとのことであった。
- エコツアーを提供する組織については、（社）信州いいやま観光局の事例紹介を頂いた。観光セクターの統合、ワンストップ窓口の構築を目的に、観光協会と、市内の観光施設を運営する振興公社が一緒になった。すべて観光の情報は観光局に集約され、セールスプロモーションも含めて、観光局が観光のものについては一手に引き受けているとのこと。
- また観光局では、講座を開催するなどガイドさんの養成にも力を入れており、みんなでガイドさんを育てていくことが大事、そうでないとうまくいかないと述べられた。森の家がガイドやエコツアーの情報の集約をして、販売を観光局という役割分担であるとのこと。
- 広域観光の取り組みとしては、同じ新幹線の駅を使う地域で協議会「信越自然郷」をつくり、お客様が新幹線を降りたとき利用できる旅行商品を一緒に作っていきましょう、と呼びかけ飯山が主導で実施している例

をご紹介頂いた。

- 参加者からの質問、「観光局の取組みを行ってきたうえでの苦労話は？」という問いには、苦労の連続であったとのこと。行政の役割はインフラを整えることではという意見が議会等でもあがるなか、市長が強い信念をもって行い、やりつづけることで形になってきたことであった。地域の資源を商品にするのは時間がかかるし、体験メニューをつくっても収益があがらないが、意義を説明して理解をしてもらう、ということの連続であり、理解者をどうやって増やしていくかが重要に思うと話された。飯山旅々。という、観光局で販売している着型旅行の商品群についても、賛否両論がある。10 人しか受け入れられないプランでも、価値のあるものを地域で作っていくと、観光地の再生につながっていく。
- 飯山での旅行商品の作り方としては、全体で 10 人ほど商品造成を行う人材がいるとのことであった。飯山観光局のエリア担当者が地域の観光協会や民宿組合や宿の人などを巻き込んで、商品を作っていくとのことであった。地域の人が旅行商品を作る力をつけることが重要。商品の宣伝は、Web サイト「飯山旅々」がメイン。売り上げは多くはないが徐々に上がってきており、今年、600 万円くらいになってきた。商品はリピート率や評価がとても高く、「今まで民宿に泊まったことなかったけれど、民宿のファンになった」という声も聞かれているとのことであった。春からは、宿プランをラインナップする予定との紹介があった。

●第二回目のアドバイスの内容

- 記録的な大雪のため、公共交通が利用できない状況のなか、機転を利かせてレンタカーで駆けつけてくださり、時間通り開催することができた。悪天候により、参加者はやや少なかったが、近隣の市からも多く参加いただくなど、今後の安房地域の行政区を越えた連携の可能性を伺わせるものであった。
- 一回目のセミナーは主要組織要職の方を対象に開催したが、今回のシンポジウムは、は各種組織の一般会員のほか、広く一般市民の方を対象とし、木村氏には一回目の内容を基調にダイジェスト版でと発表をお願いしたが、より一般人向けということで、冒頭に「エコツーリズムとはなんだろう？」という導入部分を設けていただき、また環境省のエコツーリズムモデル地区指定を受けている佐世保の紹介を頂いた。飯山は、観光がないと食べていけない地域だが、南房総はそうではないのかもしれない、またそういった点で、海辺の南房総と佐世保が共通するところが多く今後の参考になるのでは、と、「させぼエコツーリズム」ガイドラインを紹介頂いた。
- 飯山の事例紹介の後、発表の最後には、南房総市でのエコツーリズムの可能性を考えるとして、「検討のポイント」として、地域資源の活用と自然資源の保全と継承、地域資源の掘り起こし、エコツーリズムの展開による地域の活性化、地域連携、地域が関わる仕組み作り、団体間の連携や交流を課題に挙げていただいた。特に、観光に関わる組織・窓口の一元化について、飯山では必要であったが、南房総ではどうですか？と参加者に問いかけて頂いた。
- 質疑応答では、実際にエコツアーの提供を行なっている方や（ガイド）、里山保全を行なっている方から、信越トレイルについて、ルート設定や地権者および地元集落との関係などについて、質問が多くあった。

・　またシンポジウム後半のまとめに当たっては、雪により会場に来る事のできなかったコーディネーターに代わり木村氏に急遽コーディネーターも引き受けていただいた。地元の 2 活動団体（NPO 法人千葉自然学校、NPO 法人富浦エコミューゼ研究会）からの事例発表のあとコメントを頂き、また市内で様々に活動している団体がある中、特に行政が、団体間のそういった意見・情報交換の場を積極的に設けてもよいのではないかとアドバイス頂いた。

・　翌日の視察では、雪の影響もあり車中からの見学が主であったが、信越トレイルの運営の細かなところや、ツアーづくりの背景等教えていただくことができた。また互いに道の駅を運営しているので、道の駅の産品交流ができないかという話も生まれた。

（4）アドバイザー派遣実施の効果

●参加者や関係者に与えた効果

組織の話については特に、観光協会のメンバーに響いたようであった。それは、観光協会がこれまで旧町村の支部単位での動きが主であったが、新年度から合併を予定しており、今後の組織のあり方が問われているからであるが、いいやま観光局の姿が、今後の目指すべき組織の在り方の一つとして、具体的なイメージで幹部の間で共有できたのではないかと感じる。理論としてではなく、実践者による実例の紹介により、説得力を持って伝わったようだ。宿泊施設が地域づくりに積極的に関わっていく手法も、今後の活動の参考になったとのことであった。

今年から本格的にロングトレイルの取組み（ツアー）を始めた NPO 法人千葉自然学校にとっては、このタイミングで直接ロングトレイル事業について先進地から具体的にお話しを聞けた事はありがたかった、との感想があった。今後の運営に大いに参考にしたいとのことであった。

第二回目のシンポジウムでは、近隣の市、特に安房地域の中心地である館山市の団体からも多くの参加を得る事ができ、行政レベルではなかなか難しい連携を、民レベルで推進していこうという話題で盛り上がったと聞いた。

●今後の期待される効果

観光の窓口の一本化について、それが可能となったらどういった新しいことができるのか、何かしらのイメージが共有できたのではないか。すぐに新たな中間組織の立ち上げにつながることを期待するのは難しいが、そういったセクターがエコツーリズムを推進していく上で必要そうだという意識の共有が進んだことが期待される。

●今後の取り組み

森林セラピー基地認定に合わせて実施するガイド養成・商品造成事業において、ガイド養成に取り組む予定であるが、単年度のみでなく、持続的な活動に繋げていけるようなシステムを検討したい。また、観光商品を企画開発・販売していけるような人材を育成する事業を計画している。これらの事業の中で、地域の関係者をうまく巻き込ん

でいけるよう、今後の有機的な連携に繋がるような働きかけを行っていきたいと考えている。加えて、佐世保のガイドラインや、信越トレイルの憲章のようなものを、検討してみたいと考えている。

(5) アドバイザー派遣を実施して（地域からの声）

●参考となった事項

- 木村氏は、エコツーリズムという観光の性質について、始終指摘されていらっしゃった。それは、エコツーリズムというものは地域の人々の生活、自然が育んできた文化をしっかり知って次の世代に伝えていこうというツーリズムであり、それらを楽しみながら、地域のものをしっかりと旅行商品にしていく必要があり、地域の人達の思いがないとなかなか続かないということ。エコツーリズムに取り組んでいくには、それなりの覚悟を持たなければならない、と言われているように感じた。
- 体験メニューは、準備などが大変にも関わらず、きちんとした対価が支払われないのが辛く、また、クラフト・ものづくり系はあまりリピートされない。しかし、感動するものや、自然や文化に触れるといったツアーについてはリピート性が期待でき、メニューを提供する際、そのツアーの意義をどうやってうまく伝えていくか、どれくらいの地域の自慢ができるのかが大事で、思い入れをもってメニューを作り提供できるか、これができるかどうかで、エコツーリズムがうまくいくかが分かれるとのことであった。思いをもったガイドやメニューというのは、難しそうであるが、そうある必要性は理解できるし、忘れてはならないと感じた。
- また、紹介頂いた飯山の様々な事例から、地域の色々な、多くの人を巻き込んでいくこと、効果的な連携の形を考えていくことが、エコツーリズムを持続可能な取組みに育てるための秘訣と感じた。
- 信越トレイルでは、開通するまでに 8 年を費やしていること、すべての 150 ものすべての地区・集落で説明会を開いて理解を得る努力を行なってきた事、理念や憲章がしっかりと掲げられている点などに感銘をうけた。また、登録宿には、年間 3 回のボランティア参加を義務付けるなど、宿泊施設にお客さんを泊まらせるだけではなく、活動に参加させ、現場を知ってもらうことが、お客さんとの話題の共通話題をもち、宿泊の満足度を上げるという内容に、是非同じことが南房総でもできればよいと感じた。宿には、自ら宿泊事業者も商品作り、商品育てに関わってくることで、息が吹き込まれた商品になるというのは説得力があった。
- 地域と、現場と真摯に向き合って地道に活動を積み上げていくことが必要だと強く感じさせられた。

●その他感想

- 地域の自然文化を広く伝える事が観光であり、また後世にきちんと残すための手段である。地域の自然文化が豊かであることが、地域住民の生活の質を上げ、それが他所からのお客様にとって魅力的になる。そういった好循環がエコツーリズムの本質であり、やはり地域の自然文化をいかに伝えていくか、という本質を常に見失わず、商品化に取り組んでいかなければならないと、再認識させられた。
- 今回発表いただいた先進的な事例は、一朝一夕ではなく木村氏が飯山に移住されて以来の取組みが積み上げてきた実績で、（社）信州いいやま観光局となって一元的な取り組みとなって現れてきたものであり、組織を一本化したからといってすぐに同じような成果があがるものではないであろう。南房総は観光協会も市内に 8 つある道の駅を運営する複数の第三セクターも、やっと一部の合併が進んだ状況で、観光の窓口をすぐに一本化することは現実的に不可能である状況だが、しかし、この南房総にも、これまで理念をもって活動を続けてこられた人・団体が存在するわけで、互いの得意分野を生かし不得意分野を補う関係で、エコツーリズムを体現する南房総ならではの組織・システムの形を探れないものかと考えた。
- シンポジウムに参加された方等から、皆で飯山に視察に行きたいので是非企画してほしい、といった声も聞かれた。木村氏とは、道の駅間での産品交流や、今後の物販などを通じての交流の可能性も話題となった。今後も具体的に学ばせて頂きたいし、また様々な面で交流を続けさせて頂きたいと考えております。

(6) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

NPO 法人信越トレイルクラブ　事務局長、

一般社団法人信州いいやま観光局　事務局次長　木村　宏　氏

●地域におけるエコツーリズム推進の取組の現状と課題

かつて、海水浴や周遊観光で賑わいを見せ、近年では花や道の駅を核にした物産販売などの付加価値をつけた観光地として根強い人気のある南房総エリア。

7 町村が合併してできた南房総市に隣接し、館山市、鴨川市、鋸南町等観光地は多い。アクアラインの開通以来、東京、川崎、横浜といった都心からのアクセスの利便も向上し直通バスの運行も来場者増につながる要因となっています。しかし、海水浴客の減少やアクセスの利便向上により、宿泊者が減少し、従来型の観光地としての受入も限界のなかで、地域の自然資源を生かしたエコツーリズムの推進を模索する動きが出てきています。

●特に魅力を感じた地域の自然観光資源

温暖で都心からも近く、海と山の資源が豊富なエリアであり、特に半島中央部の丘陵地帯には手つかずの森林やそこに暮らす人々の生活風景が残っています。まさに里山の風景です。また、荒れてはいるものの、温暖な地ゆえの動植物が生息する森林資源も残っています。これらを活用し、また長年培ってきた海洋資源や花卉栽培の盛んなエリアの特性を生かした新たな取り組みの可能性を感じました。

●アドバイス（講義等）の概要

セミナー、シンポジュウムを通じ、まずは観光関係者へ意識喚起をするために、飯山市がスキー観光依存から脱却してきた経緯と、新たな取り組みとしてグリーンツーリズムやエコ、ヘルスといったニューツーリズム分野への展開をしてきた状況を示し、地域資源の商品化、その発信、集客の方法や、仕組み作りさらに、地域の自然資源をはじめとした地域にとって大事な資源を守るためにボランティアの力を借りての活動の事例を紹介し、その輪を広げることで事業展開ができたことなどを話しました。

また、市民参加で観光資源を作り出す、景観の取り組みなども話し、地域の理解と市民参加で作り上げるエコツーリズムの例を示しました。

さらに、観光窓口の一元化と着地型商品の造成の方法、その中のエコツーリズム商品について紹介しました。

また、市民に向けたシンポジュウムでは、これらの他に、エコツーリズムの定義や地域にとっての必要性を検討する事例として、佐世保地区のエコツーリズム推進の状況を説明し、旧来型の観光から脱却するための地域内における意識改革や、観光関係者以外の住民の意識醸成が必要なことなどをお話ししました。

地域内には、地域資源を活用し海洋資源の観察会を永年続けているグループや、里山の大事さを訴えネットワークを作り活動しているグループ、さらには自然学校などの活動団体も多く熱心に聴講いただきました。

●全体構想への取組状況・意向について

地域が南房総市の呼びかけでエコツーリズムの機運をあげ、取り組みを盛り上げること、さらには既存の活動団体などがネットワークを組んで事業推進体制を作り、小さな運動からエコロジーな生活や、お客様を迎える姿勢を考えていくことが必要ではないでしょうか。全体構想を作る以前に地域としてこの活動に取り組んでいくべきかどうかも話す機会を持ち、さらにはエコツーリズムのあり方を検討する段階ではないでしょうか。

全盛期ほどではないにせよ、漁業や花卉・果樹栽培を中心とした産業が成り立ち、周辺都市のベットタウン化も

すすむ地域にとって、意識の喚起や醸成は少し時間をかけて取り組む必要があるのではないでしょうか。

情報発信基地としての道の駅や、観光協会、さらには自然体験施設の運営や教育旅行などを受け入れる NPO も存在し、これらが行政も含め有機的なつながりを持ってエコツーリズムの推進体制を構築することも可能ではないかと感じました。

しかし、現状では全体構想を作る前に、まず意識喚起こそ地域にとっての課題ではないでしょうか。

●地域に対する印象、今後地域に期待すること（メッセージ）

今回、南房総市の取り組みとして本事業が実施されました。しかし、南房総エリアは本市だけではなく隣接した、館山市、鴨川市、鋸南町など、来訪者にとってはほぼ一体のエリアと考えられます。房総半島の南の地域をどこから区分するのかは地域の皆様で検討していただくとして、一体的な取り組みになることを期待いたします。

来訪者は、南房総市と隣接市町村界をあまり意識することなく温暖な気候の花のある風景を楽しみに、海の幸を楽しみにやってこられるのだと思います。さらに環境に配慮した生活に住民が取り組み、来訪者への模範となり、新たな旅の空間演出を進めていただきたいと思います。

事業発案者たる南房総市のプロモーション課の皆様には、地域住民へのエコツーリズムを知っていただけるためのインフォメーションや、既存の団体の活動支援や情報共有をするための仕組み作り、さらに活動団体と共に、エコ活動（ツーリズム）への参加の積極的な呼びかけを期待しております。また、既存の団体の職員などの交流会などを持ち、情報交換や理念の共有、さらには高品質なインタープリテーションができる人材の育成も必要です。来訪者の多い観光地にあって、まずは地域内のエコツーリズムを展開していただきたいと考えます。

3-5.　NPO 法人フジの森（東京都西多摩郡檜原村）

(1) アドバイザー派遣申請の背景

●地域の概要

檜原村の面積は 105.42km² となっており村の周囲を急峻な山嶺に囲まれ、総面積の 93%が林野で平坦地は少なく、村の大半が秩父多摩甲斐国立公園に含まれている。

村の中央を標高 900m～1,000m の尾根が東西に走っており両側に南北秋川が流れていて、この川沿いに集落が点在している緑豊かな村である。人口は、平成 26 年 1 月 1 日現在 2461 人。

【 位置 】

東京都多摩地域の中で唯一の「村」であり、都心から約 50km はなれた東京の西に位置する緑豊かな大自然の中にある。

南は山梨県、神奈川県に接し北は奥多摩町に、そして東側がわずかにあきる野市に向けて山が開け、村外への交通路となっている。

【 自然 】

自然の宝庫、東京都の奥座敷といわれており、豊かな自然は多くの動植物を育み、奥秋川の清流と奥深い山々は、格好の繁殖地として多くの鳥獣や植物を東京の中で見ることができる数少ない貴重なところである。

【 歴史 】

村の歴史も古く、明治 22 年の立村以来百有余年、名称も区域もそのままで秋川源流の大自然の中で貴重な歴史を積み重ねてきた。

縄文時代の遺跡をはじめ多くの出土品が発掘されており、伝統芸能は式三番叟、神代神楽、囃子、太神楽、獅子舞等が連綿と伝承され、毎年初秋には各地域で盛大に上演される。

【 観光 】

観光面では、村の 80%が秩父多摩甲斐国立公園となっており、豊かな自然の佇まいそのもの全てが観光資源である。

村を訪れる観光客は、四季様々な彩りに魅せられ、年間 37 万人にも及んでいる。

また神戸岩や払沢の滝、歴史・文化遺産を展示した郷土資料館や滝巡りなどの観光ルートや、山岳自然公園の都民の森が人気の的となっており、加えて、民宿の多い数馬地区に「数馬の湯」温泉センターもあり、日帰り観光を含め多くの方々に親しまれている。

●アドバイザー派遣申請の背景・これまでの取り組み

檜原村の各地域において観光客向けの様々な企画が行われるようになり、ガイドもいる。そこで真板氏のエコツーリズムツアーの方式を伝えながら、各々の地域で企画をたて、それを檜原全体のツアーに出来るように考えた。

(2) アドバイザー派遣実施の概要

日　　時	平成 26 年 1 月 18 日（土）～平成 26 年 1 月 20 日（月）
場　　所	東京都西多摩郡檜原村　本宿地域
アドバイザー	京都嵯峨芸術大学　芸術学部　観光デザイン学科　教授　真板　昭夫　氏
参　加　者	檜原村職員：檜原村都民の森所長、檜原村産業観光課、東京都レンジャー（現・元）、温泉センター数馬の湯センター長、檜原村森林セラピー推進協議会会長他、檜原村払沢の滝冬まつり実行委員会会長他、延べ 16 名
スケジュール・方法	【1 日目】 ・四季の里にて食事（地産地消食材） ・本宿周辺の観光視察 檜原村ふるさとの森・払沢（ほっさわ）の滝・石仏、春日神社、岩船地蔵、吉祥寺 ・講演会「エコツアーの商品化と事業化」 エコツアーの作り方、エコツアーの情報発信、 エコツアーを業として成り立たせるための仕組みづくり 【2 日目】 ・前日のアドバイスを受けて地元事業者を視察・意見交換 ちとせ屋・たちばな屋・㈱田中林業・㈱チェンソーズ・檜原村観光協会、 東京都レンジャー（檜原地区） 【3 日目】 ・前日のアドバイスを受けてエコツアー企画を検証

(3) アドバイスの内容

真板氏が「エコツアーの商品化と事業化」の講演会を行い、まずエコツアーの作り方について、先進地の事例を挙げて説明、次にエコツアーの情報発信の例としてその地域の資源・魅力を網羅したフェノロジーカレンダー（季節暦）について述べ、次いでエコツアーを業として成り立たせるための仕組みづくりについて説明、直ちに参加者に呼びかけ、本宿地区におけるフェノロジーカレンダーの制作作業に入った。

なお、作業の合間に真板氏から、エコツアーの基本になる地域の季節ごとの情報を作るフェノロジーカレンダー制作は、ツアーのストーリーを考える基本であるとアドバイスがあった。

今回は、下記「アドバイザー派遣実施の効果」の記載にある通り、参加者の意識が高かったため、初めに南大東島のフェノロジーカレンダーと檜原村でも 15 年前に（数馬地区）で作ったマップを参考資料として提示して説明を加えたため、参加者は特に質問はなく、早速本宿地区で作ってみようとの声が上がった。

そこで、すぐに用意した模造紙（写真講演会の様子参照）の横軸に 4 月～3 月、縦軸に自然・祭行事・文化・風景イベントに分けたところに、各参加者が付箋に情報を書き入れて、貼り付ける作業を続け、フェノロジーカレンダーが出来た。

●1 日目

四季の里にて食事（地産地消食材）

地元食材を活かした「ひるげ」

本宿周辺の観光視察　ふるさとの森

払沢の滝とその案内板

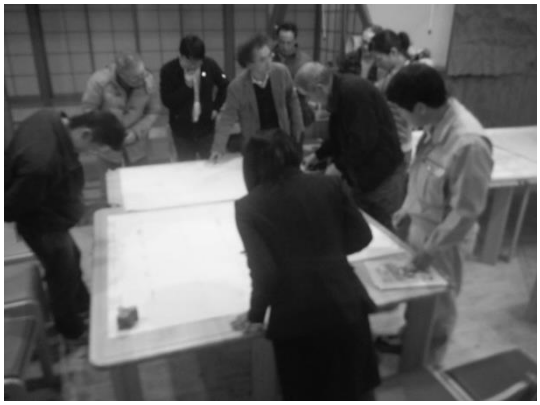
春日神社

春日神社境内の村天然記念物ケヤキ

岩船観音

吉祥寺

四季の里を会場に参加者にアドバイス講演会



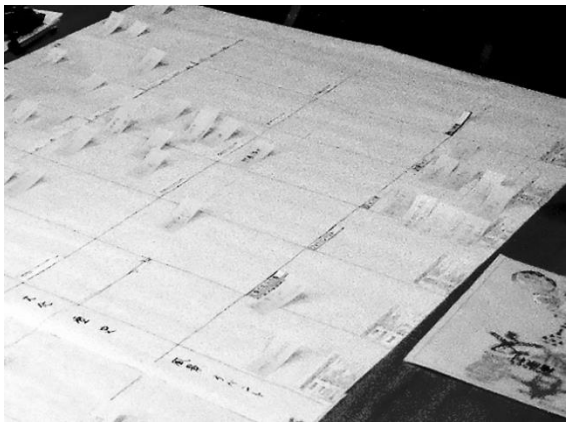
●2 日目

地元事業者を視察・意見交換　ちとせ屋

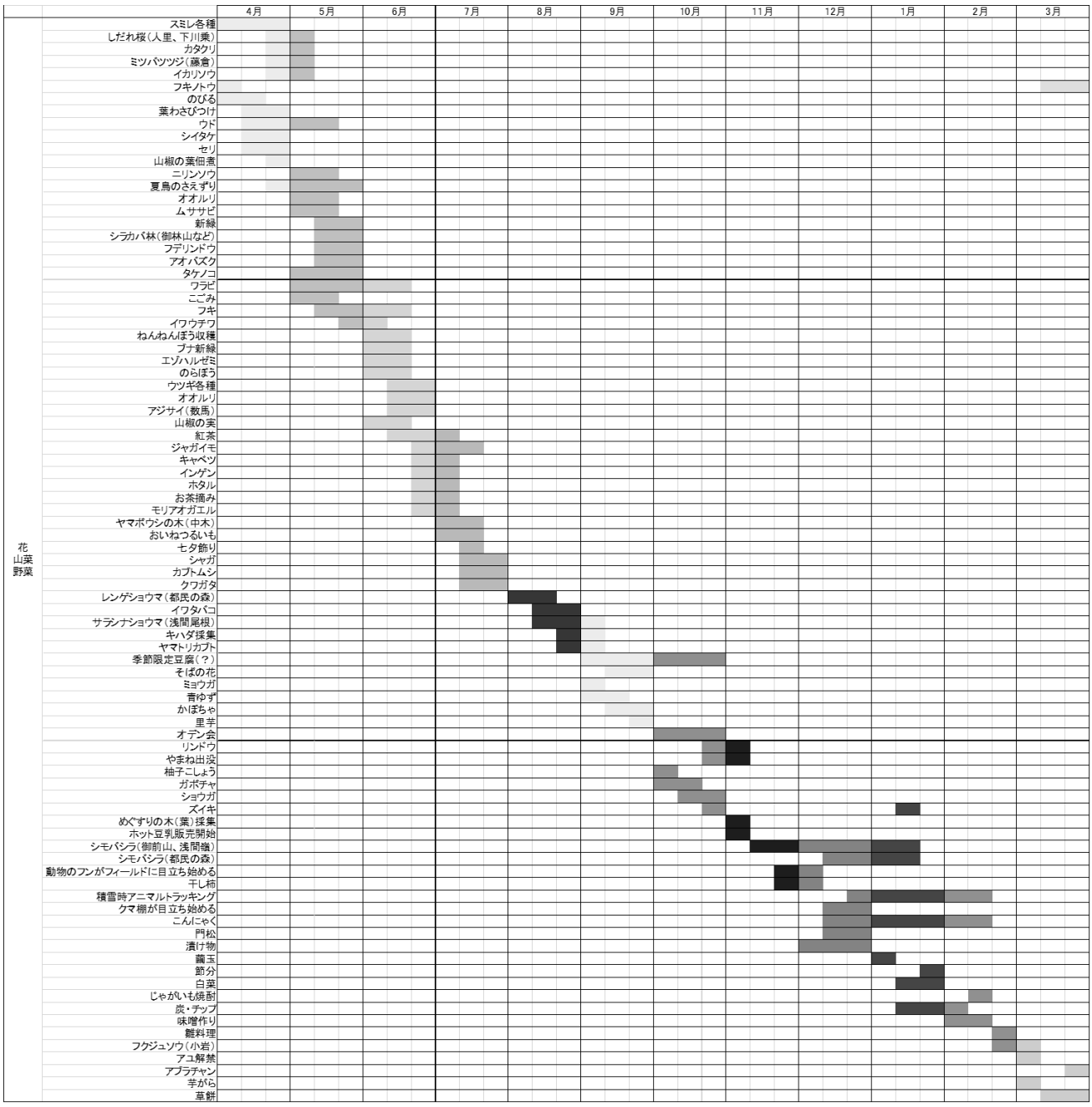
橋本旅館

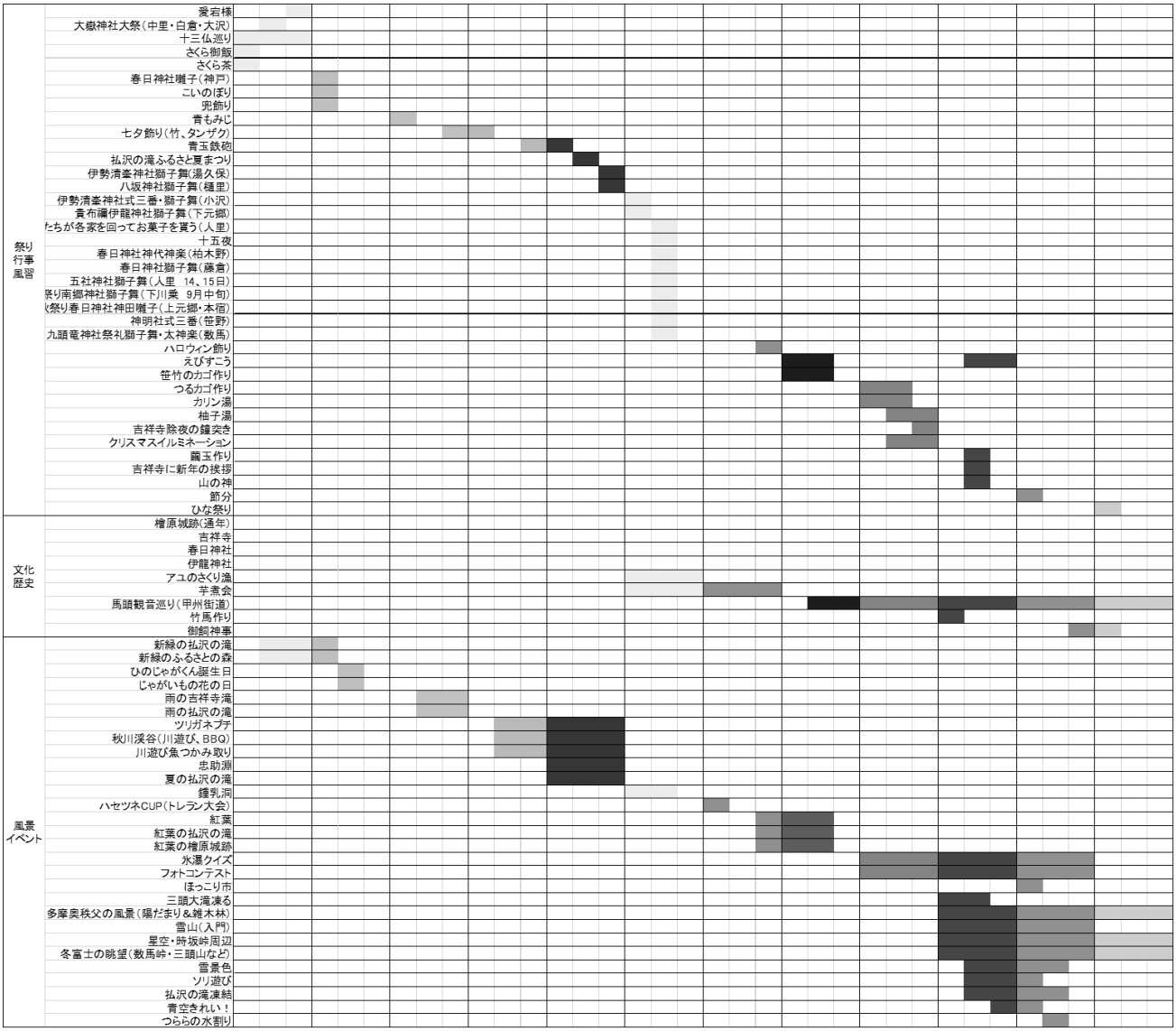
●3 日目

エコツアー企画を検証



完成したフェノロジーカレンダー作業図





（4）アドバイザー派遣実施の効果

●参加者や関係者に与えた効果

真板氏が、フェノロジーカレンダーの講評を行った際に、参加者から今後もこのような集まりを継続して欲しい、その際はぜひ参加したいとの声があがった。

●今後の期待される効果

今回のメンバーは檜原の各々の場所で企画を考え始めている。

冬まつり実行委員会は、檜原村の中心部（本宿地区）で活動し、日本の滝百選の「払沢の滝」で氷瀑クイズ・フォトコンテスト・ほっこり市（2/2）等を企画している若手のメンバーである。今後この地区のフェノロジーカレンダーを制作し、エコツアーまでの企画を立てていく考え。

森林セラピー協議会は、檜原村都民の森のセラピーロードと近隣の数馬地区と檜原の活性化を考えている。

数馬の湯は、平成 25 年 10 月 24 日に「数馬の湯トラベル」を設立した。登山・ハイキングに温泉、健康体操、送迎等が付いたガイドツアーの企画も立てている。この地区のフェノロジーカレンダーやマップ作りも考えている。

●今後の取り組み

・今回の「エコツーリズム推進アドバイザー派遣」の実施が、参加者や関係者に与えた効果として、檜原村の各々地域での企画を、この真板氏のアドバイスにより、今後も継続的に集まりを持つこととなった。

・今後の地域におけるエコツーリズムの推進に対してもたらされることが期待される効果として、ツアー企画を考える基準が檜原内で多く組まれることにより、参加の選択肢が増え、村の活性化に繋がることが挙げられる。また、エコツーリズムの定義である、下記を共有することにより特化したツアーを檜原村全体で企画することが出来る。

⑴自然・歴史・文化など地域固有の資源を生かした観光を成立させること。

⑵観光によってそれらの資源が損なわれることがないよう、適切な管理に基づく保護・保全をはかること。

⑶地域資源の健全な存続による地域経済への波及効果が実現することをねらいとする、資源の保護＋観光業の成立＋地域振興の融合をめざす観光の考え方である。それにより、旅行者に魅力的な地域資源とのふれあいの機会が永続的に提供され、地域の暮らしが安定し、資源が守られていくことを目的とする。

・今後の取り組みとしては、フェノロジーカレンダーをデータ化して、参加者で共有し、ツアーのストーリーを考える。

(5) アドバイザー派遣を実施して（地域からの声）

●参考となった事項

エコツーリズム協会が旅行業を取得していることによる協力体制
認定を行う計画が参考になった。

(6) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

京都嵯峨芸術大学　芸術学部　観光デザイン学科　教授　真板　昭夫　氏

●地域におけるエコツーリズム推進の取組の現状と課題

檜原村フジの森は富士フィルムグリーンファンドのモデル地域として資金の提供を受けて宿泊体験施設「フジの森」を建設し、地元の青年会であった冬来塾が中心となって、都市に住む人々に森の中での自然活動や森づくり体験プログラムを提供する所からスタートしている。後に、今から数年前に周辺の森林 2ha を村に買い取ってもらって、NPO 法人「フジの森」として第二期のスタートを開始。宿泊施設としての「フジの森」の活用、さらに指定管理施設として「教育の森」研修施設を連携活用し、様々な体験プログラムを年に 90 回以上実施している。また「四季の里」レストランを地域のお母さん達の参加を促しながら運営し、観光客に郷土食を提供したり、さらには木を用いたログハウスや檜原紅茶などの様々な物産開発を行って村の活性化に係っている。さらに自然ふれあい体験地域づくりとして、放置されていた森を整備活用した「ふるさとの森」作りを進めている。

檜原のお母さんたちを巻き込んだ食と地域の若者による体験と研修、そして森作りをコーデュネイトして、一体化させた村おこしに係る「エコツーリズムプログラム」の策定を開始し、実施に向けた体制づくりの準備を始めている。

課題としては NPO 法人フジの森では、エコツーリズムをじっくり進めて行く上での環境整備と体制がほぼ完成し、いよいよ最終段階の本格的なエコツアーの実践段階に入ったと言えるのではないか。そのために、ツアーを実現できる旅行資格を持った外部団体との連携、法人スタッフとしてのランドオペレーションが出来る若手人材の育成、などが重要な課題となって来ている。

●特に魅力を感じた地域の自然観光資源

檜原村で特に魅力を感じた自然資源は「人為的に植林され、管理された美しい森」と「管理される事によって身近にふれあうことの出来る多様な野生の動植物」と言える。また東京都の源流部に位置する南秋川である。

さらにこれらの自然とふれあう中で生まれてきている「奥秋川固有の伝統芸能や食文化」にあると言える。

●アドバイス（講義等）の概要

■ツアー・プログラム開発のためのフェノロジーカレンダー制作とツアー企画の組み立て方のアドバイス

エコツーリズムツアーの方式を伝えながら、檜原村本宿を中心にツアー企画を立てられるようにするためのフェノロジーカレンダーを作成し、それを元に実現可能なツアー企画の組み立てと実施方法についてのアドバイスを行った。

●全体構想への取組状況・意向について

今後の意向としては、課題にも書いたが、いまは若者と商業設備の集中している本宿地区を中心にエコツアー実施を考えているが、今後は、奥座敷に位置する温泉地区である数馬地区にも波及させてもらい、檜原村のエコツーリズムの 2 極拠点の形成を図って頂きたいと思う。

檜原村ではまだ行政の中に協議会を作って構想を作ろうという機運が熟するまでには至っていない。ようやく若手が積極的に活動を始めて、エコツーリズムを活用しようとし始めている時点である。今後 NPO 法人フジの森によってエコツアーが実施され実績が蓄積されて行けば、村行政も動き始めると考えられる。

●地域に対する印象、今後地域に期待すること（メッセージ）

檜原村は、以前に比べて地域で、お豆腐屋さん、ガイドさん、など第二世代として家の跡を継ぎ地域で活躍を始めた若者の関心が高まっている事が感じられた。

ただ現実問題としてかなり日常活動に忙しく、自らがガイドとなって活動する事は難しいが、ランドオペレーションされた企画にお客さんをガイドが連れてくれば、観光客に満足してもらい、十分なもてなしも出来るところまで来ていると感じた。エコツアーの実施までもう一息だと思う。頑張ってほしい。

今後は、更なる推進のためにも、本宿地区や数馬地区を中心に、エコツアー・プログラムを組み立て、プロモーションから販売までもっていくことのできるエコツーリズム・プロデューサー、あるいはランドオペレーターの役割を NPO 法人「フジの森」が担って行く事が実現の可能性を高める事につながると思われた。

3-6. 妙高市（新潟県妙高市）

(1) アドバイザー派遣申請の背景

●地域の概要

妙高市は、新潟県の南西部に位置し、上越市、糸魚川市、長野県の飯山市、長野市、北安曇郡小谷村、上水内郡信濃町に接している。面積は、445.52km² で、新潟県総面積の 3.5%を占めており、妙高連峰に源を発し日本海に流下する 1 級河川の関川、矢代川が南から北に向かって市域を貫流している。日本百名山の秀峰妙高山をはじめ、火打山、斑尾山などの裾野は広大な妙高山麓の高原丘陵地帯を形成し、北東部には高田平野が広がり海へと続いている。

妙高山麓一帯は上信越高原国立公園に属し、雄大な自然の景観と四季折々の変化に富み、湧出量豊富な温泉やたくさんのスキー場など観光地を抱えている。

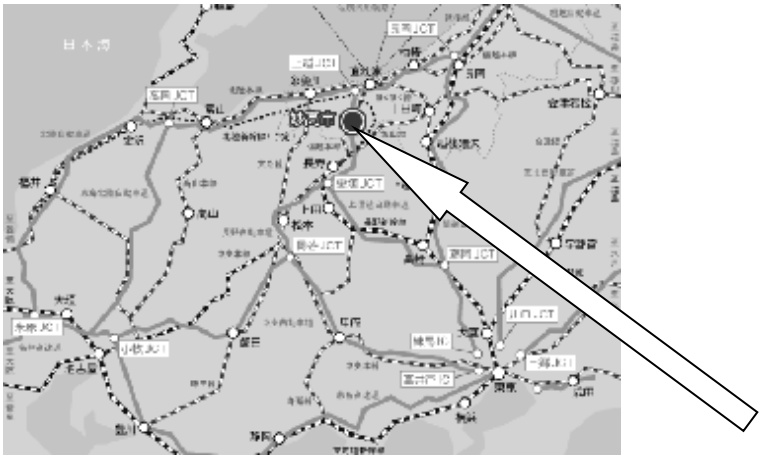
交通基盤については、JR 信越本線が中央部を走り市内には北新井駅、新井駅、関山駅、妙高高原駅がある。また、上信越自動車道、国道 18 号をはじめとする幹線道路が整備されている。

妙高市の基本理念は「生命地域の創造」である。かけがえのない自然や生活文化、歴史、産業など、全国に誇れる地域資源が数多くある。自然と調和した、地域の魅力を活かしたまちづくり、そして人と自然のつながりを大切にする躍動と夢の郷を目指し「スローツーリズム」、「グリーンツーリズム」、「ヘルスツーリズム」、「アート＆カルチャーツーリズム」という 4 つのツーリズムを進めている。

気候の特徴は冬の多雪である。これは、日本海側気候の影響によるもので、西高東低の典型的な冬型の気圧配置が天気図に現れる 12 月～2 月、シベリアからやってきた冷たく乾燥した北西の季節風が、日本海上で湿気を吸い、帯状の雪雲に発達して日本列島を通過する。その時最初にぶつかるのが妙高市内の「妙高山」や「火打山」などの頚城連峰で“日本で一番季節の変化を実感できるまち”と言える。

市内における旬の嬉しい話題として、先日開催されたソチ五輪のジャンプ団体において、妙高市出身の清水礼留飛選手がメンバーの一番手として日本チームの銅メダル獲得に大いに貢献してくれたことが挙げられる。

位　　置	東経 138 度 22 分 57 秒	北緯 37 度 04 分 15 秒
面　　積	445.52km²	
広 ぼ う	東西 33.7km	南北 30.1km
周　　囲	186.2km	
海　　抜	最高 2,461m	最低 24.7m



【妙高市の位置】

気　象　　（観測地点：新井消防署）

年　次	気　温（℃）			降水量（mm）		雪（cm）	
	平均	最高	最低	年　間 降水量	日最大	年　間 降雪量	最深積雪
平成 23 年	12.6	37.3	-8.5	1,496.0	70.5	976.0	303
平成 24 年	12.5	37.5	-7.0		88.0	673.5	167

＊平成 24 年は雨量計故障の為、年間降水量は掲載不可（日最大降水量は 7 月 13 日～11 月 30 日の間の値）

人口及び世帯数

年　次	世帯数	人　口			備　考
		総　数	男	女	
平成 22 年	11,801	35,457	17,101	18,356	国勢調査（10 月 1 日現在）
平成 23 年	12,273	35,664	17,346	18,318	住民登録（ 3 月 31 日現在）
平成 24 年	12,300	35,287	17,138	18,149	住民登録（ 3 月 31 日現在）

●アドバイザー派遣申請の背景・これまでの取り組み

平成 17 年度に新井市が妙高高原町、妙高村を吸収合併する形で妙高市が誕生したが、合併に際し何よりも大切にしたのは“妙高”という名称であった。以来、人と自然が共生し、すべての生命を安心して育くむことができる「生命地域の創造」を基本理念に掲げるとともに、上信越高原国立公園内の「国立公園　妙高」を旗頭に自然環境の保全と観光振興に向け、まちづくりを行っている。その中でも合併を機に開始された、豊かな自然環境を守り継承していくことを目的とし、地域資源を活用した観光地としてのイメージ向上をも合わせて、ゴミ拾いをはじめとする自然保護・保全活動や健康をテーマとした市民参加型イベント「エコ・トレッキング」を開催してきた。ここまで一定の成果が出ていると評価しつつも、本来の概念である「地元主導型」という点ではまだまだ不足する点もあると考えており、またさらなる地域資源の活用や発見を目的として有識者の方からの意見を頂戴したいと考えている。

平成 27 年春には北陸新幹線が金沢まで開業する。新駅の名称も「上越妙高駅」に決定されるなど、妙高の名が掲げられることとなった。国立公園の魅力アップ及びエコツアー活動の充実が図ることができれば、さらなる地域活性化に向けた起爆剤となると考えている。

主な今後の検討課題としては…

①妙高地域における資源の洗い出し及び再評価

②エコツーリズム（総合健康都市づくり）の推進への可能性と実現

③自然歩道・登山道の整備と活用（山岳リゾート）

④自然環境の保全、妙高に相応しい景観の修復・創生
⑤インストラクター、ガイドの養成と魅力発信のための拠点整備
⑥関係機関、関係団体等による保護・活用に関する横断的な組織の設置　など
といったものが挙げられる。

(2) アドバイザー派遣の概要

日　　時	平成 26 年 2 月 24 日（月）～平成 26 年 2 月 26 日（水）
場　　所	妙高市役所、道の駅あらい、妙高市観光協会、斑尾高原観光協会、妙高高原ビジターセンター、いもり池、妙高高原メッセ、赤倉観光リゾートスキー場、妙高杉ノ原スキー場、妙高高原支所
アドバイザー	環境カウンセラー（広報戦略）、環境映像ディレクター・プロデューサー　鈴木　順一朗　氏
参　加　者	斑尾高原観光協会、妙高自然ソムリエ、国際自然環境アウトドア専門学校、夢見平遊歩道を守る会、環境省自然環境局国立公園課、妙高市（環境生活課、観光商工課）　　計 15 名
スケジュール・方法	【1 日目】 ・市職員へのヒアリング 妙高市におけるエコツーリズムに関連する事項の現状説明や課題整理 ・道の駅あらい視察 道の駅内の情報館や物産館の状況確認 【2 日目】 ・視察 妙高市観光協会事務所、斑尾高原観光協会事務所、妙高高原、ビジターセンター、いもり池 事業内容や展示物、フィールドなどの確認 ・関係団体を交えた意見交換会 エコツーリズムの概要説明や関係団体の課題などの整理 ・宿泊施設での聞き取り調査 宿泊者（多くが外国人）からの聞き取り調査 【3 日目】 ・赤倉温泉内での観光客からの聞き取り調査や現地視察 温泉街での観光客から聞き取りや温泉街の様子を確認 ・市内スキー場の視察 赤倉観光リゾートスキー場、妙高杉ノ原スキー場 入込客数や施設、整備内容の状況確認 ・3 日間を振り返っての総括及びアドバイス アドバイス内容を確認し、今後の妙高市の方向性を探る

(3) アドバイスの内容

●妙高市が考える現時点での課題

「自然環境保全に関する課題」

- いもり池の環境保全
- 高山植物の保護・生物多様性の確保
- 希少動植物の保護（ライチョウの保護）
- 環境教育による国立公園に関する意識の強化
- 景観の保全

「利用に関する課題」

- 新幹線開業に伴う受け入れ態勢の整備と広域連携の強化
- 妙高を楽しむための観光基盤の整備
- 自然・温泉・食材など地域が誇れる観光資源の活用
- 妙高地域の価値の再評価と効果的な情報発信
- スキー観光産業の再生
- 外国人観光客の誘致

「国立公園内等における管理運営に関する課題」

- 環境省や地域関係者による連携の強化

●アドバイザーからの意見

- 地域の活性化（主に経済面）にどう結びつけるかが一番重要。
- スキー産業自体は残念ながら成長産業ではない。
  ⇒跡地利用ということも今後検討していく必要がある。
- スキーに来る魅力とは？首都圏等からの日帰りツアーバス等も充実していて実際、宿泊には結びついていないのではないか？「来場者数＝収益」ではないはず。
- 観光面では広域連携機能強化は非常に重要なテーマとなる。
- 北陸新幹線の最寄り駅（上越妙高駅）が素通りしないための仕掛けづくりは必須。
- 妙高市の基本理念である「生命地域の創造」についてはネーミングが一般市民からは具体的にどのようなことか？何をするのか？が見えてこない。エコツーリズムを市として取り入れるのであれば「エコ」は物事の根底に出てくる部分なので基本理念の見直し、および、訴求が必要である。
- ターゲットを絞ることで何から始めたら良いかが出てくる。整理した後に欲張らずに１つの柱（妙高の売りや武器）になるものを見つける。多くのメニューを出し過ぎることは中身が薄くなったり、経費がかさむだけである。まずは妙高市にとって一番の売り出すべきものは何なのかを再発見し、集客を成功させてからメニューを増やしていくことが大切。
- 環境教育はとても重要である。元々、我々が使っている全ての物に命があり、それを使っているという「命のつながり」を認識することが大切。そして、そうしたことを観光客に対してだけでなく、市民に対しても、郷土愛や故郷を学べるような視点で行うことが大切である。教えるのではなく、伝えていく姿勢が重要。
- 「食」というテーマも重要である。

●関係団体を交えた意見交換会

- エコツーリズムは「お金をもらっての産業」である。観光であるわけだから収益の上がる事業展開をしなければ継続できない。
- かつて世界のエコツアーが日本のメディア（BS での番組など）で盛んに取り上げられた時期があり、エコツアーが観光のトレンドになりそうな時代があり、その頃にわが国におけるエコツーリズムの考え方が生まれてきた。しかしその後の経済の低迷化や東日本大震災により、状況が変化した。その現状を認識した上で、現在に合ったエコツーリズムを考え展開することが必要になってきている。
- エコツアーのガイドを行う上で「ボランティア」と「ガイド業者（プロ）」をしっかりと棲み分けすること。参加者にはしっかりと明示する必要がある。ボランティアへお願いする側にお願いの仕方の問題などはあると思う。
- エコツーリズムのメリットとして「国立公園」内での規制緩和や、環境保全に必要な新たなルール作りが挙

げられる。そのメリットを上手く利用し合うのがエコツーリズム導入のメリットである。

- エコツーリズムを取り入れるのであれば行政が中心になり、しっかりとした土台をきっちり築くこと。継続可能な組織づくりと予算管理が必要である。
- 今は「映像（動画）」というツールの時代。携帯電話のユーチューブでも見られる時代。パンフレットだけではなく、生きた情報を受け取る側に伝えていくことが大切。
- ビジネスチャンスとしては「外国人」をリピーターにすること。理由はリピート率が高くて滞在期間も長いこと。冬だけでなく、夏もリピートしてもらえるような仕掛けが必要。そういう観点からトレイルは可能性がある。また特に欧米人は「トレイル」の楽しみ方をよく知っており、かなり興味を持っている。この意識にうまく働きかけ夏の集客を考えることは価値がありそうである。外国語でのガイドや案内ができることが肝心であり、これが出来るだけでも大きな目玉になり、話題性も高い。
- 「祭り」には、人と自然のルールというものが存在する。それは継承していかなければならない。
- 子供向けの環境教育を充実させてほしい。「体感（五感をフルに使った体験）」という部分が近年減ってきていると感じている。大人の責任としてそのような場を提供していくことが大切である。
- 震災前の当たり前のように目の前にあった日本の風景が震災後消滅し、改めて偲ばれている。なくなって初めてわかることもある。大事なのは「未来に何を残してそして伝えていくのか」を再確認し、実行することである。
- 自分の住む町の良さ、素晴らしさを子どもに伝えなければならない。もちろん子どもだけではなく市職員を含めた一般住民も同様である。
- 「国立公園」は海外からみると、価値のあるブランドである。
- 妙高を「日本の宝」だけにとどまらず、世界に進出させてほしい。特別な場所であることを十分に PR すること。
- 元々全ての物（者）は生き物であり、「エコ」という言葉の捉え方は難しいなかなか簡単に答えの出ないテーマだと思う。しかし自然とのつながりを再認識することで方向性が見えてくる。

●総括

- エコツーリズムの考え方から「観光」は切り離せないので、それに必要不可欠である広報戦略と宣伝は必須である。
- 妙高市の基本理念である「生命地域の創造」がエコツーリズムの考え方に合致しているので「エコツーリズム」へ取組んでもらいたい。合わせて、内外に対しての環境教育も盛り込んでもらうようお願いしたい。
- 既に「森林セラピーロード」を活用したエコツアーや百名山である妙高山や火打山の登山コース、貴重な山野草、ライチョウを象徴とする希少生物などを含めた雄大な自然、他含めて「宝」と呼べるような環境が妙高市内にはある。しかし、それらは他の地域より特に突出しているような魅力的な素材ではないため、今存在する「宝」を再確認して、さらに磨きをかけて輝かさなければならない。セラピーロードやいもり池を活用した魅力的な素材作りが急務である。
- 現時点では市全体としてはまとまってはいないが、エコツーリズムの考え方を推進、そしてエコツアーを展開する担い手には恵まれていると思う。ガイド団体や国際自然環境アウトドア専門学校と上手く連携出来、持続可能な経済効果を含めた計画が進展すれば他の地域の追従を許さないくらいの恵まれた可能性を秘めている。

斑尾高原観光協会にて斑尾高原の地形確認

妙高高原ビジターセンターにて館長の説明を受ける

いもり池にて妙高山を望む

関係団体を含めた意見交換会の様子

(4) アドバイザー派遣の効果

●参加者や関係者に与えた効果

・　エコツーリズムに対する知識、意識の啓発

●今後の期待される効果

・　上信越高原国立公園からの分離独立を視野に、地域資源の保全及び活用方策、管理運営体制等について、関係機関・関係団体による検討委員会を設置し、「妙高ビジョン」として取りまとめ、策定するにあたっての“きっかけ作り”の場となったこと。

●今後の取り組み

・国立公園の協働管理体制の構築

＊　環境省などからアドバイスをもらいながら、地域資源の保全及び活用方策、管理体制を関係団体と共に検討する

・「総合健康都市」との連動

＊　「トレッキング」「食」「温泉」をテーマとした健康活動の増進

・　妙高のソウルフード的目玉商品の発掘や登山中やトレッキング中に食べることのできる妙高オリジナ

ルの食べ物の開発や気軽に温泉入浴が出来るような仕掛けづくりを行う

＊　市内各地におけるウォーキング運動の充実

・　平成 26 年度に公表予定のマップを活用する

・環境教育の充実

＊　既存の「夏休み親子自然教室」の発展や充実

＊　「(仮) 日本の宝・ふるさと妙高を知ろう！」を市内小中学校の授業で展開

・　市長や教育長といったトップ自らによる出張授業も検討

＊　知識及び実地経験豊富な国際自然環境アウトドア専門学校とも連携する

・情報発信の強化（時期を逃さない広報戦略）

＊　内向け「市民に郷土愛を植え付ける」と外向け「日本（妙高）の自然の素晴らしさを世界に伝える」の情報発信戦略を練る

＊　海外向けに「国立公園妙高」⇒「ナショナルパーク MYOKO」としての PR

・　海外での「国立公園」への注目度や認知度に賭けて、既存のウインタースポーツでの既存客はもちろん、グリーンシーズン（トレッキング、登山など）向けの PR 方法の検討

＊　宿泊施設や観光施設での外国語案内などによる「妙高版“お・も・て・な・し”」の実現

(5) アドバイザー派遣を実施して（地域からの声）

●参考となった事項

・　エコツーリズムのメリットに対する認識について

・　エコツーリズムでの「行政」の在り方について

・　妙高市で掲げている基本理念との整合性について

●その他感想

外部に目を向ける以前の問題がまだまだ妙高市には山積みになっていると思った。私自身も含めて、市民の中には「妙高の魅力」を知らない方々が大勢いると思う。知っていたとしても、その全てを知っている者はごくわずかだと思う。今、まずやらなければならないことは、子供はもちろん一般市民に妙高のポテンシャルを理解して、自分達の郷土に対する愛着心を持ってもらうことだと思う。それが魅力的な情報発信にもつながってくるのではないかと思う。

行政人には数年サイクルでの異動というものがあるが、特に環境行政にはスペシャリストの存在や育成が必要ではないかと考えさせられた。

最後になるが、世界的な広い視野で考えた場合の「国立公園」の認知度や注目度そしてパークレンジャー（自然保護官）が海外の子供のなりたい職業の上位に来るような夢を与えていることをお聞きして、自分自身が「妙高」に住んでいることのありがたみを実感することができた。

これもひとえにこちらの環境省「エコツーリズム推進アドバイザー事業」並びに鈴木先生のおかげだと思っております。今後もどうか妙高市へのご厚情をお願いいたします。

(6) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

環境カウンセラー(広報戦略)、環境映像ディレクター・プロデューサー　鈴木　順一朗　氏

●地域におけるエコツーリズム推進の取組の現状と課題

妙高市は、日本百名山の一つである妙高山のすそ野に広がる豊かな自然に育まれた高原である。美しい景観はもちろんのこと、生態系の豊富さにも驚かされる。生物の多様な森林を有する地域である。さらに上信越高原国立公園に位置し、自然と人が共存する山岳型の日本を代表する自然公園である。

かつてはスキーのメッカとして相当な賑わいを見せていたが、近年のスキー離れから新たな集客を必要（大きなテーマ・課題）としている地域である。また、高齢化や山岳地近くの集落の過疎化、市全体の少子化も課題である。そのためにこの地域の基本である観光産業の活性化が切望されるところである。

しかしながらただ単に集客すればいいというものではない。これだけの自然を有する妙高市にとって「人にも自然にもやさしい地域であること」が必要である。このことは妙高市の理念にもなっている。

●特に魅力を感じた地域の自然観光資源

6 箇所の森林セラピーロード、上級コースとして百名山として知られる妙高山や火打山登山。貴重な山野草や、ライチョウを象徴とする希少な生物も多く雄大な自然が「妙高市」の宝であり生態系の豊かさに驚かされる。ビジターセンターに隣接するいもり池も興味深い。この他に 7 つの温泉や、歴史ある関山神社火祭り、冬場のスキー・スノーボードや雪上トレッキングなど魅力的な観光資源がある。また、冬場の観光客（スキー・スノーボード）には外国人が多く驚かされた。また国立公園であることも武器となる魅力的な要素である。

●アドバイス（講義等）の概要

① まず最初に、現在の時代に合った、私なりのエコツーリズムの考え方を解説させていただいた。その上で、「観光」であるがゆえに必要不可欠な広報戦略と宣伝の必要性について解説した。

② 町づくりの基本理念「生命地域の創造」が、エコツーリズムの考え方とマッチしているので、将来、可能性が広がれば「エコツーリズム成功の地」としてトライしていただきたい。その手法として、ご説明させていただいたように、町の施策のベースの考え方の中にエコツーリズムと環境教育を盛り込んでいただきたいと懇願する。

③ すでにエコツアーとしては 6 箇所の森林セラピーロードがあり、春から秋にかけてエコツアーも行なわれている。上級コースとしては百名山として知られる妙高山や火打山があり有名な登山コースを有している。貴重な山野草や、ライチョウを象徴とする希少な生物も多く雄大な自然が「妙高市」の宝とも言える。ビジターセンターに隣接するいもり池も興味深い。この他に 7 つの温泉や、歴史ある関山神社火祭り、冬場のスキー・スノーボードや雪上トレッキングなど、エコツーリズムの定着とエコツアー展開のバリエーションと魅力に富んでいることは間違いない。しかしながら、妙高市としての悩みとして、冬場のスキー人口をはじめとする観光入れ込み人口の伸び悩みから、財源確保が年々厳しくなっているため、夏場の集客に対してエコツアーの可能性に興味を持たれていることは理解できる現状である。しかし、これといって他の地域より特に突出している魅力的な素材ではなく、今存在する「妙高市の宝」をもう一度選出し、磨きをかけ、輝かせなければならない。

④ さらに、現時点ではまだまだまとまっていないが、エコツーリズムの考え方を推進、そしてエコツアーを展開する担い手にも恵まれている。ガイドの養成をする NPO や国際自然環境アウトドア専門学校があり、持続可能な経済効果を含めたエコツーリズムの計画が進展すれば、担い手の確保において、他地域の追従を許

さないくらいの恵まれた可能性を持っている。

⑤ 妙高市の宝はなんと言っても自然の中に入り、自然の豊かさ、生態系の豊かさを感じ、体験していただく事だと思う。まずは、この宝に集中し磨きをかけていくことが重要だと感じた。具体的には、初級から楽しめる「6 箇所の森林セラピーロード」と「中級・上級登山＝百名山として知られる妙高山や火打山登山」をメジャー化することである。そのためにはどうしたらよいのか？　アイディアを下記に提案させていただく。

提案 1：少なくなったとはいえ、市の観光入れ込み客の 30%を占める冬場のスキー場利用客に対し、PR 活動に注力し、夏場の集客を訴求する。冬場の来客に対し、夏場のトレッキング等のお得なクーポン発行などで客の興味を惹きつける。夏場に来てくれた客に対しては再び冬のお得なクーポン発行などで客の興味を惹きつける。「冬くれば夏も遊べる（お得な）ミョーコーさん」「「夏くれば冬も遊べる（お得な）ミョーコーさん」といったような次につなげる集客作戦を実行し、時間をかけ広報戦略に基づき集客に努める。また、宿泊施設等にも協力依頼し、宿泊客についてのリピート率や、妙高の魅力についてリサーチし地元では気づかない「宝」の発掘・再認識をしてみることから始めてみる価値もある。

提案 2：近年、冬場の宿泊客の中に外国からこの地に訪れる客数が増えていると聞く。オーストラリアやヨーロッパの客が多いということである。実際に今回のアドバイザー派遣事業で宿泊した旅館でも、8 割方これらの外国人であった。そのため、外国人が喜ぶ「おもてなし」の工夫を旅館側も随所に取り込み、また、英語での会話についても従業員が長けており驚かされた。いろいろ取材をしてみると、妙高が国立公園であることを伝えるとかなり驚き感激してくれるらしい。ここに外国人利用客の更なるリピーターや、拡大の可能性が秘められているように感じる。というのも、もともと国立公園は欧米から始まっており、彼らの中で国立公園への評価は高い。この意識を利用しない手はなく、初級から歩ける 6 箇所の森林セラピーロードを魅力的に伝え、実際にリピーターとしてきてもらうことができるのか、また、その場合、どんなリアクションがあるのか調査すべきである。日本人ガイドにとってもオーストラリア人・西洋人・欧米人の自然に対する考え方や見方、遊び方を学べる場であり、日本だけでなく世界の妙高として注目を集めることを目標に取り組まれたら面白い。ここにはニュース性も高く話題となる可能性が大きい。逆輸入の形で日本国内に対して「国立公園としての妙高」を再認識してもらえることにも通じる。国立公園＝ナショナルパークとしての価値観を日本国民に伝えるチャンスにもなり、チャレンジする意義は非常に高い。また、外国人相手に、彼らが好む「日本食…妙高食のおもてなし（食のエコツーリズム）」なども強く可能性が感じられる。これらは、夕食時や朝食時に旅館の食堂で実際に現場を目の当たりにした感想である。

提案 3：妙高市にはいろいろな魅力があるが、市民が愛してきた場所として「いもり池」がある。ビジターセンターも隣接しており、妙高山の正面に位置する絶景が望める。しかしこの池には誰が放流したのかわからないがブラックバスが繁殖しており、在来種の激減が心配されている。いもり池における植物の植生も変化があり、元の姿に戻さなければならない。これを「みんなで取り組むいもり池再生プロジェクト」と称して、特には市内の小学生を中心に生態調査を実行し、イモリの生息数や、周辺に生息する、野うさぎ、オコジョ、ホンドリス、テンなどの調査も兼ね、環境教育とエコツアーのコラボレート事業を展開していただく事をお勧めしたい。農業用水としても利用しているいもり池は、かいぼりもできるということなので再生させる可能性は大きい。これを市民の財産として市民の手で復活させるプロジェクトを成功させ、エコツーリズムにつなげていっていただけたら、話題性・広報効果もあり、また、妙高市のスローガンでもある「生命地域の創造」につながることにもなり取り組む価値は相当高いと思われる。国立公園内であることも事業を進めやすい理由になるはずである。再生を手伝った多くの子供たちの名を、何らかの手段でいもり池のほとりに記念として彫りこみたい。これにより、意識の向上と、変わらないいもり池への「訪れ」の気持ちが、大人になっても根付くと考えられる。

以上のような点から取り組まれることをお勧めしたい。まずはニュース性の高いところから始め、妙高の名を高

めて集客がある程度成功したところで、オプショナルツアーとしての多様なツアーを用意すればいいと考える。外向け（観光客の更なる集客）と内向け（市民の意識向上）にエコツーリズムの考え方を導入した以上の 3 つの取り組みからチャレンジしてみてはいかがだろうか。

●全体構想への取組状況・意向について

私が今回うかがったもう一つの地域「福井県大野市」同様、エコツーリズムの導入口であった。「エコツーリズムの効果」「エコツーリズムへの取り組み方」「エコツーリズムの必要性」「取り入れる場合、どのような手順が必要なのか」「成功しているところ、なかなかうまくいっていないところの理由」など、様々な方向から質問がでた。ある程度理解していただいたという印象から、本格的エコツーリズムを導入するかどうか妙高市としてこれから検討されると思う。

●地域に対する印象、今後地域に期待すること（メッセージ）

前述の通り、妙高市には市としての大きな柱である基本理念「生命地域の創造」がある。大変良い理念だと思っている。その理念を是非とも実現させていただきたいし、応援させていただきたい。

最後に、将来、エコツーリズムを導入する場合の話だが、取り組みのネーミングだが「エコツーリズム」でなければならない必要はないと思う。考え方の土台部分にはしっかり「エコツーリズム」を導入していただき、掲げる看板としては妙高市の基本理念である「生命地域の創造プロジェクト」とか「生命地域ツーリズム」であってもいいのではないだろうか。その方が「妙高」らしい。

3-7. 大野市（福井県大野市）

(1) アドバイザー派遣申請の背景

●地域の概要

大野市　人口 35,840 人　世帯数 11,832 世帯（平成 25.10.1 現在　住民基本台帳人口）　総面積 872.30 km²

日本百名山の一つ「荒島岳」などの山々があり、名水百選の「御清水」をはじめ多くの湧水池があることから国土庁の「水の郷百選」にも選ばれるなど豊かな自然に恵まれており、夜空がきれいなことから「星空の街」にも選定されている。また、市街地はその歴史的な風情や町並みから「北陸の小京都」ともいわれている。

●アドバイザー派遣申請の背景・これまでの取り組み

本市は、古くから湧水が豊富であり、今日においても飲料用水などの生活用水をはじめ、農業や工業など様々な用途に利用されている。昭和 60 年に名水百選に選ばれた「御清水」、平成 20 年に平成の名水百選に選ばれた「本願清水」などの湧水池が点在するとともに、水と共生する生活様式など特有の湧水文化を育んできたことが高く評価され、平成 8 年には大野市が「水の郷百選」に選ばれた。

しかしながら、近年の地下水位の低下などにより、湧水文化の後世への引継ぎが困難な状況となりつつあったため、平成 18 年 3 月に名水のまち大野を具現化する「大野市水のみえるまちづくり計画」を策定し、さらに平成 23 年 10 月に湧水文化の再生を目的とした「越前おおの湧水文化再生計画」の策定により、市民、企業とも連携し、市全体で総合的な取り組みを進めているところである。

この成果として、本年 7 月には大野市が「日本水大賞環境大臣賞」を受賞しており、湧水文化の再生を通じた地域づくりへの機運が着実に高まってきている。

今後、これら計画における「水」を中心としたさらなる地域づくりを進めていくにあたり、今回のエコツーリズム推進アドバイザー派遣事業を活用させていただくこととなった。

(2) アドバイザー派遣実施の概要

日　　時	平成 25 年 12 月 18 日（水）～平成 25 年 12 月 20 日（金）
場　　所	大野地区: 城下町（湧水池）、御清水、大野市観光協会、本願清水イトヨの里　他
アドバイザー	環境カウンセラー（広報戦略）、環境映像ディレクター・プロデューサー　鈴木　順一朗　氏
参　加　者	【1 日目】 大野商工会議所中小企業相談所長、㈱結のまち越前おおのタウンマネージャー、 大野市観光協会事務局長、観光ボランティアガイド大野ガイド、越前こぶし組番頭、 越前おおの農林樂舎主任、福井県環境政策課職員 2 名、 大野市職員（観光振興課、建設整備課湧水再生対策室、産業振興課、行政戦略）　計 13 名 【2 日目】 福井県環境政策課職員 4 名、大野市職員　計 6 名 【3 日目】 大野商工会議所中小企業相談所長、㈱結のまち越前おおのタウンマネージャー、 大野市観光協会事務局長、観光ボランティアガイド大野ガイド、越前こぶし組番頭、 越前おおの農林樂舎主任、福井県環境政策課職員 2 名、 大野市職員（観光振興課、建設整備課湧水再生対策室、産業振興課、行政戦略）　計 13 名
スケジュール・方法	【1 日目】 ・現況報告 ・研修会① 鈴木氏より説明 エコツーリズムについて、大野市の湧水におけるエコツーリズムの可能性と現在の課題 ・地元関係者と意見交換 大野市観光協会、大野商工会議所、㈱結のまち越前おおの、大野市観光ボランティアガイド、越前こぶし組（車夫）、越前おおの農林樂舎 【2 日目】 ・視察（研修参加者へのインタビュー等） 観光協会、市内湧水地（御清水、義景清水他）、春日神社、篠座神社、磐座神社、寺町通り、七間通り、石灯篭通り、河原酢造、イトヨの里　他 【3 日目】 ・研修会② 初日の研修で出た課題に対する、視察を踏まえた提案とディスカッション

(3) アドバイスの内容

●1 日目　研修会①

アドバイザー鈴木氏より「エコツーリズムについて」の説明を受けた。4 つの理念「自然環境の保全」「観光振興」「地域振興」「環境教育の場としての活用」を押さえ、ルールづくり（罰則等、自主ルールなど）が必要である。エコツーリズムとは、全ての要素の「土台」、「残さなければならない（今あるもの、失ったもの全ての）自然」であり、今回のテーマとしては「湧水」である。この土地に来てもらい、「自然を感じながら」、「大切さを認識」して、「感動に変えて」帰っていただき、結果的には地域にもお金が落ちる仕組みが大事であることを学んだ。

埼玉県飯能市の西武鉄道と組んだエコツーリズムの実践について説明を受けた後、参加者からエコツーリズム及び本市での取組み等についての意見聴取を行った。

鈴木氏からは、大野市には「プラスアルファ」となる素材がたくさんあると感じていること、また、観光については「城下町」と「自然」の両方を楽しむ方向性が良いのではないかとの感想を話され、今後のイメージ戦略で、本市のブランドキャッチコピー「結の故郷（ゆいのくに）越前おおの」における「結（ゆい）」のつながりは「水」

であるという提案をしたいとの報告を受けた。

●2 日目　現地視察

湧水池の多い市街地を中心に、観光地、水に関する施設等の現地視察を行った。また、酢造会社での作業工程の見学や陸封型イトヨ生息地の南限として国の天然記念物に指定されている本願清水や「イトヨの里」にて水に関する取組み等についての学習も行った。

御清水、御清水会館
義景公園
春日神社（良縁の樹）
山王神社の池
結ステーション（結楽座、平成大野屋、時鐘、藩主隠居所）
観光協会【事務局から現状聴取等】
七間通り、寺町通り、石灯籠通り、石灯篭会館
梅林（昼食：しょう油カツ丼、おろしそば）
河原酢造（本町：蔵見学、吉：工場見学）
篠座神社
清瀧神社
イトヨの里【副館長からの説明】
磐座神社

●3 日目　研修会②

アドバイザー鈴木氏より、今回の派遣事業による本市への提案等について報告を受けた。大野市は自然環境の上に成り立っている歴史ある都市であり、「水と共生する」全国を代表する地区になれる要素がたくさんある。今後、エコツーリズムを推進していく上では、「環境保全」「観光振興」「地域振興」「環境教育」の 4 つの柱が不可欠である。城下町人力車、とんちゃん等、様々なコンテンツはニーズに応じた俊敏な対応が必要であり、これらの土台となるのがエコツーリズムで、時間を掛けた整備が必要である。「水」が大野市の核になれると感じたとの報告を受けた。

その後、これらの状況を踏まえ、次の 7 つの項目について提案を受けた。

① 大野市民にとっては当たり前の「湧水」「地下水」⇒外部の者には驚きの条件
- 地質や構造をもっと広報すべきだと思う（「巨大な水がめ」等）。ジオパーク的な要素として新鮮でセールスポイントになる。
- 「水」⇒当たり前すぎる意識の改善
- 水をキーワードに、人、物、産業等が繋がっている。全てを結び付けている「結」の根源が「水」であると強調し、売り出してはどうか。
- イメージの統一化が必要かと思う。

② たくさんある観光素材の中から「大野と言えばこれ！」というシンプルなイメージづくりが必要
- 例：全ての観光素材に「湧水」のニュアンスを入れ、シンプルに明確に伝える。
- 映像を使ったイメージ戦略も効果的である。※鈴木氏がイメージして作成した映像データをプロジェクターにより鑑賞
- スマートフォンでもハイビジョン対応のものもあり、簡単に安価に作成できる。イメージ PR として十分

使用できる。

- 「結（ゆい）と出会えます。」等、水を通じた「人」との出会い、コミュニケーションを撮影してはどうか。
- 市街地での撮影の際、川にゴミがあった。人に歩いてもらう（巡ってもらう）のであれば、より一層の清潔感を増すよう努めることが大事。
- ブランドロゴを共通ののぼり等にして町中に設置したり、人力車や観光ボランティアの胸に付けるなどして PR しては。

③　「食」に関する将来構想とエリアづくり

- 世界無形文化遺産となった「和食」。おおの独自の料理の創造も効果的では。
- 市内の食べ物屋さんがちらばっている。「集める」ことで「エリア」の中で様々な体感（「見る」含む）が出来るようにすると良い。（参考：伊勢神宮等）
- 大野市内の人の動き　⇒　人がばらついている。集中により、いつも人がいるイメージにすることができる。
- 湧水をネーミングにした料理を作ってはどうか。水を使う、プチほんこさん、湧水結び（おにぎり）等
- 食のエコツーリズムを目指すのも良い。名物料理を考える。

④　ブランドロゴの浸透

- いたるところに表示。統一的にイメージを戦略化しながら浸透させる。

⑤　多数あるパンフレット、チラシ等の整理

- 地図をメインに集約したものがあると良い。
- 「結なび」は大変作りこまれているが、あまり利用されないと思われる。インターネット等でも検索でき、もっと簡単に見せる見ることが出来る方向性とした方が良い。
- 携帯電話等を活用したクーポンの発行も若い世代対象として魅力的である。

⑥　既存施設等の観光客への見せ方

- 施設が立派（きれい）過ぎて、人気（ひとけ）や歴史が消えてしまっている。
- 御清水を例にすると、「すだれ」や「竹あかり」を柱に設置するだけで全く雰囲気が変わる。あかりについては、特に冬場の夜など賑わいの創出や、防犯面等から集えるような場所（施設）に設置すると良いのではないか。
- 座布団を敷く⇒夏場に水に足を入れて涼む利用の仕方もある⇒地元の高校生等も利用⇒人がいるから、新たな観光客が立ち止まりやすい⇒コミュニケーションが生まれる。
- 藩主隠居所は、とてもきれいであるが、整然としすぎていて利用しづらい。

⑦　「水」と「光」のコラボによるイメージアップ

- 竹あかりでライトアップなど
- ライトアップによる「夜」の観光地としての魅力⇒短期滞在型観光から長期宿泊型観光へ。

最後に、各出席者から今回の研修によって感じた点等について意見を聴取し、今後の行政、各団体における施策等に、今回のアドバイザーからの提案内容、要素等を活用していくことを確認し終了した。

(4) アドバイザー派遣実施の効果

●参加者や関係者に与えた効果

参加者からは、アドバイザーからの提案を受け、地域で「人が遊んでいる」ことが観光客の誘致に繋がることや、「自然をうまく使わせてもらっている」ことに「恩返しする」ことが「エコツーリズム」であることが学べた等の感想があり、今後のそれぞれの分野における取組みのヒントとなった。

●今後の期待される効果

市民にとって、あることが「当たり前」となっている「水」に対し、大切さや今後の観光素材としての価値等を改めて学ぶことができ、これが大きな「気付き」となって、これからの取り組みに良い面での影響を与えるものと思われる。

●今後の取り組み

「水」を活用した取り組みについて、今回のアドバイザーからの各提案を参考に、今後の各団体における施策、活動の中で検討していくこととしたい。

(5) アドバイザー派遣を実施して（地域からの声）

●参考となった事項

アドバイザーが制作された映像による埼玉県飯能市の実際の取組みを紹介いただき、参加者は短期間でエコツーリズムに対するイメージを得ることができたと思われる。

加えて、この映像化等の取り組み、イメージ戦略等が市民、観光客へのエコツーリズム推進に有効であると感じた。

●その他感想

外部からの視点による観光地等の視察時には、細やかな点等についてもご指摘やご提案をいただいた。ほんの少しの取り組みが大きな効果をもたらすこともあることを踏まえ、今回の提案を参考としつつ、各種施策等に取り組んでいくこととしたい。

(6) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

環境カウンセラー(広報戦略)、環境映像ディレクター・プロデューサー　鈴木　順一朗　氏

●地域におけるエコツーリズム推進の取組の現状と課題

大野市は平成 20 年より「越前おおの型エコ・グリーンツーリズム」と称した推進プランを策定し、「大野市が誇る自然環境、歴史、文化、伝統など豊富な地域資源や素材を最大限に生かした、都市住民と大野市民による対等で継続的な心と心のふれあい、交流活動」と位置づけ「越前おおの型エコ・グリーンツーリズム」の確立に向けまさに今動き出しているところである。具体的には、自然や農林業、日々の暮らしと結びついた体験型交流を提供することを目的とした、「ふるさとワークステイ」「ふるさと体験」等、積極的に取り組んでいる。郊外型では中山間部を中心に、「サイクリング」「トレッキング」「カヌーや川遊び」「古民家体験」「農業体験」「地域の食材を使った料理」「自然素材を使った加工品作り」などを展開し始めている。市街地では城下町の特色を生かした観光に取組んでおり、「越前おおのブランド戦略」「越前おおの観光戦略プラン」「水のみえるまちづくり計画」「越前おおの湧水文化再生計画」等、積極的に推進しているところである。これらの考えの上に、ハード面として、大野城周り、湧水池や観光地、城下町の街並みなどを整備し、大変きれいで素晴らしいものに仕上がっている。

これらがそれぞれ推進され、今まさに「始動している」といった印象である。エコツーリズムに関したものでは、総合的には「越前おおの型エコ・グリーンツーリズム」を核とするわけだが、それぞれが始動したばかり、現状ではあれもこれもという風に見え、整理しづらいという印象であった。それぞれのコンテンツが一挙に均等に見えてくるような現状である。始動期であるので勢いが感じられたのは確かである。評価されるべき「やる気」が見えてくる。それだけに、これからは「大野市といえば○○」という特色を絞り込む必要があると感じた。それが「湧水」なのか？　短い滞在期間で感触だけでも掴まなければならない。

郊外型ツーリズムでは「越前おおの型エコ・グリーンツーリズム」と称してはいるが、どちらかといえばグリーンツーリズム的なニュアンスが強く、市街地に関しては「観光・名産品」を中心に奮闘中という印象である。ここにどのような考え方で「エコツーリズム」を落とし込んでいくか、融合させ確立していくのかが今回の目的であり、また、大野市からの要望の核になる課題でもあった。

●特に魅力を感じた地域の自然観光資源

大野市は、周囲を 1000m 級の山々に囲まれた標高 170m から 230m の高所に位置する盆地である。南北・東西の幅は約 9km、この中を、九頭竜川、真名川、清滝川、赤根川の 4 本の大きな河川が流れており大野盆地の北側で 1 本に合流する。周囲の山々が育んだ水は、河川だけでなく、大野盆地の優れた帯水層に豊富な水をもたらしている。大野盆地に降り注ぐ雨や雪も大地に浸透し、豊富な地下水になる。いわば大野市全体が巨大な水瓶（みずがめ）になっている。こうした自然環境の上に、430 年余り前、大野城が築かれ、城下町が形成された。市内のいたるところから湧水が湧き出し、浅く掘るだけでも豊富な地下水をくみ上げることが可能である。ここに「飲む」「冷やす」「洗う」のルールが作られ、人々の生活と共に「越前大野」の湧水文化が生まれることとなった。

特に魅力を感じた地域の自然観光資源は大きく分けて 3 つある。

①「何といってもやはり湧水」

戦後の高度経済成長期に開発や融雪のための水利用の急増などから、地下水位の低下や湧水の減少・枯渇が進み、大野市全体でこの問題に取り組んできた。現在では、以前ほどではないが地下水位や湧水も復活しだしている。住民や市の関係者からは「以前はもっと水が豊富だった！もっと溢れていた！それに比べたら今は少ない」という声があったが、外部からの目線、観光客の目線から見れば、まだまだ魅力たっぷり水たっぷりの自然観光資源である。今回、いろいろな方とお話しし、湧水や地下水についてご意見を伺ったが、古来より水が豊かであったが故に、豊

かなことが当たり前で、その貴重性や、この土地のが持つ巨大な水瓶の地質構造に大変な希少価値があるということを忘れがちである。

また、大野市の湧水には、希少種の淡水型イトヨが生息している。国指定天然記念物　本願清水ではイトヨが数多く確認でき、また、水中からガラス越しに天然のイトヨを観察できる博物館「イトヨの里」も完備されている。環境教育の拠点となりうる立派な施設である。イトヨの生息地は本願清水だけではない。点在する湧水池には今でもイトヨが確認できる。「昔はいたるところにイトヨがいた。希少な魚になるとは思わなかった！」というのが大野の人々の正直な感想である。それだけ水が豊かで清らかだったという証明でもある。現在は本願清水をイトヨの里としているが、個人的な希望として、大野市の湧水池全部をイトヨの生息地として甦らせ、大野市全体を「湧水のまち、イトヨの里」と呼んでいただけるようになって欲しい。もちろんイトヨの生存も重要だが、大切なのは、イトヨが普通に存在できる清らかな水が溢れる土地であるということだと考える。

そして忘れてはいけないのが、水と共に生きてきた大野の人々の生活感。みんなで水を使い、水を利用し、水の周りに集った生活感が、今でも、どことなく、どことなくではあるが感じられる。というのも水量が減ったことと、各家に地下水が引かれており蛇口をひねればおいしい水が出る。わざわざ湧水で野菜を洗うことがなくなった便利さから実際に見る場面も少ないと推測されるのだが、それでも尚、昔から使われてきた湧水池を見ると、その面影が残っているのである。これを使わない手はない。生活感＝面影が残っているのならば住民も観光客も共に集える井戸端ならぬ湧水端を復活させられる。そのような印象であった。

②「城下町と大野式おもてなし」

大野市は城下町である。「碁盤の目」に近い形で町が形成されている。そこには寺町通り、400 年以上も続く「七間朝市」が開かれている七間通り、城下町を見下ろすかのような象徴的存在の大野城、各所に点在する湧水など、北陸の小京都というキャッチフレーズを大野市が打ち出すほど味わいのある街である。当然ながら「湧水の里」であるからして各所にある用水路には趣と生活感がある。そしてそこには「知り合えばとてもほっこりするほどあったかい大野人のおもてなしの心」が生きている。

大野の「食」も見逃せない魅力の一つ。山の幸と清らかな水をふんだんに使った大野の「食」は、「食のエコツアー」としても魅力的だ。

これらの「城下町散策」と「大野の食」をマッチングさせ、観光客に堪能していただくツアーは、歴史、風俗、文化的にも価値が高く、また、それらが自然からの恩恵、特に「水」の恩恵であるという価値観を伝えられる観光型エコツーリズムの可能性を感じた。

③「エリアマネージメントしやすいサイズ」

南北、東西の幅が約 9km のほぼ五角形をした大野市。このサイズの町の中に歴史と文化、風俗、湧水の魅力がぎっしり詰まっている。これからの課題はそれをどう整理し、どう見せていくかである。この「サイズ」がとても有利に思える。というのもとてもデザインしやすいサイズであるからだ。町をデザインする時、しやすい形やサイズがある。当然管理は行政がするわけだが、中心に城下町があり、それを中心に町が広がっている。しかも広がるといっても山々に囲まれた盆地であるからそれ以上は広がらない。わかりやすく管理しやすい範囲である。当然ながらこれは観光客にとっても動きやすく、わかりやすい範囲である。今後、町をデザインし、中心部を観光の拠点（基地）として展開するに当たって、このマネージメントしやすい大野市の広さ「サイズ」は強力な武器だと考える。

環境に特化したツアーに関しては、無数のツアーが考えられるほど自然環境は揃っている。つまり盆地であるからその周りは山、山、山。遠くは白山山系から連なる山々からの水で溢れ、川も多い。森林が深く、生態系も維持されている。町を少し離れれば、満天のスターウォッチングも楽しめる（環境省「日本一星空がきれい」に認定）。この自然に特化したエコツアーの実践に関しては、無限の可能性がある自然環境だからこそ、一つずつ大事に展開していただければと思う。たくさんのツアーを組むことは可能だが、それを運営し維持していくことにはかなりの

労力が必要とされる。エコツアー成功の秘訣は数より質である。

●アドバイス（講義等）の概要

エコツーリズムの考え方はなかなか伝わりにくい。これは私が普段から感じるエコツーリズムへの印象である。

まず、現在の大野市にとって「エコツーリズムをどのように組み込んでいけるのか？」が大きな課題であった。1 日目は行政側から大野市についての解説をしていただき、次に集まっていただいた関係者の皆様に、環境省のパンフレットを見ていただきながらエコツーリズムの考え方をお話させていただいた。私の解説の未熟さは反省するところであるが、やはりわかりづらい。考え方は理解していただいても、それが大野市とどのように関わるのかが今一つ腑に落ちないものであった。第 1 日目であることから、解説はそれぐらいにし、環境省のエコツーリズム学習映像より、認定第一号の飯能市「湧水を訪ねるエコツアー」の映像を見ていただき、イメージをより明確にしていただいた。

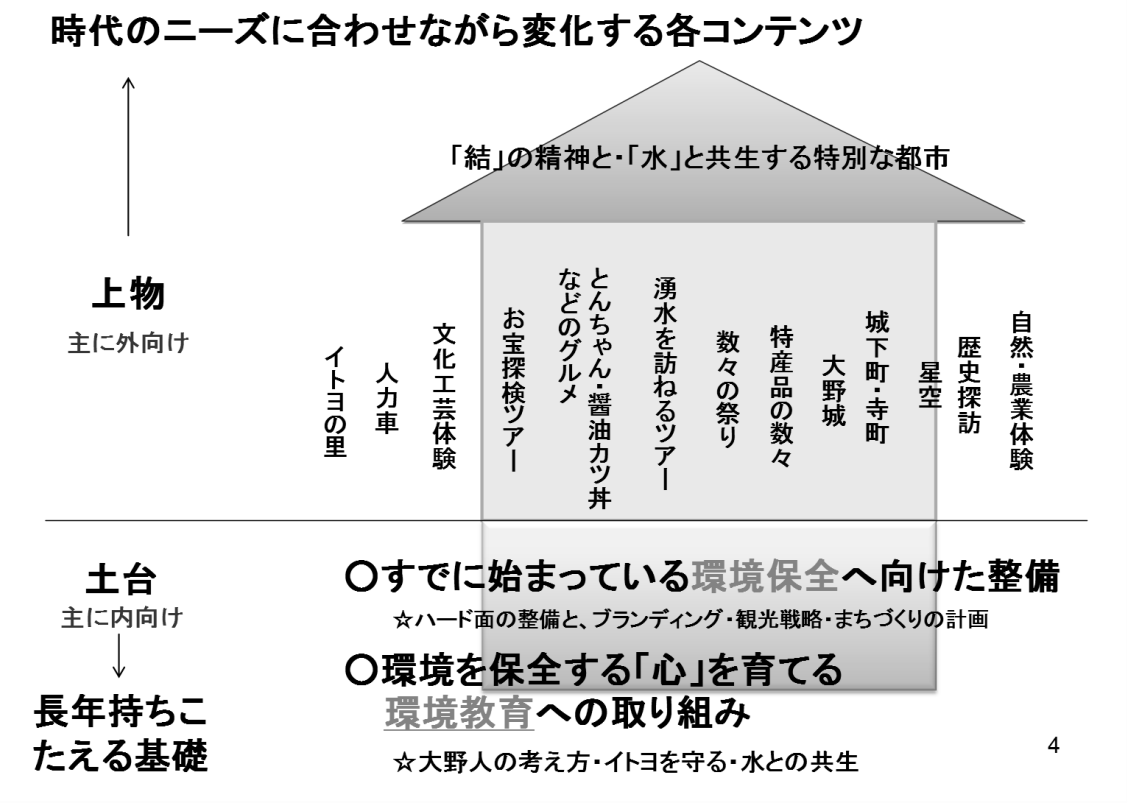
それから、大野市が抱える課題について意見を出していただいた。印象に残った課題は「現在、大野市の観光は滞在（宿泊）型ではなく通過型の観光地である。将来は滞在型の観光地を目指したい」ということだった。どうすれば魅力的な町づくりができ、通過させずに滞在（宿泊）させられるのか？　それをエコツーリズムとどう融合させたら効果的なのか？　宿題をいただいた形で次の日はヒントを探し回った。

そして 3 日目最終日。いろいろな可能性をまとめ、なるべく具体的に改善点をアドバイスさせていただいた。とはいえ、2 日間の滞在ですぐに答えが出るほど甘いものではない。一つでもヒントになればという思いを伝えた上で、パワーポイントにまとめた要点をお聞きいただいた。

以下要点

①大野市は「エコツーリズム」の考え方を取り入れるべき自然環境の上に成り立っている歴史ある都市だということを主張させていただいた。「水と共生する」という全国を代表するモデル地区になれる要素がたくさんある。それを実現するためには「環境保全・観光振興・地域振興・環境教育のエコツーリズムにおける 4 つが柱」がこれからの大野市には不可欠かつ有効であることを解説した。

②次にエコツーリズムをどのように取り入れていただきたいか。例えて言えばエコツーリズムは、家で言う「土台」の部分。しっかりした「土台」を時間をかけて作れば上物である家は 100 年、200 年も持つ家となる。その「土台」になるのがエコツーリズムの考え方であるという説明をさせていただいた。「人はどんな場合でも環境の上に生きている。その環境をこれ以上悪化させないように守り、またできる限り復活させ、うまく環境と共存しながらその特徴を利用していくのがエコツーリズムだと考えています」ということを、大野市を例に図を作成し、解説させていただいた。



土台になる部分は外からは見えない部分。内向けの努力が必要な部分。街づくりの計画や、湧水を守っていく計画など、環境保全とは切り離せない行政目標が土台の１つ目の要素。

もう一つは環境教育への取組。これは住民が自分たちの住んでいる環境を再確認することや、これからを担う子どもたちに原体験として自然環境の楽しさや、食の恩恵などを伝えることが大切であることを説明させていただいた。

上物は、観光振興と地域振興。観光もグルメもエコツアーも農業体験や古民家体験もすべて環境の上で行なわれるので、これは、時代のニーズに合ったものを選択し、展開すればいいものである。このように考えれば、グリーンツーリズムもブルーツーリズムもすべてのツーリズムが一つの頑丈な土台の上で行なわれるコンテンツとなる。つまり、似ているけれども別のものとして考えがちな各ツーリズムも一元化できる。さらに屋根には目立つように看板を置くが、現在大野市が掲げているメインキャッチフレーズの「結の故郷（ゆいのくに）・越前おおの」と、これから可能性のある「湧水の町」を掲げてはどうか、という提案をさせていただいた。この図により、ある程度具体的なエコツーリズム導入の理由や価値のイメージが伝わったと感じている。

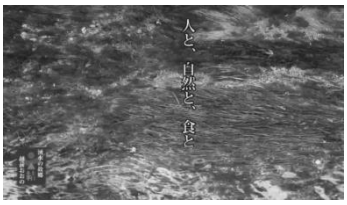
これはあくまでも私の考えだが、全国のエコツーリズムに関して多くの例を見聞きし考えた結果、誤解されがちなのが「エコツーリズムという家を作らなければいけないのでは」と思われてしまうこと。その場合、土台にはエコツーリズム推進協議会や関係各所・関係者やガイドとなり、上物には、環境教育や、エコツアーがコンテンツとして並ぶ。屋根には「〇〇エコツーリズム」が掲げられる。それではグリーンツーリズムも推進しているところはどうなるのか？　それはもう一軒グリーンツーリズムの家を作らなければならない。観光中心のツーリズムもあれば、観光だけの家も作らなければいけない。しかも土台の要である運営団体が傾けば家も傾いてしまう。しかし、そもそも環境という同じ土俵の上に展開されるのだから、一つにした方がわかりやすい。しかも土台が頑丈になる。土台が安定しなければ家も長続きしない。土台が大きくしっかりしていればちょっとやそっとの嵐でも傾きはしな

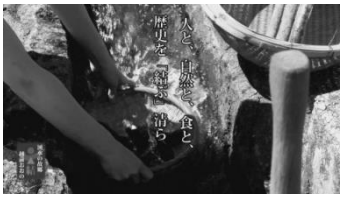
い。これが私流の考え方である。

　さて、次に提案させていただいたのが、玄関や窓や壁の部分。どうすれば「入りたい家」の装飾・演出をできるのかという点を、思いつく限り具体的にお話した。

③大野の人々にとって「湧水」や「地下水」の豊富さは、当たり前のもの。しかし、外からくる人々にとっては驚きの条件である。地元にとっては当たり前すぎて気づかない魅力であり、そのへんの意識を改善していただきたい。そして、巨大な水瓶である地質・地層構造の希少性を広報すべき。また、大野市のキーワードである「結（ゆい）」の根源にあるものが「水」、結びつけているすべてのものに共通しているものが「水」であることを強調し、象徴として「湧水」を前に押し出す売り方が効果的ではないかという提案をさせていただいた。

④さらに、大野市にはたくさんの魅力的な素材があるが、それが並列しすぎていて「大野市といえば〇〇」という印象が薄いのではないか。これを湧水とする場合には、すべての観光素材に「湧水アピール」のニュアンスを入れ込んでみてはいかがだろうかと提案した。
その上で、即席で製作した 30 秒ほどの大野市湧水イメージ CM 映像を例として見ていただき映像を使ったイメージ戦略も効果的であることを提案した。





⑤人々は「うまい食い物」に集まる！　そのためには「食べるところ」を「食べやすく配置」する将来構想とエリアづくりが課題である。現在大野市には「食」の空間が点在している。これを集客のために食べやすく配置することを提案した。さらに、水の恩恵を伝えるためにも「湧水」をネーミングした郷土料理の提案もした。コンセプトは「水」がうまいから食い物がうまい！　これぞ大野の「食」の原点であるという打ち出し方もあるのではないか。

⑥大野市では市のシンボルデザインが出来上がったばかりである。これを市の主たるところに表示し、大野市全体のイメージシンボル化（すでに計画中だと思いますが）ということも提案させていただいた。

⑦現在、大野市の観光協会他、いろいろなところから様々なパンフレットやチラシが出ているが、観光客からみると多すぎて混乱気味かもしれないので、整理してみてはいかがだろうかという提案もさせていただいた。

⑧大野市の整備事業は本当にすごい。物産センターや湧水の名所など、きれいに整備された。ただ、申し上げづらい印象であるが、きれい過ぎて温かみが抜けてしまったような印象がある。なので、もちろん作り直すのではなく、そこにちょっとした工夫をすることで温かみを蘇らせる可能性があるということを具体的に提案した。

⑨せっかく町中に「湧水」や「湧水池」「用水路」があるのだから、大野市の伝統工芸である「竹あかり」を映し出さない手はない。水に映る明かりは人を呼ぶ。水と光のコラボレーションを今後是非とも考えて欲しいという提案をさせていただいた。

以上が、アドバイスの概要である。

●全体構想への取組状況・意向について

今回は、エコツーリズムの導入口であった。まずは、エコツーリズムについて解説し、それでもなかなか解釈が難しいので、図をもって再び解説させていただいた。2 回の解説でエコツーリズムの価値をある程度お分かりいただけたと思う。大野市の場合、まだまだこれからである。可能性は理解いただいたと思うので今後検討されていかれるのではないか。素材はたくさんある。自然遺産型ではなく、里山&城下町型のタウンエコツーリズムの成功に期待したい。エコツーリズムの導入口に立ったという意味では、長い目で、「ゆるぎない土台作り」を今後も応援させていただきたい。

●地域に対する印象、今後地域に期待すること（メッセージ）

今回大野市に伺った大きな目的は、おおのの水・湧水が「宝」になりえるか？　ということであった。前述の通り、大きな「宝」だと私は考える。水がきれい、水がうまい、水が豊富など、いいことだらけに聞こえるが、住民にお聞きすると、湿気の問題がかなり頭の痛い課題となっている。湧水池と隣接する旅館などは、エレベーターの機械部分がすぐに結露し、お困りになっていた。外から見るとわからないご苦労である。しかし、そうした問題と共存してきたのが大野市の人々である。水との付き合い方を心得ているのである。

印象的だったのが、たまたま今回の研修で配られたペットボトルの水（県のご担当が持ってきてくれたものだが）を参加者も飲んでいたのだが、研修が終わった時、数人から「この水うまくないね！」という言葉が出た。それも同時に！　さすがだと感心させられた。私には十分おいしい水であったのに、さすが名水と共に生きてこられた方々だ。それが大野の「当たり前」。その感性・感覚・味覚こそ「宝」なんです！　それに気づいていただき、是非とも大野の水を「未来への宝物」としてつなげていっていただきたい。

最後に、大野市のご担当、福井県のご担当には、視察、会議室の設営等、大変お世話になりました。ありがとうございました。

3-8. 小浜市（福井県小浜市）

(1) アドバイザー派遣申請の背景

●地域の概要

・人口　30,929 人（平成 26 年 1 月 31 日）（外国人含む）
・地勢　福井県の南西部、若狭地方の中央に位置し、京阪神・中京ともに 100km 圏内。
南は東西に走る京都府北部一帯に連なる山岳、北は内外海半島・大島半島で囲まれた小浜湾に面している。市中央は北川・南川の両河川が海岸に細長く走る肥沃な平野を貫流している。
・面積　232.87km²
・気候　概ね温和、温暖だが、日本海側気候であり、冬季は積雪がある。

●アドバイザー派遣申請の背景・これまでの取り組み

福井県では、地域の生活に密着した湧水等を「ふくいのおいしい水」として認定している。

小浜市では、地元区等が管理している 3 か所の湧水が「ふくいのおいしい水」に認定され、地元のみならず、県外住民からも愛されている。

しかし近年、季節によっては水位の低下がみられ、地下水の枯渇が心配されているが、何ら対策が取られていない。また、地域活性化の観点からも、これら湧水のさらなる活用が求められているところであるが、どのような活用ができるのか分からない現状である。

このような背景があり、地域活性化、地下水保全を図るため、アドバイザー派遣申請を実施した。

(2) アドバイザー派遣実施の概要

日　　時	平成 26 年 2 月 5 日（水）～平成 26 年 2 月 7 日（金）
場　　所	雲城水、津島名水、多賀の湧水、神宮寺、鵜の瀬、国富地区、食文化館、滝の水、八幡神社
アドバイザー	公益財団法人日本生態系協会　地域計画室長　城戸　基秀　氏
参　加　者	小浜市（環境衛生課、商工観光課）、福井県環境政策課　計 4 名
スケジュール・方法	【1 日目】 ・小浜市概要説明 【2 日目】 ・視察 雲城水、津島名水、多賀の湧水、鵜の瀬、神宮寺、食文化館、滝の水、八幡神社 【3 日目】 ・指導・助言 エコツーリズム・エコツアーとは何か、他市町事例紹介、 小浜市での湧水を活用したエコツアーの作り方

(3) アドバイスの内容

●エコツーリズムの概要について講義

・ガイダンスとルールの重要性
・他市町等の事例紹介
・地域にもたらす効果等（地域の活性化等）

●小浜市での湧水を活用したエコツーリズムの提案

・小浜市の湧水は「文化との関わり」「海辺の湧水」「飲める」等の利点
・湧水の保全、地域の誇りにつながることが大切
・他の自然、歴史文化を組み合わせて深みと広がりを持たせることが重要

(4) アドバイザー派遣実施の効果

●参加者や関係者に与えた効果

・小浜市における観光資源、環境資源の再確認効果
・環境保全担当課と観光振興担当課の連携等

●今後の期待される効果

・環境保全担当課と観光振興担当課の連携強化
・観光振興における湧水等の更なる活用

●今後の取り組み

・県立大学等と連携した地下水調査
・湧水管理者へ、エコツーリズム等による湧水活用・保全方法を紹介

(5) アドバイザー派遣を実施して（地域からの声）

●参考となった事項

・ガイダンスとルールの重要性についての講義
・他市町事例等の紹介
・「飲める湧水」の重要性、希少性について

●その他感想

「飲める湧水」の重要性、希少性に気付くことができ、小浜市内の観光資源、環境資源の再確認ができた。

(6) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

公益財団法人日本生態系協会　地域計画室長　城戸　基秀　氏

●地域におけるエコツーリズム推進の取組の現状と課題

小浜市では、エコツーリズムを意識した取組は行われていないが、ガイドとまち歩きを楽しむ「小浜ぶらり」などの歴史文化ガイドツアーが行われている。

今回の「湧水」を活かした地域活性化や地下水保全の推進などをきっかけに、エコツーリズムへの認識を高め、他の豊かな自然や歴史文化を活かした取組を進めることが望まれる。

●特に魅力を感じた地域の自然観光資源

今回は「湧水」の活用が求められていたことから湧水を中心にご案内いただいた。各家庭に湧水が自噴していたこと、海辺から 5m しか離れていない場所に湧水があること、海底からの湧水が豊かな海産物に関係している可能性があることなどが興味深かった。また、伝統的な神事として湧水を奈良東大寺の「お水取り」に送る「お水送り」があり、湧水を中心として自然・歴史・食文化に広がりを持つ点が、自然観光資源としての魅力であると考えられた。

ほかに、コウノトリの国内最後の野生繁殖地である国富地区におけるコウノトリの里づくりの取組、奈良時代に朝廷に食材を送っていた地域の食文化、城下町の風情を残す町並みなど、エコツーリズムで活用できる資源は豊富にあると感じた。

●アドバイス（講義等）の概要

・まず、エコツーリズムやエコツアーの基本的な考え方（観光振興、地域振興、資源の保全の重要性など）や、日本での取組の状況（モデル事業、エコツーリズム推進法）などについて説明した。
・つぎに、身近な自然を活かした里地里山タイプのエコツーリズムの例として、飯能市や横須賀市の取組について紹介し、特に地域振興、地域活性化の効果が大きいことや、様々な資源を工夫して、エコツアーの企画実施を行っていることを説明した。
・さらに湧水を活かしたエコツアーの例として、飯能市で行われた湧水ツアーを、環境省の作成したエコツーリズム学習 DVD「エコツーリズムを推進するために」を用いて紹介した。
・湧水を活かしたエコツーリズムは、小浜市でこれまで行ってきた城下町のまちなみや食文化を活かした観光、NHK のドラマと連携した観光等と比べて、観光収入の面では規模は小さいが、地域の人が湧水と湧水にまつわる生活文化についての認識を高めたり、まちへの誇りを醸成する地域振興・地域活性化には期待できることを説明した。
・具体的には、まず、地域住民自らが過去と現在の湧水の分布や、かつての生活での利用についてマップを作ることや、個人のお宅の湧水を見せてもらうエコツアーを試行的に実施することなどを提案した。また、湧水を活かしたエコツーリズムにおいては、自噴している湧水を保全・再生することが重要であることを説明した。

●全体構想への取組状況・意向について

小浜市では、湧水を活かした地域振興や地下水保全の推進への模索から、エコツーリズムに取組むきっかけを得た段階であり、現時点では全体構想策定の意向は持っていない。協議会の設置や、全体構想の策定に取組むまでには、地域全体でのエコツーリズムへの認識の高まりが必要と考えられる。

●地域に対する印象、今後地域に期待すること（メッセージ）

小浜市は、歴史や食文化などの観光資源が豊富で、それを活かして熱心に観光振興が行われているという印象を受けた。こうした観光に比べると、身近な自然を対象としたエコツアーでは大きな観光収入を期待するのは難しいが、深く地域を知っていただくことによる地域イメージの向上や、地域住民が地域に誇りを持つといった地域振興の面での効果が非常に大きいことから、これをきっかけにぜひ、エコツーリズムに取り組んでいただきたい。

小浜市では、現在のところ湧水の保全・活用にエコツーリズムという手法が使えないかを検討している段階であるが、どのような効果があるかは、実践してみないと実感できないので、まずは、住民による湧水文化調査（住民自らが行うことが大切です）、試行的に湧水をテーマとしたエコツアーを実施するところから始めていただきたい。

3-9. 東伊豆 ECO ツーリズム協議会（静岡県賀茂郡東伊豆町）

(1) アドバイザー派遣申請の背景

●地域の概要

人口：13,413 人（男性 6,373 人、女性 7,040 人、6,255 世帯、平成 26.1.31 現在）

地勢：東伊豆町は伊豆半島東海岸中央部に位置。東側は相模灘に面し伊豆大島、利島、新島、式根島、神津島、三宅島、御蔵島（八丈島は見えない）の伊豆七島を望み、北側は万二郎岳(1,299m）万三郎岳（1,405m）遠笠山（1,197m）箒木山(1,024m）といった標高 1,000m 級の天城連山が連なる。東側は全て海岸線となっているが平地は少なく、相模灘に流れ込む河川流域と山間部盆地に僅かに広がるのみである。町内の多くは天城連山の丘陵エリア、山岳エリアとなり、伊豆半島最高峰の天城山万三郎岳（標高 1,405m）まで海岸からの直線距離は、最短で約 6,000m で、場所によっては急峻な地形となっている。隣接する市町は伊東市、伊豆市（旧天城湯ヶ島町）、河津町。

面積：77.83km²　東西 15.04km　南北 13.78km

気候：＜平均気温＞3 月～5 月 14.2 度・6 月～8 月 24 度・9 月～11 月 19.4 度・12 月～2 月 7.1 度
年平均気温・約 16.2 度（観測地は標高 130m）
＜平均降雨量＞3 月～5 月 315.5mm・6 月～8 月 131mm・9 月～11 月 210.8mm・12 月～2 月 133.3mm
年間総雨量 2,372mm（平成 24 年観測値）

東伊豆町は東側が相模湾に面しているため北東の風が入り込みやすく、盛夏時でも極端な猛暑になることは殆どない。別荘が建ち並ぶ山間部は避暑地として利用されている。また、冬期も極端に寒くなることはないが、北東風（ならいの風）の影響と急峻な地形のために寒気と共に上昇気流が発生、海岸付近は降雨でも僅か数十メートルの標高差で雪になることは珍しくない。

地域の概要：

東伊豆町は海岸線沿いに多くの温泉が湧出し、伊東寄りから大川温泉、北川温泉、熱川温泉、片瀬温泉、白田温泉、稲取温泉の 6 エリアの温泉地を有する。湯量は豊富かつ高温で優良な泉質を誇り、観光地として発展してきたが、景気低迷に伴い観光客数は年々減少傾向にあり、平成 15 年、約 120 万人の宿泊者数は平成 24 年には約 90 万人となっている。観光業のほか農業・漁業も盛んで、みかん栽培やカーネーション栽培、金目漁、テングサ漁は産地として全国的に知られ、ブランドとして確立した稲取金目は築地市場において高値で取引されている。東伊豆町の行政区となったのは昭和 34 年、稲取町と城東村の合併からであるが、人々の生活の歴史は古く、町内各所より先土器時代から縄文、弥生時代の遺跡が確認されている。町内最古の遺跡は、現在ゴルフ場として開発された場所

から出土した約 12,000 年～13,000 年前の人々が狩猟で使用されたとされる細石器である。縄文早期（約 9,500 年～6,500 年前）の人々が集落を形成し、定住をはじめた遺跡も数カ所確認され、特に峠遺跡と名付けられた遺跡からは石器製造跡が発見され、矢じり作成の流れ作業が行われたとされている。国内では殆ど例を見ない縄文時代の石器工場跡として確認されたが、現在、遺跡は埋め戻され住宅が建設されている。東伊豆町の歴史上特筆すべきは江戸城築城の際、西国大名たちによって町内各所が築城石採石地に選定され、多くの築城石が切り出されたことである。町内各所には石丁場と言われる築城石採石跡が確認されているが、多くが私有地となっているため、約 400 年前の貴重な文化財は殆ど保全されることが無く、立ち入りも容易に可能な状況となっている。また、町内至る所に築城石用に整形された巨石が点在、今年に入り、築城石積載の際、櫓を建てた柱を支えるため円形状にえぐられた巨石が発見されている。

●アドバイザー派遣申請の背景・これまでの取り組み

静岡県東伊豆町の観光エリアは温泉地として発展してきた。大型の観光施設が立ち並ぶ環境下に於いて観光客の滞在時間の多くが旅館・ホテル館内に費やされているのが現状である。天城山麓を有する山間部の緑豊かな自然を楽しむレジャーや相模灘を目前にする海洋レジャーの振興、歴史上重要な資産の保全が立ち遅れているため、エコツーリズム実践の自然環境や歴史上重要な資産が整っているにも関わらず、エコツーリズムや歴史資産の保全への意識が低い地域住民や観光関係の事業者・従事者、行政の意識改革が必要である。東伊豆 ECO ツーリズム協議会では同エリアでのガイド育成、ガイド認定制度等によりグリーンツーリズム、ブルーツーリズム、町歩きガイドを立案し、体験旅行・教育旅行のツアー商品とすることを大きな目標として地域住民、観光関係の事業者・従事者、行政にエコツーリズムによる観光振興の重要性を認識させることが課題と考えている。

これまでの取り組みは以下のとおりである。

・体験型教育旅行プラン作成
・観光ワークショップ開催
・東伊豆町古道調査
・東伊豆町築城石調査
・伊豆半島ジオパーク東伊豆エリア調査
・伊豆八十八ヶ所霊場一部訪問

(2) アドバイザー派遣実施の概要

日　　時	平成 25 年 11 月 20 日（水）～平成 25 年 11 月 22 日（金） 平成 26 年 2 月 5 日（水）～平成 26 年 2 月 7 日（金）
場　　所	■11 月実施 東伊豆町役場、東伊豆町観光協会、稲取スコリア丘の断面と火山弾、稲取細野高原、三筋山山頂、片瀬海岸変色海域、穴切海岸、箒木山山頂、奈良本けやき公園、大川エリア江戸城築城石石丁場 ■2 月実施 片瀬エリア～奈良本エリア古道、奈良本エリア～大川エリア古道、 稲取市街地江戸城築城石各所及び古道、丸鉄園・穴ノ沢遺跡、北川エリアジオサイト、 北川海岸沿い築城石～北川鹿嶋神社～伊豆急行北川駅前築城石石丁場視察、 大川三島神社～椿園付近視察
アドバイザー	アイ・エス・ケー合同会社　代表　渡邊　法子　氏
参　加　者	■11 月実施 ＜視察参加者＞ 東伊豆 ECO ツーリズム協議会会員　計 9 名 ＜講演会参加者＞ 東伊豆 ECO ツーリズム協議会会員、伊豆町議、静岡県農林技術研究所、熱川温泉旅館組合事務局、東伊豆町有線テレビ放送、熱川プリンスホテル、丸鉄園、熱川温泉観光協会事務局他　計 34 名 ■2 月実施 ＜視察参加者＞ 東伊豆 ECO ツーリズム協議会会員、東伊豆町文化財保護審議会委員　計 8 名
スケジュール・方法	■11 月実施 【1 日目】 ・懇談（副町長、企画調整課、東伊豆町観光協会事務局長） ・視察 稲取スコリア丘火山弾、細野高原、三筋山山頂登頂、片瀬海岸変色海域、 穴切海岸溶岩流浸食海岸 ・勉強会 地域住民に対するエコツーリズムの意識啓発、ガイドの育成、役割、認定制度について 【2 日目】 ・視察 箒木山登頂、けやき公園（地元食材による昼食）、陶芸体験、 東伊豆大川エリア江戸城築城石石丁場 ・講演会「観光における東伊豆エリアの特性（資源・人）と可能性について」 【3 日目】 ・勉強会 視察による地域資源の発見・発掘、環境教育の実施方法、 エコツーリズムに関する団体の NPO 法人化の課題と事業事例 ■2 月実施 【1 日目】 ・視察 古道（片瀬エリア～奈良本エリア）、古道（奈良本エリア～大川エリア） ・勉強会 民間組織（NPO 法人）と行政との役割分担、他エリアとの連携 【2 日目】 ・視察 稲取エリア（東伊豆町文化協会長によるガイド）、 丸鉄園・穴ノ沢遺跡出土品見学、伊豆北川エリアジオサイト、

	・勉強会 NPO 法人化に伴うエコツアーの事業化、エコツアーの作成・情報発信、 インバウンドツアーの受け入れについて 【3 日目】 ・勉強会 東伊豆町のエコツアー受け入れに関する課題点抽出、課題に対する解決策、策定 ・視察 伊豆北川鹿嶋神社～伊豆急行北川駅前築城石、伊豆大川三島神社～椿園付近

(3) アドバイスの内容

● 11 月実施

＜各視察について＞

・東伊豆役場、東伊豆町観光協会において

エコツーリズム推進アドバイザー・渡邊法子氏は元稲取温泉観光協会事務局長としてご活躍されていた。今回、東伊豆 ECO ツーリズム協議会へのアドバイスをいただけるということで東伊豆町役場にて副町長、企画調整課、東伊豆町観光協会事務局長と懇談いただきエコツーリズムへの取り組み、行政との関わり、協働についてお話しいただいた。

東伊豆役場、副町長と渡邊氏

東伊豆町観光協会事務局長と渡邊氏

・稲取スコリア丘火山弾視察

伊豆半島ジオパークのジオサイトとして静岡県立稲取高校より車で北に約 3 分の位置、かつて採石場として利用されていた崖の後に 1 万 9 千年前に噴火した稲取火山列のスコリア丘を見ることが出来る。現在、貴重なスコリア丘は保全されておらず、誰でも立ち入ることが出来る状況となっている。

＜課題＞

①稲取スコリア丘はジオサイトとしての保全・保護が必要。

②スコリア丘へのアクセスが容易なために火山弾がマニアによって持ち去られることが考えられる。

稲取スコリア丘

1 万 9 千年前の噴火で吹き飛ばされた火山弾

・細野高原、三筋山山頂登頂

稲取細野高原は三筋山（標高 821m）の山麓に広がる台地で、秋には東京ドーム 26 個分のススキ野原が広がる。台地の一部は水はけの悪い土石流に覆われているため、窪地は湿原となり中山第一湿原、中山第二湿原、芝原湿原、桃野湿原を形成し、貴重な動植物、鳥類の生息エリアとなっている。

三筋山山頂からは天城連山、伊豆七島が浮かぶ相模灘のパノラマが広がり、天城ハイキングの起点のひとつである。

＜課題＞

①細野高原に関わる各団体と協力してガイドツアーを充実させ、体験旅行、教育旅行、着地型観光の提案を実施していく。

②景観ガイドの養成は比較的容易だが、湿原ガイド養成には 3 年以上かかるため適切なガイド養成講座、テキストの作成が必要。

③細野高原周辺を熟知している地元の人のガイドが必要。

東京ドーム 26 個分のススキ野原

三筋山中腹展望駐車場での景観ガイド

・片瀬海岸変色海域視察、穴切海岸溶岩流浸食海岸視察

片瀬温泉海岸変色海域は、恒常的に変色する海域に気が付いた東伊豆 ECO ツーリズム協議会事務局・杉本が日頃興味がある海底火山を調査する海上保安庁に情報提供したところ、過去数年間の航空写真の分析により恒常的変色域であると判断され、火山噴火予知連絡会資料に掲出され、観測エリアとなったジオサイトである。

穴切海岸は伊豆熱川温泉のホテル街より徒歩約 10 分の伊東寄りに位置し、天城山から流れ出た溶岩流が縞模様を形作った流離を見ることが出来、入り江の崖には波によって浸食を受けた海食洞も観察できる。

＜課題＞
①ストーリーを語ることが出来るガイドの育成と整備が必要。
②ガイドブック等制作時には MAP 内にジオポイントをプロットして旅行者に案内していくことが重要。
③その他、ジオポイントはエリアに点在しているので調査していく必要がある。

テレビ放映された片瀬海岸変色海域

穴切海岸の流離と海食洞

・箒木山登頂

天城連山のひとつ箒木山（ほうきぎやま）の標高は 1023m。万二郎岳、万三郎岳、白田峠を縦走するコースに比べると険しい箇所も少なく、比較的容易にトライすることが出来る山のひとつである。山頂部は草原が広がる広大なパノラマで、気象条件によっては相模灘に浮かぶ伊豆七島の他、三浦半島、房総半島を望み、好条件が重なると横浜ランドマークタワーや東京スカイツリーを見ることが出来る。検証はしていないが東京スカイツリーを肉眼で見ることが出来る最南端、最西端かもしれない。

温暖な気候の東伊豆エリアでは秋の紅葉を楽しむことはなかなか出来ないが、標高の高い箒木山ほか天城連山では、爽快な登山と共に鮮やかな紅葉を楽しむことも出来る。

＜課題＞
①着地型観光として「ガイドと歩く箒木山」は魅力ある観光資源だが、コース管理者の設定とコース整備を進める必要がある。
②コース周辺にトイレがないためトイレ整備が問題となる。
③保全については地権者を含めて検討する必要がある。

箒木山山頂から伊東方面を望む、国内最大級のスコリア火山大室山が眼下に見える

箒木山山頂から下田方面を望む

伊豆山間部の紅葉

・奈良本けやき公園（地元食材による昼食）、陶芸教室

東伊豆町奈良本にある里山公園。ホタルイベントや里の朝市、フリーマーケット、陶芸教室などが行われている。

＜課題＞

①地元食材のお弁当は食材説明を聞かせることで魅力アップ、箒木山ハイキングとセットでセット販売可能。

②陶芸の他、絵手紙制作など里山体験公園として価値が高い。

地元食材の説明

熱川ポークのコロッケ、クレソンは公園内採取、

柿のドレッシング

陶芸教室

大きなけやきが植栽された公園

・東伊豆大川エリア江戸城築城石石丁場視察

東伊豆町の海岸線には、江戸城築城石の調達を命じられた西国大名達が、巨石を切り出した石丁場が大川から稲取まで点在している。中でも大川エリアの谷戸山は東海岸石丁場では最大規模、分け入れば分け入る程、数多く出現する築城石群に感動するであろう。中には約 400 年前の石工が刻んだ刻印があり、比較的見つけやすい刻印石は出雲国松江藩主堀尾山城守が切り出したと言われる分銅紋が記された巨石である。無数と言っても過言ではない築城石群であるが、現在、行政と地権者との関係があまり芳しくなく、放置状態となり約 400 年前の重要な文化財は何も保全されない状態が続いている。

＜課題＞

①保全については法律に基づいて国、地方自治体、地権者を含めた調整が必要。

②町条例を制定して保全する方法も考慮すべき。

③石丁場へのアクセスが現在全くのフリー状態、早急に管理方法を考慮すべき。

④観光関連従事者、経営者、町職員が築城石に関して知らないケースがある。

・エコツーリズム推進アドバイザー渡邊法子氏講演会

アドバイザー渡邊法子氏によって講演会を開催いただいた。

講演内容「観光における東伊豆エリアの特性（資源・人）と可能性について」

①エコツーリズムって？

②新しいツーリズム

③エコツーリズムによる効果

④事例

・京都府京丹後市

・東伊豆町稲取温泉

⑤どうすればエコツーリズムは売れるのか？

⑥東伊豆エリアの新たな可能性

上記内容で解りやすく解説・講演頂いた。渡邊氏は元稲取温泉観光協会事務局長をされており、東伊豆町の特性を熟知されているため的確に問題点・課題点をピックアップ頂き、エコツーリズムの解説、京丹後市の事例と併せて今後、具体的な行動に結びつく講演会となった。

・勉強会にて

○各視察箇所課題抽出

課題点については各視察内容に記載。

○東伊豆 ECO ツーリズム協議会の NPO 法人化に伴うメリットとデメリット

NPO 法人にこだわらず他組織形態（合同会社、社団法人等）を比較検討して、これからの事業形態に合わせた組織作りが必要。組織作りと平行して行政や他団体との関わりを持っていくことが重要になる。

○エコツーリズムの全体構想を策定していく

全体構想策定後は、エコツーリズム推進法に基づき、地方自治体から関係省庁に書類による告知をしなければならない。今回、環境省のエコツーリズム推進アドバイザー派遣事業に採択されたことは、東伊豆 ECO ツーリズム協議会が国からエコツーリズムを推進する協議会として認められたことであり、法令に基づいて活動する義務がある。

○ガイド育成を実施すべき

先ず講師を誰にするか決める。Output を設定して具体的なスケジュールをプランして実行していく。稲取の例では回覧による全戸配布のチラシを作成、参加者募集を行った。

● 2月実施

＜各視察について＞

・古道視察（片瀬～大川）

伊豆東海岸には下田から熱海に至るまで「東浦路」と呼ばれる古道が通っている。この古道は時代が遡ること約800年の平安時代、源頼朝が往来したとも伝えられ、その後、江戸城築城石のため西国大名の命によって多くの石工が築城石を切り出し、老中松平定信は伊豆巡視のため、伊能忠敬は伊豆測量に、吉田松陰は下田に着港した黒船に乗ろうと奔走したのである。近年になって伊豆東海岸は国道が通り、鉄道が敷設され人々の往来は変化してきたが、伊豆古道「東浦路」は現在でも姿を変えて現存し、子供達の声が響く大切な生活の道となっている。東伊豆ECO ツーリズム協議会では伊豆古道にスポットを当て、道祖神や道標、供養塔が残る古道をエコツーリズムのポイントとしてアドバイザーの渡邊氏に片瀬エリア～大川エリアの東伊豆古道を視察して頂いた。

・海防の松（はりつけの松）

江戸時代中期、海防問題がにわかに高まり寛永五年(1793)幕府は沿岸諸藩に海防を命じると共に老中松平定信は自ら伊豆の海岸を巡視した。定信の一行200名は三島から天城を越え3月14日片瀬に宿泊した。この巡視の結果、伊豆相模の海岸に海防のための松を植えるよう指示した。これらは海上から陸の村々や防御の様子が見えないようにするためのもので当時で 40 年生くらいのかなり大きな松を植えたようである。今に残る木の年輪は250年前後を数えることが出来る。片瀬、白田付近の海岸には明治初期に数百本の松があったと言われているが片瀬区の手厚い保護にも関わらず今は数本残るだけである。尚、この松の別名は「はりつけの松」と云われた云い伝えがある。叶わぬ恋のためお寺に火を放った男女がはりつけにされたという云い伝えがある。（案内看板より）

＜課題＞

①東浦路の古道ツーリズムは様々な見学ポイントがあり、商品として充分成り立つ素材を持っている。複数のコース設定、テーマに沿ったコース設定で PR すべき。

②ウォーキングしながら各ポイントを見学するのもよいが、ガイドツアーとすることで更に魅力あるコース作りが可能となる。ガイド養成がキーポイント。

昭和天皇ご成婚記念に建てられた道標

手に索を持つ道祖神

文久二年八月十八日と刻まれた供養塔

左甚五郎作と伝えられる山門がある龍淵院

峠に佇む下半身だけのお地蔵さん

熱川小学校裏の馬頭観音群

東浦路から絶景を望む

白田地区の大洞庵石塔群

白田地区の道祖神

・稲取市街地江戸城築城石各所及び古道

東伊豆町の南端に位置する稲取にも多くの築城石が現存し、町内の民家脇には運び出された「角石（すみいし）」（築城の際、石垣の角に使用される石）が残っている。民家の石垣の一部にも築城石が使われているケースがあり、約 400 年前の石工達の息吹が今も聞こえる町といえる。伊豆急行線伊豆稲取駅前には築城石に関する展示があり、築城石に関する概要を気軽に学ぶことが出来る。東伊豆町の海岸線付近の築城石に関する調査は未だ実施されておらず、今年に入り、稲取地区の海岸にて築城石積載の際、櫓を支えたと思われる円形にえぐられた巨石が発見された。傍らには波によって浸食された築城石が転がっているのが確認出来る。（築城石は運搬の際、運搬設備から落としてしまうと落城に繋がるとして運び出されることはなかった。）

＜課題＞

①東伊豆町の築城石群は国内トップクラスと言われているが保全されていない。さらなる調査と保全活動が進むよう東伊豆 ECO ツーリズム協議会がイニシアチブを取ることも考慮すべき。

②稲取から大川に至るまで古道と築城石の素晴らしいコースが設定可能だが、ガイドツアーの実施には、やはりガイド養成が必要となる。知識者、学識者による講義や勉強会を実施しなくてはならない。

伊豆急行伊豆稲取駅前の展示

東伊豆町文化協会長、岡田善十郎さんの説明

発見された櫓を支えた穴

海岸に放置された築城石（長さ約 2m）

・丸鉄園　穴ノ沢遺跡出土品見学

東伊豆町では先土器時代の石器から縄文・弥生時代の土器や古墳が発見されている。みかん狩りやマスの活け堀を運営する丸鉄園では、活け堀を造成する際、多くの土器、食器が発掘され、時代考証は縄文初期から江戸時代と幅広い時代のモノが混在していた。また、直径約 30cm ある黒曜石の塊や矢じりも出土していることから縄文人の生活が営まれていたことを裏付けている。

＜課題＞

①貴重な出土品ながら保存がしっかりされていない状況、保全・保管方法に一考有り。

②穴ノ沢遺跡付近は付近の峠遺跡と併せて大規模な遺跡群の存在が予見できるが、調査については行政の思惑があり現在手つかずの状況となっている。

石器と土器、黒曜石の塊

・伊豆北川エリアジオサイト視察

伊豆北川エリアの海岸には溶岩が流れて出来た柱状節理を観測する事ができる。視察当日、ガイド役のメンバーが都合により同行できなくなり、ジオサイトと思われる箇所を視察した。視察後、連絡がついたガイド役に確認したところ数十年前の焼き場の跡で、「地元の人はあまり行かないよ」とのことであった。

＜課題＞

①前出した穴切海岸も同様であるが、人気のない入り江は焼き場として利用されていたとのこと。ジオサイトとし

て溶岩流などの観測が出来るポイントではあるが、裏話があることもガイドとして知っておくべき。
②ジオサイトは足場が悪いポイントが多いため、ツアーの際の安全確保が大切。

※下記視察内容については、前述した築城石、古道の内容と重複のため割愛。
・伊豆北川鹿嶋神社～伊豆急行北川駅前築城石視察
・伊豆大川三島神社～椿園付近視察

(4) アドバイザー派遣実施の効果

●参加者や関係者に与えた効果

今回、視察並びにアドバイザーの同行を終えて、今まで知らなかった東伊豆町の歴史・文化について再認識することが出来た。特に築城石に関しては東伊豆町というより国内最大級の文化財であるにも関わらず、現在ほとんど保全活動がされず、誰でもアクセスフリーな放置状態であることが危惧される。また築城石・古道・遺跡に関する記録が東伊豆町には殆ど残っていないという事実が判明した。

これら貴重な遺跡、文化財の保全について町民や観光従事者や観光事業者が、行政に対して積極的に働きかけていかなくてはならないことを実感した次第である。今回の派遣事業への申し込み当初、東伊豆町の環境保全については特にアドバイスを求めていなかった。NPO 法人化にあたっての組織作りや商品作り、他団体、行政との関わりについてのアドバイスをお願いしていたが、もっと大事なこととして、我が町に環境保全という大きな問題があるのだと参加メンバーは痛切に感じたことと思われる。

伊豆の傍ら、人口もさほど多くない町であるが、築城石だけをとっても石工たちは国内至る所から派遣され、採石をしていた町であると認識し、国内各地と関わりを持っていたのだと改めて認識した。

●今後の期待される効果

現在、東伊豆 ECO ツーリズム協議会を構成するメンバーはペンションオーナー、旅館経営者、ハーブガーデンオーナー、広告出版関連、ケーブルテレビ関連ほかとなっている。民間主導で協議会を運営しているが、行政はエコツーリズムに対し、認識があまりなく、エコツーリズム推進法に基づく全体構想策定についても協働姿勢はない。「書類が出来たら持ってきなさい。」という姿勢であるが、地元ケーブルテレビの放映やメンバーによる教育委員会への働きかけで少しずつ理解されはじめている。

今後、町民を対象にした「大人のふるさと学級」（小学生対象のふるさと学級は教育委員会指導で実施）を展開し、町民に対し東伊豆町の貴重な文化財、史跡、古道を認識させ、町の素材がエコツーリズムに繋がり、町の発展のひとつであることを提示していく予定である。

●今後の取り組み

今後の取り組みは、

①「大人のふるさと学級」をテーマ毎に分けて 2014 年 4 月より開講、毎月開催とする。

＜大人のふるさと学級の開催主旨＞

・地元町民へのエコツーリズムへの理解度向上
・地元の文化、歴史、ジオの再認識
・エコツアーガイドの養成

②「大人のふるさと学級」の企画と同時進行で商品開発を進め、エコツーのメニュー作りに着手する予定。

③具体的に NPO 法人化を目指し 3 月下旬に監督官庁に書類を提出する予定。

④エコツアー事業の認識度向上→会員メリットの策定→会員数アップ

(5) アドバイザー派遣を実施して（地域からの声）

●参考となった事項

・当初 NPO 法人化を目指して活動していた東伊豆 ECO ツーリズム協議会であるが、エコツーリズムを推進するにあたり組織のあり方をアドバイス頂き再考することで、組織形態による事業方法を認識でき、改めて NPO 法人として活動するメリットが理解できた。
・アドバイスを受けることで商品として地域を見ることが出来るようになった。
・他エリアの状況を伺うことで東伊豆町の町内に資料が少ないという事実、学芸員がいないという現状を認識すると共に資料の必要性、学芸員の存在の重要性を認識した。

(6) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

アイ・エス・ケー合同会社　代表　渡邊　法子　氏

●地域におけるエコツーリズム推進の取組の現状と課題

平成 25 年に発足した東伊豆町 ECO ツーリズム協議会は民間が主体で設立されました。観光が主要産業の東伊豆町ですがこれまで観光については海岸線の温泉場が中心でした。東伊豆町には海だけでなく山の自然資源や築城石丁場などの歴史文化資源も豊富であり、活かしきれていない魅力的な自然観光資源をエコツーリズムの推進によって活かそうとする取り組みが始まっています。

民間主導でエコツーリズムの推進が始まりましたが、行政との協働体制や今後の推進方法について課題を生じている状況です。

課題としては以下の点があげられます。

１、山の景観や生息する動植物等の自然環境資源の活用方法と商品化
２、築城石をテーマに築城石丁場の保全と地域振興をおこなう推進方法
３、古道など、その他の地域資源の発掘および活用方法と商品化
４、エコツーリズム（着地型）商品の企画、販売の仕組み作り
５、効果的な情報発信の仕組み作り
６、人材育成の仕組み作り
７、事業の継続化
８、行政との連携、協働

●特に魅力を感じた地域の自然観光資源

東伊豆町は伊豆半島の東部に位置し海と山に囲まれ魅力的な自然観光資源が豊富な地域です。

特に魅力を感じた自然観光資源は以下のとおりです。

１．古道・・・・・・・・海沿いから山へ向かう石垣や坂道の多い古道は魅力的。
２．築城石丁場・・・・・貴重な資源。エコツーリズムとしての活用が望まれる。
３．箒木山、三筋山・・・・山から海を見る四季折々美しい景観、伊豆七島が望める。
４．シラヌ田の池・・・・蛍、モリアオガエル、動植物の観察に適している。
５．石仏・供養塔・・・・・古道の道端の石仏。石工が多く存在した町としての資源。
６．縄文時代の古墳・・・7000 年前の遺跡から黒曜石など貴重な出土品がある。
７．漁港・・・・・・・・漁師まちの光景、地引網の体験。
８．海岸線・・・・・・・ジオパークとして貴重な地質が点在する。

●アドバイス（講義等）の概要

１、人材育成事業について
２、地域の人によるエコツアーの実施環境づくり
　－１地域で取り組む理解と協力
　　・地域全体で事業の継続化を
　　・担い手づくりと組織化
３、エコツーリズム商品を流通させるためのツアーデスクの設置

・事例紹介
・事業の継続化
４、エコツアーメニューの種類と特徴
５、メニュー別組織体制の強化
６、持続可能な組織体制の構築　等

民間主導で始まったエコツーリズムの推進において東伊豆町行政との連携・協働は不可欠であることをお伝えしました。まずは人材育成事業を東伊豆町行政と協働体制に運べるようアドバイスし、また組織を継続するにあたり事業をどのように組み立て、財源をどのように確保していくかという課題についてアドバイスいたしました。また商品化は流通を念頭に置き観光地であるというマーケットを活かして設定するようアドバイスしました。

●全体構想への取組状況・意向について

民間主導で立ち上がった組織の東伊豆町 ECO ツーリズム協議会として、「築城石」の石切丁場など地権者との話し合いや保全が必要不可欠であるため、行政との協働体制により、基本構想の策定を推進していくことが必要であると見受けられます。

これまで保護措置が講じられていなかった「築城石」の資源について保全しながら活用できるよう、東伊豆町におけるエコツーリズム推進全体構想は、策定をしていくべきものと考えます。

●地域に対する印象、今後地域に期待すること（メッセージ）

東伊豆町は伊豆半島の海と山が共存しジオパークとしての地質をはじめ自然観光資源に非常に恵まれている地域です。縄文時代から人々が暮らし、江戸時代には築城石を切り出し運んできたことを、よくうかがい知ることができる素晴らしい文化資源が点在している地域でもあります。地権者との調整が難しい部分もあり、保護への配慮がまずは課題ですが、適切な利用の方法を模索し定めながら推進できますよう、東伊豆町行政と地域全体で取り組む事が大切かと思います。地域内での理解を深め、次世代に郷土愛を育み、担い手を育成するためにも、行政と協働して人づくり事業から着手し、さらに地域の魅力を活かしたエコツーリズム商品化をめざして事業が継続できるよう推進して頂きたいと思います。

3-10. 大井川流域振興連絡会（静岡県大井川流域）

(1) アドバイザー派遣申請の背景

●地域の概要

当連絡会の名称ともなっている「大井川」は、静岡県、長野県、山梨県の 3 県境からはじまり、静岡県中部を南北に流れ、駿河湾に注いでいる延長 168km、流域面積 1,280km² 一級河川である。上流域には南アルプス国立公園、奥大井県立自然公園等が広がり、豊かな自然環境や深い渓谷美を有する河川景観に恵まれている。本研修に参加したのは、連絡会委員である静岡市、島田市、川根本町の 3 市町のメンバーで、各地域の概要は以下のとおり。

1. 静岡市（井川地区）
   静岡駅から約 60km 北に離れた、人口 577 人（平成 25 年 12 月末現在）、面積 498.9 km² の自然豊かな山間地域で、南アルプスの麓として親しまれている。
2. 島田市（川根地区）
   島田駅から約 17km 北部に位置し、人口 5,397 人（平成 25 年 12 月末現在）、面積 120.48 km²、中央を大井川が蛇行し、その支流の中小河川がこれに注ぎ、道路や人家等が河川に沿って開けており、大小 40 の集落が点在している。
3. 川根本町
   大井川に沿った東西約 23km、南北約 40km の南北に細長い形で、人口 7,865 人（平成 26 年 1 月 1 日現在）面積は 496.72km²で、このうちの約 90%を森林が占めている。

●アドバイザー派遣申請の背景・これまでの取り組み

「大井川流域振興連絡会」は、静岡県中部地域を流れる大井川流域における連携・協力体制の強化を図り、諸施策の推進を目的に、流域の市町等（静岡市、島田市、吉田町、川根本町、大井川鐵道㈱）で組織された団体である。当連絡会では、流域活性化施策の 1 つとしてエコツーリズム推進活動支援事業を実施し、地域活性化に寄与する地域団体への支援活動を行っている。

現在、大井川流域では、「南アルプス・井川エコツーリズム推進協議会（静岡市井川地区）」、「地域資源を生かしたツーリズム推進会議（島田市）」、「川根本町エコツーリズムネットワーク（川根本町）」の 3 団体が活動しており、交流人口の拡大等により地域活性化に貢献している。各団体は、中山間地域が主な活動地域である点は共通しているが、各地域の伝統、文化及び地理的条件やそれらを活用した体験メニュー、組織形態等の点において、相違点が

あるほか、各活動地域が遠隔地であることから、団体同士の連携も十分に図られていないのが現状である。

また、いずれの団体も過疎化、高齢化が進んでいる中山間地域で活動していることから、人材の確保や財源不足等、活動を実施していくにあたり団体間で組織運営上の課題を抱えている。

こうした経緯から、アドバイザー派遣制度を活用させていただき、①各団体が共通して抱える諸問題解決に向けた糸口を見つけること、②大井川流域の各団体が参加することにより、団体同士の交流を促進し、流域全体における広域連携を考える機会とすること。これら 2 つ目的を達成したいと考えた。

(2) アドバイザー派遣実施の概要

日　　時	平成 26 年 1 月 18 日（土）～平成 26 年 1 月 19 日（日）
場　　所	静岡県島田市川根町（島田市山村都市交流センターささま）、静岡県川根本町地名
アドバイザー	NPO 法人信越トレイルクラブ　事務局長、一般社団法人信州いいやま観光局　事務局次長 木村　宏　氏
参　加　者	南アルプス・井川エコツーリズム推進協議会、静岡市清流の都創造課、地域資源を生かしたツーリズム推進会議（島田市山村都市交流センターささま、川根温泉ふれあいの泉、NPO 法人まちづくり川根の会）、島田市政策推進課、川根本町エコツーリズムネットワーク、川根本町商工観光課 計 29 名
スケジュール・方法	川根本町エコツーリズムネットワークが提供している体験プログラム等の現地視察を行いながら、今後の地域資源の活用のあり方や、人材育成等の組織運営手法について助言をいただく。また、信越トレイルの事例紹介や地元関係者との意見交換等を実施し、大井川流域におけるエコツーリズムを通じた広域連携の推進についても助言をいただく。 【1 日目】 ・説明会（島田市山村都市交流センターささま） ・川根本町エコツーリズムネットワーク体験プログラム等視察 ・講演・意見交換会（島田市山村都市交流センターささま） 【2 日目】 ・講演・意見交換会 ・大井川流域視察

(3) アドバイスの内容

●1 日目

①川根本町エコツーリズムネットワーク体験プログラム等視察

川根本町地名における「山の田んぼの米作り体験」メニュー及び「サンゴーカントリーともしび」における活動状況の紹介

②講演・意見交換会：テーマ「エコツーリズムのベースづくりについて」

なべくら高原「森の家」設立までの経緯や、ニューツーリズム体験メニュー提供開始までの過程の紹介を皮切りに、メニュー開発に係る注意点（この体験メニューで何を訴えたいか等）や地域資源の保全活動及び景観作りの大切さを説明。その他、関係者にニューツーリズム活動を広めていく方法や、保全活動自体が体験メニュー化した事例を紹介。飯山市において現在計画中の森林セラピーも紹介していただいた。

参加者からは、保全活動や再生事業のメニュー化や、景観条例の有無等の質問があった。

●2 日目

①講演・意見交換会：テーマ「エコツーリズムをベースにした広域観光の展開」

信越トレイルという里山を巡る全長 80km のロングトレイルの成立ちや事業概要について紹介していただいた。信越トレイル成立までには、米アパラチアントレイル視察（米国における官民協働のあり方や、ボランティアの役割及び明確な管理規格の制定を学習）を実施したことや、関田トレイル協定の締結後のルート整備におけるボランティアの活躍があったことを紹介。市や県の垣根を越えた連携を組立てるためには、各主体の役割の明確化が重要である。また、継続的に実施しているルートの保全活動の重要性や、信越トレイルの理念等の形成における加藤則芳氏の役割を説明された。

最後に、信越トレイルクラブの情報発信について紹介され、講演は終了した。

参加者からは、トレイルコースの管理手法（トイレ等）や、参加者の体力レベルの把握及び募集における注意事項等について質問があった。

田んぼ

ともしび

研修

トンネル

(4) アドバイザー派遣実施の効果

●参加者や関係者に与えた効果

今回の研修は、大井川流域で活動している 3 団体が抱える運営上の諸課題に係る解決策を模索することに加え、団体同士の交流促進を通じた各地域活動の活性化を図ること、そして大井川を 1 つの軸として各団体が連携し、広域的エコツーリズムの推進を考えるきっかけ作りとすることを目的に取組んだ。

団体が抱える諸問題については、木村先生から、信越トレイルや信州いいやま観光局における組織運営手法を御

紹介いただいたことにより、今後の体験メニューづくりや情報発信の方法について学ぶとともに、エコツーリズム等の活動においては、ガイドだけが頑張っても成立するものではなく、地域の人達の意識を醸成することが不可欠であることを認識した。

また、広域連携については、講演を通じた意見交換や各団体による各々の取組み内容の紹介を実施することにより、各団体メンバー同士の交流を深めることができた。木村先生からも、大井川流域における団体間交流や連携について、「大井川を軸とすることもできれば、大井川鐵道を軸とすることもできる。」との御意見をいただいたことから、地域の枠を越えた連携が十分実現可能であると共通認識を持つことができた。

●今後の期待される効果

各団体の運営においては、今回の研修で学習したメニュー開発や情報発信の手法、各活動地域で意識作り等を踏まえた活動の推進が期待される。また、広域連携の点では、各団体メンバーの交流が促進されたこと、木村先生の講演を通じて大井川流域における広域連携が十分可能であるとの共通認識を持つことができたこと等から、今後は、具体的な動きとして表れることが期待される。

●今後の取り組み

先進地における取組みを学んだことを、各地域における活動に反映し、運営基盤の強化や体験メニュー等を考案していくことにより、地域活性化を図っていきたい。また、地域関係団体や NPO 法人、行政機関が参加したこの機会を活かし、連絡調整をはじめとした団体間連携をより促進させ、大井川流域を舞台としたエコツーリズムにおける広域連携の促進や、地域振興を考えていきたい。

(5) アドバイザー派遣を実施して（地域からの声）

●参考となった事項

・エコツーリズム活動の推進は、ガイドをはじめとした活動団体の構成員の働きのみで成立するものではなく、母体となる地域全体の理解や協力が不可欠であるということ。地域が「こういう町（村）にしていきたい」というビジョンを共有化し、独自のカラーを打ち出していくことと、顧客が求める地域像とのマッチングを意識していくことが、魅力ある地域を作っていく上で大切。

・体験メニューの開発にあたっては、労力と対価のバランスを考えるとともに、自分達が何を訴えたいか、リピートしてもらうにはどうすればよいかという視点を盛り込むと良い。

・地域資源の活用において、荒廃した田畑や建築物の再生という手法もある。（ただし、そこには、参加者が「加勢したい」と思うインセンティブが必要。）

●その他感想

今回の研修を通じて、一番印象強かった話が、大きく 2 つある。

1 つめは、廃寺や里山の再生事業で、当事例は、体験メニュー自体が非常にユニークで、メディアに取り上げられたことにより、市外の人々の注目を集め、地域の問題が認知され、解決に至ったという点で画期的だと思った。地元調整の難しさや、地域に存在する問題と解決策の両方を明確化し、人々が「参加したい」と感じる仕立てにする過程が肝要ではあるが、地域が抱える問題の新しい解決方法として、エコツーリズムが活用できる可能性が見えた。また、こうした活動の中で、地域住民がエコツーリズムへ参加するきっかけ作りとなった点も大きい。地元とその他の地域の交流を促進していく土壌を形成するためにも、魅力的である。

2つめが広域連携の考え方で、信越トレイルにおいては、各主体の管理区域が明確化され、観光協会や自治体等で調整が図られているとともに、自然観察調査の実施やボランティアによる活動等、継続的に管理するスキームが確立されているのが素晴らしいと思った。加えて、情報を一元化することにより、顧客が現ポイントから次ポイントへ進む（地域に遊びに来てくれる）誘いを組立てている点も、広域連携をより有機的、実用的なものにしていると感じた。大井川における広域連携にあたっても、こうした管理手法や情報発信の考え方を取り入れてみたいと思う。

(6) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

NPO 法人信越トレイルクラブ　事務局長、

一般社団法人信州いいやま観光局　事務局次長　木村　宏　氏

●地域におけるエコツーリズム推進の取組の現状と課題

大井川流域の 4 市町と大井川鐵道(株)によるエコツーリズムの推進状況は、特に上流域のエリアにおいては自然資源を生かしたアクティビティーの提供やガイドによるツアーなどが実施され、河口域の吉田、島田のエリアでは、大井川活用の歴史や文化遺産などの資源を生かした観光客の受入をおこなっています。これらを結ぶ重要な役割を果たしているのが大井川鐵道であり、またその成り立ちをさかのぼれば、電源開発の歴史をひもとくことができます。大井川鐵道が果たす役割は大きく、大井川流域を旅するものにとっての魅力のひとつになっています。その要因は蒸気機関車の動体保存であり、急勾配を上るアプト式鉄道の運行です。また旧型車両の電車の運行もマニアのあこがれでもあります。モータリゼーションがすすむなかではあるものの、その経営努力の成果としては全国的な知名度を誇り支えられているところでもあります。これらの資源を生かし、また温泉施設も流域に点在することもあり、温泉宿泊を伴う旅行客の入り込みが多いエリアではありますが、エコツーリズムの視点からすると、これからその仕組みを作っていく地域ではないでしょうか。

●特に魅力を感じた地域の自然観光資源

南アルプスに源を発する大井川の川上から川下までの区間が連携して事業を推進することは、人々の生活と重要に関わってきた自然との共生や、農業用水の確保による農業政策の歴史、地域の産業の発展など、上下流のつながりを伝えるのに大事な意味があるのではないでしょうか。また、お茶やミカンをはじめとした柑橘類の生産地でもあり、日本人にはなじみ深い 2 つの生産物を持っていることは強みでしょう。大井川を基軸とした生態系や人々の暮らし・文化を伝えてこそエコツーリズムの成立要件となるではないかと感じました。また地形的にも山と川と海のつながりを伝えられる点においても、誇るべき自然(観光)資源ではないでしょうか。

●アドバイス（講義等）の概要

地域が連携して事業を推進する体制として、信越トレイルの事業推進を例にお話しさせていただきました。周辺 10 市町村の接する里山のトレッキングルートを整備してきた経緯や手法、関係機関・団体の調整、新たな資源の発掘などの例を挙げ、地域をあげて取り組む意識の醸成や、役割分担など、トレッキングルート整備の発想から 8 年の時間を要したこと、この歳月は、ルート整備のみならず、地域内のいろいろな調整の日々を重ねた結果であったことを伝え、地域の連携、広域の連携にはじっくり腰を落ち着けて取り組む姿勢と、共通する[理念]が必要であったことを話しました。

さらに、過疎高齢化が進む地域にあって、観光関係者のみならず、地域住民やボランティアの力による整備が必要であったこと、整備後の運営については NPO がこの任に当たり、システムの運用のための組織作りの必要性もお伝えしました。

アクティビティー(体験メニュー)の提供、旅行商品の造成、情報提供、さらに広域商品の作成などについては、信越トレイルクラブの事務所があり、(一社) 信州いいやま観光局が運営する[なべくら高原・森の家]の地域資源活用型の商品ラインナップやその展開、また観光局が手がける着地型商品の展開も交えお話ししました。

大井川流域には多様な資源が点在し、個々の活動にはすでに観光客などの受入実績もあります。新たな事業を構築するというよりは、いかに地域の情報を共有し、発信していくか。また[エコ]に対する共通認識の醸成も必要と感

じました。個々の取り組みを個々に終わらせるのではなく、お客様が地域内のいろいろなサービスを楽しみ、滞在していただく仕組み作りこそ経済効果の拡大という意味でも必要ではないでしょうか。

●全体構想への取組状況・意向について

現在、上流部の静岡市井川地区から下流の吉田町までの情報の一元化ができていません。パンフレットですらこの一帯を網羅するものはありません。

情報収集、集約、共有そして発信と、今すぐ取り組めることから始めて見てはいかがでしょうか。エリア内では、民間の皆様が個々の活動をしている現状を踏まえれば、自治体の担当者が集まってこれらの情報を集め、集約。その後、官民の関係者が集まってお互いにどんな取り組みをしているかの情報共有。この情報共有の場を各地で何度もおこなうことが大切だと思います。お互いに顔を合わせコミュニケーションをとりながら、ペーパーだけでなく、実際の目や口で伝え、体験してみることが大切だと思います。そしてエコツーリズムに取り組む姿勢を共に考え定めることも大切です。

現状を踏まえ、新たな観光地づくりを念頭に[エコツーリズム]全体構想の作成に取り組むいい契機にも感じます。共に理念を共有し、自然資源の見直しや継続的な利用と保全、滞在型の観光地づくりなど構想案を作成しながら関係者が話し合う機会をつなげていただければ、今回の会合の成果にもなってくるのではないでしょうか。

●地域に対する印象、今後地域に期待すること（メッセージ）

今回、上流から下流までの官民両者の観光関係者が一堂に会しました。大井川流域では初めてのことと聞きました。

2 日間の研修にご一緒させていただいて、それぞれの皆様が個々の取り組みを生き生きとなされている印象を受けました。このエネルギーが結集し、連携していくことこそ行政境を超えた新たな大井川流域のツーリズムエリアができてくるのではないでしょうか。景観をきれいにしていくことでのイメージアップも提案させていただきました。都市に近い割には人工的な景観破壊も見られず、新たに意識を高く景観作りをしていくことが十分可能なエリアと感じました。

これを機に「エコツーリズム推進」の名の下に闊達な議論が始まり、従来型の観光地から新たにエコツーリズム手法による観光地への発展につながっていかれることを期待いたします。

3-11. 東海自転車旅エコツーリズム協議会（愛知県名古屋市）

(1) アドバイザー派遣申請の背景

●地域の概要

愛知県の人口：7,434,557 人　内名古屋市の人口：2,271,745 人

愛知県は、日本列島のほぼ中央に位置し、古来の尾張と三河とを合わせた地域で、南は太平洋に面し、西は三重県、北は岐阜県、北東は長野県、東は静岡県と接している。県土は東西約 106km、南北約 94km、総面積は 5,165 km (全国第 27 位)で国土の約 1.4%を占める。西部は、木曽三川(木曽川、長良川、揖斐川) と庄内川によって作られた全国第 2 位の広さを持つ濃尾平野とその東側の尾張丘陵およびそれから連なる知多半島から形成されている。南部から南東部は矢作川によって作られた岡崎平野、豊川によって作られた豊橋平野および渥美半島から形成されている。北部から北東部は長野県から木曽山脈が南に延びて三河高原を形成し、標高 1,415m の茶臼山を主峰とする山岳地帯で、標高 1,000m を超える山も少なくない。渥美半島と知多半島の間に三河湾、また、知多半島と三重県の志摩半島との間には、北に向かって伊勢湾が深く入り込んでいるため、海岸線は長く 596km に達する。

名古屋市は濃尾平野の南に位置し，市域の南西部で伊勢湾に面している。面積 326.45km^2，世帯数 1,013,411 世帯，人口 2,258,804 人（2010 年 1 月 1 日現在）の都市で、行政上は 16 の区からなっている。市域の東北端にあたる守山区の東谷山(198.3m)を最高点として，北東の丘陵地から南西の低地に向けて緩やかな勾配をもつ地形が続いている。地形は自然環境や土地の利用形態から，東部の丘陵地，中央部の台地，北・西・南部の低地の 3 つに区分される。東部の各区（守山・千種・名東・天白・緑区）は，標高 50～100m 程度のなだらかな丘陵が続いている。最近は急速に宅地化が進んでいるが，まだあちこちに大規模な公園・緑地が散在しており，比較的自然度の高い地域である。市の中央部（中・東・昭和・瑞穂の各区と南・熱田区の一部）は，北から南にかけてなだらかに傾斜する標高 10～15m 程度の平坦な洪積台地になっており、古くから市街地が発達し、商業地・住宅地として栄えている。北部・西部・南部（北・西・中村・中川・港の各区と熱田・南区の一部）は、河川の堆積作用によってできた沖積低地で、特に庄内川の西側と北側にはまだ畑や水田が多く残っている。しかし市域の北・西部では，人口の増加と市街地化が進んでおり、南部の名古屋港付近はエ業地帯となっている。

こうした地形や自然環境、土地の利用形態の違いがスズメバチの発生量にも大きな影響を与えており、東部丘陵地で多く、市街地から西部の低地にかけては極めて少なくなっている。

●アドバイザー派遣申請の背景・これまでの取り組み

当団体のある愛知県には、藤前干潟など生物多様性にとって重要な地域や、名古屋城をはじめとする歴史文化遺産が数多くある。また伊勢湾流域圏ということで、河川の上下流交流を通じて近隣県とも密接な関係にある。私どもは、この守るべき地元の自然環境や歴史遺産を、ツアーで体験することを通じて保全意識を高め次の世代に残していきたいと考えている。

しかしながら、一方でツアーを無造作に企画してしまうことは、観光地へ多くの車が乗り入れ、また多くの人が来ることで、結果的に貴重な自然環境や歴史遺産の破壊をしてしまうということもありえると認識している。その点、自転車を使ったツアーであれば、観光地への移動に伴う環境負荷は最小限ですむ。さらに、大型バスでのツアーには向かなくても、自転車ツアーに適した観光資源も多くあると思う。是非こうした自転車でしかいけない、自転車で行くからこそ良さが分かる。そして、今まで陽のあたらなかったところでも、観光スポットとなり、少しずつ地域経済が発展していく・・・。そんな取組みを少しずつでも進めて行ければ幸いと考えている。

(2) アドバイザー派遣の概要

日　　時	平成 26 年 2 月 2 日（日）～平成 26 年 2 月 4 日（火）
場　　所	名古屋市（北区・西区・中区・千種区・熱田区・瑞穂区・中川区）
アドバイザー	株式会社南信州観光公社　代表取締役社長　高橋　充　氏
参　加　者	特定非営利団体市民・自転車フォーラム、名古屋市市民経済局文化観光部観光推進室、中部経済新聞社、株式会社ウェイストボックス、株式会社ゲルプランツ、エバイス株式会社　計 8 名
スケジュール・方法	【1 日目】 ・市内視察 【2 日目】 ・セミナー

(3) アドバイスの内容

2 月 3 日に高橋先生、木村氏、芦葉氏、杉浦と名古屋市の主要地区の小さな名所旧跡を視察した。本来は自転車で廻れば先生にも雰囲気が充分伝わったと思われるが、時間の関係で車で廻ることとした。とはいえ我々が事前に自転車にて廻って下調べをした箇所であり、自転車目線の視察になったと思われる。名古屋城や熱田神宮だけではなく今回は四軒道や七里の渡しなど有名ではない名所旧跡を廻り、最近メジャーな「名古屋めし」も堪能していただいた。

それを踏まえ 2 月 4 日は午前の部では高橋先生の飯田市でのエコツーリズムの取り組みをお話いただいた。飯田市で取り組まれているのは体験型観光という事であった。具体的には学習旅行（修学旅行）との事であった。学習旅行という考え方は私どものエコツアーには該当しないが、観光振興という事でいえば体験型観光というのはまさしく自転車を利用したエコツーリズムであり、飯田市の「和菓子探訪の旅」や「桜守の旅」など地域住民の方を上手く巻き込んだ観光ツアーのお話は私どもの自転車ツアーに取り入れたい事柄やヒントが沢山あった。

飯田市行政との関係も非常に深く、その点が私どもの今後の課題だとは思ったが、今回の講座には名古屋市市民経済局文化観光部観光推進室の月足氏も参加していただいたので、今後は名古屋市との連携も深く取って行き事業を展開していきたいと思う。

昼食も参加者の皆さんと高橋先生を囲み「名古屋めし」をほおばりながら、エコツーリズムの中での自転車の可能性をざっくばらんに意見交換をさせていただいた。

午後からの部はわれわれの自転車エコツーリズムについてご意見をお聞かせいただいた。

高橋先生からは昨日の視察を踏まえてヒントをいただいた。

具体的なツアーのモデルコース（4 時間コース・8 時間コース）などの構築やツアーガイドブックにおける編集の仕方に関するアドバイスをいただいた。

一番具体的なアドバイスは、自転車 V.I.P ツアーの企画をしたらどうかとの事であった。

ガイドブックを見て行くだけのツアーではなく、名古屋街のコンシェルジェと行く自転車エコガイドツアーの企画で、外国人観光客にも需要はあるとの事であった。

告知方法も具体的に教えていただき、やはり行政との関係も大切だという事がわかった。

コンシェルジュの育成だとか旅行会社の選定とかの問題はあるが、出来ない事ではないので今後具体的に計画して行くつもりである。

また、大阪での取り組みも紹介していただき、旅と食は一体だというお話で「名古屋めし」もツアーに取り入れたらどうかとのご意見もいただいた。

高橋先生からは自転車ツアーの可能性はあるとのお墨付きをいただいたので、今後他の有識者の方のご意見もいただきながら、名古屋自転車エコツアーの事業化に取り組んでいきたいと考えている。

今回の「エコツーリズム推進アドバイザー派遣事業」で高橋先生のお話を聴く機会をいただいて、大変勉強になったと共に事業化へ明るいお話もいただけたので、会員の意気もあがりました。ありがとうございました。

（4）アドバイザー派遣実施の効果

●参加者や関係者に与えた効果

ただ漠然と自転車で名古屋市の名所旧跡を巡るツアーを企画し実行するだけでは、目新しさだけでの集客は見込める可能性はあるが、それだけではリピーターの育成にはつながらない。参加者は今回の高橋先生の講義を受けて、

ツアーの受け入れ側の学習や人材教育がエコツーリズムには必要不可欠だという事を充分理解したと感じる。

●今後の期待される効果

高橋先生の方の講義を聴き、今後協議会で設定した方向性に従い既存の情報リソースを活用しながら、自転車旅に適した観光スポットの洗い出しを再度行う。

より地元密着な情報を地元の語り部がポタリングをしながらツアー客と廻るエコツアーでなければ今後の発展性も見込まれないと感じた。

また、名古屋には歴史ビジネスを地域で行っている株式会社コミュニティネット（http://www.communitynet.co.jp/）という企業もあり、今後意見交換等も含めコラボレーションできれば歴史という観点では広がりが期待できると思う。

●今後の取り組み

一般市民の方が自転車旅にどのようなことを求め、どういう条件であれば参加したいと思うかなどのアンケート調査を NPO 団体のイベントやホームページにて行い、エコツアーの企画に活かせるデータを把握したいと思う。

また、今後自転車ツアーとしてのルールやマニュアル類をベースに、高橋先生や地元の歴史関連の有識者の方々のご指導の元、エコツアーの要素を取り入れ、後日エコツアーを行う際に効果的に実施できるような資料を作成していきたいと思う。

高橋先生からご提案をいただいたツアー同行者的なものから、インタープリターとして十分通用する人材をどのように育成するかなどについて考えていく。

名古屋市市民経済局文化観光部観光推進室と連携して名古屋の自転車マップの作成をめざす。

また、PR 用のオリジナルグッズ（自転車お守り等）の企画も考えていきたい。

(5) アドバイザー派遣を実施して（地域からの声）

●参考となった事項

南信州観光公社様の取り組みの内、体験型ツアープログラムの内容は今後自転車のエコツアーに活かしていけると感じた。また南信州のエコツアーを支えていらっしゃるのが地元の人材である事が理解でき、また地元行政との深い結びつきがあるからこそエコツアーの継続が可能であると教わった。

●その他感想

南信州観光公社様では旅と食の結びつきも考えておられ、「和菓子探訪の旅」ツアーなどは、まさしく地元の方々と地元の物産を知ってもらうに最適なツアーであると思った。また、「桜守の旅」など、ツアーのネーミングにも素晴らしいものがあり、人を引きつける魅力になっていると感じた。

(6) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

株式会社南信州観光公社　代表取締役社長　高橋　充　氏

●地域におけるエコツーリズム推進の取組の現状と課題

タイム順で競う形ではない自転車レース大会の実施、道路開業イベントとの協業、歩道における歩行者とのシェアリング、自転車マップ作り等、多岐にわたる市民活動により、自転車の利便性や楽しさを伝え、地域振興にも貢献するなど、組織としてもエコツーリズム推進のための充分な素地がある。あとはエコツーリズムの具体的な実践を行なうことが必要であり、その可能性は充分にある。

●特に魅力を感じた地域の自然観光資源

広義の自然観光資源として、戦国から近代までの歴史や産業の遺跡遺構が随所にあり、自動車や徒歩では廻りにくいところを、自転車を活用することで効果的に楽しめる。

●アドバイス（講義等）の概要

名古屋市内の観光向けの自転車マップやガイドブックの造成が目標とのことであったが、更にその先を見据えた活動を期待するところもあり、先ず南信州でのガイド・案内人プログラムの取り組みについて紹介をした後で、主に下記の点について質疑応答も含めて助言をした。

・マップについては、裏面の観光名所の紹介の部分は、各施設の目を引く特徴を、上手くキャプションを付ける形で紹介することと、テーマ別でもエリア別でも、見た人がすんなりと観光に入りやすいような形に工夫することが望ましい。

・マップやガイドブックについては、従前の各種マップや刊行物の出来栄えを見ても、良いものができることは予想されるので、是非、編集に携わった生粋の名古屋のおじさんたちが「スペシャル自転車ツーリングクルー」として、高価格高付加価値の「VIP 自転車ツーリング」を案内するといった取り組みも視野に入れると良い。費用は案内料として参加者 1 人につき、半日（4 時間）で¥5,000～、1 日（6 時間）で￥10,000 程度の少し高目の設定で、クルー1 人で 3～5 名程度もしくは 2 名で 7～8 名を一単位での対応とする。旅行業法との絡みで、あくまでも案内に徹し、食事や入場については利用者が選択する様に組み立てる。OSAKA 旅メガネのツアー作りも参考になる。

・VIP 自転車ツーリングの発想は、前日の視察において、歴史、習俗、産業、風景、名古　屋めし、食文化などについて、名古屋の人ならではの案内をして頂いたことで、それをそのまま企画として行なえば、満足度の高いものとなると確信したことによる。

●全体構想への取組状況・意向について

今年度の生物多様性保全推進交付金申請書の記載内容からもある程度伺えるが、各種自転車イベントの開催やガイドブック・マップ作りを地域住民や行政に協力を取りつけながら丹念に実施してきたことから、全体構想策定を目標とした場合は充分に対応できる組織である。ただ、具体的な自然観光資源の保護・育成という部分については特に対象があるわけではなく、現状は観光客にも使える自転車ツーリングマップ・ガイドの作製が第 1 目標であるので、自転車移動を前提とした旅そのものが環境への負荷を軽減させることを充分に意識した形で進めると良いのではないかと感じた。

●地域に対する印象、今後地域に期待すること（メッセージ）

自転車の持つ徒歩には無いスピードと、自動車には無い利便性を組み合わせ、高低差のあまりない名古屋市の地理的特性も相まって、広範囲にわたって細かく深く地域の魅力を味わえる自転車旅を体現できるマップやガイドブックづくりなどの取組をこのまま進めた上で、是非編集者たちがスペシャルクルーとなって、私達が直接案内しますというコンセプトで、VIP 自転車ツーリング企画を実現させて欲しい。その際、デザイン専門学校の学生が作ったウェアの貸し出しもあると楽しさが増す。市役所、企業の客人のもてなしの一つとしても、それが加えられることを期待する。参考までに、下記に今回の訪問を通じて特に魅力的と感じた素材を分野別に列挙する。

①産業

１．ノリタケ公園の煙突の云われ　２．トヨタ商会の建物　３．問屋の案内

②歴史

４．榎白山神社の信長の戦勝祈願　５．白壁町・黒門町～町名の云われ　６．四間道の屋根神様の云われ

７．建中寺から徳川園にかけての徳川の権勢　８．武家屋敷から近世の名家までの変遷　９．美濃路の現在

③街並みと風景

１０．四間道の風情　１１．一本松古墳の美しい形　１２．名古屋城ビューポイント

１３．向野橋から見る路線区の佇まい&朝日と夕日、近代から現代の建築の縮図も見る

１４．ガイドウェイバス～日本唯一のバス専用高架道路と世界最大のバス停

④名古屋めしの楽しみ方

１５＆１６．ひつまぶしの蓬莱軒の待ち時間を楽しむ方法

①熱田神宮の清水と信長塀　②蓬莱軒本店から七里の渡し

１７．コンパルのエビカツサンドと面白アイスコーヒー　１８．あんかけスパの系統の違い

１９．名古屋人が愛する喫茶店と小倉トースト

⑤その他

２０．松重閘門に日本近代遺産を見る　２１．近代建築様式の見本～名古屋市役所

２２．都市計画再生と自転車専用道路

3-12. NPO 法人大杉谷自然学校（三重県多気郡大台町）

(1) アドバイザー派遣申請の背景

●地域の概要

大杉谷地域は、一部を吉野熊野国立公園に、全体を奥伊勢宮川峡県立自然公園に含まれる自然豊かな地域である。また、一級河川宮川の源流・上流部に位置している。平成 16 年の豪雨災害以降、大杉谷登山道は閉鎖されていたが、10 年ぶりに平成 26 年 4 月に開通予定である。

登山口がある、大杉谷地区は、大台町内で最も過疎高齢化が進んでいる地域である。ダム建設当時の昭和 34 年は 2,896 人と最大の人口であったが、ダム建設による集団移転や林業の衰退、高度成長による集団就職などで、急速に過疎化が進んだ。

大杉谷地区への活性化対策は、昭和 40 年代から始まっており、宮川ダム周辺を観光拠点と位置付け、大杉谷峡谷への登山者の受け入れや大杉谷林間キャンプ村の開業(昭和 53 年)、ダム湖の遊覧船の就航などにより、交流人口が大幅に増加した時期もあったが、現在は度重なる豪雨災害の影響もあり交流人口は大幅に減少している。現在は、260 人まで人口が減少し、高齢化率は 71%と超高齢化社会となっている。

●アドバイザー派遣申請の背景・これまでの取り組み

平成 16 年の豪雨災害以来 10 年ぶりに大杉谷登山道が全線開通となり、今後、登山客が増加することが想定されるが、町内のガイド団体が集って意見交換や登山道利用について話し合う機会がなかった。

開通前に各実施団体で共通ルールについて話し合い、足並みを揃えながら安全で適切なエコツアーの在り方を模索する機会としたい。

(2) アドバイザー派遣実施の概要

日　　時	平成 26 年 2 月 25 日（火）～平成 26 年 2 月 27 日（木）
場　　所	大杉谷地域総合センター2 階講義室
ア ド バ イ ザ ー	公益財団法人キープ協会 環境教育事業部シニアアドバイザー　川嶋　直　氏
参　加　者	NPO 法人大杉谷自然学校　5 名、（公社）大杉谷登山センター1 名、大杉谷案内人の会 1 名、 大台町観光協会フィールドマイスター1 名、大台町　2 名（大杉谷出張所 1 名・産業課 1 名）、 宮川流域ルネッサンス案内人 1 名、大台町ふるさと案内人 1 名、桃の木山荘関係者 1 名　計 13 名
スケジュール・方法	【1 日目】 ・打合せ 【2 日目】 ・川嶋氏によるガイド講座（実技・役割・品質維持等の事例紹介） ・参加団体からガイドの概要発表 各関係者の意見交換会（環境保全・ゴミやトイレ等への共通認識・価格・安全管理等） 登山道概要説明（コース概要・事故・利便性等） 【3 日目】 ・意見交換会

(3) アドバイスの内容

●1 日目

○川嶋氏講義（自己紹介・環境教育プログラムの紹介・エコツーリズム概論）

講師の川嶋氏より、キープ協会での事例紹介の他、環境教育プログラムの紹介をスライドを見せていただき解説していただく。

その後、エコツーリズム概論を紙芝居方式でプレゼンしていただく。これまでは、エコツーリズムという考え方があまりなく、樹木、歴史解説がガイドであると考えていた参加者が多かったため、エコツーリズムに関する考え方を学ぶことができた。

○登山道説明

大杉谷登山センターより登山道の概要についてご説明いただく。平成 25 年度の利用者数や事故数、事故事例など詳細な報告となった。また、平成 26 年度の予想入山者数や交通アクセス整備も説明いただく。

○参加者による意見交換会

参加者が意見交換をする機会として、自己紹介の他、ガイドの経験、内容、価格、環境配慮など現在実施しているガイドについて 1 人ずつ発表を行った。その後、課題を洗い出し、これまで議論がされてこなかったテーマを整理した。

●2 日目

○アドバイザーの方によるアドバイス

前日の内容を受け、大杉谷でのエコツーリズムに必要な要素や他地域でのエコツーリズムの事例などをご紹介いただいた。そして、経験が浅い参加者が多かったので、実際にお金を払って他のガイドが実施しているプログラムに出てみると参考になる等具体的事例を教えていただいた。

グループに分かれての意見交換

事業紹介の様子

エコツーリズムについての講義

全体で意見交換会を実施

(4) アドバイザー派遣実施の効果

●参加者や関係者に与えた効果

参加者は多くがガイド経験者もしくは、ガイド業を促進する人であったが、ガイドに対する意識は様々であった。例えば、参加費（1 人あたり 300 円から 1 万円）、山中でのトイレの仕方（指導なし、埋める、持ち帰る）など差が大きいものがあることがわかった。

災害の影響で登山者が多くなかったため、特別のルールがなかったが、今後、ツアー客が活用するようになれば、ルールも必要になるということで意見が一致した。今回はその手始めにメーリングリストを作成し、連絡体制を強化することとなった。

ガイドの方法としては、これまで樹木や山野草、歴史の紹介しかしてこなかった人が多かったが、川嶋氏による、環境教育プログラムの事例紹介は新しい取り組みということで大変参考になったという声が多かった。

●今後の期待される効果

今後は、情報交換、連絡体制及びルール作りを担うグループか協議会を設立し、エコツーリズムの理念が生きたツアーを提供したいということで意見が一致した。

また、安全管理や体験プログラムについては勉強会や研修会が必要であると要望が出たため、今後は定期的に開催したいと考えている。

●今後の取り組み

今年 4 月の全線開通のために、参加者全員が協力してエコツアーの受入を実施していくことになった。4 月に 3 回程度エコツアープログラムを提供する予定である。

その他、安全管理研修は早急に実施が必要であり、夏までには実施する予定である。

(5) アドバイザー派遣を実施して（地域からの声）

●参考となった事項と感想

・これまで参加者には自然情報を提供するだけだったので、体験を提供することは新しい視点で大変参考になった。
・登山道では実施は難しい場合が多いが、登山道に入る前後に提供するのは付加価値がつく
・登山道だけではなく、大台町全体を使ってエコツアーの提供はできないか。
・アクセスや宿泊が整備されていないため、情報提供をするなど整備が必要。
・参加者間の意見交換会をする機会がなかったので、大変よかった。
・事故や行方不明者がでているのを知らないケースもあったので、今回メーリングリストなど情報共有方法ができたので大変よかった。

(6) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

公益財団法人キープ協会 環境教育事業部シニアアドバイザー　川嶋　直　氏

●地域におけるエコツーリズム推進の取組の現状と課題

この地域には 13 年前から「大杉谷自然学校」が設立されており、今回の派遣事業でも派遣依頼の中核となっている。大杉谷自然学校には地元出身の大西かおりさんが校長として活躍している。大西さんは全国の自然学校ネットワークでも広く知られる存在なので、今後他地域の自然学校などからの支援を受けることも可能だ。

地域全体の事業としてのエコツアーはまだこれからの地域ではあるが、その核になる組織（大杉谷自然学校）はすでにしっかりとした活動をしている。また、大杉谷登山道は平成 16 年以来 10 年ぶりにこの春に開通することになっている。登山者の安全管理のためのルールや、トイレやガイドの基準がまだ整備されていないので、この機会にこのあたりの作業を進めてゆくことが当面の課題であろう。

●特に魅力を感じた地域の自然観光資源

大台ヶ原―大杉谷登山道はかつて年間 16,000 人を迎えた魅力ある観光資源である。また地域の食材を利用した地元料理も、今回私が宿泊させていただいた「奥伊勢フォレストピア」で提供されているフランス料理など、なかなかレベルの高いものと思えた。そして何より、訓練された 10 名近いスタッフを抱える「大杉谷自然学校」はこの地域の得難い魅力（資源）となっている。

また、この地域は他地域からの居住者の積極的な受け入れも行っている。まだその実績は乏しいが、受け入れへの積極的な姿勢を持っているということは、今後エコツーリズムに関係する新規居住者等が関わることが出来る素地がある事にもなる。

●アドバイス（講義等）の概要

ガイド組織が複数存在し、それぞれのガイドに関するルールも一本化されていない現状では、ひとつひとつ確認しながらのルール作りが必要。特に、有料ガイドとボランティアでの無料ガイドの混在はお客さまにとっても分かりにくく、今後調整をする必要があると思えた。

お客さまにとって大杉谷が提供するアクティビティ（プログラム）がどのようなレベルのどのような価値を持つものであるのかを確認するためには、ぜひ他地域の同種のアクティビティ（プログラム）に参加されることを強く薦めた。自分たちのプログラムと他地域でのプログラムを対比して見ることで分かってくることがある。こうした「お客様体験」を数多くすることが、自分たちの地域の魅力の見直しにもつながるし、自分たちのプログラムサービスの質を見極めることにも繋がる。

●全体構想への取組状況・意向について

「エコツーリズム…協議会」の設立までは、まだ少し道のりが必要かとは思うが、今回私の訪問を機に「大台町観光協会」を始めとして、「大台町」「登山センター」や「ガイド事業者」などが一同に介して、現状の確認と今後の可能性について話し合いの機会を持てたことは、最初のスタートラインに立てたという大きな意味をもつものと思われる。

大杉谷自然学校は、上記取りまとめの作業について中心的な役割を果たそうとする意志を持っている。中心的な核が明確な意欲を持ち、その周辺も協力的な関係性があるこの地域には、確実にエコツーリズムの歩みが始められると感じられた。

●地域に対する印象、今後地域に期待すること（メッセージ）

名古屋や大阪からの立地は決して良くないこの地域だが、その分「滞在型」の学校教育と連携した自然体験を中心としたプログラムの可能性を感じた。また、昨今の登山ブームもあり、大台ヶ原―大杉谷間の登山は一定の需要があると考えられる。

そして何よりも大杉谷自然学校のスタッフたちを中心に関係する方々が、魅力ある大台町を多くの方に知っていただく第一歩が今回踏み出せたのではないかと思う。今後の発展を期待する。

3-13. 周南市（山口県周南市）

(1) アドバイザー派遣申請の背景

●地域の概要

周南市は、山口県の東南部に位置し、北に中国山地を背に、南に瀬戸内海を臨み、その海岸線に沿って大規模工業が立地し、それに接して東西に比較的幅の狭い市街地が続いている。北側には、なだらかな丘陵地が広がり、その背後の広大な山稜には農山村地帯が散在している。また、島しょ部は、瀬戸内海国立公園区域にも指定されており、美しい自然景観を有している。

人口：149,460 人（平成 26 年 1 月 31 日現在）

気候：周防山地以南は温暖少雨の瀬戸内型、その以北は内陸型

総面積： 656.32km² 【東西約 37km、南北約 39km】

（平成 22 年 10 月 1 日国土地理院調べ）

地域の概要：

徳山市、新南陽市、熊毛町、鹿野町の 2 市 2 町は、山口県東南部の周南地域に位置している。

周南は古くから周防の国の南部を示す言葉として、瀬戸内海を望む広い地域を指していて、温暖な気候と山海の幸に恵まれた豊かなイメージを彷彿とさせてくれる。

この 2 市 2 町は、市民生活、産業経済活動も極めて結びつきが深く、既存の行政の枠組みを超えて諸活動は一体的に展開されている。

昭和 39 年には、「工業整備特別地域整備促進法」に基づき、徳山市、新南陽市、熊毛町が周辺関係市町とともに「周南地区」として位置付けられている。

また、昭和 46 年には、国の「広域市町村圏振興整備措置要綱」に基づく「周南地域広域市町村圏」が設定され、相互の連絡調整や住民票の広域発行などの共同事務処理を行うほか平成 7 年には「地方拠点法」に定める「周南地方拠点都市地域」に指定され、周南関係市町とも協力連携を図りながら地域の一体化と均衡ある発展を目指した取り組みを進めてきた。

このように、2 市 2 町の広域的な取り組みでは、常に「周南」との地域名を冠していて、また社会活動や企業活動を営む様々な団体においても名称に「周南」が用いられていることも多く、地域の総称として一般的に定着している。

●アドバイザー派遣申請の背景・これまでの取り組み

周南市の背景は、山から里、海、島とあらゆる地域資源を有している。これらの地域資源を有効に活用する手法としてエコツーリズム事業があると認識している。

そこで、今回は、日本の各地の事例を周知されているアドバイザーを通して、周南市の素材を今一度現地確認し、それを元に具体的な取り組みまでできればいいと考えている。またそのきっかけづくりができればいいと考えている。

(2) アドバイザー派遣実施の概要

日　　時	平成 26 年 2 月 3 日（月）～平成 26 年 2 月 4 日（火）
場　　所	山口県周南市立中央図書館及び中心市街地
アドバイザー	公益財団法人キープ協会 環境教育事業部シニアアドバイザー　川嶋　直　氏
参　加　者	森の案内人の会、周南市観光ボランティアガイド、徳山動物園、新南陽総合支所、須金支所、 山口市地域づくり支援センター、山口市地域振興部中山間地域活性化推進室、ふるさと振興財団、 NPO 法人市民プロデュース、税理士法人 魁、子ども家庭課、中心市街地整備課、 コミュニティ推進課、文化スポーツ課他　計 29 名
スケジュール・方法	【1 日目】 ・市内散策（児玉源太郎ゆかりの地めぐり） 中央図書館周辺に点在する児玉源太郎ゆかりの地をめぐる ・講義「エコツーリズムって何？」 エコツーリズムの基本について学ぶ ・講義・実習「紙芝居プレゼンテーション“KP 法”に学ぶシンプル・明快な説明法」 シンプルプレゼンテーション&思考整理法“KP 法”について学ぶ 【2 日目】 ・講演「私と児玉文庫」 午後からの企画実習に向け、児玉文庫の思い出や思いを語っていただく ・児玉文庫関係蔵書めぐり（図書館内） 中央図書館にある児玉文庫関係の蔵書について説明を受ける ・グループ実習「児玉文庫の精神を活かしたまちづくり企画」 児玉文庫を活用したまちづくり企画を考え、KP 法等を使って発表 ・ふりかえり・わかちあい

(3) アドバイスの内容

●1 日目

・最初に今回の素材である「児玉文庫」に関わるスポットを見学した。案内は、周南市の観光ボランティアの方にお願いした。(2 名）2 グループに分かれて、少人数で説明が行き届くように案内された。

・その後、アドバイザーにより、ワーキングがスタートする。
まず、参加者が関心のあるキーワードについて問いかけがあった。
① エコツーリズム②地域振興（地域おこし）③観光（観光産業）④環境保全（自然保護）⑤環境教育⑥ゆたかさ、しあわせ もっとも多かったのが、地域振興とゆたかさ、しあわせだった。それを皮切りに川嶋流 KP 法 [1] により様々な地域の取り組み事例が紹介されていった。 ⇔ 最初の導入

※[1] KP 法・・・紙芝居プレゼンテーションの略

・キーワードやイラストなどを書いた何枚かの紙（KP シート）をホワイトボードなどにマグネットを使って貼りながらプレゼンテーションを行う。

・KP シート 10～15 枚で 1 つのテーマを構成する。この 1 つひとつのまとまりを「KP セット」という。1 セットは、およそ 2 分から 5 分程度で話し終える分量

・プレゼンテーションは、与えられた時間に応じてこの「KP セット」を何セットか組み合わせて行う。

・基本的にパソコンなどのデジタル機器は使わない。

・KP シートの用紙や筆記具などは、すぐに手に入るものしか使用しない。

『KP 法』シンプルに伝える紙芝居プレゼンテーション 川嶋直著 みくに出版参考

・次に、それぞれの思いを実際に KP 法により作ってみようということになった。

4 グループに分かれて、自己紹介を KP 法で紹介

グループごとに各人のテーマを決めて、実際に KP 法を使って作成実習を実施

完成後にホワイトボードを使って、KP 法で実演した。グループごとに終了したら、他グループにもシェアし、共有した。

ふりかえりの中で、実際に見るとやるとでは、全然違うことを体験した。

数多く実践することで、技術として身に付け、まちづくり等に活用したいということで、ワーキングを終了した。

●2 日目

・実際に児玉文庫についてご存知の浅見道子さんに話を聞いた。

午前中は、浅見道子さんの話を聞き、この話は、戦時中の話でリアルな体験の話であり、郷土の名士である軍人児玉源太郎が後世へ伝えるために、武道場ではなく、なぜ児玉文庫という私設図書館をつくったのかという思い[2]を聞くことができ、その後の午後からのワークショップにおいて、その思いを参加者で共有し、今後のまちづくりの中でどう活かしていくかということで、具体的な取り組みについてワークショップを通じて話し合った。

※[2] 児玉源太郎が、児玉文庫という私設図書館をつくった思いとは？

・児玉文庫は、児玉源太郎の若い頃からの念願の末に開設されたものである。

源太郎は若い頃からの体験をふまえて、みずから学問の大切さを実感し、特に読書の必要性を感じたようで、早くから手元に本を集めて、是非郷土の若い人に読んで欲しいという夢を持っていたという。

児玉源太郎ゆかりの地を観光ボランティアにより現地案内、説明

川嶋氏の KP 法の講座

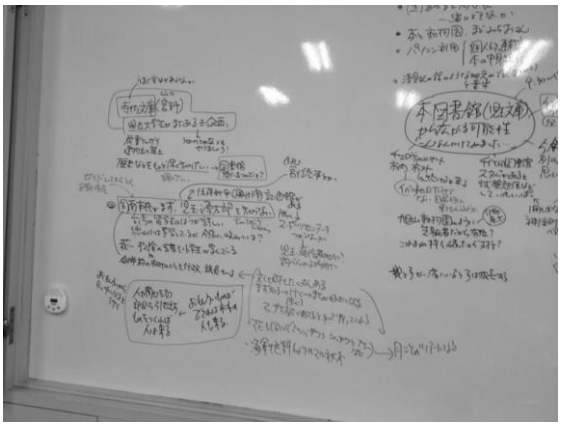
熱心に聴く聴講者

実践編 自分でやってみよう KP 法

浅見道子さん（86 歳）の話を聞く

ワークショップの1シーン

（中央；川嶋氏）



具体的な取り組み案を引き出す

最終的に意見が出揃い、まずは図書館を中心に取り組んでいこうということでまとまった。

(4) アドバイザー派遣実施の効果

●参加者や関係者に与えた効果

まず、KP 法というシンプルだが、わかりやすい手法を実践することで自分なりの整理の仕方、伝え方の手法を学んだことが収穫ではないだろうか。現地を見て聞いて、それを具体的な形にしていく手法を学び、それぞれの部署に持ち帰って実践することができるのではないか。

川嶋氏よりボランティアガイドの改善点（気づき）を話していただき、指導する場面があった。今後ボランティアガイドの資質向上が期待できそうである。

・KP 法という手法を学ぶことで伝え方を教わったことは大きな収穫
・川嶋さんのパフォーマンスが価値あり
・やり方、テンポ、伝え方、簡潔で手短に伝える手法を学んだ

●今後の期待される効果

今回は、児玉文庫という具体的な事例を元に、ワークショップを実践した。

今まで当たり前だったものが、伝え方によって大きく変容する可能性というものを参加者は感じたのではないか。今まで見えなかったものが外からの視点でアドバイスいただき、意見交換し、共有し、振り返る、これらの一連の作業工程がいままで実践されていなかったことに気づき、今後新たに陽の目を当てていく可能性を見出した。

●今後の取り組み

今回は図書館を中心に実践したが、その図書館は情報の拠点であり、発信能力が高いことが分かった。ではまずここからスタートさせようということになった。

・街中図書館の実践 ex：カフェとかを巻き込み、図書館と連動させる。
・図書館で婚活、コンサート
・親子で体験できるようなしくみづくり

まず図書館で何かひとつ実践し、成功事例をつくりたい。まずはそこからスタートさせたいと考えている。

その後、他部署とのコラボを組みながら、エコツーリズムの拠点として成長させていきたい。

(5) アドバイザー派遣を実施して（地域からの声）

●参考となった事項

・身近なところに、素材はあり、タカラはあるという気付き
・伝え方がいいと成果が上がるということ
・人材育成が大事だということ
・全国の色々な取り組み事例を紹介いただいた事
・まさに実践者が語ることによって、可能性を見いだせるということ
・手法はシンプルにということを学んだ

●その他感想

・川嶋直という個性のあるアドバイザーのおかげで終始なごやかに、多くの学びができた感じがします。
・すぐにやれそうな気がしていること。
・その他 2 日間という貴重な学びの時間を共有できたことに感謝したいと思います。

(6) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

公益財団法人キープ協会 環境教育事業部シニアアドバイザー　川嶋　直　氏

●地域におけるエコツーリズム推進の取組の現状と課題

今回は山口県周南市中央図書館の徳永館長さんが中心となって、これからの周南市のまちづくりに「エコツーリズム」という考え方を取り入れて行けたら、という模索段階でのアドバイザーの派遣であった。しかし、周南市には以下にも触れるが「児玉文庫」という歴史的に意味のある資源を持っていて、またその資源を案内する観光ボランティアガイドの仕組みもありすでにそのガイドは活躍している。ただ、このガイドは基本的にボランティアで運営されガイド料も無料となっている。

●特に魅力を感じた地域の自然観光資源

今回は自然資源というよりも周南市の歴史資源中心に触れる機会であった。この地に生まれ育った「児玉源太郎」の足跡が、周南市中央図書館周辺の数百 m 四方に点在し、その足跡を上記の観光ボランティアの方の案内で歩いた。翌日には、児玉源太郎直系の浅見道子さんのお話を伺い、児玉源太郎が残した「児玉文庫」について、そして残念ながら児玉文庫が焼けてしまったその時の様子までお聞きした。

●アドバイス（講義等）の概要

川嶋からの講義としては「エコツーリズムとは何か？」「着地型観光と発地型観光」「観光とは」「エコツーリズム推進法」「エコツアーに必要な人材」「エコツーリズムの課題」などについてお話をした。当日集まった皆様の考え方の地ならし作業を意識した。

また、翌日のディスカッションのために「KP 法（紙芝居プレゼンテーション法）」の実習も行った。この KP 法のスキル獲得が目当てで集まった方もいて、そうした方々も「児玉文庫」を柱にしたエコツーリズムを考える機会に触れて頂けたことは良かった。

初日のボランティアガイドさんのガイドについて、インタープリテーション（人と対象との間の通訳）が本業の私から見て気になった点を数点具体的にガイドの方にお伝えした。今回はそもそもそうしたアドバイスは求められていなかったため、いつか機会があったら別の機会にアドバイスしようと思っていたが、ガイドさんから「ぜひ気付いた点を教えて欲しい」との強い要望があったので以下の点をアドバイスした。

「参加者の歩くスピードに合わせて歩くこと（今回のガイドの方はドンドン先に歩いて言ってしまい、説明ポイントで皆様を待つという感じでした）」「話し終わったら必ず『何かご質問は？』と聞く、あるいは話している途中にやりとりが出来るような雰囲気作りをすること」「出発時点で人数を確認し、いくつかのポイントでも人数をいつも把握しておくこと」「せっかく配布した地図を全く使わなかった『今ココです、これからココに行きます』などと使うべき」「大切なキーワードは書いたものを見せるようにすること。クリアファイルなどにキーワードを大きく書いた紙を入れて、ポイントでの解説毎に大事なキーワードだけでも見せるようにすると良い」等をアドバイスした。

また、2 日目の全体でのディスカッションでは、児玉文庫そのものの価値を伝えることも良いが、児玉文庫を産んだ児玉源太郎を育てた周南市のどのような風土があったのか？その風土を言葉化するところから、明治初期から今にまでストーリー（物語）が繋がるのではないか？その言葉化された風土こそ、今の周南市の「光」であるはずだし、それを見せるのが「観光」なのではないかと思う。というようなこともアドバイスした。

●全体構想への取組状況・意向について

まだ、エコツーリズムへの取り組みは「これから」という地域だが、地域ポテンシャルが高いことと、地域の図書館という文化的施設がこうした音頭をとっていることに、大きな可能性を感じた。

●地域に対する印象、今後地域に期待すること（メッセージ）

周南市はエコツーリズムへの取り組みを始めたばかりというか、これから始めようとしているところ。しかし、図書館を中心として歴史資源としての地元の「文庫」の意味を再考することを通して、地域の価値を見なおしてゆくという作業は非常に興味深い作業と思えた。

ちょうど周南市の玄関である徳山駅ビルの再開発に、TSUTAYA を運営する企画会社である CCC が関わろうとしており、佐賀県武雄市の CCC が企画した図書館の様に、人が集まる新たな装置としての図書館という意味が期待されている。今回の 2 日間の研修に、この中心市街地活性化協議会の上野さんが中心的に関わっていらしたことは、今後の周南市のエコツーリズムを軸としたまちづくりの可能性に大きな可能性を感じた。

3-14. 那賀町（徳島県那賀郡那賀町）

(1) アドバイザー派遣申請の背景

●地域の概要

那賀町は、平成 17 年 3 月 1 日、5 町村（鷲敷町・相生町・上那賀町・木沢村・木頭村）の合併により、誕生した。人口は 9,620 人、世帯数 4,088 世帯（2013 年 12 月末現在）。

徳島県の南部に位置し、東は阿南市、西は高知県、南は海部郡、北は勝浦郡、神山町、美馬市、三好市に隣接している。地域の北西部には四国山地、南部には海部山脈などを配しており、標高 1,000m 以上の山々に囲まれ、地域の 9 割以上が森林の中山間地域である。域内には那賀川及び坂州木頭川が流れ、両河川は旧上那賀町内で合流して地域のほぼ中央を西から東に貫流している。面積は 694.86km² あり、徳島県の総面積（4,145.10km²）の約 17%を占めている。

平均気温は 13.5℃（1993 年～2002 年の各年平均気温の平均）で、朝夕の寒暖の差が非常に大きいのが特徴である。また、平均降水量は 3,159mm（1993 年～2002 年の各年総降水量の平均）であり、徳島県内で最も降水量の多い地域となっている。

●アドバイザー派遣申請の背景・これまでの取り組み

町村合併前の、鷲敷町・相生町・上那賀町・木沢村・木頭村の丹生谷（にゅうだに）5 町村は、地理的・歴史的、また産業・文化面においても古くからの結びつきがあり、行政運営においても一部事務組合で丹生谷地域全体の課題やまちづくりに共に取り組んできた。一方、過疎化や少子高齢化が進み、さらには地方分権の推進や地方交付税の削減による財政困難等、多種多様な行政課題に対応するため、平成 17 年 3 月 1 日、5 町村の合併により「那賀町」が誕生した。合併当時 11,893 人いた人口も現在では約 9,600 人まで減少し、20 年後には人口が約半分になると試算されている。このままでは、限界集落が増え続け、山林や田畑は荒廃し、ふるさとの風景が消えてしまう。

町内の目立った観光名所は四国お遍路・第 21 番札所 太龍寺への参拝用「太龍寺ロープウエイ」（利用者年間約 10 万人）しか無く、しかも利用者は隣接する阿南市にある第 22 番札所平等寺に移動してしまう。今後は通過型観光から、那賀町の自然環境・歴史・文化等の地域資源を活用した滞在型・体験型観光へ変化させることが大きな地域課題になっている。

那賀町は良い意味でも悪い意味でも「山間部の田舎」であり、豊かな自然・棚田や山間地の農村風景、自然と向き合う生活文化が残っている。また、町内には古くから残る農村舞台も複数箇所に現存しており、人形浄瑠璃の公

演が行われるなど、歴史・文化面でも地域資源が数多く残されている。

今後、地域資源を活用して少しでも那賀町を訪れる人が増える仕組み作りに取り組みたいと考え、今回のエコツーリズムアドバイザー派遣事業に応募した。

(2) アドバイザー派遣実施の概要

日　　時	平成 26 年 1 月 27 日（月）～平成 26 年 1 月 29 日（水） 平成 26 年 3 月 18 日（火）～平成 26 年 3 月 19 日（水）
場　　所	視察：那賀町内全域の観光施設、地域の様子等 1 回目研修会：相生地区　相生ふるさと交流館、木頭地区　コミュニティ・スペース「くるく」 2 回目研修会：鷲敷地区　那賀町地域交流センター
アドバイザー	株式会社南信州観光公社　代表取締役社長　高橋　充　氏 株式会社ジェイティービー旅行事業本部観光戦略部長、株式会社 JTB 総合研究所　客員研究員　加藤　誠　氏
参　加　者	■1 回目 ・相生地区 観光協会会長 1 名、観光協会会員の業者 4 名、観光協会事務局 1 名、農家 3 名、町会議員 1 名、酪農家 1 名、住民団体代表者 3 名、 住民 5 名、行政関係者 3 名　計 21 名 ・木頭地区 行政関係者 3 名、観光協会会員の業者 4 名、住民団体代表者 1 名、地域住民 2 名、　計 10 名 ■2 回目 観光協会会長 1 名、観光協会会員の業者 4 名、観光協会事務局 1 名、農家 3 名、町会議員 1 名、林業グループ代表 1 名、住民団体代表者 4 名、地域住民 2 名、行政関係者 6 名　　計 23 名
スケジュール・方法	■1 回目 【1 日目】 ・那賀町内の視察 那賀町内でエコツーリズム・グリーンツーリズムの導入を検討している那賀町・相生地区を中心視察して、今後のエコツーリズム導入に活かせる地域資源や自然環境等について、エコツーリズム・グリーンツーリズムの導入の可能性についてアドバイスをいただいた。 ・打ち合わせ 【2 日目】 ・那賀町木頭地区の視察 那賀町木頭地区では、地域住民が山村留学センターや移住体験事業を運営、炭窯の再生プロジェクト、古民家を改修したコミュニティカフェの運営、といった様々な住民活動が盛んであり、それらを視察していただき、今後、エコツーリズムに発展させる為には何が必要なのか？についてアドバイスをいただいた。 ・那賀町・木頭地区にて「エコツーリズム研修会」 地域住民の方を中心に参加していただき、飯田市で行われているエコツーリズム・グリーンツーリズムの実例紹介、今後、木頭地区でエコツーリズム・グリーンツーリズムを進めるために必要なこと・もの、について、研修をしていただいた。 ※研修会終了後、郷土料理「かきまぜ」「そば米汁」で昼食会を開催 ・那賀町・相生地区にて「エコツーリズム研修会」 行政関係者・観光協会・会員、地域住民の方を中心に参加していただき、飯田市で行われているエコツーリズム・グリーンツーリズムの実例紹介、今後、相生地区でエコツーリズム・グリーンツーリズムを進めるために必要なこと・もの、について、研修をしていただいた。 【3 日目】 ・那賀町役場・エコツーリズム導入担当者にアドバイス

	■2 回目 【1 日目】 ・那賀町内の視察 那賀町内の道の駅、宿泊施設、野外活動センター、町立病院など ・打ち合わせ ※宿泊先・四季美谷温泉の中田料理長とジビエ料理に関する意見交換 【2 日目】 ・那賀町・鷲敷地区にて「エコツーリズム研修会①」 「観光地域づくりとエコツーリズム」をテーマに、エコツーリズムによる観光まちづくりとは、観光まちづくりの進め方、地域資源を活用した観光商品の作り方・売り方、について研修を実施。 ・　那賀町地域交流センターにて「エコツーリズム研修会②」 「観光地域づくりとエコツーリズム」をテーマに、地域資源を活用した観光商品の作り方・売り方、プロモーションの方法、エコツーリズム推進のポイント、について研修・意見交換を実施。

(3) アドバイスの内容

＜第 1 回＞

●町内視察

・関西都市圏からバスで 4 時間かかるという那賀町の立地は、旅行として考えた場合では悪い立地ではない。
・木頭地区に伝わる古代布「太布織」のワークショップ等の伝統文化は、もっと観光資源として活用できる。
・町内を視察しただけでも、多くの体験プログラムを準備・企画できるので、実際に 1 つでも多くの体験プログラムをつくることから始めたら良い。

●研修会

・本物の体験を実現することで、そこに感動が生まれる。 地域の人がインストラクター受入農家として関わり、普段行っていることをそのまま、訪れた学生に体験させることが大切。
・南信州観光公社で実際に行っている、体験型観光の手法を用いたツアー向きプログラム「小京都飯田歴史散策と和菓子探訪の旅」「桜守の旅」を紹介していただき、那賀町でも工夫をすれば様々なプログラムを実施できるとアドバイスいただいた。

＜第 2 回＞

●町内視察

・那賀町内には様々な観光施設・資源が点在しているので、それらを結ぶ工夫が必要である。（拠点づくり、看板の整備、交通手段など）
・観光資源・地域資源として良いものが多くあるので、地域住民がそれらについて自信をもつことが重要。
・四季美谷温泉のジビエ（鹿肉）料理はもっと広めた方が良い。

●研修会

・旅行のスタイルが「団体」から「個人」に変化しており、対象地も「観光地」から「生活地」を求めるようになっている。

・地域における観光まちづくりのキーワードは「住んでよし　訪れてよしの地域づくり」である。
・エコツーリズムは、新たな需要の創造と環境保全を両立させ、持続可能な観光まちづくりを進めるための重要な概念である。
・日本版エコツーリズムでは、これまでの自然保護や環境保全を中心とした動きから、日本古来の伝統的な生活文化や食文化など地域に密着した生活者のライフスタイルのなかでの普及啓発へ領域が広がっている。
・これからの旅行では、「五感に訴えるシナリオづくり」が必要。どこでもできる体験ではなく、そこにしかないもの、そこでしか体験できないものが求められる。
・今後、まずやらないといけないことは、今回集まったメンバーが中心となって、エコツーリズムに取り組む組織をつくること。

(4) アドバイザー派遣実施の効果

●参加者や関係者に与えた効果

那賀町の地域住民のなかでは、もともと「観光」ということにあまり関心がもたれていなかったため、今回のアドバイザー派遣事業により、自分達が住む地域の魅力や地域資源について再発見をすることができた。また、それらをうまく活用できれば観光として成功するのでは？という確信を持つことができた。

●今後の期待される効果

今回のアドバイザー派遣事業がきっかけとなり、町内の観光振興や地域振興に興味があり具体的に何かをしたい、という方々に集まっていただけた。今後は、勉強会の様なグループを発足させることになったため、さらに具体的に活動を推進していく団体に発展することが期待される。

●今後の取り組み

今回のアドバイザー派遣事業がきっかけとなり集まった方々で勉強会の様なグループを結成、町内の地域資源を活用した体験プログラムを整理・企画して、実際に商品化できるように取り組む。

(5) アドバイザー派遣を実施して（地域からの声）

●参考となった事項

那賀町は徳島県内でも不便といわれている山間地に位置しており、地域住民は「こんな不便な山のなかに、わざわざ観光に人が来るはずがない」と考えることが多かったが、今回、アドバイザーの方より、関西都市圏から 4 時間という立地条件は、宿泊を伴う旅行先としてはちょうど良い、地域に残っている様々な本物の地域資源を体験してもらうことに意義がある、というアドバイスをいただき、この地域には自分達が気づいていなかったポテンシャルがあることを知ることができ、今後の取組みに対する意欲が高まった。

●その他感想

今後、アドバイザー派遣事業がきっかけとなり集まった有志グループで、町内の様々な地域資源・観光資源・伝統文化等を活かした体験プログラムを整理・企画して、具体的な取組みへと展開していく。

(6) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

株式会社南信州観光公社　代表取締役社長　高橋　充　氏

●地域におけるエコツーリズム推進の取組の現状と課題

素材は多くあり、意のある人もいるが、それぞれに全体の連携面において難ありと感じている雰囲気があるので、役場主体で窓口を作り事業推進を図る必要がある。

●特に魅力を感じた地域の自然観光資源

・木頭地区蝉谷集落の巨石～清水～杉巨木トレッキングルート
・木沢地区剣山スーパー林道を活用したトレッキング、樹氷
・太龍寺お遍路道(古道)
・那賀川流域の地形地質
その他にも多くの魅力のある資源がありますが、自然に的を絞って厳選した。

●アドバイス（講義等）の概要

南信州での取り組みについて紹介をした後で、主に下記の点について質疑応答も含めて助言をした。

・京阪神地区からバスで 3.5～4 時間というアクセスは、こと教育旅行においてはちょうど良い時間的な距離であるため、旅行会社に対してきちんと分野別に体験できるプログラムを整理し、受付窓口を観光協会に据えて、教育効果の高いプログラムと安心して利用できる受入システムを表現したパンフレットを那賀町として作成して営業を行なえば充分に集客できる。
・民泊は教育旅行市場では大きな要素の一つとなっている。各地区 20 軒、那賀町全体で 80 軒程度の民泊農家ができれば、平均サイズ 4 クラス 160 名(40 班)の学校の受入も余裕を持って受入可能になる。南信州では端から端まで 1.5～2 時間の範囲で 1 校の学校の民泊を受けることもあるが、緊急時も含めてきちんとしたコーディネート体制を取ることができれば広域分散型でも問題無い。
・15 年程前にグリーンツーリズムを行なった地区では、もてなし過ぎによる疲労感ばかりが残ったとの話があり、あくまでも初めて会う人の普段の生活や生産の現場に受け入れてもらい、作業や生活を共に過ごすことで良い交流が生まれるというコンセプトを明確にして、利用者受入先双方が同じ目標に向かうことでそうしたことは軽減される。

●全体構想への取組状況・意向について

全体構想への取組については、特にそれを意識した動きはまだなされていなく、町としてエコツーリズムの推進を目標として掲げ、その窓口の選定を行なうところから始めなければならない段階である。ただ、自然観光資源は豊富で、積極的な地域住民もいるため、そこがクリアされれば大いに期待できる。

●地域に対する印象、今後地域に期待すること（メッセージ）

教育旅行はもちろん、一般団体においてもテーマ旅行には充分に魅力のある素材があるので、町公式の受入窓口を選定し地域への浸透を図りながら事業推進を図ってもらいたい。参考までに、下記に今回の訪問を通じてプログラム化可能と思われる素材を分野別に列挙する。

①スポーツ・アウトドアプログラム

１．乗馬(外乗付)　２．ラフティング　３．カヌー　４．渓流釣り　５．デイキャンプ　　６．キャンプ
７．杉一本乗り　８．川遊び　９．お遍路道登山

②農林業プログラム

１０．田植　１１．花作業　１２．柚　１３．茶摘みとお茶作り　１４．森林営林　１５．野菜植付
１６．野菜収穫　１７．稲刈　１８．農家民泊

③伝統工芸・芸能プログラム(見るではなく、作る・演じる)

１９．紙漉(日帰り)　２０．紙漉(１泊２日)　２１．太布織(古代織)　２２．太布糸作り　２３．草木染め
２４．とんぼ玉作り　２５．人形浄瑠璃体験(農村舞台)　　２６．お遍路講座

④味覚(作られたものを食べるではなく、作って食べる)

２７．はんごろし(おはぎ)作り　２８．柚ジャム作り　２９．柚料理作り　３０．柚味噌作り
３１．コンニャク作り　３２．ジビエ料理(鹿肉)作り

⑤語り部(人に学ぶ)

３３．太龍寺住職法話　３４・３５．Ｕターンの若手経営者の語り(わじき温泉・そわか)
３６．プロが認めたアマチュアカメラマンの生き様を知る(ＫＥＮ‘Ｓカフェにて)
３７．林業家の魂に触れる　３８．県花ジンリョウユリの守人のこだわりに触れる

⑥ガイドツアー

３９．水崎新四国八十八ヶ所廻り　４０．蝉谷清水と巨石巨木トレッキング　　４１．剣山樹氷ツアー
４２．剣山ネイチャートレッキング　４３．滝めぐり　４４．わじき縁日七福神巡り
４５．那賀川地質ウォーク

⑦産業観光(工場・施設見学や、山間部の地域活動を知る)

４６．大塚製薬ワジキ工場　４７．長安口ダム　４８．㈱きとうむら

⑧その他

４９．相生森林美術館と版画教室　５０．おららの炭小屋の取り組みと炭加工体験　５１．吹筒煙火を知る
５２．太龍寺ロープウェイ

株式会社ジェイティービー旅行事業本部観光戦略部長、株式会社 JTB 総合研究所　客員研究員　加藤　誠　氏

●地域におけるエコツーリズム推進の取組の現状と課題

【背景】

那賀町は平成 17 年に 5 町村（鷲敷町・相生町・上那賀町・木沢村・木頭村の丹生谷）合併により誕生した。主に林業で栄えた町村で、昭和 30 年代に約 3 万人弱いた人口も現在では 9,600 名と約三分の一になり、2040 年には 4,000 名まで減少するといわれており、過疎化が進んでいる町だ。

【現状と課題】

旧 5 町村の産業は様々で、米、ゆず、いちご、花き、林業などが生産・加工されている。歴史的に町全体が１、２次産業を生業としてきたため、観光での地域活性化及び地域振興について議論されたことがほぼ無い。那賀町は山間部の田舎町で豊かな自然や棚田や山間地での農村風景、自然と向き合う生活文化が残っている。旧 5 町村には様々な豊かな自然観光資源、アクティビティ、歴史的建造物、近代インフラ建造物があるものの、情報、仕組み等の一元化や共有がされていないことが最大の課題である。また、自然観光素材へのアクセス（インフラ）が整備されていないため、訪れる観光客のマーケットが限定的である。

那賀町観光協会が機能していないことを踏まえ、観光協会が観光における推進母体（プラットフォーム機能）として観光推進の中心的存在になることが重要で、官民一体となった推進が必要である。

●特に魅力を感じた地域の自然観光資源

【太龍寺ロープウエイ】

・21 番札所へ行くためのロープウエイ

・建物、駐車場、食事、土産スペース等が充実しており、ハブ施設としてふさわしい

【那賀川】

・流れの緩急が豊かでラフティング、カヌー等のリバーツーリズムに期待ができ、アクティビティの場としては申し分ない

【トレッキング＆乗馬】

・四季美温泉：「花と山と温泉」ツアー（トレッキング）を実施している

・観光乗馬コルツ：乗馬施設としては珍しく、場外トレッキングが出来る

【歴史・文化】

・農村舞台：人形浄瑠璃の上演

【大驫の滝】

・演出や加工が必要だが、トレッキング道等があり素材としてはすばらしい

【白人神社】

・パワースポットとして面白い

●アドバイス（講義等）の概要

4 つのテーマに沿ってアドバイスを行った。

<u>１）エコツーリズムによる観光まちづくり</u>

旅のスタイルは年々変化し団体旅行隆盛の時代から個人需要へとシフトして来た。つまり観光地ではなく個々に合った「生活地」を求め始めた。住んでよし、訪れて良しのオンリーワン地域を目指すことが必要である。観光街づくりの原点は「地域社会」「地域環境」「地域経済」が偏り無く三位一体で進めて行くことが地域全体を活性化する。三位一体のどこかが欠損すると地域では環境への悪影響も出てくる。そのためにも、消費旅行から環境や地域

に配慮した環境共生型観光への変革が必要である。

持続可能な観光街づくりはエコツーリズム主体者（行政・専門家・観光客・旅行会社）が「環境保全」「資源を生かした観光」「地域振興」を常に意識していなくてはならない。

つまり、日本版のエコツーリズムにおける観光街づくりにおいて、日本古来の伝統的な生活文化や食文化等、地域に密着した生活者のライフスタイルの中で普及啓発を進めなければいけない。

２）観光街づくりの進め方（実践）

地域観光マーケティング推進のステップは下記の通りである。

①地域の推進体制の構築

②役割分担の明確化

③地域観光資源の分析と活用法の整理

④マーケットの把握と対象マーケットの明確化

⑤効果的な商品化・マーケティング活動の実践

地域観光マーケティングには問題点もある。観光関連産業だけではなく、他産業関係者や、地域住民の統一的な推進体制が必要だが、仕組みや組織はあるものの成果が出ないことや、「まち」が一枚岩になっておらず推進リーダーが存在しない等、理想と現実のギャップがある。民間主導で「本気で動ける組織」への意識・体質の改善が急務である。

地域の「観光街づくり」体制のポイントは下記の通りである。

①観光振興へ向けた機運が高まっているか

②地域のビジョン・目的が明確か

③多様な主体と連携しているか

④熱意の溢れたリーダーがいるか

⑤継続的・持続的な事業展開が可能か

⑥中期の事業計画に耐えうる予算が確保されているか

また、役割分担の明確化もしなければいけない。

地域、観光関連組織・団体、市町村、都道府県、国などのステークホルダーがいる中で、観光を通じた地域活性化に向けて地域の事情に基づいて誰が何をやるのか明確な役割分担をして行くことが重要だ。

本来の地域の魅力を再認識することや、観光客目線での評価、住民視点での見直し等、地域を客観的に見直す事も重要である。マーケティングも重要で、狙うべきターゲットを正しく設定し、強みを延ばすための取り組みや、効果的なプロモーションの実施をする事を心がけ、心理的変数での設定、地元をターゲットとすることがポイントである。つまり、地域の生活文化を感じさせ、マーケットニーズに適用し、来訪者目線で効果的なマーケティングの実行が重要である。

３）商品戦略

現在の旅行形態は「モノ消費」から「経験消費」へと変わりつつある。つまり主観的な消費行動から生み出される楽しさ、感動、審美性などが重視される消費の形態だ。

経験経済の考え方では娯楽経験、審美経験、教育経験、脱日常経験などは新たな価値観を形成出来る。この４つの経験こそエコツーリズムで提供できる新たなツーリズム形態である。

地域で得られる本物の情報や限られた情報を与えることにより品質や価格などのスペックではなく、「五感に訴える物語」として旅を創造することが出来るようになる。

商品開発のポイントとして３つある。

①希少性（この旅行でしか体感できない）

②季節性（今しか見ることが出来ない）

③地域性（文化・食・その土地ならでは）

つまり、どこでも出来る体験ではなく、そこにしかないもの、そこでしか体験できないものが求められている。

新たな旅への関心としての事例として、「山ガール」「アニメ聖地巡礼」「歴女」など従来の形態とは異なるまったく新しい旅のニーズが生まれているのが典型的な事例だ。

４）チャネル戦略

地域観光商品販売に向けては２つのステップが考えられる。

①地域型観光を推進するプラットフォーム組織による情報の一元管理

②旅行会社、運輸事業者と連携した顧客獲得戦略

地域統一的な推進体制と本気で動ける意識の高い組織が必要であることから、プラットフォーム組織の構築が何よりも重要である。プラットフォームとは、地域コーディネーター機能である。先にも述べたように主体として、行政、経済団体、各種組合、民間組織、宿泊施設といった多様な業種業態の企業団体が参加した観光街づくり集団のことである。

観光商品の流通経路も視野に入れておかなければならない。

地域独力で販売するにも限界がある。そこで旅行会社のシステム・ノウハウ、輸送業者の活用が有効である。

地域の役割×旅行会社の役割×輸送業者の役割を掛け合わせ、三位一体の協業体制の構築が必要なのである。

５）プロモーション戦略

いくらすばらしい商品が出来たとしても来訪者が増え、地域活性化が図れなければ意味がない。いかに知ってもらいリピーターが増幅して行かなければさらに街は衰退して行く。そこで必要なのがプロモーションだ。

流通する情報は爆発的に増え、且つ情報が「伝わりにくい」世の中にあって「砂漠に看板」にならないために旅行行動ごとのメディアの使い分け、活用方法が重要である。

中でも、メディアへの露出をまずは考えなければいけない。プレスリリースやTV番組、新聞の活用が有効である。但し、言いたいことを発信するのではなく、言いたくさせる内容にすることが最も重要だ。また口コミ発生装置としてソーシャルメディアの活用も考えて行かなければいけない。

●全体構想への取組状況・意向について

那賀町からのレポートでは、全体構想認定について知らないと示されていた。

観光協会が存在するが、強力な推進者が不在である。個別のワーキンググループ単位での活動から始め、いくつかの実績を踏まえた上で行政・民間一体となって全体構想を作り上げて行く必要がある。

●地域に対する印象、今後地域に期待すること（メッセージ）

講義には那賀町の自然観光資源の多さと質の高さに自信をもたれている町の有力者の皆さんが参加された。しかしながら、いくら資源が多く質が高いからといって那賀町に多くの観光客が訪れ、消費し、町の地域活性化が促進できるわけではなく自己満足に終わってしまう。

下記に上げる事項を町全体の課題として議論していただきたい。

①誰にターゲットを置くか（家族旅行、修学旅行、団体旅行等）

②フェノロジーカレンダーの作成

③広報・PR戦略

④データの把握（観光資源/宿泊人員/入場（体験）人員等）を含めたマーケティング

2014年はお遍路開創1,200年だ。那賀町は遍路道であったこともあり、「お接待」文化が根付いている。現代風にいうと「おもてなし」といったところであろう。訪れた方に精一杯ご奉仕する精神がある。これは最高の強みだ。

自然観光資源の多さと質も大事だが最終的には「人」である。那賀町に行ってみたい、交流したい、住んでみたいと思わせることこそが地域交流や、エコツーリズムの原点である。

官民一体となった推進を期待したい。

3-15. 南大隅町ツーリズム推進協議会（鹿児島県南大隅町）

(1) アドバイザー派遣申請の背景

●地域の概要

平成 26 年 3 月現在の人口は、8,386 人となっており、依然として減少が続いているが、減少の速度は 1965 年（昭和 40 年）代ほど急ではなくなっている。10 年間の人口減少率は 10%以上となっており、著しい過疎化に見舞われている。

旧根占町、旧佐多町の両町で構成された南大隅町は、大隅半島の南部にあり、九州本島最南端の佐多岬を有している。

北緯 31 度線を擁する町としては、カイロ、上海、ニューオーリンズ、ニューデリーなどがある。

地形としては、南東側は大隅海峡、西側は鹿児島湾（錦江湾）に面しており、三方を海に囲まれた半島の先端の町であり、西には薩摩半島の指宿市、南には種子島、屋久島等がある。

面積は 214 km²、鹿児島県全体の 2.3%を占めるが、地域内の可住地面積比率は 19%となっている。

東部から半島の中央部にかけて肝属山地が広がり、平地は錦江湾側に多少残されている。また、河川としては、雄川がある。

錦江湾を見下ろす高地にある野尻野地区、大中尾地区では自然の風を利用した風力発電による電力供給がなされている。

本土最南端で、大隅海峡を流れる黒潮の影響もあるため、高温多湿の気候条件にあり、亜熱帯性の植物も多数みられる。

九州本島としては非常に珍しい亜熱帯性の植物等の豊かな自然があることから、霧島錦江湾国立公園、大隅南部県立自然公園の指定を受けている。

●アドバイザー派遣申請の背景・これまでの取り組み

今回のアドバイザー派遣申請の大きな目的は、都市と当該地域の観光を契機とした環境・自然保全の可視化と意識高揚である。

その背景として南大隅町は、霧島錦江湾国立公園内に大部分が含まれ、中でも本土最南端の地「佐多岬」は昭和 40 年代、新婚旅行のルートの一角を形成し賑わいを見せていたが、近年は老朽化した施設が目立ち、あらたなコンセプトをもった再整備が急務となっている。

また、国立公園の特別保護区にある佐多岬のほかにも、「雄川渓谷」や「照葉樹林」などの素材も有しており、

自然資源は豊富に活用できる環境にあると言える。

しかしながら、現在それらの素材が環境・自然保護という観点からの活用がされているとは言い難く、町としては今回の申請でアドバイザーの視点と経験をもって、本町の自然を「体験フィールド」として昇華させたい。

この取組によって南大隅町は環境・景観保全の役割を担う一方で、都市からの来訪者は有償で旅や体験を楽しみながら環境・景観保全に寄与することとなる。

現在、全く素材を活用できておらず、上記の想定される取組を検討するためには「エコツーリズム推進アドバイザー」の存在は不可欠である考えることから、是非とも今回の派遣方へのご高察をお願いしたい。

(2) アドバイザー派遣の概要

日　　時	平成 26 年 3 月 3 日（月）～平成 26 年 3 月 4 日（火）
場　　所	根占地区　大浜海岸・夕日スポット、雄川の滝遊歩道、ミニトマトハウス 佐多地区　佐多岬公園周辺、佐多旧薬園
アドバイザー	株式会社ジェイティービー旅行事業本部観光戦略部長、株式会社 JTB 総合研究所　客員研究員 加藤　誠　氏
参　加　者	【1 日目】 南大隅町ツーリズム推進協議会　計 2 名 【2 日目】 南大隅町ツーリズム推進協議会、南大隅町企画振興課、南大隅町歴史研究会　計 13 名
スケジュール・方法	・ 現地視察のテーマとしては、1 日目～2 日目に佐多岬及び周辺地域の地形や動植物などを現地視察していただき、先進地の事例などをご紹介いただきながら、その自然を活かした体験メニューづくり（佐多岬トレッキング・雄川の滝遊歩道ウォーキング等）のアドバイスを頂いた。 【1 日目】 ・南大隅町海岸線国道沿い全域視察 佐多岬、佐多旧薬園、大浜海岸・夕日スポット 【2 日目】 ・根占地区視察 ミニトマトハウス、雄川の滝遊歩道 ・講演・意見交換会 「今後のエコツーリズム展開（体験メニューづくり）についてアドバイス

(3) アドバイスの内容

●講演・意見交換会

4 つのトピックとして「1. エコツーリズムによる観光まちづくりとは」「2. 観光まちづくりの進め方」「3. 地域資源を活用した観光商品の作り方・売り方」「4. エコツーリズム推進のポイント」を講義いただいた。

（質疑応答）

会員 東幸治郎氏

Q. エコツーリズムの体験メニューを展開するにあたり問題となるのは、人材育成だと思われますがどうしたらよろしいでしょうか？

加藤 誠氏

A. 非常に難しい問題ではあるが、現在、観光振興計画を町で策定していると聞いているが、計画の中で取り入れ

て、行政が予算化することが近道である。また、あらゆる補助制度があるので、ぜひ利用してほしい。とにかく、時間とお金をかけるしかありません。

南大隅町のように半島の先端で海に囲まれていることから、伊豆半島で行われているようなシーカヤックを活用したメニューを作っていくこともよいのではないでしょうか。

また、サイクリストを対象とした商品を考えることも大切である。たとえば、「ツールドおおすみ」等のなかでエコ学習にふれるような内容を組み入れる等が必要となるでしょう。

南大隅町役場 原主査

Q. エコツーリズム商品を展開するにあたりどのようなサイクルで内容更新をしたほうがよろしいのでしょうか？

加藤 誠氏

A. エコツーリズムを求めるお客様も一般のお客様も飽きやすいので、徐々にエコ学習ができる内容を付け加えていくことが重要となってきます。さきほど述べた両方のお客様も1回は来るかもしれないが、さらに2回目来たくなるようなエコ学習とストーリーを考えていかなければならないと思います。

●現地視察

加藤 誠氏 全体を通してのコメント

視察した箇所は全てすばらしい場所ではあるが、そこまでの2次アクセスがどうしても不便である。町としては、不便でも来る価値をもたせるストーリーを考えなくてはならないと思う。すばらしいが難しい素材だと考える。伊豆半島等の先進地事例を学んでみては。

現地視察「ミニトマトハウス」

現地視察「雄川の滝遊歩道」

現地視察「雄川の滝遊歩道」

現地視察「大浜海岸・夕日スポット」

講演・意見交換会①

講演・意見交換会②

(4) アドバイザー派遣実施の効果

●参加者や関係者に与えた効果

まったくと言っていいほど、観光に関する知識・考え方がない参加者に対して、講義により、現在の観光を取り巻く状況・観光まちづくりの基本・エコツーリズムの進め方等を基礎から講義いただいたことにより、参加者はエコツーリズムに対する考え方の基本を習得した。

●今後の期待される効果

講義や現地視察の中でよく出てきていた「シーカヤック」を利用した体験・サイクリストへの案内等の実現に向けて今後の観光振興計画策定への反映等を行うこととなった。

●今後の取り組み

今後の取り組みとしては、講義・現地視察でのアドバイスを反映した体験メニューの開発・エコを含むツーリズム商品の造成を行う内容を観光振興計画に反映させ、実施していくこととしている。

(5) アドバイザー派遣を実施して（地域からの声）

●参考となった事項

講義内容のすべてが、まだ、エコツーリズムに対しての基本的な考え方ができていなかったので、非常に参考になった。また、加藤氏のご指摘により南大隅町にある自然素材の素晴らしさを再確認できたので、今後のそれぞれの素材をつなげる学習内容を考えていきたいと考える。

●その他感想

全体を通して、エコツーリズム商品への商品化という視点でお話いただいたことにより、より具体的にターゲットを意識して体験メニューの検討を行うことができた。

(6) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

株式会社ジェイティービー旅行事業本部観光戦略部長、株式会社 JTB 総合研究所　客員研究員　加藤　誠　氏

●地域におけるエコツーリズム推進の取組の現状と課題

【背景】

南大隅町は、昭和 40 年代南九州への新婚旅行がブームとなり、宮崎県と並ぶ新婚旅行のメッカであった。街の川沿いには数十軒の旅館が立ち並び、観光客で街は繁栄し財政的にも潤っていた。しかし昭和 50 年代以降、各地域での観光地の魅力作りが盛んになった事や、国内旅行の一般化、海外旅行への憧れが重なり年間 20 万人いた来訪者が年々減少し続けた。

定住人口においても、現在では約 8 千人と昭和 40 年代と比べ半数に落ち込み、過疎化と共に高齢化も著しく進行し、町全体で 43.3%と県平均の 26.5%を大きく上回っている。

【現状と課題】

南大隅町には、観光資源の宝とも言える九州本島の最南端「佐多岬」がある。他に「雄川渓谷」や「照葉樹林」など自然豊かなグリーンツーリズム素材を有している。また、海水浴場や、水中展望船の運航、カヌー等のブルーツーリズム素材も多く有している。グリーンツーリズムとブルーツーリズムが同時に体験出来るエコツーリズムには絶好のロケーションにある。しかしながら、それらの素材が環境・自然保護の観点から利活用されているとは言い難い。

「佐多岬公園線」は 24 年 10 月から南大隅町の町道として共用開始され、緩やかではあるが一般来訪者数も拡大し始めた。

唯一、25 年度は 5 校 157 名の教育旅行の民泊の受け入れをし、エコツーリズムとして展開しているが拡大して行くには様々な課題が残っている。

各施設や、道路、遊歩道等のハード面と、人材教育や体験プログラム、素材などのソフト面の両面の整備が必要であり、何よりエコツーリズム推進のためのプラットフォーム作りが急務である。

●特に魅力を感じた地域の自然観光資源

【佐多岬展望台】

・九州本島最南端である事
・2 年後に遊歩道の整備が終わる事
・町道の「佐多岬公園線」は 24 年 10 月から南大隅町の町道として無料化された事

【大浜海岸】

・錦江湾に沈む夕日と開聞岳のコントラストは感動に値する
・年に数回見ることが出来るダイヤモンド開聞岳への期待

【雄川の滝遊歩道・滝見大橋】

・CM にも起用された事もあるこの滝はこの町随一の絶景ポイント
・26 年 9 月に整備完成予定のトレッキング道（約 1.2km）

●アドバイス（講義等）の概要

4 つのテーマに沿ってアドバイスを行った。

１）エコツーリズムによる観光まちづくり

旅のスタイルは年々変化し団体旅行隆盛の時代から個人需要へとシフトして来た。つまり観光地ではなく個々に合った「生活地」を求め始めた。住んでよし、訪れて良しのオンリーワン地域を目指すことが必要である。観光街づくりの原点は「地域社会」「地域環境」「地域経済」が偏り無く三位一体で進めて行くことが地域全体を活性化する。三位一体のどこかが欠損すると地域では環境への悪影響も出てくる。そのためにも、消費旅行から環境や地域に配慮した環境共生型観光への変革が必要である。

持続可能な観光街づくりはエコツーリズム主体者（行政・専門家・観光客・旅行会社）が「環境保全」「資源を生かした観光」「地域振興」を常に意識していなくてはならない。

つまり、日本版のエコツーリズムにおける観光街づくりにおいて、日本古来の伝統的な生活文化や食文化等、地域に密着した生活者のライフスタイルの中で普及啓発を進めなければいけない。

２）観光街づくりの進め方（実践）

地域観光マーケティング推進のステップは下記の通りである。

①地域の推進体制の構築
②役割分担の明確化
③地域観光資源の分析と活用法の整理
④マーケットの把握と対象マーケットの明確化
⑤効果的な商品化・マーケティング活動の実践

地域観光マーケティングには問題点もある。観光関連産業だけではなく、他産業関係者や、地域住民の統一的な推進体制が必要だが、仕組みや組織はあるものの成果が出ないことや、「まち」が一枚岩になっておらず推進リーダーが存在しない等、理想と現実のギャップがある。民間主導で「本気で動ける組織」への意識・体質の改善が急務である。

地域の「観光街づくり」体制のポイントは下記の通りである。

①観光振興へ向けた機運が高まっているか
②地域のビジョン・目的が明確か
③多様な主体と連携しているか
④熱意の溢れたリーダーがいるか
⑤継続的・持続的な事業展開が可能か
⑥中期の事業計画に耐えうる予算が確保されているか

また、役割分担の明確化もしなければいけない。

地域、観光関連組織・団体、市町村、都道府県、国などのステークホルダーがいる中で、観光を通じた地域活性化に向けて地域の事情に基づいて誰が何をやるのか明確な役割分担をして行くことが重要だ。

本来の地域の魅力を再認識することや、観光客目線での評価、住民視点での見直し等、地域を客観的に見直す事も重要である。マーケティングも重要で、狙うべきターゲットを正しく設定し、強みを延ばすための取り組みや、効果的なプロモーションの実施をする事を心がけ、心理的変数での設定、地元をターゲットとすることがポイントである。つまり、地域の生活文化を感じさせ、マーケットニーズに適用し、来訪者目線で効果的なマーケティングの実行が重要である。

３）商品戦略

現在の旅行形態は「モノ消費」から「経験消費」へと変わりつつある。つまり主観的な消費行動から生み出される楽しさ、感動、審美性などが重視される消費の形態だ。

経験経済の考え方では娯楽経験、審美経験、教育経験、脱日常経験などは新たな価値観を形成出来る。この 4 つの経験こそエコツーリズムで提供できる新たなツーリズム形態である。

地域で得られる本物の情報や限られた情報を与えることにより品質や価格などのスペックではなく、「五感に訴える物語」として旅を創造することが出来るようになる。

商品開発のポイントとして３つある。

①希少性（この旅行でしか体感できない）

②季節性（今しか見ることが出来ない）

③地域性（文化・食・その土地ならでは）

つまり、どこでも出来る体験ではなく、そこにしかないもの、そこでしか体験できないものが求められている。

新たな旅への関心としての事例として、「山ガール」「アニメ聖地巡礼」「歴女」など従来の形態とは異なるまったく新しい旅のニーズが生まれているのが典型的な事例だ。

４）チャネル戦略

地域観光商品販売に向けては 2 つのステップが考えられる。

①地域型観光を推進するプラットフォーム組織による情報の一元管理

②旅行会社、運輸事業者と連携した顧客獲得戦略

地域統一的な推進体制と本気で動ける意識の高い組織が必要であることから、プラットフォーム組織の構築が何よりも重要である。プラットフォームとは、地域コーディネーター機能である。先にも述べたように主体として、行政、経済団体、各種組合、民間組織、宿泊施設といった多様な業種業態の企業団体が参加した観光街づくり集団のことである。

観光商品の流通経路も視野に入れておかなければならない。

地域独力で販売するにも限界がある。そこで旅行会社のシステム・ノウハウ、輸送業者の活用が有効である。

地域の役割×旅行会社の役割×輸送業者の役割を掛け合わせ、三位一体の協業体制の構築が必要なのである。

５）プロモーション戦略

いくらすばらしい商品が出来たとしても来訪者が増え、地域活性化が図れなければ意味がない。いかに知ってもらいリピーターが増幅して行かなければさらに街は衰退して行く。そこで必要なのがプロモーションだ。

流通する情報は爆発的に増え、且つ情報が「伝わりにくい」世の中にあって「砂漠に看板」にならないために旅行行動ごとのメディアの使い分け、活用方法が重要である。

中でも、メディアへの露出をまずは考えなければいけない。プレスリリースや TV 番組、新聞の活用が有効である。但し、言いたいことを発信するのではなく、言いたくさせる内容にすることが最も重要だ。また口コミ発生装置としてソーシャルメディアの活用も考えて行かなければいけない。

●全体構想への取組状況・意向について

南大隅町からのレポートでは、全体構想認定の取り組み意向は無いと示されていた。

民間を中心に協議会立ち上げを早期に実現し、まずは実績を踏まえた上で行政・民間一体となって全体構想を作り上げて行く力と熱意はあると感じた。

●地域に対する印象、今後地域に期待すること（メッセージ）

昭和 40 年代に 20 万人が訪れた街とは思えない程街の人口は減少し、高齢化が進み活気は感じられなかったが、嘗ての繁栄期を知る年配者と街の活性化を願う若手が手を組み、エコツーリズムを通じた地域活性化に取り組もうとしている「熱意」は他地域とは比べ物にならないほどの意気込みを感じた。

グリーンツーリズムとブルーツーリズムの素材を多く有しているが、ハード面（観光地、宿泊施設・道路・遊歩道）の老朽化対策と、ソフト面の強化（おもてなし・人材育成）が必要だ。観光に対するステージとしては胎動期である。最優先課題として推進母体としてのプラットフォーム作りが急務と考える。

最後に、地域におけるエコツーリズム推進のポイントを常に自問して欲しい。

①南大隅町の文化・歴史をプログラムの中で「経験」として伝えられているか

②南大隅町ならではの「過ごし方」を仕組みとして提供できているか

③地域の歴史・風土を「物語」として伝えられているか

④「五感」をフル活用させる体験を提供できているか

⑤「経験（体験）」を通じて「思い出に残る出来事」に出来ているか

エコツーリズムは地域の生業や暮らしを体験させ、地域の本当の価値を伝える重要な手段となり、「地域ブランド」作りに繋がることを常に心に留め、地域一体となってエコツーリズム推進に邁進して欲しい。

3-16. 奄美群島広域事務組合（鹿児島県徳之島）

(1) アドバイザー派遣申請の背景

●地域の概要

徳之島は奄美大島の南西に位置し，名瀬港から同島の主要港である亀徳港まで航路距離で 109km の地点にある。周囲 89.1km，面積 247.77km^2 の島で，耕地面積が全面積の 28%（6,880ha），林野面積が 43.3%（10,724ha）を占めている。人口は約 25,000 人で，徳之島町，天城町及び伊仙町の 3 町で一島を形成している。

奄美大島に次ぐ大きな島で，中・古生層や一部火成岩類よりなる基盤岩類がほぼ全域にわたって広く分布し，山岳としては井之川岳（645m）を主峰とする山脈が島の中央を走り，島を東西に両断している。河川の主なものに，秋利神川があり，西海岸に注いでいる。海岸線は単調であるが，沿岸にはリーフが発達している。

総面積は奄美大島の 3 分の 1 に過ぎないが，耕地面積は群島中最大で，さとうきびを主体に野菜，畜産（肉用牛）との複合経営の農業が営まれている。さとうきびの生産額は群島総生産額の 48.9%を占め，また畜産も群島の 44.0%を占めている。

自然は，猛毒で知られているハブや，天然記念物として保護されているアマミノクロウサギ，トクノシマトゲネズミ，オビトカゲモドキ，徳之島の固有種であるハツシマカンアオイ，トクノシマエビネなど，貴重な動植物が多く生息している。

【平成 24 年度奄美群島の概況より抜粋】

●アドバイザー派遣申請の背景・これまでの取り組み

奄美群島では平成 26 年度中の国立公園指定および世界自然遺産登録を見据え，豊かな自然や固有の文化などの自然観光資源を活かした高品質なエコツアーの提供と着地型観光の推進を目指し，エコツーリズム推進協議会やエコツアーガイド連絡協議会等の組織整備やエコツアーガイド認定制度及びエコツーリズム推進全体構想の策定について検討がされているところである。

本事業の対象地域である徳之島においては，平成 25 年 8 月に徳之島エコツーガイド連絡協議会が発足され，観光客への印象形成をする観点からツアー造成を検討しているが，エコツーリズムをどのように捉え，どのような仕組みをつくればよいか，どうすればエコツアーを地域から生み出せるか試行錯誤しているのが現状である。

本事業を導入することにより，宝の 5 分野（「自然」「生活の知恵」「歴史」「産業」「人」）を発掘し，地域における自然と人間の関わりを季節の移り変わりに表現するフェノロジー・カレンダーを作成し，季節毎に何を見せるのかを考えることにより今後のツアー造成に繋がり，徳之島エコツーリズムの確立を目指す。

(2) アドバイザー派遣実施の概要

日　　時	平成 26 年 2 月 22 日（土）～平成 26 年 2 月 25 日（火）
場　　所	徳之島一円
アドバイザー	文教大学　国際学部　教授　海津　ゆりえ　氏
参　加　者	徳之島エコツアーガイド連絡協議会、徳之島エコツーリズム推進協議会、徳之島町役場地域営業課、伊仙町役場企画課、奄美群島広域事務組合
スケジュール・方法	【1 日目】 ・ヒアリング ふり茶（伊仙町西犬田布） ・ナイトツアー参加 山クビリ線（徳之島町）、当部林道（天城町）～母間林道（徳之島町） 【2 日目】 ・フェノロジー・カレンダー作成 【3 日目】 ・ヒアリング 芭蕉布（伊仙町目手久）、まち歩き（伊仙町伊仙）、塩づくり（伊仙町西犬田布）、黒糖づくり（伊仙町犬田布）、闘牛（伊仙町目手久） ・フェノロジー・カレンダー仕上げ 【4 日目】 ・ヒアリング 黒糖焼酎造り（徳之島町大原）

ふり茶

役所跡地の石積み

製糖工場

徳之島の日常（闘牛散歩）

(3) アドバイスの内容

本事業は，フェノロジー・カレンダーを作成することを目的に実施したが，あくまでも作成がゴールではなく，作成までの過程を知ることが重要であることから，ヒアリングを通じ宝の背景を探る手法を学んだ。アドバイザーには，「フェノロジーから始めるエコツーリズム」と題し，講演をいただき，実際にフェノロジー・カレンダーの作成を行った。

作成状況

(アドバイザーのコメント)

・地域発観光とは「価値」を伝え，来訪者の「旅」の体験に変え，継承することであり，価値の受け売りから「自分語り」が重要。

・エコツーリズムの主体となる人々が宝を探すことが必要であり，宝探しを続けるしくみが必要。

・活動の公表を行い，情報の共有を図ること。

（報告会を重視し，地域全体へのフィードバックを行うことが重要）

(4) アドバイザー派遣実施の効果

●参加者や関係者に与えた効果

エコツーリズムを推進するにあたり地域の資源を発掘し活用する仕組みである宝探しがいかに重要かを再認識することができた。また，地域の方々へのヒアリングを通じ，宝（点）と宝（点）が密接な関係で結ばれている（線になる）ことや，地域の成り立ちも自然が作り上げてきたことへの気づきとなった。

●今後の期待される効果

現在は，コアなメンバーでの活動が中心ではあるものの，ヒアリングをとおし地域の方々へスポットがあたりフェノロジー・カレンダーで『見える化』することにより地域の自信に繋がり，ひいては，エコツーリズムにおいて非常に重要である地域自身が地域を主的にマネジメントすることが期待される。

●今後の取り組み

フェノロジー・カレンダーを作成し『見える化』することにより今後，エコツアーコースの造成も活発化し，ガイダンスも宝の背景を知ることにより充実したものになる。

(5) アドバイザー派遣を実施して（地域からの声）

●参考となった事項

・改めて地域主導によるエコツーリズムを推進することが重要かを実感した。
・身の回りにある当たり前のものにスポットを当てることで，今まで気づかなかったことに気付き，活用の方法が色々見いだせた。

●その他感想

・日本には，四季があり，その季節の移り変わりとともに自然や，食べ物，産業，行事などとうまい具合に繋がっていることは，分かっているようで分かっていなかったので，再認識する機会となった。
・フェノロジー・カレンダーにすることで，エコツアーガイドに不慣れな人にもうまく島のエコツアーを伝えることができ，実践することが可能だと感じた。
・海津先生をはじめゼミの学生の反応は，今後エコツアーを進めていくうえで大変参考になった。旅人は何を求めて旅するのか？その答えは「非日常の出来事からの刺激」なのだと感じた。
・私達の身の回りにある全てが，活用の方法次第でエコツーリズムに結び付けられると感じた。

(6) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

文教大学　国際学部　教授　海津　ゆりえ　氏

●地域におけるエコツーリズム推進の取組の現状と課題

奄美群島は平成 26 年度の世界自然遺産への登録をにらんで、指定後の観光推進の方向性を「エコツーリズム」とし、現在、エコツーリズム推進法による認定地域取得に向けて群島一丸となって整備を進めているところである。群島 12 市町村にわたる有人 9 島のうち、既に奄美大島、徳之島、沖永良部島にはガイド連絡協議会が結成され、群島全域にまたがる「エコツーリズム推進協議会」も今年度末に設立される予定である。

今回のアドバイザー事業派遣先の徳之島は、NPO 法人「虹の会」を中心に、地域資源の掘りおこしと、宝を伝える活動（ガイド）を行っている。事業化できているわけではないものの、同会の活動によって徳之島の自然資源が数多く顕在化している。メンバーは徳之島 3 町におり、役場職員やガイドなど多様な職種の人材が関わっている。

●特に魅力を感じた地域の自然観光資源

徳之島は自然と結びついた数多くの自然観光資源を有している。昨年度は、伊仙町の阿権集落の屋敷と、犬田布岬の海岸に広がる地質（メランジ）、アマミノクロウサギの観察小屋等を視察した。今回のアドバイザー事業でもヒアリングを伴う現地視察を住民とともに実施した。総じて徳之島は有形の自然資源、無形の文化資源とも豊かに持ち、かつ担い手や継承しようとしている人々がいることが明らかとなった。以下に主な資源を挙げる。

・アマミノクロウサギ住む森

徳之島は絶滅危惧種アマミノクロウサギが生息する島であり、同種が生息するのは奄美大島と徳之島のみである。徳之島は奄美大島に比べて生息面積は 10 分の 1 の約 33km²、個体数は奄美大島で 2,600～6,200 頭、徳之島で 120～300 頭と推定されており（生物多様性センターHP）、極めて少なくその希少性は奄美大島に比べて高い。現在、自然林の伐採、林道建設、河川改修、移入捕食者（マングース、イヌ、ネコ）がその存続を脅かしているとされ、徳之島ではアマミノクロウサギ保護施設を設けて普及啓発と保全の呼びかけに努めている。生息地はフェンスで仕切られて保護され、天城町にあるアマミノクロウサギ観察小屋では、モニターカメラによる生息地の観察ができる。夜行性のクロウサギを見るナイトウォッチングを案内するガイドもおり、生息エリアに細心の注意を払いながらツアーを実施している。

・「振り茶」文化

ふり茶とは、コミュニティの人々が集い、茶飲み話をする習慣であり、そのさいに飲む茶と作法をさす奄美独特の生活文化である。ふり茶は各家庭にあった囲炉裏端で振舞われ、茶と菓子や旬の野菜や漬物などつまみになるものを出した。農作業の合間や天候不良時の時間つぶしの「なぐさみ」で、茶の入れ方も茶道のように形式ばったものではなく、服装や作法も決まっていない。茶の入れ方は独特である。手桶にほうじ茶と玄米を合わせて淹れた茶を入れ、手製の大きな茶筅で勢い良く泡立てる。その茶を波打たせながら泡ごと茶碗に注ぎ、いただいた方は両手で茶碗をもって感謝しながら飲む。飲み干したらまた継ぎ足し、延々と時を過ごす。

西犬田布にお住いの明司シヅエさん（88 歳）は、その文化を次世代に継承するために、自宅に囲炉裏をこしらえ、月に 2 回、公民館でふり茶講座の講師を務めている。西犬田布集落の人々はほとんどがふり茶を振舞えるようになっているが、若い人々にはまだ伝えきれていないとのこと。伝え残していきたい徳之島の文化である。

写真①・ふり茶を点てる明司シヅエさん

・芭蕉布づくり

奄美群島にはもともと大島紬という染織文化があるが、芭蕉布は高価な紬と対極にある庶民の布である。素材が軽くて通気性がよく、南国・奄美の気候風土に合った布であった。かつて奄美群島のどの島でも野良着として織られ、使用されてきた。かつては伊仙町では大正時代まで泥染めや藍染めなどを行っており、昭和に入るまで、女性はとついだら染織を始める習慣があった。徐々に工業製品に置き換わり芭蕉布が織られることはなくなっていった。芭蕉布の継承に危機感をもったすみこさんは、12 年前から芭蕉布の再興に取り組み始めた。島に残る織機を 12 台集め、現在も芭蕉布づくりに取り組んでいる。

芭蕉は 2 月に切り倒して皮をはぎ（うーはぎ）、糸作り（うーあみ）を行う。一着の着物を織り上げるのに 20 本の芭蕉が必要であり、男女共同作業でなければ一人でできるものではない。織機は沖縄の機械とは異なる奄美特有の形をしている。

写真②・染織家當すみこさん

写真③・芭蕉布のスディナを羽織る

・黒糖づくり（徳南製糖）

奄美では薩摩藩の政策により、1610 年頃からサトウキビ栽培と製糖に取り組んできた。かつての水田をつぶし、次々とサトウキビ畑に置き換えていった。サトウキビは徳之島では天城町で主に生産されているが、現在は大規模農家が増えたため、ハーベスターを導入して刈り農家が増え収量の 90%に上る。サトウキビは暑すぎず、寒くない気候が適しており、奄美群島はちょうどよい環境条件を有する。サトウキビの刈り取りは 12 月末から 3 月までである。

徳南製糖はその中にあって、現在も手刈りによるサトウキビだけを仕入れ、手作業で黒砂糖を製造する製糖会社である。昭和 47 年に創業し、現在二代目の社長が運営している。純度が高い製品はそのまま食用の他、菓子の原材料などにも使用されている。年間 500 トンの原料サトウキビを仕入れ、50 トンの製品砂糖を出荷する。10 トンはのど飴の「那智黒」、天野商店に 20 トン、島外に 13 トン、島内 7 トンの比率である。10 名のスタッフで運営されている同社の黒糖製造過程は昔ながらの手法であり、見学者が絶えない。しかし、機械化が進む中で、手刈りによるサトウキビの収穫がいつまで存続するかが危ぶまれている。

写真④・黒砂糖の製造工程

写真⑤・徳南製糖前にて。右から 2 人目が社長

・黒糖焼酎（西川酒造）

徳之島には黒糖焼酎の醸造所が数多いがそのうちの一つで「島のナポレオン」等を産している。山中にある醸造所は、水の採取ができ、大規模工場を立地できる場所として選定された場所に建っている。製造工程の公開を行っ

ており、見学者も絶えない。島のサトウキビを活用しており、丸ごと徳之島の地産商品といえる。

写真⑥・黒麹、白麹など条件が違う仕込み樽が並ぶ

・泉

日本一の長寿者である故・泉重千代さん宅の裏にある泉は、現在は農薬等が混入し、飲用にはできないが、もとは集落の水場であった。山中を 12km にわたってくりぬいて掘られた水路が原型である。今もその手掘りの後を岩盤に見ることができる。「水を得る」苦労を知ることができる場所であるが、日本一の長寿を支えた水としてとらえると、徳之島の力を知る場所としてとらえることもできる。

・福木とサンゴ石垣の家並み

今は少なくなった、ということであったが隆起サンゴを使った石垣と福木に囲まれた家並みが、今でも残されている。もとは屋敷と畑を囲んでいた垣とのことであるが、耕作をしなくなった家では、畑は庭のようになっており、広大な庭付き住宅のようである。屋敷の由来を伺っても、正確な年数はわからないほど歴史のある家並みである。今後、丁寧に掘り起こしていくことによって、徳之島の人の歴史が見えてくると思われる。

・塩づくり（ましゅ屋）

徳之島では塩を「ましゅ」という。ましゅ作りは生活と切り離すことができない、伝統的な作業である。ましゅ屋はこれを生業とし、製品（塩）の販売と塩づくりのワークショップ、集落内の古民家を借りた地産池消型レストランを営んでいる。

ましゅづくりの工程は、潮汲み→煮つめる→濾す（にがりと塩を分ける）→乾燥である。塩にも時期によって塩分濃度の違い等が現れる。できたての塩は、にがりを含んでほろ苦く甘い。島の野菜や料理との相性がとてもよい。

写真⑦（左）・工程を経て塩になってゆく

写真⑧（右）・塩を絞ってそこにたまったものが「にがり」。なめると苦い！

・徳之島コーヒー

犬田布岬のカフェのオーナーが農園主となり、30 年前に栽培を始めたのが徳之島コーヒーの始まりである。風に弱いコーヒーの木を台風等から守り、収量をあげるのは並大抵の努力ではなく、カフェで出せるようになるまで

20 年以上を費やした。今は収穫した豆によって 5 月から数か月間、店に出せるようになった。

創始者の吉玉さん（カフェオーナーのご主人）は、地域の宝とすべく組合を作り、数軒の人々がコーヒー栽培に携わっている。

●アドバイス（講義等）の概要

今回のアドバイザー事業は、2 月 22 日～25 日までの足かけ 4 日間となった。主たる目的は徳之島における「フェノロジーカレンダー」づくりと、フェノロジーを通してみた徳之島の資源の再認識、自然観光資源の視察である。フェノロジーカレンダーづくりは 23 日に集中的に行い、視察は 22 日と 24 日、25 日を使用して実施した。

（1）フェノロジー・カレンダーづくりワークショップ

ワークショップの流れは以下の通りである。

1）フェノロジーについての説明

フェノロジーとは季節暦の意味である。生物学用語であり、元々は動植物の一年間の生活史を指しているが、環境庁（当時）が西表国立公園においてエコツーリズム推進基盤整備調査事業を開始した 1991 年度において、資源調査の結果をとりまとめる際にこの概念を導入し、地域の自然資源、人文資源全般の通年暦に整理した。筆者とエコツーリズムアドバイザーの真板昭夫氏（京都嵯峨芸術大学）が、その当事者である。昨年度の徳之島におけるアドバイザー事業の際に、フェノロジーについて紹介をしたところ、次年度においてフェノロジーの作成を実施したい旨希望があり今回の運びとなった。

冒頭では宝探しによる資源抽出と、空間的整理、時間的整理、エピソード整理による宝の立体化を住民が行うことの大切さを説明した。

2）季節の資源出し

宝の 5 分類を用い、自然・生活文化・歴史・産業について A 班：自然＋生活文化＋歴史、B 班：産業・名人に分かれてグループワークにより宝の抽出を行った。あらかじめ用意した長さ 250cm、幅 90cm の特大暦フォーマットに書き込み・付箋貼付により書き込みを行った。また、作業過程でメンバーが話す言葉を拾い、アシスタントの学生たちが記録した。作業中のフェノロジーカレンダーの作業シートは写真の通りである。

写真⑨　次々に書き込む

3）総覧とディスカッション

出来上がった各班のフェノロジーシートを並べて各グループごとに結果を発表し、互いにコメントを加えたり、縦方向のつながりを論じ合ったりして、フェノロジーカレンダー作業シートを補完した。「徳之島を知っているつもりだったが、全然知らなかった」「みんなすごく詳しい！」「ある人が知っていることはほかの人は知らなかった」「子供たちに伝えたい」などの感想が飛び出した。

また当初の参加者にはいなかった専門分野である「食」については、翌日のワークショップの際に名人（参加者

の一人の親戚）を招き、フェノロジーづくりに協力していただくなど、臨機応変に展開した。

（２）名人リストづくり

宝の 5 分類の 5 番目にあたる「名人」については、人物名、分野、居住地、およその年齢などを挙げ、リスト化した。約 50 名の名人がリストアップされた。

（３）自然観光資源視察

徳之島を代表する以下の資源について、ヒアリングを伴う現地調査を実施した。目的は、フェノロジーカレンダーに掲載されている資源の中にある徳之島らしさを表す代表的な宝が存在することに島民が気づくこと、宝にまつわるバックグラウンドストーリーや歴史、担い手、作業工程などをガイド役となる住民が学ぶことによって、ガイドに深みが出ることを体験してもらうことである。訪問先は以下の通りである。詳細は前項に記したとおりである。

・宝：芭蕉布づくり　　訪問先：染織家（個人）宅
・宝：黒糖づくり　　訪問先：徳南糖業
・宝：塩づくり　　訪問先：ましゅ屋
・宝：闘牛　　訪問先：なくさみ館

写真⑩（上左）・夕方になると闘牛を散歩させる風景が方々で展開される
写真⑪（上右）・闘牛名人の役場職員・遠藤要さん。闘牛をこよなく愛している。
写真⑫（下）・地域情報発信館として整備された伊仙町闘牛場「なくさみ館」

（４）総括

今後の展開として、同様の手法で他地域のフェノロジーを作ることができること、作って終わりではなく、活用した上でのプログラムづくりなどに応用することが重要であることなどを伝えた。作業の結果は事務局の奄美群島広域事務組合にてとりまとめ、フィードバックを行う予定である。

●全体構想への取組状況・意向について

徳之島は奄美群島全域 12 市町村をカバーする奄美群島エコツーリズム推進協議会の加盟島の一つであることから、全体構想への取り組み状況などは奄美群島全域に関して述べる。

奄美群島は現在、環境省主導の政策により、国立公園の指定、世界自然遺産登録（琉球弧）等に向けてロードマップの中にある。2013 年 8 月に奄美群島エコツアーガイド連絡協議会（会長：美延睦美（徳之島在住・虹の会会長））が立ち上がり、2014 年 3 月 28 日に奄美群島エコツーリズム推進協議会が設立する予定である。同協議会は主要 5 島（奄美大島、徳之島、喜界島、沖永良部島、与論島）に各支部を置き、また同島群にはエコツアーガイド連絡協議会を設けて連携を図るとしている。（図１）

各島とも複数の基礎自治体を含んでおり、全体で 12 市町村に分かれている。群島は、上記の国立公園や世界自然遺産登録に先立ってエコツーリズム推進協議会を結成し、推進法に基づく認定地域となることを目指している。すでに全体構想の作成は終盤を迎えており、ドラフトが完成している。協議会では基本構想は群島をまとめて一つのものとし、12 市町村の首長が連名で署名を行うものを想定している。このような形態は他地域では未だ見られないが、今後、島しょ地域でエコツーリズム推進協議会を結成し、構想書を策定する際のモデルとなると言えよう。

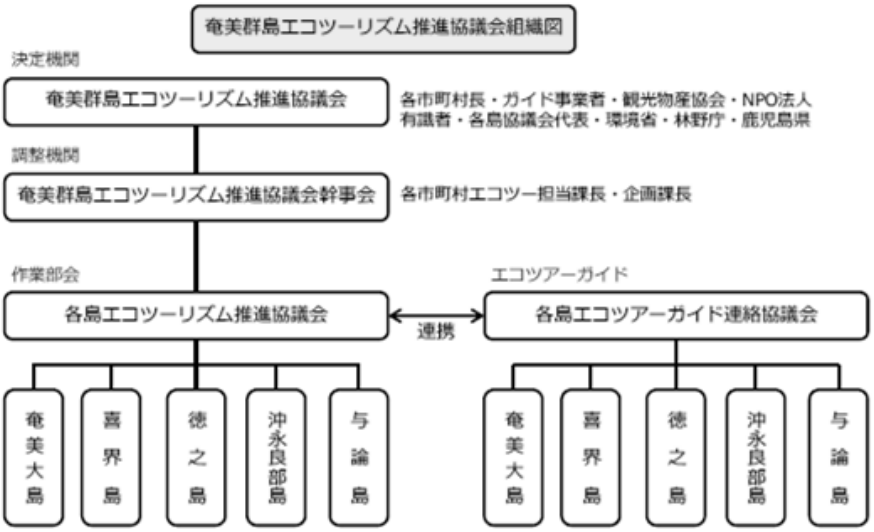


図１　奄美群島エコツーリズム推進協議会組織図

現実的には、上図 5 島は一様なエコツーリズムへの取り組み状況であるとはいえない。奄美大島は既に多くのエコツアー事業者やガイドがおり、ガイド事業先行型である。昨年度訪問した住用村のように、住民主導によるエコツーリズム推進をめざす地区もあるが、住民による案内とエコツアーガイドを区別する動き等も見られるようであり、住民とガイドの連携の在り方が課題となっている。

徳之島は前述したように、住民や NPO の活動が活発で、個人ガイドも NPO のメンバーとなるなど、地域住民とガイド事業者の連携は比較的スムーズである。地域で受け入れるエコツアーサイトとして、徳之島はモデルとなりうると考えられる。

●地域に対する印象、今後地域に期待すること（メッセージ）

2 年続けて奄美群島にアドバイザーとして伺った。経年での印象も含めて述べる。

（１）徳之島の深い文化

昨年度は 2 島を対象としていたため、徳之島での滞在時間も短く、資源の掘りおこしを踏まえたアドバイスには

至らず、入口部分の講義と意見交換にとどまった。今年はフェノロジーづくりのワークショップを通して、徳之島の多様な宝に少しでも触れることができた。それらを踏まえて、まず言えることは徳之島の文化はとても奥深いということである。自然を糧とし、与えられた資源として培ってきた生活様式やまちなみ、生業などが、時代とともに少しずつ姿を変えながら現在に引き継がれてきていることがわかる。

サンゴ石垣やフクギに縁どられた集落、集落のシンボル樹・ガジュマル、島でとれた原料を島で加工して作る黒砂糖や塩、焼酎、コーヒーなど拾い上げていくとまだ無数に出てくるであろう。再興に努める人々がいる芭蕉布も含めて、島の生活が自然の恵みに支えられていることがよくわかる。食もまた自然の恵みや季節と深い関わりがあり、海の幸・山の幸を巧みに使い、新たな産品も次々と生まれている。その背景には、担い手の人を思う気持ちがしっかりと生きている。このような自然とのつながりは、来訪者に、人間は何によって生かされているのかを考え直すきっかけを与える。

（２）人と人のつながり

徳之島らしさの特徴として、人と人のつながりの濃さが挙げられるであろう。「名人」をリストアップした際、スラスラと人物名が挙がり、個人のプロフィールまでを皆が当たり前のように知っている。小さな島の特徴ともいえるが、島民どうしが互いに関心をもち、集う機会が多いことが伺える。

人と人がつながるための様々な装置があることも徳之島の特徴である。ガジュマルの木があればお年寄りが集うことや、囲炉裏端での茶飲み話の演出役「ふり茶」の習慣、貧しく苦しい生活を乗り越えていくための様々な「なくさみ」（牛なくさみ、漁なくさみ等）、宴会になれば唄を歌う習慣など、隣人とのつながりも希薄な都市住民には予想だにできない人間関係の濃さである。内なるコミュニティのつながりの強さは、ともすると排他的な印象につながりかねない。明司シヅエさん宅の玄関先にあった言葉、「キュウガメーラ・イッチモーレ」（どうぞおあがりください）の精神が外に伝わるように意識する工夫は必要であろう。

（３）文化の断絶

奄美群島は沖縄と同様、外の力によって翻弄されてきたことは歴史の学習等で知られていたが、時に受け継がれてきた文化を断絶してきたことがわかった。その中で大きな損失は二つある。一つは島口（方言）、もう一つは稲作文化である。奄美方言の貴重さや特異さは言語研究者によって指摘されているが、奄美方言とくくれないほど島口は多様であり、かつ美しい。若者世代は使うことができないというが、話者を意識的に育成するなどしてぜひ継承して欲しい。

稲作は、薩摩藩によるサトウキビ栽培を契機に徐々になされなくなり、現在はすっかり消失した生業である。しかし米文化を下地とした伝統行事や祭りは受け継がれ、基盤となる生業と切り離された形で伝わっている。形骸化した祭りは姿かたちを変えていくおそれがある。米文化を下地としてきた島の背景を知るためにも、モデル水田を整備し、子どもの学校教育の中で利用するなどした方がよいと思われる。

（４）地域づくりとしての観光

奄美群島はいま、エコツーリズム推進法による認定を得ようとしている。国立公園の指定や世界遺産など、指定や登録が続くが、一連の法制度にもとづくプロセスが「地域づくり」に結びつくよう、取得後のビジョンや地域づくりについての議論が必要である。取得で事業が終わりとならないよう、行政もサポートを続けていくことが求められる。

エコツーリズムは観光であることから、エコツーリズムを推進することは、観光による地域づくりを進めることを意味する。景観整備や従業員のおもてなし教育などにより、地域一丸となった受け入れ体制づくりを進めることが望まれる。来訪者の視点に立った徳之島を見つめることが必要である。

（５）エコツーリズムの実践に向けて

今回のワークショップで実施したフェノロジーカレンダーづくりや名人リストづくり、ヒアリングなどは、どのタイミングでも、どこででも実施可能な基本型である。今回の作業を参考に、今後も、皆で時折フェノロジーを考えたり、ヒアリングを続けたりして島の資源の理解を深めてほしい。徳之島にしかない、今しかない宝を探し、磨き、途絶えそうな文化を継承する運動をおこし、島の宝が未来を創る地域としてモデルを示してもらいたいと考える。徳之島の資源と人には、それを実現する力があると確信する。

3-17. NPO 法人西表島エコツーリズム協会

（沖縄県八重山郡竹富町）

(1) アドバイザー派遣申請の背景

●地域の概要

西表島は沖縄本島からさらに南西に約 430km に位置し、石垣島を中心とした八重山諸島に属する。面積は約 290km²（沖縄本島に次いで県内 2 位）で、亜熱帯気候、島嶼環境にあり、独自の生態系を有している。島の約 90%が森林で亜熱帯照葉樹林、マングローブ林に覆われている。

人口は約 2300 人で、主な産業は、農業（さとうきび、米、パイン、マンゴー）、畜産業、漁業、観光業である。

行政区分は八重山郡竹富町。

●アドバイザー派遣申請の背景・これまでの取り組み

今年 1 月に「奄美・琉球」が世界自然遺産暫定リストに掲載されることが決定し（現在保留中）、その対象地域の中に県内でも有数の自然資源を誇る西表島が入ることはほぼ確実である。10 年ほど前から地域でも度々話題にはあがってきた西表島の世界遺産登録が、ここにきて急速に現実味を帯びてきた。

近い将来の世界遺産登録への期待に、今年 3 月の新石垣空港開港も加わって、地域の観光業界は俄に浮き足立っているように見える。

しかし、落ち着いて現実に目を向けてみると、新空港開港によって西表島にもたらされたのは、主に石垣島からの「日帰り」観光客の増加で、島に及ぼす経済効果は限定的である。日帰りでも手軽に大自然の中でのカヌーやトレッキングが楽しめるとあって、近年、日帰り（エコ）ツアーの需要が高まり、ツアー事業者の増加に歯止めがかからない一因ともなっている。現在、ツアー事業者の数や、年々拡がりをみせる利用フィールドの範囲などは、正確に把握されておらず、現状のまま世界遺産に登録されて観光客が押し寄せた場合に、環境への負荷や地域住民の生活への影響が心配される。

ガイド認定制度の導入やゾーニング、利用と保全のルールや仕組みづくりの必要性は、以前から提唱されているが、なかなか進展がみられない。最短で 3 年後の世界遺産登録の可能性が出てきた今、これらの整備を急ピッチで、しかし丁寧に進めていく必要があると考える。

それらの取組みを進めるにあたって、世界遺産に登録されて 20 年となる屋久島の事例からヒントを得たい。

(2) アドバイザー派遣実施の概要

日　　時	平成 25 年 11 月 16 日（土）～平成 25 年 11 月 17 日（日）
場　　所	視察場所：島内のエコツアーフィールド、観光スポット、エコツーリズム関連施設 （仲間川周辺、野生生物保護センター、由布島、星砂海岸、浦内川、祖納集落、 西表島エコツーリズムセンター） 講演実施会場：中野わいわいホール
アドバイザー	有限会社屋久島野外活動総合センター　代表取締役　松本　毅　氏
参　加　者	＜島内視察参加者＞ 西表島エコツーリズム協会会員 ＜講演／パネルディスカッション参加者＞ 【司会進行】 竹富町商工観光課　主任　通事太一郎 【パネリスト】 西表島エコツーリズム協会　会長　石垣昭子 西表世界自然遺産研究委員会　委員長　中神明 西表パイン園　代表　川満弘信 環境省西表自然保護官　福田真 【参加者】 竹富町議会議員、西表島エコツーリズム協会会員、竹富町ダイビング組合員 3 名、 西表島カヌー組合員 2 名、環境省西表自然保護官事務所職員 2 名、 九州森林管理局西表森林生態系保全センター職員 2 名、その他島内の観光従事者、 地域住民など　計 30 名程度
スケジュール・方法	【1 日目】 ・視察 仲間川周辺、野生生物保護センター、由布島、星砂海岸、浦内川、祖納集落 ・意見交換（竹富町町議会議員、住民らと） ・講演とパネルディスカッション 講演「世界自然遺産を考える～屋久島の事例から～」 屋久島が世界遺産に登録されてからの様々な変化や、発生した問題とその対策、取り組まれてきたガイド制度、利用と保全の仕組み作りなどの事例や、現在抱えている課題などをお話しいただいた。（40 分） パネルディスカッション 地域の 4 名のパネリストから世界自然遺産登録に向けてそれぞれの立場で取り組まれていることや考えを発表いただき、それに回答する形式でアドバイスをいただいた。（40 分） 【2 日目】 ・観光従事者との意見交換

(3) アドバイスの内容

●講演

「世界遺産 20 周年を迎えて」と題して、屋久島が世界遺産に登録されてからの観光客数の推移や観光形態の変化、ガイド認定制度の取り組み、入域制限の仕組み、保全のための財源確保の手法などについて、わかりやすくお話しいただいた。

○観光客の増加とそれに伴う島の変化

観光客数、宿泊者数共に増加し、それに伴いガイドなどの観光関係事業者も増加した。世界遺産登録以降、人口の減少には歯止めがかかっている状態である。

○「屋久島ガイド」登録・認定制度

ガイドの急増による質の低下を防ぐために、ガイド自らが協議会を立ち上げ、話し合える場がつくられた。その後エコツーリズム推進協議会が発足し、「屋久島ガイド」登録・認定制度がつくられた。よりハードルを高くしたり、観光客に周知するための見直しが検討されている。

○立ち入り制限

観光客が集中するフィールドへの立ち入り規制（利用調整）を設ける検討がされている。立ち入り制限には自然環境重視・観光振興重視・利用環境重視の考え方がある。

○環境保全のための財源

し尿処理や山岳救助にかかる費用を確保するために保全募金制度を取り入れている。しかし十分ではないため、新たな財源の確保が課題である。

講演会

パネルディスカッション

視察（由布島）

視察（祖納）

●パネルディスカッション

4名のパネリストに、世界遺産登録に向けてそれぞれの立場で進めていること、考えていることを発表していただいた。

○川満弘信

農業の振興は観光と共に地元経済の基盤になり得ると考えている。世界遺産に向けては産業間が連携して受入体制を整えていきたい。

○中神明

世界遺産登録に向けて、行政の取り組みを待っているだけではだめだと思い、観光協会の中で世界遺産研究委員会を発足させた。予算があるわけでもなく、具体的な活動内容もまだ決まっていないが、まずは観光事業者の声をひろいあげていくことが重要だと考えている。

○福田真

国立公園は、保護と利用の両者が必要であり、西表島としてはどのように両立していくのが望ましいのか、地域住民と共に検討していきたい。

○石垣昭子

西表島が置かれるであろう状況を先行して経験されている屋久島の事例は大変興味深く、勉強になる。何百年もの歴史を築き上げてきた島人が、老若男女問わず一体となって考え、取り組んでいくべきだと思う。それには歴史や文化の継承も不可欠だと思う。

○松本毅

保護・規制も利用も、議論していく上で様々な立場からの意見や都合があるだろうが、常に利用者である観光客の視点が大切で、そこが抜けおちてしまわないようにしなければならないと思う。

　また、保護と利用の形態は様々であり、このすばらしい風景や生物多様性など、他にはない「西表らしさ」を保護することは不可欠であると思う。屋久島とはまた異なった形態となるべきだと思うが、それをみなさんが話し合い、協議を重ねて、導き出してほしいと思う。

(4) アドバイザー派遣実施の効果

●参加者や関係者に与えた効果

・屋久島での世界遺産登録後の変化や現状を知り、同じ島嶼環境にあり共通点も多いことから、西表島で起こりうる変化を想定でき、参考になった。また、それに向けて必要な取り組みを探るきっかけとなった。
・屋久島で、現在進行形で時代と共にその状況に応じた検討・対策がされていることを知り、保全と利用のバランスを保ち続けるためには、世界遺産登録の前後だけではなく、常に行政・民間の協議が必要であることを認識した。
・行政が主導しないとできないこともあるが、ガイドや観光事業者らが問題に感じていることに対して、自ら取り組んでいけることもあるということを知った。
・他地域の事例を参考にしつつ、それと同じではない「西表らしさ」を追求した形をつくりあげていくことが大切だと認識した。
・観光事業者だけでなく地域全体の問題として、様々な主体間で情報を共有し、できるだけ多くの情報共有の場、話し合いの場をもっていくことが不可欠だと感じた。
・今回初めて役場職員が司会進行をつとめ、民間・行政が共に考える場をつくる第一歩となった。

●今後の期待される効果

・行政が具体的な取り組みを始める前に、ガイド、ダイビング事業者、宿泊施設など、それぞれの業種内で、問題を認識したり、ビジョンを描いたり、それぞれにできる準備が進められていくことが期待される。
・観光協会の世界自然遺産研究委員会の活動内容を決めていくにあたっての参考となり、今後の有意義な活動が期待される。

●今後の取り組み

・地域では、全体的に世界遺産登録に関する情報が不足していると感じるため、先ずは今回と同じような地域住民が勉強できる機会を継続して設けていき、その中でのエコツーリズムの重要性をより多くの住民に知っていただきたいと考えている。

(5) アドバイザー派遣を実施して（地域からの声）

●参考となった事項

世界遺産登録後 20 年が経過して、今なおガイド登録制度の見直しや縄文杉への立ち入り制限について議論が続けられている屋久島の事例から、世界遺産に登録される、されないに関わらず、保全と利用の最善のバランスを保ち続けるためには、常に行政・民間が議論をし、対策していかなければならないということを改めて感じた。現在の西表島では、話し合い・協議の場がほとんどもたれていないのが現状であるが、行政の動きをただ待つのではなく、民間から起こせる（現場にいるからこそ起こせる）アクションもあるということを感じた観光事業者もいたようである。

世界遺産登録という地域住民の関心が高まっているこの機を、これまで観光事業者だけのものだと思われがちであった「エコツーリズム」を地域に浸透させる好機と捉え、推進をしていきたい。

●その他感想

アドバイザーの松本氏が「屋久島より若者が多く、とても活気がある」と言われたのが意外であったが、その言葉に自分たちの可能性を感じることができた。先人たちが苦労をして切り開いていきたこの島で、先人たちが大切にされてきた宝（自然・文化）をしっかりと受け継ぎながら、若者のパワーを集結させて、西表島の未来をつくりあげていければと改めて感じた。

(6) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

有限会社屋久島野外活動総合センター　代表取締役　松本　毅　氏

●地域におけるエコツーリズム推進の取組の現状と課題

2013 年 1 月に「奄美・琉球」が世界自然遺産の暫定リストに加えられ、2016 年には自然遺産としては日本で 5 番目の登録となることが有力となってきた。世界遺産登録による観光客の増加、観光形態の変化、それに伴う新たな問題の発生に対して島民の期待と不安が高まってきている。そのような状況の中で、世界遺産 20 周年を迎えた屋久島の事例を報告し、それに向けた対策の議論を進めていく必要がある。

しかし、東部の大原地区は、石垣島からの日帰りツアーが主流であるのに対し、西部の上原地区は、民宿・ホテルなどの宿泊を伴うツアーが主流となり、観光の形態が違うことから、エコツーリズムにたいする共通認識を持つことが難しいと思われる。

また、新たなツアー事業者の増加に伴い、ツアーガイド間での自主ルールの徹底が難しくなってきている。

●特に魅力を感じた地域の自然観光資源

サンゴ礁のリーフから汽水域のマングローブを経て、内陸部へつながる自然環境の変化をスノーケリング、カヌーや遊覧船、トレッキングで見ることができる。また、それらの自然資源を活用してきた生活・文化があり、今現在も受け継がれてきていることは、非常に貴重なことである。

●アドバイス（講義等）の概要

世界遺産登録 20 周年を迎えた屋久島において、観光客の増加、観光形態の変化、ガイドの増加、自然環境への影響などについて事例を報告した。

特に、ガイドの増加に伴う「屋久島ガイド」登録認定制度の仕組み、入山規制に関する考え方、財源の確保に関する現在の取り組みに関して報告をした。

しかし、観光の熟成度によって状況は変化し続けるものであり、常に行政・民間が議論をして対応してかなければならない。

●全体構想への取組状況・意向について

現在、西表島においてエコツーリズム推進法における全体構想の取り組みはなされていない。全体構想に関しては、環境省・沖縄県・竹富町の行政の取り組みが不可欠であり、今後行政と民間との協議が必要と思われる。

●地域に対する印象、今後地域に期待すること（メッセージ）

世界遺産登録にともなう期待と不安がある一方で、住民にとって情報が不足している。現状の分析と今後起こりうることを想定した対策の議論が必要と思われる。今回、上原地区の西表島エコツーリズム協会の主催する「島人文化祭」に参加をさせていただき、住民の連携が非常にうまくいっている印象を持った。特に若い人を中心に地域の活力が感じられた。今後、行政を交えた議論の場を充分に設けて、西表島の未来を大いに語り合っていただきたいと思う。

その際に、世界遺産の称号はあくまでも西表島の自然が世界の宝であるという認識のものとで、利潤追求に走ることなく、未来永劫守っていく使命を課せられたという認識を忘れないでいただきたいと願う。そのためには、その地域が活力を失わないよう経済的な安定とともに行政の十分な支援と自然の素晴らしさを共有するたくさんの

来島者が必要となる。エコツーリズムとは、地域住民と行政と来島者が共通の認識を持ち、自然資源の保全と活用のバランスをとることといえる。

西表島エコツーリズム協会がその中心となって活躍されることを期待する。

今回は、参加者の方々と充分に意見交換をする時間がなかったのは残念でしたが、文化祭に参加せていただき、郷土芸能が本当に地域に根ざしていることを知ることができました。とてもいい機会に呼んでいただいたことを事務局の方々に感謝しています。

3-18. 南大東村（沖縄県南大東村）

(1) アドバイザー派遣申請の背景

●地域の概要

南大東村は、明治 33 年（西暦 1900 年）に、無人島であった島が、八丈島出身の方々によって開拓が始まり、開拓 114 年目を迎えた歴史の浅い島である。

島は、総面積が 30.57km² で、標準的珊瑚環礁が隆起し東西 5.78km、南北 6.54km の短楕円形で、海岸線から内側に環状に露出した岩石地帯であり、島全体を二重三重に防風林が設置され、耕作を囲んでいる。山は無く、島全体は平坦で、一番高い所でも標高 75.8m で、島の各所に鍾乳洞があり、中央部には 47ha もある大池を中心に多数の池沼が散在している。気候は、典型的な亜熱帯海洋性気候で、年間の平均気温 23.4 度と温暖で、年間 150mm 内外の降水量で、夏から秋にかけての台風シーズンには天気予報に一喜一憂している。

人口は、平成 26 年 1 月末現在で、1295 人、世帯数 650 戸、ここ数年は大きな変化はない。開拓以来、八丈島、沖縄各地から移住してきた人々が開拓精神を胸に、島の歴史を積み重ね、豊かな自然、人情ともに、高齢者、子供達、働き世代など、いつも心が触れ合い、どこでも手を結びあえる環境で、未来に向かって新しい島づくりに励んでいる。

有史以来、現在でもサトウキビが島の基幹産業であり、甘味資源の供給基地として栄えて今日に至っている。歴史、文化、自然は、沖縄県内でも特異的なもので、平成 12 年には天然記念物活用事業において、小さな島から大きな遺産、「島まるごとミュージアム構想」を立案し、島の自然保護と観光振興、特異性の強い自然、文化等を活かしたエコツアーの構築等、観光振興も新たに進めている。しかし、離島特有の、高齢化、人口減少、人材育成など、島が抱える様々な課題もある。

●アドバイザー派遣申請の背景・これまでの取り組み

南大東島は、「島まるごとミュージアム」をコンセプトに、エコツーリズムを推進して、島の基幹産業であるサトウキビ農業に加え、新たな産業構造構築のため、観光を推進し、24 年度には、村のホテル、農協、観光業者、商店などで構成する南大東村観光協会が設立された。さらに、昨年は新たな観光推進のため、3 年間かけて作成した、食のカレンダーが完成した。近年は、特異な自然、文化を求め、10 年程前から体験型の交流も行い、観光客も徐々にではあるが、増加傾向にはある。

しかし、これまでの南大東村の観光はマス的な要素が高く、大手旅行社と提携して行うツアーが殆どで、最近は

マンネリ化傾向にあり、今後観光が島の活性に繋がっていくか地元関係者も不安を抱えている。

また、南大東島に入るためには、生活路線として利用している、島の人が 50%以上利用する 1 日 2 便（40 人乗り）の飛行機と月 4 回で天候によっては欠航が多い船（所要時間 13 時間 55 名乗り）が運航しているが、島外からの来島は、他市町村に比べその数は限られ、今後、大幅に観光客が増加することは考えにくい。

そこで、南大東村では今後、エコツーリズムの基本である、地域が主体となった地域密着型観光が、大変重要になっていくものと考えている。今回は、「一人でも多くの南大東島のファンを確保するため」をテーマに、アドバイザー事業を活用させて頂き、これまで島で行ってきた様々な観光の取り組みを、改めて見直すとともに新たな島の産業となる観光を、どのような方法で今後行っていけばいいのかアドバイスをお願いしたい。

また、地域づくりとして、エコツーリズムを推進していくためには、今後の後継者である子供達を中心とした人材育成が、これからの大きな課題であり、徐々に高齢化や人口減少が進む南大東村の人たちにとっての「地域の宝」について、改めて認識を高めるためにも今回のアドバイザー事業を活用させて頂きたい。

(2) アドバイザー派遣実施の概要

日　　時	平成 26 年 2 月 28 日（金）～平成 26 年 3 月 2 日（日）
場　　所	シンポジューム及び講演：沖縄県南大東村離島振興総合センター 食のカレンダーを利用したツアーなどのワークショップ：南大東村文化センター シュガートレイン復活構想予定地、生活改善グループ拠点施設、南大東村役場（担当者説明等）
アドバイザー	京都嵯峨芸術大学　芸術学部　観光デザイン学科　教授　真板　昭夫　氏
参　加　者	＜講演会・シンポジューム参加者＞ 南大東村役場 8 名、南大東村小中学校 PTA13 名、小中学校 6 名、南大東村役場 8 名、 地域参加者 10 名　計 45 名 ＜ワークショップ＞ 食のフェノロジーカレンダー関係（観光協会）5 名、生活改善グループ（大東御膳作り）7 名 計 12 名
スケジュール・方法	【1 日目】 ・シンポジュウム・講演会 「島の宝に目覚めた子供達」をテーマに、子供達や地域が宝さがしを行う事によって、生み出される地域づくりの考え方 〇日本エコツーリズム協会理事でもある、開　梨香氏と協力し、島の教育環境を含め、エコツーリズム（宝さがしから学ぶキャリヤ教育、地域の宝を活用し、地域づくりの原点）を見直すため、シンポジュムと講演を行った。 【2 日目】 ・勉強会 「南大東島のファンを確保するため」をテーマに 　「食のカレンダー」を活用した、ツアーのプラグラム実施状況、成果、課題 ・宿泊関係者ヒアリング ・視察 　シュガートレイン復活事業の現場、ビニールハウス等見学 【3 日目】 ・視察 「ダイトウオオコウモリの森」新たな島の宝となった、人工的に形成された森 （真板先生が 15 年前にプロジェクト計画を行ったもの） ・生活改善グループ拠点視察 ・大東御膳についてのヒヤリング

(3) アドバイスの内容

●講演とシンポジュム「島の宝に目覚めた子供達」をテーマに

南大東島は、高齢化、人口減少など、離島特有の問題を抱えている。さらに地域活性化のため、エコツーリズムを推進し、宝探しなど、これまで行ってきたものを活用することはもちろん、これから継承し、発展させていくためには、人材育成も大変重要である。

そこで講演会では、エコツーリズムの基本となる「宝さがし」は人材育成を行う意味から大変有意義な活動となるとの考えから、次のご意見を伺うことが出来た。

○観光というのは、地域の人達が誇るもの、自慢するものを、外から来る人に見せてですね、何と素晴らしい島なんだと、外から来る人と、地域の人達が交流することを観光という。

○観光人口から交流人口という言い方をしています。

○観光の光を、宝といい、その地域にしかない自然、文化、産業、などがかけがえのないもので、島の最大な価値であり、よそに負けないような自慢することを発見して、活かすということです。

○子供達を巻き込んだ島の宝さがしは、島の誇り、島を担っていく子供たちを作って行く

○宝さがしは、自信を持つ心（島のゆるぎない誇り）を育てることが出来る。

○島を誇ることで、あらゆる可能性を見出すことができる子供達が育成される。

○島を愛し、島を誇る子供達は、自分に自信を持った大人に育つ

○自慢と誇りを持つ子供を育てることは、島の遺産を継承し、21 世紀の郷土を開く、新たな人材となります。

○誇りをもつための子供達のベースは、親が、住んでいるところ、関わる人、自分に対する誇りを子供達に自慢し、伝えること。

●ワークショップ・アドバイス

・観光協会が商工会のブランディング事業で、以前にアドバイス頂いた、食のカレンダーを参考に、ストーリー性を持った大東御膳 158 名分を実施

・島内の飲食店、ホテルで、島に残る”銀のトレイ"を利用して実施した

・伊達巻寿司、大東オムレツ、スイーツ、和え物は生活改善グループが提供

・アンケートより、味、量、見た目など、大変満足、満足が多いが、器のプレイトに関するコメントは辛口である。

・歴史的なものは満足だが、料理人にとってこの器（プレイト）は困る

・料金も含め、今後、継続していくためにどうするかという問題。

・ツアーのメニューとして出していきたいので、今後の考え方、仕組み、ルール作りについてどうすればよいかアドバイスを頂きたい。

＜アドバイス＞

○なぜ、大東御前を作ったのか、大東御前とはどんなイメージなのかということを確認することが大切である。

○大東御前のコンセプトが大事であり、新たな器を作って料理を出すことは何の問題もないと思います。

○コンセプトは 3 つあると思います。

1 海洋島の特徴、南大東島の海の文化の象徴

2 サトウキビ文化の象徴

3 チャンプルー文化の象徴

以上の 3 点を、取り入れた御前を考えて、メニューを作っていくことが大切である。

○生活改善グループが、新メニューつくりの情報提供を行っていくことはよいと思います。

○観光客を迎える時に、料金のダンピングが心配である。

○料理を作ることによって、お客さんに島の思いを伝えていくことが大切である。

○料理する人、それに関わる人たちが、島の料理を作る意味・コンセプトを明確にして、島の文化を認識してもらいたい。
○ケースバイケースで今後は対応していくことも大切だと思います。

●視察時

○島の食材を利用するために、とても充実したビニールハウスは素晴らしい。
○シュガートレインを復活させる時に、ハード面、管理の問題もそうだが、人を受け入れるソフト面を考えていく必要があると思います。
○ダイトウオオコウモリの森は、造園学的にも貴重な場所として面白い場所です。

講演会の様子

ワークショップの様子

視察の様子

視察の様子

島の活動の様子（大東御膳つくり）

(4) アドバイザー派遣実施の効果

●参加者や関係者に与えた効果

○「宝さがし」は観光や地域活性化だけでなく、人材育成として活用できることを学んだ。
○地域の宝を一人でも多くの子供達が継承していくためには、地域全体で取り組んでいく必要性を改めて感じることができた。
○食のモニターツアーによる大東御前の試みは間違っていないことが確認できた。
○アドバイスを頂いた、3 つのコンセプトを大事にしながら、改めて自分たちの役割を見直して、これからの観光発展に活かしていくためのシステムを構築していきたい。
○食のカレンダーを利用した、新たなツアーの構築の可能性も感じた。
○食に関しては、地域全体で取り組む雰囲気づくりも大切である。
○島に生まれた新たな宝、ダイトウオオコウモリの森を参考にしたプログラムツアーも考えられる。

●今後の期待される効果

エコツーリズムを推進する事は、現在島が抱えている、人口減少、高齢化など様々な問題を解決し、地域活性化を生み出す大きなカギになると思う。地域の宝を大切にして、継承し、新たな宝を生み出し、それぞれをバランスよく大切に推進していくことで、地域が活性化し、島が抱える問題が解決していくかもしれない。

今回の事業をきっかけに、さらに南大東島のエコツーリズムの中核となる「宝さがし」の宝自慢をして、地域を誇れる人材を一人でも多く育ていく心が芽生えた。

また、エコツーリズムを推進して 10 年程度になり、多少マンネリ化が出てきたところだったため、これまでの時期を第 1 期の序章であり、エコツーリズムを生み出し、プログラム等を作っていく時期としてとらえ、これからはこれまで行ってきたことを継続的に実践し、応用していく期間として、新たな第 2 期として今後もエコツーリズムの推進を図って行きたい。

●今後の取り組み

○アドバイスを参考に「食のカレンダー」を活用した、お互いが連携して、飲食店、観光協会、農家、農協などが、南大東島の食材を利用して大東御前などの食事を外からの人に提供するのはもちろん、地元の人も気軽に食べられるようにシステムも構築する。

○観光推進と地域活性化を図るため、「島の産業遺産」シュガートレインを復活させるための検討委員会を設置し、活動する。
○島の人材育成のため、沖縄県の実施する体験交流学習の受け入れを、地域全体で受けいれる体制を作り、実施していく。
○地域活性化のために、ホテル、観光業者、飲食店、行政、商工会が一体となって連携し、エコツーリズムの推進のために観光協会の充実、施設（ハード面）などのさらなる充実を図るよう、申し合わせを行う。

(5) アドバイザー派遣を実施して（地域からの声）

●参考となった事項

○フィジーを開拓し発展するのに 100 年かかっている。南大東島に似通った歴史の島があることを学んだ。貨幣の話は、面白かった（南大東島にある石と同じだった）。
○京都で、和食が世界遺産になった時に、南大東島と同じ問題があった、日本食のイメージは芋の煮転がしから数万円する料理まで幅広い、その中で、京都にある地域では、京都料理を勉強した人の中で、後は自分で考えろと、コースで有ることなどの大枠やテーマを持ち、料理を出している。
○東京都の檜原村の例で、器の問題、料理人の問題、食材の問題等は大東島と同じようなもので参考になった。

●その他感想

本村は、高校が無く中学を卒業すると親元を離れた生活を余儀なくされる。その時に、自分の誇れるものを持ち、自信を持った子供達なら、どんな状況に置かれても自分を見失わず生活して、学校、仕事などに励むことが出来ると改めて感じた。

エコツーリズムは、ただ観光客を受け入れ、地域を活性化させるものではなく、人材育成としての大きな役割も担うものだと感じた。

これまで南大東島には団体客として訪れる人たちから、本当に島が好きな人達が、個人的に訪れることが、徐々に増えて来るのではないかと考えている。そのためには、やはりこれまで行ってきた体験ツアーを中心としたエコツーリズムの精神は、さらに重要度が増して行くものだと確信している。

また、食のカレンダーを活用したツアーや、島の食を大切にして、島の食材を利用した新メニュー作りなどは島の活性化だけでなく、島の誇れるものを改めて生み出すものであり、人が住んで 114 年の南大東島の、新たな歴史を作るために重要なアイテムになっていくものと思う。

(6) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

京都嵯峨芸術大学　芸術学部　観光デザイン学科　教授　真板　昭夫　氏

●地域におけるエコツーリズム推進の取組の現状と課題

エコツーリズムは、観光協会と商工会、生活改善グループ、行政では南大東村教育委員会、産業課等がそれぞれ観光やエコツーリズムの推進に関わっている。これらの元で、ツアープログラムの開発、島の食の開発、宝お興しによるブランド商品開発、新しいエコツーリズム客受け入れの宿泊施設の建設など実施されているが、まとまって実施されている訳ではない。

課題としては、今後島全体で観光を宝探しから宝お興しを考え指導して行く横断的な組織をどのように組み立てて行くのかが最大の課題と言える。今後、外部との連携を強化してエコツーリズムを進めて行く若手人材の育成、などが重要な課題となって来ている。

●特に魅力を感じた地域の自然観光資源

南大東島での特に魅力を感じたエコツーリズム関連の資源は「サトウキビ開拓に関わる大和と沖縄本島のチャンプル文化と歴史資源」と「ふれあうことの出来る多様な海洋生物」「島が形成されて来た 4600 万年の歴史を示す鍾乳洞などの自然資源」「海洋島固有の生態系を構成する野生動植物」と言える。

●アドバイス（講義等）の概要

南大東島では、島の夫人の方々を対象に「宝探し」の意義と、その事が島の環境保全と同時に 15 歳で島を離れる子供達にいかに島の自然の素晴らしさに目覚めさせ、自信を持たせ、成長の糧てとなっているのかを事例をもとに講演した。またフェノロジーカレンダーをもとに開発した食「大東御膳」の活用方法について論議を行い、どのような基準で作って販売すべきかのアドバイスを行った。

●全体構想への取組状況・意向について

エコツーリズム推進のための全体構想を考えるまでには至っていない。それは、全体構想を策定して行く事が、保全の意義や子供達の生まれた島への自信を強くするという効果は理解できても、島の具体的なツアー実施と誘客効果とどのように結びつくのか、またそのあえて一緒の協会を作ってやるための活動費をどこから捻出するのかが不明であるからである。費用が無いならば、今自分たちが所属している関係組織からの費用で夫々が夫々で実施して行けば良いのでは、という意識がある。

●地域に対する印象、今後地域に期待すること（メッセージ）

南大東村は徐々にではあるがエコツーリズムのツアーを実施し始めている。また観光客受け入れのための食の開発等に取り組みを始め徐々にではあるが、一般の観光から地域の資源を活用した独自のツアープログラムの開発にも着手しつつある。しかし島の中では様々な立場の人々があり、一つにまとまって進んでいないのが現状と言える。ただエコツーリズム開発における「宝探し」によって、15 歳になると島を出て行く子供達に自信を持たせ、ツアーの活性化が島の誇りを示す指標となるように取り組んでいる事は、立場の違う人々でも気持ちは同じと感じた。

4. アドバイザー派遣報告会

4-1. 開催概要

アドバイザー派遣事業を通じて行われた取組を多くの方々に共有するため、事業報告会を開催した。本報告会では、アドバイザー派遣を活用して取組を行った 2 地域、現地に赴いていただいた 3 名のアドバイザーから、地域の取組や課題、アドバイザー派遣を通じて目指したこと等を報告していただいた。

日時	2014 年 3 月 4 日（火）13：30～17：30
会場	公益財団法人日本交通公社　大会議室 〒100-0004　東京都千代田区大手町 2-6-1　朝日生命大手町ビル 17 階
参加費	無料
申し込み	ホームページ、FAX、メールにて申込を受付 ・ホームページ　http://www.jtb.or.jp/eco-tourism13.html ・FAX　03-5255-6077 ・メール　eco-jimu@jtb.or.jp

会場の様子（公益財団法人日本交通公社大会議室）

【プログラム】

13:30	開会
13:30－13:40	＜挨拶（報告会開催にあたって）＞ 環境省自然環境局総務課自然ふれあい推進室
13:40－14:40	＜地域からの報告＞ (1) 新潟県妙高市での取組 市川　健一郎　氏／妙高市環境生活課環境企画係　主事 (2) 静岡県賀茂郡東伊豆町での取組 杉本　充伯　氏／東伊豆 ECO ツーリズム協議会　事務局
14:40－14:50	休憩
14:50－16:20	＜アドバイザーからの報告＞ (1) 渡邊 法子 氏　／アイ・エス・ケー合同会社　代表 派遣地域：栃木県市貝町、静岡県東伊豆町 (2) 木村 宏 氏　／NPO 法人信越トレイルクラブ 事務局長、 一般社団法人信州いいやま観光局 事務局次長 派遣地域：千葉県南房総市、静岡県大井川流域 (3) 鈴木 順一朗 氏　／環境カウンセラー(広報戦略)、 環境映像ディレクター・プロデューサー 派遣地域：新潟県妙高市、福井県大野市
16:20－16:40	休憩
16:40－17:30	ディスカッション
17:30	閉会

（司会進行　公益財団法人 日本交通公社）

4-2. 議事概要

（1）挨拶

環境省自然環境局総務課自然ふれあい推進室長　中尾　文子　氏

- 環境省は、地域の方々が地域の宝を探して磨き、それを旅行者に伝えて、感動を与えようという地域自らが元気になる取組をエコツーリズムと考えて応援している。
- 現在、日本の地域は過疎化や高齢化など疲弊状態にあり、支える人がいなくなり、景観が失われている。一方、政府一丸となって、訪日観光客増加による日本経済の活性化を目指している。
- このような中、自然を保護し、かつ地域の楽しさを見つめ直して環境教育に貢献するエコツーリズムを一層推進していきたい。
- この「エコツーリズム推進アドバイザー派遣事業」もそのような環境省の取組の一環。地域ごとの個別の状況を踏まえて、適切なアドバイスをしていただくもの。
- 本日は地域の取組の様子を発表いただくほか、アドバイザーからは、地域、日本、環境省に対して、「こうしたらいいのではないか」というご指導をいただきたい。

（2）地域からの報告①：新潟県妙高市での取組

市川　健一郎　氏　／妙高市環境生活課環境企画係　主事

●妙高市の概況について

- 妙高山麓一帯は上信越国立公園に指定されており、雄大な自然の景観と四季折々の変化に富む。豊富な温泉やスキー場などの観光地として発展してきたが、平成 24 年度の観光入込客数は、ピーク時と比較すると約半分、スキー場入込客数については約 5 分の 1。
- 東京から長野新幹線で約 2 時間半、車だと約 3 時間の位置。平成 26 年度末開通予定の北陸新幹線では約 1 時間半となる。
- 豊かな自然と人が共生し、全ての生命を安心して育むことのできる「生命地域の創造」をまちづくりの理念に掲げており、理念実現のため、スローツーリズム、グリーンツーリズム、ヘルスツーリズム、アート＆カルチャーツーリズムという 4 つのツーリズムを位置付けている。
- 豊かな自然の保全・継承、観光地としてのイメージ向上のため、「エコ・トレッキング」という、ゴミ拾いを市民と一緒に行う自然保護・保全活動イベントに取り組んできたが、足りない点も多々あると認識している。

●エコツーリズム推進アドバイザー派遣について

- 今の妙高市の理念には含まれていないエコツーリズムについて、その考え方の導入可能性を探るとともに、新たな地域資源の活用・発見につなげるため本事業を活用した。
- 国立公園を抱える妙高市は、環境保全、利用、管理運営といった大きく分けて 3 点の課題を抱えている。
- アドバイザーの鈴木順一朗氏からは、まず、基本的なエコツーリズムの考え方を教えていただいた。妙高市でエコツーリズムを取り入れる場合、新しいものを一から築くのではなく、今の妙高市の土台に「環境」を落とし込めば良いとアドバイスいただいた。
- この柱の他、①観光産業においては、集客のために広報戦略と宣伝が重要であること、②妙高市の基本理念「生命地域の創造」がエコツーリズムの考え方に合致しているため、エコツーリズムの導入可能性が高いこと、③市内外に向けた環境教育を発展・充実させ、市民の地元に対する誇りの醸成が重要であること、④市内には良い資源があるが、このままでは妙高ならではの特色がないため、他地域と差別化するため妙高の宝の再確認と磨き上げが重要であること、⑤ガイド団体や専門学校などエコツアーを展開する担い手には恵まれているため、上手な連携が重要であること、という 5 つのアドバイスをいただいた。
- 今後は、環境省などと協力した国立公園の協働管理体制の構築、「総合健康都市」という町そのものを健康にしようという取組と連動した活動、環境教育内容の検討、時期を逃さない広報戦略に基づいた情報発信、といった 4 点に重点的に取り組んでいきたい。

(3) 地域からの報告②：静岡県東伊豆町での取組

杉本　充伯　氏　／東伊豆 ECO ツーリズム協議会　事務局

●東伊豆町の概況について

- 町の北から西側には天城連山が連なり、東側は海岸線が続く。平地が非常に少なく、河川流域と山間部にわずかな盆地がある程度。
- 大川、北川、熱川、片瀬、白田、稲取という 6 つの温泉エリアを擁する。大川から白田までは旧城東村。旧稲取町と旧城東村が合併し、昭和 35 年に東伊豆町が誕生した。
- メイン産業は観光業。平成 15 年には約 120 万人の入込客数であったが、平成 24 年は 87 万 5000 人。
- 農業、漁業も盛んで、みかん、カーネーション、「稲取金目」が特産品。
- 町内には先土器時代から縄文・弥生時代にかけての遺跡も残っている。人の暮らした痕跡が古い。またこのエリアでは、約 400 年前に江戸城の築城石が切り出されており、この石が町内の至る所に転がっている。
- 町の合併時に旧町村の所有地について対応が検討された際、城東地区は企業に売買した。そのため、貴重な遺跡が出土していながら土地開発のため別荘地にしてしまったことがある。稲取地区は地区で管理を行っているため、ある程度保全されている。

●地域の課題と東伊豆 ECO ツーリズム協議会について

- 東伊豆町を訪れる観光客の行動パターンは、東伊豆町周辺で観光をした後、東伊豆町の宿泊施設に滞在するというもの。いかに町内に滞在し楽しんでもらうかということが課題。東伊豆町には様々な自然があり、それらを活用したグリーンツーリズム、ブルーツーリズムを目指している。
- 東伊豆 ECO ツーリズム協議会は行政主導ではなく、地元ペンションのオーナーが中心になって民間で立ち上げてきた協議会。

●エコツーリズム推進アドバイザー派遣について

- アドバイザーの渡邊法子氏には、ジオサイト、自然景観、古道、縄文遺跡・江戸城築城石史跡を視察していただき、ガイド養成の重要性、保全の必要性、行政との連携の必要性等についてアドバイスをいただいた。
- アドバイザー派遣を通じて今まで全く知らなかった東伊豆町について知ることができた。また、貴重な火山弾や刻印石など、様々なものが保全されていないという危険性に気付くことができた。
- 今後は、町民が地元のことをよく知るために「大人のふるさと学級」を開催し、町民のエコツーリズム理解度の向上や、ガイド養成につなげていきたい。

（4）アドバイザーからの報告①：栃木県市貝町、静岡県東伊豆町

渡邊　法子　氏　／アイ・エス・ケー合同会社　代表

1）栃木県市貝町への派遣について

●栃木県市貝町について

- 市貝町の一番の自然観光資源はサシバという絶滅危惧種の渡り鳥。町では「サシバの里いちかい」として、サシバの町としてのまちづくりが始まったところ。
- 町内に宿泊施設は 1 軒ぐらいしかなく、観光産業とはほとんど無縁の町。今度誕生する道の駅で、地域住民や旅行者に町の素晴らしい自然環境や歴史を伝えていきたいが、その活用方法を知りたいということであった。

●アドバイスの内容について

- エコツーリズムにおいて、地域資源の魅力を来訪者に伝えるガイドの存在は不可欠であるが、地域特有の自然観光資源について最も詳しいのは地元の方であり、地域人材の育成が不可欠である。
- 地域住民が地元の観光資源について感動でき、その感動を自分の言葉で来訪者に語ることができるように、人材育成を進めるべき。また、地域全体で継続可能な形で人材育成に取り組むことが重要。
- 人づくりがある程度進んだら、地域内で活動されている方をコーディネートし組織化する。
- こうした人材育成が出来て初めて、商品造成と流通のためのツアーデスクを設置する。事業継続のためには財源の確保も重要となる。
- 市貝町で策定中のサシバの里の基本構想は、エコツーリズムの全体構想に準じて進められていると見受けられた。重要な資源を活用しようしており、行政と一緒に進めてもらいたい。

2）静岡県東伊豆町への派遣について

●静岡県東伊豆町について

- 東伊豆町では、町内にある多様な資源をどのように今後の観光に生かして、地域経済活性化につなげられるかと模索している。こうした取組が、民間から始まったという特異なケース。

●アドバイスの内容について

- 東伊豆町でも人材育成の仕組みづくりと事業の継続化は、商品流通のためにも必要。東伊豆町では行政との協働体制構築に苦慮しているが、人材育成に取り組むにあたっても行政との協働は不可欠である。
- 地権者との関係において、築城石などの資源が厳しい保全状況にあるが、全体構想を策定すれば保全も進めやすくなると考えられる。その意味でも行政との協働は必要不可欠。

3）おわりに

- そもそもエコツーリズムをどのように売っていくのかという観点で、事業に取り組む必要がある。
- 盤石な人づくりが土台にあってこそ、商品がうまれ流通していく。

(5) アドバイザーからの報告②：静岡県大井川流域、千葉県南房総市

木村　宏　氏　／NPO 法人信越トレイルクラブ　事務局長、

一般社団法人信州いいやま観光局　事務局次長

●飯山市の取組について

- 飯山は景色が最大の魅力。ゆっくり落ち着ける雰囲気がある。
- 飯山はスキー産業の停滞を受けてグリーンツーリズムを推進してきた。南房総市は海水浴客の減少を受けて対応策を模索している。大井川流域でもかつては SL による誘客が盛んだったが、現在は苦戦している。
- 飯山ではグリーンツーリズム推進拠点として、森の家という施設を市がつくった。この森の家がプラットフォームの役割を担っている。
- 飯山ではボランティア参加型商品に力を入れており、ブナの保全や水田の整備につなげている。
- 飯山は妙高市とともに森林セラピーにも取り組んでいる。南房総市も森林セラピー認定基地になる予定。
- 信越トレイルは、トレッキングルート策定により様々な地域の連携を図り、新しい観光を目指すという目的で取り組み始めた。ボランティアの力で全長 80km のトレイルをつくった。
- 飯山では「ふるさと」のイメージづくりも実践している。商業看板の高さ制限や電線の地中化等、日本の原風景のイメージにそぐわない風景は変えている。
- 北陸新幹線の開業にあたり観光プラットフォームが必要ということで、信州いいやま観光局が誕生、着地型商品の造成に取り組んでいる。

1）静岡県大井川流域への派遣について

- 大井川流域振興連絡会は、島田市、吉田町、川根本町、静岡市という 4 つの行政にまたがっている。この流域の連携とエコツーリズム手法による集客を課題としている。
- 大井川流域という一つのエリアでありながら、横のつながりや活動がなく、今回の勉強会の場で初めて 4 市町の行政担当者、体験メニューの提供者が顔を合わせた。
- ディスカッションや自分たちの取組についての発表を通じて、連携してエコツーリズムに取り組む気運が高まった。連携するためには、共通の概念・理念を醸成することが重要。
- 大井川流域には、エコツーリズムにふさわしい変化に富んだ素材がある。エコの観点に立ったストーリー作りが可能だと思われる。様々な自然体験メニューの提供者が既に多く活動していることもメリット。
- 観光地特有の、看板が林立しホテルが目立つといった商業的な印象がなく、もう少し磨きあげれば、来訪者にエコツーリズムの地域だと感じていただけるようになるだろう。
- 国道と大井川鐵道という 2 つの連携軸がしっかりしており、ここを軸にした新たな観光の可能

性がある。民間の参画があることもポイントになる。

- 大井川鐵道沿線エリア全体では、2 泊 3 日ぐらいのボリュームになり、リピート性も高い場所。全体構想策定も含んだエコツーリズム推進の可能性が高いと感じた。

2）千葉県南房総市への派遣について

- 首都圏からのアクセスが良く、東京発のバスは 2 時間以内で南房総市に到着する。また、このバスはまず道の駅に向かう。交通会社と道の駅の連携可能性も考えられる。
- 市内の 8 つの道の駅、「花といえば房総」のイメージ通りの花畑、歴史資源や自然景観など、観光資源は豊富にある。
- 南房総を巡るトレッキングルート作りを進めるにあたっては、自然学校という核施設の存在が大きな利点となる。
- エコツーリズムを推進するにあたっては、誰かではなく地域一丸となる必要があること、そのためには意識醸成が必要だということを佐世保の例を挙げてお話しした。
- 観光客が激減し、民宿をはじめとした多くの宿泊施設が苦戦している。しかし、住民の機運さえ上がってくれば、豊富な観光資源と活発な人材を力に、8 つの道の駅を窓口にして取組は進展すると思われる。

（6）アドバイザーからの報告③：新潟県妙高市、福井県大野市

鈴木　順一朗　氏　／環境カウンセラー（広報戦略）、環境映像ディレクター・プロデューサー

●エコツーリズム推進アドバイザーを呼んだ目的

- 大野市は、湧水が観光資源の目玉になり得るのか、その場合エコツーリズムの考え方を取り入れることは有効なのか、という疑問を抱えていた。
- 妙高市からは、「生命地域の創造」という基本理念とうまくコラボレートし、国立公園であるということをプラスしてエコツアーの可能性を探りたい、その場合エコツーリズムの考え方は有効か知りたい、という要望を受けた。

●大野市と妙高市の概況について

- 大野市は巨大な水がめの地形で、水が豊かなために城下町として発展した。市内はどこでも、いい水が勢いよく湧いている。
- 妙高市は緑が多いところで、町場の中に観光資源はあまりない。自然を中心とした国立公園と共存する町。また、スキー客が激減している。

●エコツーリズムとは何か

- エコツーリズム推進法の認定は、市町村といった行政に適用される。そのルールの上で展開されるのが「エコツーリズムの上でのエコツアー」。これにより環境保全のルールを前提にエコツアーが展開される。

●「今」の時代に合ったエコツーリズムをどう考えるべきか？

- リーマンショックや東日本大震災を受け、「エコ」が「環境保全」というより「省エネ」を指す言葉になってしまった。
- エコツーリズムという特別なひとつの団体や考え方や推進協議会を作るのではなく、行政がエコツーリズムの考え方を全ての施策のベースに入れて、推進してもらいたい。
- 観光客向けコンテンツは、ニーズに合わせて変化させるべき。
- 「エコ」という言葉は教育的な響きが強く逆効果。考え方にきちんと入っていれば良い。
- エコツーリズムは自然の保全と産業を両立させるものであり、観光系担当者と環境系担当者の協働が重要。

●具体的なアドバイス内容

- 大野市で復活させた水場は、近代的過ぎて人の温かみが感じられなくなっている。竹の座布団を敷くなど、人が集まるような工夫が必要とアドバイスした。
- 妙高市の誇りであるいもり池には、ブラックバスが繁殖し本来の生態系が崩れている。ブラックバスの排除を住民とともに行ってはどうかとアドバイスした。

●エコツーリズムの導入に際して覚えておいていただきたいこと

- 観光収入がきちんと確保された、持続可能な運営の仕組みづくりが重要。
- 一つのヒットツアーづくりが次のニーズを引き出す。
- エコツーリズムは観光でお金を落としていただきながら、環境の保全もしていこうという考え方。人を呼ぶためには広報と宣伝が必須。

（7）ディスカッション

●パネリスト

- 妙高市環境生活課環境企画係　主事　市川　健一郎　氏
- 妙高市環境生活課環境企画係長　岡田　雅美　氏
- 東伊豆 ECO ツーリズム協議会　事務局　杉本　充伯　氏
- アイ・エス・ケー合同会社　代表　渡邊　法子　氏
- NPO 法人信越トレイルクラブ　事務局長、
  一般社団法人信州いいやま観光局　事務局次長　木村　宏　氏
- 環境カウンセラー（広報戦略）、環境映像ディレクター・プロデューサー　鈴木　順一朗　氏
- 環境省自然環境局総務課自然ふれあい推進室　室長　中尾　文子　氏

●司会

- 公益財団法人日本交通公社　主任研究員　菅野　正洋

●ディスカッション

ディスカッションに先立ち、会場から出された質問・意見を事務局にてグループ分けし、行政との連携、組織、情報発信、地域の人材育成、保全、という 5 つのテーマに沿ってディスカッションを行った。

①行政との連携

◇地域からは今後の取組意向を紹介していただきたい。アドバイザーからは踏み込んだアドバイスをいただきたい。（司会）

杉本氏

- 東伊豆 ECO ツーリズム協議会が全体構想策定を持ちかけても、行政の反応は薄い。どうすれば行政との協働体制がとれるのか分からず、苦慮している。

鈴木氏

- 妙高市でも、当初は行政がエコツーリズムに取り組むことに対して、違和感を覚える声があった。
- 行政と協働することにより、エコツーリズム推進法に基づいた規制緩和やルールづくりが可能になる。
- 現時点では、エコツーリズムに取り組んだ地域の成功事例と言えるものがない。成功事例を作ることで、取組の輪が広がるので、今後は一つ一つ成功事例を作ることが重要。

渡邊氏

- 丹後でも当初行政の反応は薄かったが、地域の魅力を語れる地域人材が育つにつれて、協力を得られるようになった。今では協力してガイド養成を行っている。
- 地域づくり全体を考えた場合、むしろ行政が主導することが必要。

②組織

◇エコツーリズムを進めるにあたり、「観光地域づくりプラットフォーム」等、対外的にも対内的にも中心となる組織が必要、という意見をいただいた。プラットフォームづくりにあたっての意識醸成、目指すべき姿について、信州いいやま観光局の事例をお聞きしたい。（司会）

木村氏

- 信州いいやま観光局は、飯山駅の誕生をきっかけに、情報の一元化と発信窓口の一本化を図るため誕生した。
- 一市町村での観光客の受入が難しくなり、またそういったニーズもなくなっている中、情報を一元化し地域を挙げて観光客を受け入れることがますます重要になる。

・ まずは行政も民間も、共にエコツーリズムを推進しようというコンセンサスを持つことが重要。その上でお互いに情報共有をしながら、新しい地域を作っていく。そして、様々な情報を一つのプラットフォームに集約し、ここに行けば欲しい情報が全て手に入る、という形を作ることが必要になる。

・ 信州いいやま観光局の事業規模はここ 3 年間、4 億 5000 万円～5 億円位で推移している。5 億円の内、市からの補助金約 4000 万円の他は、事業所が稼ぎ出している。

信州いいやま観光局は 4 つの施設と観光協会の機能を併せ持った一般社団法人。商品造成、セールスプロモーション、販売、受入、といった全てを一元的に行っている。

・ 多くの着地型旅行商品を作り、様々なニーズに応えられるようにしている。

◇妙高市には環境生活課のほかに、観光担当部局があるのか。（参加者）

岡田氏

・ 他に観光商工課がある。環境生活課はエコツーリズムの側面から観光に携わっており、エコ・トレッキングを通じた自然保護の啓発や、国立公園を担当している。観光商工課とは連携して事業にあたっている。

・ 観光分野だけの狭い活動ではなく、環境も含めて行うのがエコツーリズムの精神だと理解している。

鈴木氏

・ 派遣実施の際は、観光商工課の方も熱心に参加された。観光担当者と環境担当者が共に取り組んでおり、非常に可能性があると思う。

③情報発信

◇情報発信について、具体的なアドバイスをいただきたい。（司会）

鈴木氏

・ 広報戦略と広告を分けて考えることが重要。広報戦略とは、事業を始めるにあたって、どの時点で何をして、どのような発信を行うかを考えるスケジューリングのこと。広告をする際は、その時々の条件の中で最適なものを選ぶことが重要。

・ イメージ付けを行う上で映像は効果的。ホームページを開いた時に、15 秒程度の印象的な映像を流すだけでも効果がある。こうした映像制作は、一般向けの安いビデオカメラ

とソフトでも十分対応できる。

木村氏

- エコツーリズムには、地域の資源を守り伝えることで地域の活性化につなげるという基本的な考え方がある。パンフレットや映像といった媒体の利用も効果的であるが、地域の資源をきちんと守っている姿勢や地域の良さを、地域の人が伝えることそのものが一番の広報になると考えている。
- そのため、飯山ではガイド養成に力を入れている。ガイドを通して地域の良さを発信することで、リピーターになってもらったり、新しいお客様がやって来たりということが、従来の観光とは異なるエコツーリズムならではの特色である。
- 地域内では悪い所を指摘しにくいため、ガイド養成をサポートしてくれるような事業があれば良いと感じている。

④地域の人材育成

◇地域からは今後の具体的な取組について紹介していただきたい。アドバイザーからは上手く進めるためのアドバイスをいただきたい。（司会）

杉本氏

- 東伊豆町では、今回のアドバイザー派遣を受け、商品づくりと「大人のふるさと学級」という二つの分科会を立ち上げた。
- 「大人のふるさと学級」は大人が地元について知るための講座で、月 1 回の開講を予定している。この取組を通じて地域の素晴らしさを認識してもらうと同時に、そうした地域の宝がエコツーリズムに結び付いていくことを理解してもらいたい。

渡邊氏

- 地域について学ぶことを入り口に、活動の協力者を増やし、人材育成、ひいてはエコツーリズム推進につなげていくという取組が、民間から始まったことが素晴らしいと思う。
- 財源を捻出しながら取組を継続化させるためには、行政との協働が必須となる。

鈴木氏

- 地元の良さは住んでいるとなかなか分かりづらい。地域の宝を見つけるためには、外部からのお客様の声を拾うことも重要。

⑤保全

◇妙高市では環境教育により市民の保全意識を高めたいということであった。また、信越トレイルは観光客が直接保全活動に関わるプログラムである。（司会）

岡田氏

- 妙高市にとって国立公園は重要な意味を持つが、妙高市民の国立公園に対する関心は薄く、保全しようという気持ちも薄れている。
- 今後は地域の人と一緒に自然を守り育てるため、環境教育に力を入れていきたい。
- 現在はパーツごとの取組に終始しているため、今後は統一的なプラットフォームづくりについても検討していきたい。

木村氏

- 飯山における森の保全活動は、高齢化が進み地域住民だけでは山が守れなくなった地域において、地域の資源を使い新しい観光を生みだせないかと考えた時に、森の保全のためボランティアに入ってもらえる仕組みを作ったことがきっかけ。
- ボランティアは飽きてしまいやすいが、ロングトレイル整備という目標が継続のための大きな動機付けになった。
- ボランティアが活動するにも地域の理解が必要。地域の中でのコンセンサス作りや森を守ることの重要性を伝える役目を、観光局が果たしてきた。その結果、ボランティアと地域住民との触れ合いが生まれている。
- このような体制作りは非常に大変で、キーパーソンや組織の存在が不可欠。エコツーリズムには、組織があり、それをコントロールする人がいて、実際にお客様に伝える人がいるという総合力が欠かせない。地域を挙げての総合力が重要なエコツーリズムは、地域の意識醸成が必要となるため他のツーリズムより難易度は高いが、その分満足度は高く、やりがいがある。

◇最後に、各地域で進められている取組に対し、環境省として期待することや、支援策・政策等についてコメントをいただきたい。（司会）

中尾氏

- 成功事例がない、という点が引っかかっている。エコツーリズムは経済的な尺度だけで評価はできないのではないか。
- 環境省事業として、東日本大震災の被災地域において、エコツーリズムを用いた復興支援を行っている。この事業を通じて、エコツーリズムを地域で作り上げることは、地域の中のつながりを取り戻し、強めていく過程でもあると感じている。エコツーリズムを作っていくプロセスそのものの価値も評価するべきではないか。
- 地域のことを語れて、感動を分かち合えるようなガイドの養成が非常に重要である。ガイドの方もお金だけがやりがいではないだろう。その部分の評価は難しいが、重要な点であると思う。
- エコツーリズム推進アドバイザー派遣事業は、エコツーリズム推進に取り組む地域団体から要請があれば、その団体に専門家の派遣を行うもの。
- エコツーリズムガイド養成事業に参加すると、交通費などは自己負担だが、3ヶ月間のオンザジョブトレーニングを受けることができる。一方、今までの職からは離れる必要があり、相当の覚悟が必要となる。

この事業は年に 1 回ガイドを目指している方を募集し、約 3 ヶ月かけてオンザジョブトレーニングという形で養成する。自然学校やエコツーリズムを推進している団体に、ガイドの卵の方をインターンとして派遣している。

- 生物多様性保全推進交付金（エコツーリズム地域活性化支援事業）は、地方自治体が参加して形成されている地域のエコツーリズム推進協議会に対して、交付金を環境省が手当てするもの。地域側に予算が集まってくれば、この事業を活用することで、2 倍の速度で事業を進めることが可能となる。制約はあるが、協議会で用意した予算とほぼ同額を環境省でもつことができる。
- 復興エコツーリズム推進事業として、岩手県から福島県までの 5 地域において、特にエコツーリズムで地域活性化を目指したい、被災の後、地域のヨリを戻していきたいというところに対して、環境省がサポートしながら、なるべく地域の方が中心になる形で、組織作りやプログラム作りを行っている。
- エコツーリズム大賞はエコツーリズム協会と一緒に行っている事業で、様々な先進的取組を行っている団体に対し、環境大臣からエコツーリズム大賞を授与するもの。大賞に準ずる秀でた取組が見られる団体に対してはエコツーリズム大賞優秀賞、総合的な面では優秀賞より劣るが、ある一分野に優れている団体、あるいは革新的な取組が見られる団体に対してはエコツーリズム大賞特別賞を授与している。

参考　エコツーリズムについて

(1) エコツーリズムの基本知識

①エコツーリズムとは

「エコツーリズム」とは、

自然環境や歴史文化を対象とし、それらを体験し学ぶとともに、対象となる地域の自然環境や歴史文化の保全に責任を持つ観光のありかた

のことをいう（環境省「エコツーリズム推進会議」（平成 15～16 年度）における概念）。

言い換えれば、エコツーリズムとは、地域ぐるみで自然環境や歴史文化等、地域固有の魅力を観光客に伝えることにより、その価値や大切さが理解され、保全につながっていくことを目指した仕組である。

観光客に地域の資源を伝えることによって、地域の住民も自分たちの資源の価値を再認識し、地域の観光のオリジナリティが高まり、活性化させるだけでなく、地域のこのような一連の取組によって地域社会そのものが活性化されていくことを目指すものである。（環境省「エコツーリズムのススメ」より）

参考：
地球のためにできること。エコツーリズム推進ガイド
2007年3月発行

②エコツーリズムの歴史

エコツーリズムは、途上国において、観光客に森林等を見せて経済振興を図ることによって、森林伐採等の自然開発から自然を保護しようとする産業転換を促す考え方として注目された。その後、先進国では持続的な観光振興を目指す概念として論じられるようになった。

わが国では 1990 年頃からエコツアーを実施する民間事業者が、屋久島等の自然豊かな観光地で見られるようになった。環境庁（当時）は、平成 3 年（1991 年）に「沖縄におけるエコツーリズム等の観光利用推進方策検討調査」を実施して、エコツーリズムに関する調査を開始した。1990 年代後半には日本エコツーリズム推進協議会（現日本エコツーリズム協会）等の民間推進団体の設立が相次ぎ、エコツーリズムの普及に向けた動きが加速した。

このような背景を受けて、平成 15 年から平成 16 年にかけて、エコツーリズム推進会議が設置され、国をあげたエコツーリズムの推進がスタートした。環境省は、同会議で策定された 5 つの推進方策を中心に、エコツーリズムの普及と定着に向けた具体的な取組を進めている。

また、平成 19 年 6 月には地域で取り組むエコツーリズムに関する総合的な枠組みを定めた「エコツーリズム推進法」が議員立法により成立し、平成 20 年 4 月より施行された。

③エコツーリズムが目指すもの

エコツーリズムの考え方に基づき、自然環境の保全に配慮しながら、地域の創意工夫を生かしたエコツーリズムを実現させるため、エコツーリズム推進法では、エコツーリズムを通じた「自然環境の保全」、「観光振興」、「地域振興」、「環境教育の場としての活用」を図り、これらをうまく両立させていくことを基本理念に掲げている。

●エコツーリズム推進の基本理念

自然環境への配慮

観光振興への寄与

地域振興への寄与

環境教育への活用

④エコツーリズムの特徴

自然環境や歴史文化を対象としたエコツーリズムは、以下のような特徴を持っている。

●特徴１　豊かな自然地域をはじめ、多様なフィールドや資源が対象

エコツーリズムは、国立公園や世界自然遺産地域等の豊かな自然地域に限らず、里地里山やまちなか等多様なフィールドや資源が対象になる。

豊かな自然地域

【例】
- 原生林と野生動物に出会う
- 流氷ウォーク
- ホエールウォッチング
- フォレストウォーク　等

身近な里地里山

【例】
- マガンの飛び立ち・ねぐら入り観察
- 湧き水の郷と水のある暮らし体験
- 冬野菜の収穫とまんじゅうづくり体験
- 桜の案内人と桜をめぐる　等

人の暮らすまちなか

【例】
- 自然を背景に積み重ねられてきた地域の歴史巡り
- まちなかでみられる生き物観察
- 運河から見る都市の自然観察　等

●特徴 2　「見る」だけでなく、「体験する」「学ぶ」

エコツーリズムは、「見る」だけでなく、五感を通してさまざまなかたちで体験することによって、地域の自然や歴史を深く理解し学ぶものである。

流氷の上を歩く（知床）

漁船（サッパ船）で海の魅力を体感する
（岩手県田野畑村）

●特徴 3　解説を通した観光対象や地域への深い理解と付加価値づけ

見ごたえのある傑出した観光資源であっても、旅行者だけでその魅力を深く理解することはできない。特別優れた資源でない場合は尚更である。

エコツーリズムは、自然や歴史に精通した地域のガイドが案内役となり、観光対象と旅行者との間にたって解説（通訳）することによって、対象の面白さや魅力を伝える、気付かせるものであり、ゆえに、ガイドの解説によって、さりげない資源であっても付加価値をつけることができる。

●エコツーリズムにおけるガイドの役割

地域の自然を熟知したガイド
（白神山地）

伝えるのは知識ではなく専門的な情報
（屋久島）

動物の痕跡から自然への興味、気づきを誘導する
（軽井沢）

小道具を使って分かりやすく解説する
（軽井沢）

●特徴４　環境に負荷をかけない旅行スタイル

エコツーリズムは、訪れた地域の自然や歴史文化の大切さを理解する（学ぶ）とともに、それらを保全していくものである。

そのため、エコツーリズムの考え方に基づいたツアー（エコツアー）では、地域の環境に負荷をかけないよう、利用ルールに基づいた行動をするとともに、極力少人数を単位としたフィールドの利用が基本となる。

自然環境を守るための利用者のコントロール
（知床五湖利用調整地区）

入口でガイドのレクチャーを受ける（知床五湖）

ガイドを伴った知床五湖一周ツアー

【参考】エコツーリズム憲章

ひとびとが、自然や環境、文化を発見する旅に加わり、
自然のために、小さくても何かを実践し、
そうした旅人を受け入れる地域を、みんなでつくっていけば、
この国土のすみずみにまで、個性に満ちた自然や文化があふれ、
もっとゆたかないのちを楽しむことができる。
一人ひとりが自然を守り、考え、慈しむ。
自然の中にあたらしい光を見る、
「エコツーリズム」はそのための提案です。

ゆっくりと見回してみよう。
見えなかった色がみえてくる。
気がつかなかった香りに気づく。
聞こえなかった歌がきこえてくる。
季節が移っていく。
あざやかに、大地がここにある。

森がどこまでもひろがっている。
どこまでも空が、海がひろがっている。
風がそっと通りすぎる。
水が落ちて、土を潤す。
生きものたちが息づく。
人間のふるさとは、ここにある。

自然はやさしい。温かい。
大きくて、物知りだ。
時に荒々しい。
時にはひどく荒々しい。
人のくらし、歴史や文化は、
そうした自然とともに育ってきた。

大自然から里山や都市の小さな自然まで、
自然のいのちと人のいのちを共振させる。
そういう旅をしよう。
ゆったりと呼吸し、
ゆっくりと見回し、
おおらかな一歩をしるしたい。

「エコツーリズム」は次の 3 つを実現し、それがずっと続いていくことをめざします。
地域の自然と文化を知り、慈しむ。
元気な地域が自然を守る。
自然と文化を受け継いでいく

(2) エコツーリズムに取り組む地域への支援

環境省では、エコツーリズムに取り組む地域等への支援策として「エコツーリズムガイド養成事業」、「エコツーリズム推進アドバイザー派遣事業」、「生物多様性保全推進交付金（エコツーリズム地域活性化支援事業）」を実施する。

①エコツーリズムガイド養成事業

＜エコツアーの質を決定する大きな要素であるガイドの育成を実施＞

- 既存の自然学校等を活用し OJT 等による質の高いガイドの育成
- エコツーリズムに関する求人情報の提供による就労支援

②エコツーリズム推進アドバイザー派遣事業

＜エコツーリズムの推進に伴う地域の課題解決への支援＞

- エコツーリズム等を活用した地域活性化に取り組む地域に対して、有識者をアドバイザーとして派遣
- エコツーリズムの推進にあたっての課題の解決を支援

③生物多様性保全推進交付金（エコツーリズム地域活性化支援事業）

＜地域が取り組む魅力あるエコツアープログラムづくり等への支援＞

- エコツーリズムやジオツーリズム等に取り組む地域協議会等へ支援
- 地域協議会は多様な主体で構成（市町村の参加は必須）
- 国が地域協議会に対しプログラムづくり等に要する経費の 2 分の 1 を交付
- 1 協議会あたりの交付額の上限は 1000 万円

(3) エコツーリズム推進法について

平成 19 年 6 月 20 日の参議院本会議において、エコツーリズム推進法が成立した。

①成立の背景

近年、身近な環境についての保護意識の高まりや、自然と直接ふれあう体験への欲求の高まりが見られるようになってきている。このような背景から、これまでのパッケージ・通過型の観光とは異なり、地域の自然環境の保全に配慮しながら、時間をかけて自然とふれあう「エコツーリズム」が推進される事例が見られるようになってきた。しかし、現在は地域の環境への配慮を欠いた単なる自然体験ツアーがエコツアーと呼ばれたり、観光活動の過剰な利用により自然環境が劣化する事例も見られる。このような状況を踏まえ、適切なエコツーリズムを推進するための総合的な枠組みを定める法律が制定された。

②法律の趣旨

この法律は、地域の自然環境の保全に配慮しつつ、地域の創意工夫を生かした「エコツーリズム」を推進するに当たり、以下の 4 つの具体的な推進方策を定め、エコツーリズムを通じた自然環境の保全、観光振興、地域振興、環境教育の推進を図るものである。

(1) 政府による基本方針の策定
(2) 地域の関係者による推進協議会の設置
(3) 地域のエコツーリズム推進方策の策定
(4) 地域の自然観光資源の保全

③今後の取組

エコツーリズム推進法は、平成 20 年 4 月 1 日の施行である（同日、エコツーリズム推進法施行規則公布・施行）。政府は、エコツーリズム推進のための基本方針を作成する（平成 20 年 6 月 6 日閣議決定）。市町村が作成した地域ごとの全体構想は、主務大臣の認定を申請することができ、この基本方針に適合するものが認定される。国は、全体構想の認定を受けた市町村に対して、広報に努める等、地域のエコツーリズム実現に関する施策を推進する。（※主務大臣：環境大臣、国土交通大臣、農林水産大臣、文部科学大臣）

④エコツーリズム推進法に基づく全体構想認定団体

平成 26 年 3 月現在で、下記の 4 つの協議会がエコツーリズム推進法に基づく全体構想の認定を受けている。

●飯能市エコツーリズム推進協議会（埼玉県飯能市）／2009 年 9 月 08 日認定
●渡嘉敷村エコツーリズム推進協議会（沖縄県渡嘉敷村）及び座間味村エコツーリズム推進協議会（沖縄県座間味村）／2012 年 6 月 27 日認定
●谷川岳エコツーリズム推進協議会（群馬県みなかみ町）／2012 年 6 月 29 日認定
●鳥羽市エコツーリズム推進協議会（三重県鳥羽市）／2014 年 3 月 13 日認定

エコツーリズム推進法の概要

Ecotourism

目的

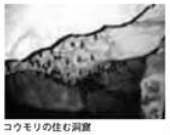
地域で取り組むエコツーリズムに関する総合的な枠組みを定めた法律です。エコツーリズムを通じて、我が国の自然環境を保全し、後世に伝えていくことをはじめとして、国民の健やかで文化的な生活を実現していくことを目的としています。

自然観光資源の定義

私たちの暮らしは、自然と密接に関わり、自然と共生してきました。自然環境の保全を考えていく上で、自然と密接に関連する人々の生活文化についても目を向ける必要があります。

「自然観光資源」には動植物の生息地や生育地などの自然環境のほか、自然と密接に関わる風俗慣習や伝統的な生活文化に関わるものも含まれます。

自然観光資源の例

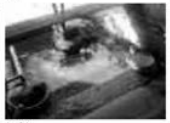


コウモリの住む洞窟

棚田

ブナの巨木

クジラ



カバタ
湧水を家に引き込みその水を飲事や洗濯に利用

湿原

事例紹介

屋久島地区
ガイド事業者や行政、そのほか多数の関係者との話し合いを経て、エコツアーガイドの登録制度を開始。

佐世保地区
様々な主体の参加を得て、エコツーリズムによる地域資源を再発掘。第3セクターが中心となった推進体制を構築。

飯能地区
事前協議制度による質の担保や地域住民の参画意識の高まりが実現し、様々な主体によるエコツアーを展開。

基本理念

自然環境の保全に配慮しながら、地域の創意工夫を生かしたエコツーリズムを実現させるためには、エコツーリズムを通じた自然環境の保全、観光振興、地域振興、環境教育の場としての活用を図り、これらをうまく両立させなくてはいけません。法律にはこの四つの項目を基本理念として位置づけています。

自然環境に配慮しましょう

地域の観光の活性化に結びつけましょう

地域への誇りや生きがいの創出の場に結びつけましょう

自然の大切さを学びましょう

エコツーリズム推進法の概要

Ecotourism

国の役割

国は、基本理念をもとにエコツーリズムの推進に関する基本的な方針を定めます。
また、協議会の活動状況の公表、協議会への技術的助言、情報収集及び広報活動により、エコツーリズムを推進していく地域に対して支援を行っていきます。
さらに、市町村から申請された「エコツーリズム推進全体構想」の認定を行います。

市町村長は、協議会が作成した全体構想を主務大臣に報告します。認定を求める場合は、認定を申請します。

市町村の役割

エコツアーに係わる事業者、地域住民、NPO法人、専門家、土地の所有者、その他エコツーリズムに関連する活動に参加する人、国や県などの 関係行政機関による話し合いの場（エコツーリズム推進協議会）を組織して、自分たちの地域で自然観光資源をどのように守りながら利用していくのかなどをまとめた構想（エコツーリズム推進全体構想）を作成し、運営します。

また、この全体構想に基づき、特定自然観光資源を指定して保護措置などを図ります。

認定申請があった場合は、主務大臣により審査が行われます。主務大臣は基本方針に適合すると認められる全体構想に対して認定をします。

全体構想が認定されることでできるようになること

1 地域資源の保護	これまで法的に保護措置が担保されてこなかった自然観光資源についても「特定自然観光資源」に指定することで、汚損や損傷、除去、観光旅行者等に著しく迷惑をかける行為を禁止するなどの保護措置を講じることができます。
2 立入りの制限	必要に応じて、特定自然観光資源が所在する区域への立入り人数の制限を行うことができます。
3 広報	国が、認定地域の取組を全国にPRします。

全体構想認定団体

埼玉県飯能市のエコツーリズム推進全体構想が平成21年9月8日に認定（認定第1号）
里地里山の身近な自然、地域の産業や生活文化を生かした取組

【参考】エコツーリズム推進法のあらまし

1. 目的（第１条関係）

エコツーリズムが①自然環境の保全、②地域における創意工夫を生かした観光の振興、③環境の保全に関する意識の啓発等の環境教育の推進において重要な意義を有することにかんがみ、その基本理念や基本方針の策定その他エコツーリズムを推進するために必要な事項を定めることにより、関係する施策を総合的かつ効果的に推進し、現在及び将来の国民の健康で文化的な生活の確保に寄与することを目的としています。

2. 定義（第２条関係）

(1)自然観光資源

・動植物の生息地または生育地その他の自然環境に係る観光資源

・自然環境と密接な関連を有する風俗慣習その他の伝統的な生活文化に係る観光資源

(2)エコツーリズム

観光旅行者が、自然観光資源について知識を有する者から案内または助言を受け、当該自然観光資源の保護に配慮しつつ当該自然観光資源と触れ合い、これに関する知識及び理解を深めるための活動

3. エコツーリズムの基本理念（第３条関係）

・自然観光資源が損なわれないよう、生物の多様性の確保に配慮しつつ、適切な利用の方法を定め、その方法に従って実施されるとともに、実施の状況を監視し、その監視の結果に科学的な評価を加え、これを反映させつつ実施すること

・関係事業者が自主的かつ積極的に取り組むとともに、観光の振興に寄与することを旨として実施すること

・地域の多様な主体が連携し、地域社会及び地域経済の健全な発展に寄与することを旨として実施すること

・環境の保全についての国民の理解を深めることの重要性にかんがみ、環境教育の場としての活用が図られるよう配慮すること

4. 基本方針（第４条関係）

政府は、基本理念にのっとり、エコツーリズムの推進に関する基本的な方針（内容は(1)から(5)までのとおり）を定めます。

(1)エコツーリズムの推進に関する基本的方向

(2)エコツーリズム推進協議会に関する基本的事項

(3)エコツーリズム推進全体構想の作成に関する基本的事項

(4)エコツーリズム推進全体構想の認定に関する基本的事項

(5)生物の多様性の確保等のエコツーリズムの実施にあたって配慮すべき事項、その他重要事項

5. エコツーリズム推進協議会（第５条関係）

市町村は、エコツーリズムを推進しようとする地域ごとに、事業者や地域住民、NPO 法人、自然環境や観光の専門家、土地所有者、関係行政機関などで構成するエコツーリズム推進協議会（以下、協議会）を組織することができます。

協議会は、エコツーリズムを推進する地域や実施の方法、対象となる自然観光資源を明らかにする全体構想（エコツーリズム推進全体構想）の作成や関係者の連絡調整を行います。

6. 全体構想の認定（第６条、第７条関係）

市町村は、組織した協議会が作成した全体構想について主務大臣（環境、国土交通、文部科学、農林水産の各大臣）の認定を受けることができます。

主務大臣は、認定をした全体構想についてインターネットの利用などにより周知します。

7. 特定自然観光資源の指定（第８～10 条関係）

市町村長は、主務大臣の認定を受けた全体構想に従い、保護措置を講ずる必要がある自然観光資源を特定自然観光資源として指定し、汚損、除去等を禁止することができます。

また、指定した特定自然観光資源が著しく損なわれるおそれがあると認められる場合は、立入りについてあらかじめ市町村長の承認を受けるよう制限をすることができます。

8. 活動状況の公表等（第 11～16 条関係）

主務大臣は、毎年、協議会の活動状況を取りまとめ、公表します。また、協議会の構成員に対する技術的な助言などを行います。

9. エコツーリズム推進連絡会議（第 17 条関係）

政府は、環境省、国土交通省、文部科学省、農林水産省その他の関係行政機関の職員で構成するエコツーリズム推進連絡会議を設け、エコツーリズムの総合的かつ効果的な推進を図るための連絡調整を行います。

10. 罰則（第 19 条関係）

特定自然観光資源が所在する区域内で禁止されている行為（汚損・損傷、ゴミの投棄、騒音、占拠など）を市町村職員の指示に従わないでみだりに行った場合、30 万円以下の罰金に処されます。

11. 施行期日

この法律は、平成 20 年４月１日から施行されます

【参考】エコツーリズム推進基本方針の概要

【法律上の位置付け】

エコツーリズム推進法（平成 19 年法律第 105 号）第 4 条に基づき、政府は、基本理念にのっとり、エコツーリズムの推進に関する基本的な方針を定めることとされており、手続については次のとおり定められている。

・環境大臣及び国土交通大臣は、あらかじめ文部科学大臣及び農林水産大臣と協議して基本方針の案を作成し、閣議の決定を求める。（第 3 項）

・環境大臣及び国土交通大臣は、基本方針の案を作成しようとするときは、あらかじめ、広く一般の意見を聴く。（第 4 項）

・環境大臣及び国土交通大臣は、閣議の決定があったときは、遅滞なく、基本方針を公表する。（第 5 項）

・基本方針は、エコツーリズムの実施状況を踏まえ、おおむね 5 年ごとに見直しを行う。（第 6 項）

【概要（主な記述内容）】

はじめに

・地球環境問題が深刻化する中、人々の主体的な行動やライフスタイルの変革に結びつかないのは、地球とつながっている（自然の恵みで人も生きている）実感が決定的に不足しているため。

・エコツーリズムは、人と自然のつながり、人と人とのつながりを取り戻し生物多様性を保全しながら元気な地域社会をつくるものであり、観光旅行者や関係する人々が地球環境とつながる糸口にもなるもの。

・エコツーリズムに取り組む地域への国による認証制度が始まった。

第 1 章エコツーリズムの推進に関する基本的方向

・推進する意義は、①ルールの設定による自然環境の保全、旅行者や住民などの環境意識が高まり地域の環境から地球環境まで含めた保全に関する行動につながる効果、②地域固有の自然環境や生活文化等の魅力を見直す効果、③観光地としての競争力の向上・新たな観光振興の可能性などに加え持続的な地域づくりに対する意識の高まりや住民の誇りにつながる効果。

・進め方を次のように整理。①関係者が話し合い、②地域の宝を再認識・発見し、③宝を大切に磨き、④観光旅行者にうまく伝え、⑤その感動をさらに磨く原動力とし、⑥地域の活性化につなげる、という相互に関連する一連の行為。

・「大切にしながら」、「楽しみながら」、「地域が主体」という視点が基本。

・エコツーリズムの推進によって我が国で長期的に目指す姿を明示。

・重点的に取り組むべき当面の課題として、①人材育成、②取り組む地域への支援、③戦略的広報、④科学的評価方法等に関する調査研究、⑤他施策との連携を提示。

第 2 章エコツーリズム推進協議会に関する基本的事項

・「エコツーリズム推進協議会」の組織化にあたっては、①協議会の効率的な運営に配慮しつつ、②特定事業者、地域住民、NPO 等、有識者、土地の所有者等、関係行政機関、関係地方公共団体など地域の多様な主体の参加・連携が必要。

・協議会は、①原則公開とし、透明性を確保するとともに、②相互に情報を共有し、関係者間の合意形成を図ることが必要。

第 3 章エコツーリズム推進全体構想の作成に関する基本的事項

・エコツーリズムの実施にあたっては、対象となる自然観光資源などが損なわれないよう、事前に「ルール」などを決めて「ガイダンス・プログラム」を実施し、自然観光資源の状態を継続的に「モニタリング」するとともに、その結果を科学的に「評価」し、これをルールや活動に反映させるという「順応的な管理」による進め方が重要。

・「ルール」には、自然観光資源が損なわれることを防ぐため、①罰則のような一定の強制力を必要に応じ持たせるものと、②自主ルールのように関係者間の内発的な取り組みとして実施するものがあり、安全確保や住民の生活への配慮などの目的も必要に応じ検討することが望まれる。

・「モニタリング」の実施にあたっては、①原生的な自然の区域では、専門家や研究者など積極的な関わりを得てよりきめ細かく実施し、②里地里山などでは、ガイドや地域住民などが主体となってモニタリングを行い、その結果を専門家や研究者が評価するなど、地域の自然的社会的特性に応じて実施することが重要。

・エコツーリズムの推進にあたっては、①地産地消の取り組みなど農林水産業をはじめとする関連産業との連携・調和、②他の法令や関係法令に基づく各種計画などとの整合、③地域の生活や習わしへの配慮などが必要。

第 4 章エコツーリズム推進全体構想の認定に関する基本的事項

・全体構想が認定されると、①これまで保護措置が講じられていなかった自然観光資源を「特定自然観光資源」として指定し、法的に保護することで、持続的かつ質の高い利用が可能となったり、②地域のブランド力が高まり、また国が積極的にその周知に努めることから、集客力の向上につながるなどの効果が期待される。

・認定の基準として、①協議会の参加者や運営方法、その他各種手続きなど全体構想が基本方針に適合すること、②プログラムの実施主体やモニタリングの役割分担など全体構想の内容が確実かつ効果的に実施される見込みがあることといった基準を明示。

第 5 章生物多様性の確保等のエコツーリズムの実施にあたって配慮すべき事項その他エコツーリズムの推進に関する重要事項

・他地域からのメダカやホタルの導入などによる遺伝子レベルでの攪乱にも配慮することが必要。

・里地里山などでは、維持管理活動をプログラムに取り入れることによる生物多様性の回復も期待。

・潜在的なニーズがある「子ども」の視点が重要。宝探しやプログラムづくりへの地域の子どもの積極的な関与が地域への誇りや愛着にもつながる。長期宿泊体験など学校教育との連携も重要。

・有識者からの助言を受けつつ、関係省等での連携を強化。

環境省請負業務

平成 25 年度エコツーリズム推進アドバイザー派遣事業　事例集

平成 26 年 3 月発行

公益財団法人日本交通公社

東京都千代田区大手町 2-6-1　朝日生命大手町ビル 17 階

リサイクル適性の表示：印刷用の紙にリサイクルできます
この印刷物は、グリーン購入法に基づく基本方針における「印刷」に係る判断の基準にしたがい、
印刷用の紙へのリサイクルに適した材料［A ランク］のみを用いて作製しています。